

2015 年度
博士学位申請論文

指導教員 高木 光太郎 教授

ジェローム・ブルーナーと「意味の行為」の照準
——混乱と修復のダイナミズム——

Perspectives on “*Acts of Meaning*” Postulated by Jerome Bruner
: Dynamism of Confusion and Restoration.

2015 年 11 月

青山学院大学大学院
社会情報学研究科
社会情報学専攻

横山 草介

目次

目次	ii
表目次	iv
凡例	v
序論	6
0. 1. 序	6
0. 2. ナラティブ心理学の抱える課題	9
0. 3. 本論文の構成	11
第 I 部 ナラティブ心理学の展開と「行為の意味」の研究	18
第 1 章 物語への転回	19
1. 1. 文脈独立的な「法則」の解明から、文脈依存的な「意味」の理解へ	19
1. 2. ナラティブターンの一つの道標としての「二つの思考様式」	23
1. 3. 精神の理解に向けた文脈主義アプローチの台頭	30
1. 4. ナラティブ心理学の展開における三つの理論的立場	32
1. 5. ナラティブ心理学の草創期の議論	35
1. 6. 物語の語り手は誰か	39
1. 7. ナラティブ心理学の今日的展開	47
1. 8. ナラティブ心理学の臨床への展開	57
1. 8. 1. Roy Schafer の精神分析理論への物語概念の導入.	57
1. 8. 2. White, M. & Epston, D. (1990) の書き換え療法.	61
1. 8. 3. Anderson, H. & Goolishian, H. (1988) の会話/対話療法.	68
1. 9. ナラティブ心理学の展開とは何であったか	73
1. 10. ナラティブ心理学の閉塞と今日的危機	76
第 II 部 JEROME BRUNER と「意味の行為」の照準	80
第 2 章 「意味の行為」とは何か	81
2. 1. Bruner の「意味の行為」論の「行為の意味」論としての受容の転倒	81
2. 2. Bruner が「意味の行為」に至るまで	91
2. 3. 1. 思考の様式としての物語.	91
2. 3. 2. 行為の中の諸理論 (Theories in action) .	94

2. 4.	解釈学的心理学の構想	95
2. 5.	Bruner の「意味」とは何か？	104
2. 6.	Bruner の「意味の行為 (acts of meaning)」とは何か？	108
2. 7.	Bruner の「物語 (narrative)」、それは何を捉える方法なのか？	114
第3章	通奏する「意味の行為」の方法論	120
3. 1.	「意味の行為」を問う方法論	120
3. 2.	方法論のない心理学者、Bruner	121
3. 3.	心理学者 Jerome Bruner の研究略史	123
3. 4.	反転実験	125
3. 5.	子どもとことば	132
3. 6.	物語のダイナミズム	137
第Ⅲ部	「意味の行為」の方法的展開	142
第4章	「意味の行為」の心理学	143
4. 1.	「行為の意味」の研究と「意味の行為」の研究との違いは何か	143
4. 2.	希求する精神のダイナミズム	145
4. 3.	精神、文化、ナラティブ	149
4. 4.	「意味の行為」の先にあるもの	150
第5章	物語という行為	152
5. 1.	行為としての物語	152
5. 2.	方法論と結びついた方法としての物語	153
5. 3.	物語と「混乱と修復のダイナミズム」	159
5. 4.	物語を通して問う「行為の意味」と「意味の行為」	176
第6章	結論	180
6. 1.	本論文が明らかにしたこと	180
6. 2.	残された課題	185
6. 3.	結語	191
	文献	192
	謝辞	204

表目次

表 1 BRUNER (1986) の 2 つの思考様式の概要.	26
----------------------------------	----

凡例

本論文の主幹となる Bruner の著作は下記の通りである。原著への参照は全て次の版による。

Bruner, J. S. (1986). *Actual minds, possible worlds*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (ブルーナー, J. S. 田中 一彦(訳) (1998) . 可能世界の心理 みすず書房)

Bruner, J. S. (1990). *Acts of meaning*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (ブルーナー, J. S. 岡本 夏木・仲渡 一美(訳) (1999) . 意味の復権 ミネルヴァ書房)

Bruner, J. S. (1996). *The culture of education*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (ブルーナー, J. S. 岡本 夏木・池上 貴美子・岡本 佳子(訳) (2004) . 教育という文化 岩波書店)

Bruner, J. S. (2002). *Making stories: Law, literature, life*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (ブルーナー, J. S. 岡本 夏木・吉村 啓子・添田 久美子(訳) (2007) . ストーリーの心理学 ミネルヴァ書房)

引用に際して文章に大きく手を入れた箇所がある。その際の変更基準は以下の通りである。

- (1) 日本語表現について、本論の文章と重ねた際の読み易さを考慮した変更を施した。
- (2) 翻訳の引用にあたって原著者の主張をより正確に理解することを目指した変更を施した。
- (3) 本論の論述の都合から引用者が独自の段落分けを行なった場合がある。

尚、上記の基準は Bruner 以外の著作からの引用についても同様に適用している。

引用箇所の指定は原著者名の明示に加え、以下の原則に従って行なった。

- (1) 本文中、原著からの引用は、括弧で括り、出版年、および引用箇所のページ数を示した。
- (2) 翻訳からの引用は、論考における時系列の重視という観点から原著の出版年を先に示し、続けてスラッシュをおき、翻訳書の出版年、および引用箇所のページ数を示した。

序論

本章の目的は、序論として論文の目的、ならびに研究の学問的な位置づけを示し、論文全体の内容を総説することにある。本論文は、人々の生きた人生や経験の意味という主題を、物語という手段を介して理解することにその探求の中核的な目的を位置づけてきたナラティブ心理学の展開に対し、この心理学が抱える今日的課題の解決を目的としたものである。本論文の中心的主題は、人生や経験の意味を問う心理学、と概説されてきたナラティブ心理学の展開に対し、人生や経験の意味、といった人々の生きた「行為の意味 (meaning of acts)」の研究に専心するのではなく、人間が意味を希求し、生成する行為としての「意味の行為 (acts of meaning)」(Bruner, 1990) を研究することの必要性と意義を明らかにすることにある。

0. 1. 序

人々の生きた人生や経験の意味を、物語という手段を介して理解することに探求の中核的な目的を位置づける心理学が興盛してきた。この心理学はナラティブ心理学 (narrative psychology) と呼ばれている。本論文の中心的課題は、人生や経験の意味を問う心理学、と概説されるこの心理学の展開に対し、人生や経験の意味、といった人々の生きた「行為の意味 (meaning of acts)」の研究に専心するのではなく、人間が意味を希求し、生成する行為として理解される「意味の行為 (acts of meaning)」(Bruner, 1990) の過程を研究することの必要性と意義を明らかにすることにある。

ナラティブ心理学の展開の出発点は、心理学研究の方法論上の中心となる概念に「意味」という概念を位置づけることを主張する議論から始まったと言える (Bruner, 1990; Polkinghorne, 1988)。この展開の草創期において「意味」という概念を心理学研究の新たな中心概念に位置づけることを主唱した心理学者の一人が Jerome Bruner であった。この主張は 1990 年に公刊された彼の著書 *Acts of meaning* (Bruner, 1990) の中で為されている。この主張によって Bruner は、ナラティブ心理学の今日的展開において、このアプローチの方法論的基礎を築きあげた心理学者の一人に数えられてきた。だが、彼が *Acts of meaning* の中で

展開した議論は、その本来の主題である行為論としての「意味の行為」として読解されることなく、人生や経験の意味といった人々の生きた「行為の意味」を問うための方法論的前提としてナラティブ心理学の展開の中で広く受容されてきた。言葉を換えて言えば、彼の議論は「意味の行為」を研究するための理論的前提としてではなく、「行為の意味」を研究するための理論的前提として受容されてきた。

本論文は、ナラティブ心理学の展開における「意味の行為」論の「行為の意味」論としての受容という Bruner 理解の転倒を明らかにし、彼の「意味の行為」の議論をその本来の筋立てに沿って、意味の行為論として読解し直すことによって、ナラティブ心理学の展開が内包する今日的課題の解決を目指すものである。

冒頭で述べたように、ナラティブ心理学の展開は概して、人々の生きた人生や経験の意味を理解する、という研究目的をその中核に位置づけて展開してきた側面がある。この時、人々の生きた人生や経験の意味の理解という目的を達する手段として有効に機能すると考えられた方法概念が物語であった。ナラティブ心理学の展開の中で、人生や経験は、それらを構成すると考えられる諸種の出来事がばらばらに散在している限りは意味を持ち得ないと考えられる。従って、人々の人生や経験の意味を理解可能にするためには、ばらばらに散在している出来事に何らかの加工作業を加える必要がある。この加工作業として位置づけられたのが物語行為であった。では、ここで言われる物語行為とは何か。我々が行う物語行為はおよそ次のように展開すると考えられる。まず、語り手が何らかの物語の筋立てを用意する。続いて、その筋立てを妥当する、いくつかの出来事を取捨選択する。ついで、選択された複数の出来事を物語全体の筋立てとの間の整合性が保たれる範囲で、適当な文脈によってつないでいく。この過程を出来事の物語化の過程と呼ぶとするならば、ナラティブ心理学は、人間は物語化の作業によって、自らや他者の生きた人生や経験の意味を理解可能にする、という方法論的前提に立脚してきたと言える。要するに、物語は、人々の生きた人生や経験に意味を付与する手段、として定義されることになる。裏返して言えば、人生や経験の意味は、それらを構成する諸種の出来事を特定の筋立てに沿って繋ぎ合わせる物語化の作業に伴って発生すると考えられるのである。こうしてナラティブ心理学の展開を主唱する学者たちは、人々が語り出す様々な物語を分析対象として、彼らが生きた人生や経験の意味、すなわち人々の生きた「行為の意味」を理解することを心理学の研究課題の一つに位置づけることを主張してきた (Atkinson, 1995/2006, 1998; Crossley, 2000a/2009, 2000b, 2003; Gergen, K. J. & Gergen, M. M., 1983, 1984, 1986, 1988; McAdams, 1985, 1993; Riessman, 2008)。

Bruner は、この展開の第一人者に数えられる心理学者の一人である。そして、彼の「意味の行為 (acts of meaning)」の議論もまた、上に述べたナラティブ心理学の展開の志向に沿うものとして受容されてきた。つまり、ナラティブ心理学の展開に関わる議論において Bruner の「意味の行為」と言えば、それは一般に、人が物語という手段を用いて自分自身や他者の生きた人生や経験に意味を付与する行為として受容されてきたのである。我が国のナラティブ心理学の展開を例にとっても、Bruner の「意味の行為」の議論に関わる引用の多くが、人々が生きた人生や経験に意味を付与する行為という文脈の中で為されてきたように思われる。すなわち、Bruner (1990) の主張した「意味の行為 (acts of meaning)」とは、人生や経験を「意味づける行為 (acts of giving meaning)」であり、この「意味づける行為」が、彼が 1980 年代以来、主唱してきた物語の考え方と結びついている、という理解のされ方をしてきたのである。

だが、「意味の行為」と「意味づける行為」とは同義として理解してよいか。これが、Bruner の議論の読み違いであることを本論文は明らかにしていく。「意味づける行為」という時、意味付与の対象は所与であることを前提としている。要するに、「意味づける行為」が成立するためには意味付与の対象となる。たとえば、人々の生きた人生や経験といったものが予め用意されている必要がある。そして「意味づける行為」は、対象の意味を理解可能にすることを目的として行われる行為、ということになる。このことを、本論文では「意味づける行為」を巡る議論が内包する「対象所与性の前提」と呼ぶことにしよう。問題は、この議論が Bruner (1990) の主張した「意味の行為」の議論と同義であるか、ということである。そのことを確認するために、ここで Bruner (1990) が *Acts of meaning* の序文の中で、同著を「意味の行為」と題した理由について述べている部分を検討したい。

私がこの本を *Acts of Meaning* と名付けたのは、次のような大きな主題を強調するためである。すなわち、意味の生成 (meaning-making) に係る特質とその文化的組成、ならびに、意味が人間の行為 (human action) の中で果たす中心的な役割について強調するためである。

(Bruner, 1990, p. xii)

Bruner (1990) はここで明らかに、人間の行為に関わる意味の生成論と機能論を問おうとしている。言葉を換えて言えば、ここで彼は人間の意味生成の原理と、人間の行為における意

味の機能の研究を強調しているのである。つまり、彼が同著の主題として扱おうとしていた問題は、人間が意味を生成し、意味を使用する過程が如何なる行為過程であるか、という問題だったのである。ところが、Bruner (1990) の「意味の行為」の議論は、そのようなものとしては受容されなかった。彼の「意味の行為」の議論は、人々の生きた人生や経験を「意味づける行為」を指示するものとして受容されてきたのである。

対象所与性の前提に立脚する「意味づける行為」の議論が、その研究のゴールに位置づけるのは、対象の意味の理解である。つまり、人々の生きた「行為の意味」の理解が、研究のゴールに位置づけられる。従って、Bruner (1990) の「意味の行為」の議論の「意味づける行為」としての受容は、人々の生きた「行為の意味」を問う議論として理解されることになる。だが、実際に彼が主張していたのは人々の生きた「行為の意味 (meaning of acts)」の研究ではなく、「意味の行為 (acts of meaning)」の研究であった。すなわち、人間が意味を生成し、意味を使用する過程が如何なる行為過程であるか、という問題だったのである。「彼の人の生きた人生や経験の意味は何か」という問いと「人間が意味を生成し、意味を使用する過程が如何なる行為過程であるか」という問いとは、その問題の対象が異なることは明らかである。

ナラティブ心理学の展開の中で生じた Bruner (1990) の「意味の行為 (acts of meaning)」論の「行為の意味 (meaning of acts)」論としての受容の転倒は、Bruner の「意味の行為」論の誤読という問題に留まらず、ナラティブ心理学の展開が内包することになっている今日的課題と密接に結びついている。では、その課題とは一体何なのか。それは、「意味」を問う議論の背後に「行為」を問う議論が不問に処されることになった、という問題である。この問題に対し、本論文は Bruner (1990) の「意味の行為」の議論をその本来の筋立てに沿って「意味の行為」論として読解し直すことによって、ナラティブ心理学の展開が内包することになった今日的課題の解決を目指す。

0. 2. ナラティブ心理学の抱える課題

前節で示唆したように、ナラティブ心理学の展開は人々の生きた人生や経験の意味を問う、という目的に重点をおいて進められてきた。言葉を換えて言えば、ナラティブ心理学の展開は人々の生きた「行為の意味」の研究に傾倒してきたと言えよう。こうした傾向は、検討される人々の語りや、人生の物語のような長期的な時間的枠組みの中に構成される場合 (Atkinson, 1995/2006, 1998; Crossley, 2000a/2009, 2000b, 2003; Gregg, 1991, 2011; McAdams, 1985,

1993; Riessman, 2008) ——大きな物語へのアプローチ (approach to big story) ——においても、日常の小さな経験の物語のような短期的な時間的枠組みの中に構成される場合 (Bamberg, 2006, 2010; Bamberg & Georgakopoulou, 2008; De Fina & Georgakopoulou, 2008, 2012; Georgakopoulou, 2006) ——小さな物語へのアプローチ (approach to small story) ——においても同様に見出し得るものである (Schachter, 2011)。

もしもナラティブ心理学の今日的展開が、人々の生きた「行為の意味」の研究に大きな重心を置いているという現状認識を持つことができるならば、Bruner (1990) が「意味の行為」という主題によって明らかにしようとした「人間が意味を生成し、意味を使用する過程が如何なる行為過程であるか」という問題は、ナラティブ心理学の展開の中で、一つの未解明の問題として残されていることになる。

では、「意味の行為」を問う研究が「行為の意味」を問う研究の背後に不問に処されることの一体何が問題なのか。簡単に言えば、「行為」を問う議論が、「意味」を問う議論の背後に不問に処されることの一体何が問題なのか。その中核に位置づく問題の一つが、「過程」を問わずに「結果」を問うことができるのか、という問題である。つまり、意味生成や意味使用の原理についての議論を経ずに、物事の意味を問うという論理構造が如何にして成立し得るのか、という問題である。物事の成り立ちの検討において明らかかなように、物事の成り立ち、結果だけ独立に存立しているわけではない。物事の成り立ちの背後には、生成の過程が存在しているはずである。この生成の過程を不問に処しておいて、言わば、物事の結果を、その生成過程から切り離して検討するということは本来できないはずである。従って、物事の成り立ちを十全に理解しようとするならば、結果を問うだけではなく、過程も問う必要がある。さらに、物事の生成過程をその時間的順序に従って理解しようとするならば、時間逆行的に結果から過程を問うのではなく、時間順行的に、過程の先に結果を展望するという方法論に立脚しなければならない。この問題は「意味」の問題を考える場合においても同様に指摘できるはずである。要するに、「意味の行為」の先に「行為の意味」を展望するという方法論に定位する必要がある。

しかしながら、ナラティブ心理学の展開は、屢々、この問題に無自覚に多くの個別事例研究を蓄積してきたように思われるのである。つまり、「過程」を問わずに「結果」を、換言すれば「意味の行為」を問わずに「行為の意味」を問うてきたように思われるのである。ナラティブ心理学の今日的展開が抱えるこうした問題に対し、本論文は Bruner の「意味の行為」を巡る議論を、その元来の主題である「意味の行為」論として読解し直すことによって、この問題

の解決の糸口を見つけ出すことを目指す。ここに本論文の目的を次のように明示する。

本論文の目的は Bruner の『意味の行為 (*Acts of meaning*)』(Bruner, 1990) の理論的読解を通して、その元来の主題である行為論としての「意味の行為」の内実を解明し、ナラティブ心理学の今日的展開に対し、「行為」の先に展望される「意味」という視座を持ったナラティブ心理学の構想を支える方法論を提唱することにある。同時に我々は、これまであまり省みられることのなかった心理学者 Jerome Bruner の思想研究の一つの布石を打つことを目指す。

対象所与性の前提に立脚する「行為の意味」の研究は、対象の意味は物語化の作業を通して付与されるという考え方に依拠している。この考え方に依拠して研究が進められる時、意味は、物語の数に比例して際限なく増えていくことになる。語りの数だけ意味が成立する、という論理構造は、ナラティブ心理学の展開をいずれ物語と意味の飽和状態という危機に直面させることになりはしないか。それだけではなく、ナラティブ心理学の研究目的それ自体をも「彼の人によって生きられた経験や人生の意味は何か」という問い方の飽和状態に陥れることになりはしないか。この様な展開の先に残される道は、希有な経験を持った個人や、社会的、文化的なマイノリティを対象としたケーススタディの蓄積であろう。ナラティブ心理学の学的展開の中には、既に、このこと自体を目的化してきた傾向もある（やまだ, 2006; Crossley, 2000a/2009, 2000b, 2003; Riessman, 2008）。

実証主義自然科学の方法論に立脚して、文脈独立的に一般化可能な精神の普遍法則の解明を志向するのではなく、文脈依存的に絶えず変化する精神の個別具体的な動態を理解することを志向するパラダイムの系譜を引くものとして、上に述べたようなナラティブ心理学の展開それ自体の意義は否定すべくもない。だがしかし、人々の生きた「行為の意味」を問う研究が一つの飽和状態を生み出していることは既に学界の今日的展開の中で懸念されている事態の一つではないだろうか。このような学界における危機を眼前に、Bruner (1990) の「意味の行為」の議論を基点とした仕事の理論的再検討は、価値のある可能性の源泉であると考えられる。

0. 3. 本論文の構成

冒頭で述べたように本論文の中心的課題は、人生や経験の意味を問う心理学、と概説される

ナラティブ心理学の展開に対し、人々の生きた「行為の意味 (meaning of acts)」の研究に専心するのではなく、人間が意味を希求し、生成する行為として理解される「意味の行為 (acts of meaning)」の過程を研究することの必要性と意義を明らかにすることにある。特に、ナラティブ心理学の主唱者の一人に数えられる Bruner (1990) の「意味の行為 (*Acts of meaning*)」の議論を基点としてこの論究を進めるものである。ナラティブ心理学の展開は概して、物語という手段を介して人々の生きた人生や経験の意味を問う、という考え方に立脚して進んできたと言える。Bruner の「意味の行為」の議論もまたこうした論立てに沿って、人生や経験を物語によって「意味づける行為」として読解され、受容されてきた。だが、ここには Bruner (1990) の「意味の行為」論を「行為の意味」論の理論的前提として受容するという転倒が見出された。この転倒によって人間の「意味の行為」の過程を問う議論は、「行為の意味」という結果を問う議論の背後に不問に処されることになった。だが、本論文は「行為の意味」を問う議論は、「意味の行為」を問う議論を前提する必要があると考えた。というのも、「結果」としての「行為の意味」を問うための前提に位置づくはずの、「過程」としての「意味の行為」の探求が為されなければ、「行為の意味」の探求は、過程の先に位置づく結果という物事の生成の論理的必然性から外れた議論として展開することになるからである。ナラティブ心理学の展開が内包し得るこのような課題に対し、本論文は Bruner (1990) の「意味の行為」の議論の原始点に立ち戻り、この議論を人間の心理学的な行為の一つとしての行為論として読み直すことによって、「行為」の先に展望される「意味」という視座を有するナラティブ心理学の新たな方法論を提示することを目指す。同時に我々は、これまであまり省みられることのなかった心理学者 Jerome Bruner の思想研究の一つの布石を打つことを企図する。以下、本論文の構成と各章の要点を確認する。

本論文は、論文全体の概要を示した序論に続く 6 つの章から構成されている。さらに論文の全体構造は、その内容上の特質からⅢ部に分けられている。論文の第Ⅰ部はナラティブ心理学の展開を広く概説し、この展開の方法論的基底にある考え方を明らかにすること、ならびに、ナラティブ心理学の今日的展開が抱える課題を明らかにすることに目的を置いている。続く第Ⅱ部は、この課題の解決が Bruner (1990) の *Acts of meaning* の読み直しによって為し得ることを論究する。まず、Bruner の「意味の行為」論が、「行為の意味」論の方法論的前提として転倒して受容されてきたことを明らかにし、この議論に基礎づけて Bruner の「意味の行為」論の本来の主題を明らかにする。すなわち、彼の「意味の行為」論を、意味論としてではなく、行為論として読解し直す (第 2 章)。次いで、Bruner の「意味の行為」の方法論が彼の思想と

結びついたものであることを、彼の研究史を辿ることによって明らかにする（第 3 章）。本論文の第Ⅲ部では、まず Bruner の「意味の行為」の行為論としての読解が、今日のナラティブ心理学、ひいては心理学の展開に対して為し得る寄与について考察する（第 4 章）。そして、Bruner の「意味の行為」の方法論に立脚したナラティブ心理学の具体的な研究構想について検討する。ここでは実際の語りの分析を通して「意味の行為」の過程を捉えることを試みる（第 5 章）。最後に、2 章から 5 章までの論考を総括し、本論文の学問的意義、並びに、残された課題を記した結論が配される（第 6 章）。

各部を構成する各章の概要は以下の通りである。序論では、論文全体の概要を示すことを目的としている。ここでは論文の目的、ならびに研究の学問的な位置付けを示している。本論文は、人々の生きた人生や経験の意味を、物語という手段を介して理解することに研究の主目的を位置づけてきたナラティブ心理学の今日的展開が抱える課題の解決を目指すものである。その中心的主題は、人生や経験の意味を問う心理学、と概説されるナラティブ心理学の展開に対し、人々の生きた「行為の意味 (meaning of acts)」の研究に専心するのではなく、人間が意味を希求し、生成する行為として理解される「意味の行為 (acts of meaning)」(Bruner, 1990) の過程を研究することの必要性と意義を明らかにすることにある。

第 1 章では、ナラティブ心理学の展開を一つの学説史として概観する。ここでは 1980 年代に一つの基点をみる学際的動向としての「物語への転回 (narrative turn)」を主軸に、ナラティブ心理学の基底に流れる一つの方法論的前提を確認する。この前提は、ナラティブ心理学の展開は、物語を対象に意味を付与する手段として定義し、物語化の所産として具体化される意味の問題として、人生や経験の意味といった人々の生きた「行為の意味」を研究することを主目的に位置づけてきた、というものである。ついで、ナラティブ心理学の今日的展開が、「行為の意味」の研究に傾倒してきた結果、その行為レベルの前提に位置づくはずの人間が意味を希求し、生成する行為としての「意味の行為」の研究が不問に処されてきたことを指摘する。物事の成り立ちの検討においてその生成過程を問わずに、結果のみを独立に問うならば、その理解には不足がともなう。同様に、ナラティブ心理学の今日的展開の中には、過程としての「意味の行為」を問わずに、結果としての「行為の意味」のみを独立に問う議論が少なからず存在している。こうした学問上の不足に対し、ナラティブ心理学の思想的指導者の一人に数えられる Jerome Bruner (1990) の *Acts of meaning* の理論的再読がこれらの不足を解消する一つの糸口になることを確認する。

第 2 章では、Bruner (1990) の *Acts of meaning* の理論的読解を基点として、彼が「意味

の行為 (acts of meaning)」と呼んだ人間の心理学的な行為の内実を明らかにする。2章の論究を通して明らかにされることは、Bruner の「意味の行為」とは、前提や常識の破壊として定義される混乱の発生に対峙した精神が、その破綻を修復し、平静を取り戻そうとする「混乱と修復のダイナミズム」として理解することのできる過程である、ということである。この過程は、混乱の発生に伴って生じた、今、この時点においては理解し難い出来事が、いずれ何らかの意味を獲得することによって理解可能になるような可能性の脈絡希求の行為として定義される。この説明は、Bruner (1990) の「意味の行為」の議論を、人々の生きた「行為の意味」を問う議論の方法論的前提として転倒させて受容してきたナラティブ心理学の今日的展開に対し、一つの再考を迫るものである。

第2章の末尾で我々は Bruner の「意味の行為」に対する志向は、彼の心理学者としての思想と結びついているという仮説を提示する。しかしこの仮説を立証するためには、人間が意味を希求し、生成する行為として理解される「意味の行為」の過程を研究するための Bruner の方法論が、この言葉を標題に持つ *Acts of meaning* (Bruner, 1990) の中でのみ提示された一過性のものではない、ということを論証する必要がある。この論証に取り組むのが第3章である。

第3章では、Bruner の「意味の行為」の方法論が、彼の研究史の中で繰り返し提示されていることを明らかにする。本章では彼の研究史の中から選択的に、(1) Bruner の研究生活の最初期にあたる 1940 年代後半にハーヴァードを拠点に行われた一連の知覚実験研究、(2) 英国オックスフォードに拠点を移して 1970 年代に行われた乳幼児の言語獲得研究、(3) 1980 年以降、ニューヨーク大学を拠点に今日まで続けられているナラティブ心理学の研究、の3つに焦点をあてる。第3章の論究を通して明らかになることは、上記のいずれの研究においても Bruner 心理学の観察の焦点は人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」の過程として描き出すことのできる「意味の行為」の過程に向けられてきた、ということである。

続く第4章では、Bruner (1990) の「意味の行為」の行為論としての読解が、ナラティブ心理学の今日的展開に対して果たし得る寄与を考察する。「行為の意味」の研究は、物語の構成に随伴して規定されていく結果としての意味を問うてきた。これに対し「意味の行為」の研究は、人間が意味を希求し、生成する過程が如何なる行為過程であるのかを問う。本章では双方が問題としている精神の有り様が異なることを指摘し、前者を「構成する精神」の研究、後者を「希求する精神」の研究として整理しなおす。このように整理してみると、我々はナラティブ心理学の展開において「構成する精神」の過程には注目してきたが、「希求する精神」の

過程にはあまり目を向けてこなかったことが分かる。このような現況に対し、Bruner の心理学がその解明を目指してきたのは「希求する精神」のダイナミズムであった。最後に我々は、希求する精神のダイナミズムの解明を目指す「意味の行為」の心理学の先に Bruner が眼差していたのは、心理学の知による平和の達成であったことを明らかにする。

第 5 章では、Bruner の「意味の行為」論の理論的読解に基づいた Bruner 心理学に通奏する「方法論」と「方法」の解明を足場として、人間が意味を希求し、生成する行為として理解される「意味の行為」の過程を、物語を介して研究するナラティブ心理学の具体的構想を実際の「語り」の分析を通して検討する。この際、我々は精神の「混乱と修復のダイナミズム」の過程として表現し得る「意味の行為」の過程の検討を、語りの繋ぎ方、すなわち語りの「文脈の変化」に注目することによって行うことを試みる。次いで、同じ語りに対して、人々の生きた結果としての「行為の意味」の検討を行うことによって「意味の行為」の研究と「行為の意味」の研究との具体的な違いを明らかにする。「意味の行為」の研究をナラティブ心理学の探求の一つの基点に位置づけることの可能性を探ることによって、本章では「過程」の先に展望される「結果」、「行為」の先に展望される「意味」という視座に定位したプラグマティックなナラティブ心理学の展開を展望する。同時に本章での論究を通して「意味の行為」の過程を、ナラティブの分析を通して明らかにすることの困難性も明らかになる。第 6 章は結論である。本論文の議論を総括し、その学問的意義を述べ、最後に今後の研究課題を提示する。

ナラティブ心理学の今日的展開における主立った議論の一部は、人々の生きた人生や経験の意味といった、人々の生きた「行為の意味」の研究に傾倒してきた。この時、当の「行為の意味」が規定されるに到った過程、すなわち、人間が意味を希求し、生成する行為として理解される「意味の行為」の過程は屢々、不問に処されてきた。この結果、物事の成り立ちの検討において重視すべき「過程」の先に展望される「結果」という視座を、研究の方法論的枠組の中に十分に捉えてこなかったと言える。だが、物事の成り立ちの検討において明らかのように、物事の「結果」は、「過程」の帰結として導出されるのが本来であって、「結果」だけ独立に存立しているわけではない。それゆえに、「結果」を検討するためには、「過程」の検討から始める必要がある。だが、ナラティブ心理学の今日的展開における主立った議論の一部は、「過程」としての「意味の行為」を問わずに、「結果」としての「行為の意味」の研究に傾倒してきたと言える。だが、「過程」の理解を伴わない「結果」の検討が、物事の内実を十分に捉え得ないと同様に、「意味の行為」の理解を伴わない、「行為の意味」の検討も、行為と意味の内実を十分に捉え得ないと言えよう。ナラティブ心理学の展開が内包するこのような不足に対し、

本論文は人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」の過程を、いずれ何らかの意味が落ち着くであろう可能性の脈絡希求の行為として理解される「意味の行為」の過程として捉える Bruner 心理学の方法論の解明によって、「過程」の先に展望される「結果」、「行為」の先に展望される「意味」という、物事の成り立ちを辿る順行的な流れの中に、ナラティブ心理学の研究を位置づけることを提案した。そして、こうした研究の一つの展望として、人間が意味を希求し、生成する行為として理解される「意味の行為」の過程を、物語の「語り方」に焦点をあてる分析によって明らかにすることを試みた。

本論文の各章は以下に記載の既刊論文、ならびに国内会議で発表された未刊論文の内容を元に、論考の展開に付する大幅な改稿を施したものである。

第2章

横山 草介 (2014) . ブルーナーと人間をみる眼 ナラティブと質的研究会 会議発表資料
立命館大学生存学研究センター・日本心理学会ナラティブと質的研究会・日本発達心理学
会ナラティブと質的研究分科会 立命館大学

横山 草介 (2015) . ナラティブの文化心理学——ブルーナーの方法—— 質的心理学研究,
14, 90–109. 新曜社

第5章

横山 草介 (2012) . 質的データ分析試論としてのナラティブの重奏化 青山社会情報研究,
4, 1–12.

横山 草介 (2013) . ナラティブの重奏化による現実の生成 質的心理学研究, 12,
176–194. 新曜社

第 I 部

ナラティブ心理学の展開と「行為の意味」の研究

第1章 物語への転回

本章の目的は、ナラティブ心理学の展開を学説史的に概観することにある。ここでは 1980 年代に一つの基点をみる「物語への転回 (narrative turn)」を主軸に、ナラティブ心理学の基底に流れる一つの方法論的前提を確認する。この前提は、ナラティブ心理学の展開は、物語を物事に意味を付与する手段として定義し、物語化の所産として具体化される意味の問題として人生や経験の意味といった人々の生きた「行為の意味」を研究することを主目的に位置づけてきた、というものである。ついで、ナラティブ心理学の今日的展開が、「行為の意味」の研究に傾倒してきた結果、その行為レベルの前提に位置づくはずの人間が意味を希求し、生成する行為としての「意味の行為」の研究が不問に処されてきたことを指摘する。物事の成り立ちの検討においてその生成過程を問わずに、結果のみを独立に問うならば、その理解には不足がともなう。同様に、ナラティブ心理学の今日的展開の中には、過程としての「意味の行為」を問わずに、結果としての「行為の意味」のみを独立に問う議論が少なからず存在している。こうした学問上の不足に対し、ナラティブ心理学の思想的指導者の一人に数えられる Jerome Bruner の「意味の行為」(Bruner, 1990) の議論の再読がこれらの不足を解消する一つの糸口になることを確認する。

1. 1. 文脈独立的な「法則」の解明から、文脈依存的な「意味」の理解へ

人々が日々の生活の中で、または、彼らの生活について語る物語を対象とした研究が、学際的な思潮の中に広がってきている。そのもっとも大きな背景には、質的研究 (qualitative research) と総称される研究パラダイムの人間科学における再興という歴史的脈絡がある (Clandinin & Connelly, 2000; Clandinin, Pushor & Orr, 2007; Costall, 2006; Denzin & Lincoln, 2011; Flick, 1995/2011, 2014; Josselson, 2004; Josselson & Lieblich, 1993, 1995, 1999, 2009; McAdams, Josselson & Lieblich, 2001; Mitchell, 1981/1987; Parker, 1994, 2005; Polkinghorne, 1988; やまだ・麻生・サトウ・能智・秋田・矢守, 2013)。この史的動向

を、文脈独立的に不変の知の解明を志向する自然科学の方法論に依拠する人間科学の展望と併存するパラダイムとして、人間の様々な知や行為の有り様を、文脈依存的に可変的な意味の解釈という方法によって理解することを志向する人文科学の方法論に依拠した人間科学の展望と見る論者も少なくない (Bruner, 1985, 1986, 1990; Clandinin & Connelly, 2000; Clandinin, Pushor & Orr, 2007; Crossley, 2000a/2009, 2000b, 2003; Denzin & Lincoln, 2011; Flick, 1995/2011, 2014; Gergen, 1973, 1985; Josselson, 2004; Josselson & Lieblich, 1993, 1995, 1999, 2009; MacIntyre, 1981; McAdams, 1985, 1993; Mitchell, 1981; Parker, 1994, 2005; Polkinghorne, 1988; Sarbin, 1986, 1990; Toulmin, 1990; やまだ, 2000a, 2013)。

ここに再興という表現を用いた所以は、時間と空間を超えて不変の自然法則の実証的解明か、特定の時間と空間の内に枠づけられた人間の生に係る経験や出来事の意味の解釈による理解か、という人間科学の方法論を巡る論争に関わる長い歴史的系譜を鑑みてのことである (丸山, 1985)。従って正確には、自然法則の実証的解明と、人間の生についての解釈学的理解との間で展開されてきた方法論争の中に、再び人間理解についての「認識論的な危機 (epistemological crisis)」 (Sarbin, 1986, p. vii) が呈せられ、1980年代を一つの基点として様々な支流となつて今日まで拡張してきたと言った方が適切であろう (Brockmeier, 2000, 2009; Bruner, 1985, 1986, 1990; Clandinin & Connelly, 2000; Clandinin, Pushor & Orr, 2007; Crossley, 2000a/2009, 2000b, 2003; Denzin & Lincoln, 2011; Flick, 1995/2011; Gergen, 1973, 1985; Josselson, 2004; Josselson & Lieblich, 1993, 1995, 1999, 2009; MacIntyre, 1981; McAdams, 1985, 1993; Mitchell, 1981/1987; Parker, 1994, 2005; Polkinghorne, 1988; Sarbin, 1986, 1990; Toulmin, 1990; やまだ, 2000a, 2006, 2013)。本章では、今日しばしば、「物語への転回 (narrative turn)」と呼ばれるこうした歴史的転回の心理学における動向の特徴を明らかにすることを目的としている。

さて、人間理解についての認識論的な危機に関わって丸山 (1985) は当世の時代精神を次のように記述している。

人間科学が極度に専門化かつ細分化され、「科学的客観性」の美名のもとで、<人間なき人間科学>への歩みが加速度的に進行しつつあるのではないか、あるいは、人間科学は、人間に関する体系的な研究であるどころか、人間をますます恣意的に断片化し、また人間の自己理解に寄与するどころか、人間をたんなる操作対象にしてしまった

(丸山, 1985, p. 3)

こうした危機感の内側から、文脈独立的に普遍の自然法則の解明を目指す実証主義科学の方法論のみに依拠しては、人間理解に向けた探求はその仕事の一部を達するに過ぎないという考え方が急速に広まってきたと言えよう。20世紀の後半になって再興してきたこの動向には、屢々「転回 (turn)」という言葉が当てられる。言わば、人間科学が探求する知の在り方についての一つの歴史的な方向転換を指してこの言葉が用いられてきた。とはいえ、この方向転換は、それまでの探求の道程の棄却の上に成り立つものとして理解されるべきではない。そうではなく、むしろ、人間科学の探求に関わる別様の方法論的可能性を模索する動勢——Kuhn (1962/1971) はそれをパラダイムという概念によって説明した——が勢いを増してきたと理解した方がよいだろう。というのも、人間科学の探求に際して、自然科学の方法論への依拠の一切を否定する議論を展開したところで、そうした議論が正当性を欠くことは一見して明らかだからである。従って本論では Bruner (1986) が主張したように、両者は人間科学における知の構築において共約不可能でありつつも、相補的に機能するものとして理解しておくことにしよう。

さて、20世紀の後半になって起こってきたこの転回については、既に多くの論者が「言語論的 (linguistic)」(Rorty, 1967)、「解釈学的 (interpretive)」(Bruner, 1986, 1990; Josselson, 2004)、「論弁的 (discursive)」(Brockmeier & Harre, 1997; Edwards & Potter, 1992; Harre, 1999; Shotter, 1997)、「物語論的 (narrative)」(Atkinson & Delamont, 2006; Bamberg, 2006; Brockmeier & Harre, 1997; Bruner, 1990; Gregg, 1991; Josselson & Lieblich, 1993, 2009; Monteagudo, 2011; Parker, 2003; Riessman, 2008; Schachter, 2012; やまだ, 2013) という頭語をつけて、あるいは「第二の認知革命 (second cognitive revolution)」(Bruner, 1990; Harre, 1992, 1999) と呼んで当該の学的思潮の転回を表現してきた。いずれの頭語に自らの研究プログラムの歴史的基盤を求めるにせよ、一つの学際的思潮とも呼び得るこの転回について全てを論じることは本章の目的ではない。本章の目的は、本論文の探求の舞台となる心理学の領野での方向転換の特徴を理解することにある。本章では特にこの転回の梶棒を握っている側の心理学について、その史的動向を理解することを目指す。

さて、20世紀の心理学史をいくつかの転回期を目印として特徴づけるならば、その大きな潮流は次のように概観することができるだろう。つまり、(1) 被験者の経験についての内観に依拠した意識の科学から、(2) 刺激と反応との因果的接続という方法論的枠組みに依拠し、一つの自然法則として客観的に観察可能な行動の科学へ、そして、(3) 行動主義への反旗として、

内観主義への回帰としてではなく、科学としての客観性を保持したまま、人間の精神過程への研究を復権することを目論んだ認知の科学へ、という流れによってである (Costal, 2006)。20世紀の心理学史をこのように概観する時、先に述べた「物語への転回」は、認知革命を経て後、1970年代半ばから1980年代にかけて展開した動向として理解することができる (Bruner, 1985, 1986, 1990; Clandinin & Connelly, 2000; Clandinin, Pushor & Orr, 2007; Crossley, 2000a/2009, 2000b, 2003; Denzin & Lincoln, 2011; Flick, 1995/2011, 2014; Gergen, 1973, 1985; Josselson, 2004; Josselson & Lieblich, 1993, 1995, 1999, 2009; MacIntyre, 1981; McAdams, 1985, 1993; Mitchell, 1981; Polkinghorne, 1988; Sarbin, 1986, 1990; Toulmin, 1990; やまだ, 2000a, 2006, 2013)。

特に1980年代に転回の一つの折り目を見るこの動向は、方法論的には、個を単位とする方法論的枠組みから、関係を単位とする方法論的枠組みへ、人間観については文脈独立的な機械モデルのメタファーから、文脈依存的な行為主体モデルのメタファーへ、という定式によって特徴づけることができる (Brockmeier, 2009; Bruner, 1985, 1986, 1990; Clandinin & Connelly, 2000; Clandinin, Pushor & Orr, 2007; Crossley, 2000a/2009, 2000b, 2003; Gergen, 1973, 1985, 1994/2004; Hermans & Kempen, 1993/2006; Josselson, 2004; Josselson & Lieblich, 2009; Parker, 1994, 2005; Polkinghorne, 1988; Sarbin, 1986, 1990; Shotter, 1997; やまだ, 2006, 2013)。

機械は、動力が伝送されない限り動かない。裏返せば、動力さえ伝送されれば、因果的に定まった動きをする。この動作は文脈独立的な不変原理として遂行されることが期待される。それに対し、行為主体モデルでは人間を機械と同じとは見なさない。従って、外的な作用に対して、それらに反作用する行為主体 (agent) の志向性 (intentionality) の在所に議論の余地を残すことになる。「行動 (behavior)」の科学としての心理学においては、行動は特定の外的な作用因を契機に発生する特定の応答として記述される。この時、特定の作用因と、その帰結として生じる応答との間には、因果的に定まった法則的な結びつきがあると仮定される。これに対し、「行為 (action)」の科学としての心理学においては、行為は、行為主体 (agent) の水準に位置づく「意図」、「志向性」、「再帰性」、「省察性」といった諸概念にどのような心理学的概念としての位置づけを付するかが議論の焦点になってくる (Brockmeier, 2009; Bruner, 1990; Parker, 1994, 2005; Shotter, 1997, 2001; やまだ, 2006)。本論文が焦点を合わせるのは後者の立場ということになる。

以上、20世紀の後半に起こった「物語への転換 (narrative turn)」と呼ばれる学際的な動向の特徴について論じた。本節で確認しておくべきは、1980年代を一つの基点として人間科学の知の探求が、文脈独立的な普遍法則の解明のみならず、文脈依存的な意味の理解という方向にも向けられるようになった、ということである。この学際的展開の中で「意味 (meaning)」という概念は、対象が位置づく文脈との関係において規定される概念として理解される。つまり、「意味 (meaning)」は、文脈独立的に定まった対象指示機能を有する「語義 (sense)」という概念とは明白に区別される。では、心理学における「物語への転回」はどのようなものとして展開してきたのであろうか。

1. 2. ナラティブターンの一つの道標としての「二つの思考様式」

本節では、心理学における「物語への転回」を理解するための道具立てとして、Bruner の「二つの思考様式 (two modes of thought)」(Bruner, 1986) という考え方を確認することから始める。Bruner の「二つの思考様式 (two modes of thought)」(Bruner, 1986) は、心理学における「物語への転回」の一つの道標に位置づけられる。彼の「二つの思考様式」というアイデアが広く知られるようになったのは、1986年に公刊された *Actual minds, possible worlds* (Bruner, 1986) という書物においてである。以来、彼の「二つの思考様式」という考え方は、ナラティブ心理学の一つの思想的な足場として広く引用されてきた (Atkinson, 1995/2006; Bamberg, 2010; Brockmeier, 2000, 2009; Brockmeier & Harre, 1997; Crossley, 2000a/2009, 2000b, 2003; Gergen, 1994/2004; Gregg, 1991, 2011; Hermans & Kempen, 1993/2006; Josselson, 2004; Josselson & Lieblich, 1993, 1995, 1999, 2009; Polkinghorne, 1988; McAdams, 1985, 1993; McLeod, 1997/2007; Monteagudo, 2011; Hermans & Kempen, 1993/2006; 森岡, 2013, 2015; Murray, 2000, 2002; Polkinghorne, 1988; Riessman, 2008; Sarbin, 1986; Shachter, 2012; Wertsch, 2008, 2009; White & Epston, 1990; やまだ, 2000a, 2006, 2007, 2013)。Bruner (1986) は同著の中で人間科学における「物語への転回」の時代精神を次のように振り返っている。

1970代半ば、社会諸科学は伝統的な実証主義の立場を後にし、より解釈学的な立場へと移行していった。そこでは、意味 (meaning) がその主要な議論的になっていた。言葉はどのように解釈されるのか、どのような規則によって意味が規定されるのか、どのよ

うな含意のもとで、文化はそれ自体、一つの「テキスト」として、つまり、参加者達が自分たちの指針として「読む」ことのできる「テキスト」として扱うことが可能になるのか

(Bruner, 1986, p. 8)

20 世紀の学説史を概観してみるならば、心理学のみならず、人間科学の主立った議論は往々にして実証主義自然科学の方法論に依拠してその探求を進めてきたと言える。実証主義自然科学の方法論の範疇に位置づけられる心理学においては、人文学の範疇に位置づくものと考えられてきた特定の文脈の下に据えられた対象が持ち得る意味の理解といった問題関心が入り込む余地はほとんどなかった。Bruner (1986) はその理由について次のように述べている。

科学は人間の意図や人間の苦境を超えて不変のままに留まる世界を制作しようと目論む。... 他方、人文学者は、主にそれを見る者の立場とスタンスに伴って変化する世界を取り扱う。科学は、それを理解しようと求める人びとの生活状態の変化を越えて、事物や事象の不変性と結びついて「存在」する世界を作り出す...。人文学はその世界に住まうことによって求められることを反映するものとして世界を理解しようとする。言語学の用語で言えば、文学ないし文芸批評の研究は、文脈依存性を通じて一般化可能性を希求するが、科学研究は文脈独立性を通じてそれを希求するのである。

(Bruner, 1986, chap. 3, p. 50)

Bruner (1985, 1986, 1990) の理解に従えば、20 世紀の心理学研究は、概して、人々の生活状態の変化を超えて不変の精神の特質を解明することに向かってきた。文脈独立的に不変の知の構築につとめる実証主義自然科学の方法論と、自らが住まう生活世界の影響を受ける存在として、その影響の中にある人間の多様な振舞いや心の状態についての知の構築につとめる人文学の方法論。前者は文脈という概念を、真理を曇らせるノイズとして取り扱い、後者は文脈という概念を、真理において本質的な役割を果たすものとして取り扱う。ここに用いられる二つの真理という言葉の意味は、その研究上の目的が異なるためにはっきりと区別しなければならない。そう考えたが故に、Bruner (1985, 1986) は「二つの思考様式」を区別して論じたのである。つまり、前者の思考様式は文脈独立的な事象を「真理 (truth)」(Bruner, 1986, p. 11)

として価値づけ、後者の思考様式は、文脈依存的な事象に「迫真 (verisimilitude) ¹⁾」(Bruner, 1986, p. 11) という価値を見出してきたと論じたのである (Bruner, 1985, 1986)。そして Bruner (1985, 1986) は、これら「二つの思考様式」は人間の知の構築において相補的に機能してきたが、本質的に異質なもので、相互いに還元できないものと結論づけた。彼は「二つの思考様式」について次のように述べた。

思考の様式には二つの種類がある。各々は経験をまとめあげ、現実を構成するに当たって異なった仕方を提供する。二つ (相補的ではあるが) は、相互いに還元されえない。一方の様式を他方に還元しようとしたり、一方を他方の帰結として無視しようとしたりする試みは必然的に思考についての豊富な多様性を捉え損ねることになる。

(Bruner, 1986, p. 11)

こうした主張に続いて Bruner (1985, 1986) は、文脈独立的に不変の知の構築につとめる自然科学の方法論に則る思考様式を思考の「論理-科学的様式 (logico-scientific mode) ²⁾」(Bruner, 1986, p. 13)」と呼び、自らが住まう生活世界の影響を否応無く受ける存在として、その影響の中にある人間の様々な振舞いや心の状態についての知の構築につとめる人文学の方法論に則る思考様式を思考の「物語様式 (narrative mode) ³⁾」(Bruner, 1986, p. 13) と呼ん

¹⁾ ここで言われる「迫真 (verisimilitude)」とは、当該の事象の位置づくローカルな文脈において、他者との間に成立する事象の信憑性の程度によって査定される真理性を指す概念である。従って、後者の思考様式が価値をおく迫真性 (verisimilitude) はその基本的特性において文脈依存的であることになる。

²⁾ Bruner (1986) は、「論理-科学的様式 (logico-scientific mode)」(Bruner, 1986, p. 13) と同義の概念として「パラディグマティックモード (paradigmatic mode)」(Bruner, 1986, p. 13) という言い方も用いている。この思考様式は、物事の説明や記述に際して、それらを数学的な仕方で積み上げていくことを志向する思考様式である。つまり、精緻な類型化や証明の手続きを経て、複数項の因果関係を検証したり、論理付けたりすることによって、一つの普遍法則を構築していくことを企図する思考様式である。思考の論理-科学的様式は、主に一般化可能な因果律と、その証明とをとり扱っており、実証的真理へと向かうための手続きや、経験的証拠に基礎付けられた論証を行なうための手だてが考案されてきた。思考の論理-科学的様式は、自然科学が長らく依拠してきた思考様式を指している。Bruner の議論に従えば、思考の論理-科学的様式の適用は、「優れた理論、簡明な分析、論理的証明、適切な議論、合理的仮説から導かれた実証的発見」(Bruner, 1986, p. 13) といったものを生み出す。

³⁾ 思考の物語様式の適用は「優れた物語、胸を打つドラマ、(必ずしも「真実」でないとしても) 信憑性に富む歴史の説明」(Bruner, 1986, p. 13) といったものを生み出す。思考の物語様式は「人間の、あるいは人間らしい意図 (intention) や行為 (action)、そして、それらの成り行きを特徴づけている変化やその帰結」(Bruner, 1986, p. 13) を取り扱い、「超時間的な奇跡を、

で区別したのである。そして、20世紀の心理学の主立った議論が長らく思考の「論理-科学的様式」に定位して、精神の不変法則の解明に専心してきたことを批判し、新たに思考の「物語様式」に定位した心理学の存立可能性を展望した (Bruner, 1985, 1986)。ここで Bruner の「二つの様式」の概要を理解しておくことが本論の理解においても役に立つはずである。従って、Bruner (1985, 1986) の「二つの思考様式」の概要を表にまとめておく (表 1)。

表 1 Bruner (1986) の 2つの思考様式の概要.

思考様式	思考の論理-科学的様式 (logico-scientific mode)	思考の物語様式 (narrative mode)
志向	体系立った証明手続きと実験的証拠に依拠して普遍法則の解明を目指す。 真理を志向する。	人間の意図や行為、生の移り変わりといった人間の精神生活の多様な有り様を理解することを目指す。 迫真性を志向する。
方法	類型化、概念化、実験に基礎付けられた観察、数学的演繹。	ストーリー化、ドラマ化、物語化、経験を選択的、時系列的にまとめあげる行為。
記述の特性	一義的説明を求める。	多義的解釈を求める。
プロダクト	優れた理論、簡明な分析、論理的証明や議論、合理的な仮説から導かれた検証と緻密な考察。	優れたストーリー、胸を打つドラマ、(必ずしも「真実」ではないにせよ) 信憑性に富む歴史の説明。

1980年代の中頃に発表された「二つの思考様式」(Bruner, 1985, 1986) というアイデアによって Bruner が主張したことを簡単にまとめておこう。彼は、人間の精神機能に係るあらゆる研究は実証主義自然科学の方法論に立脚して進めるべきである、と考えてきた 20 世紀の主

個別具体的な経験へと取り込み、その経験を、時間と、空間の中に位置づけ直そうと苦心する」(Bruner, 1986, p. 13)。論理-科学的様式の適用は、無矛盾性と、因果的一貫性を志向し、結論が出るか、出ないか、にその主立った関心を向ける。これに対し、物語様式の適用は、人間が特定の脈絡の中で行う様々な行為やその行為の意味という主題を扱う。ここには、物事の因果的妥当性を破綻させるような相容れない価値の葛藤やジレンマ、矛盾が含み込まれる。だが、思考の物語様式に依拠する探求は、それらを拒絶するのではなく、それらを人間の生の具体的な有り様として理解することに向かう。

立った心理学研究の限界を指摘し、それらを棄却するのではなく、それらと並走し、それらの研究知見を補完するもう一つの立場として、「思考の物語様式」の方法論に定位して研究を進める心理学の存立可能性を展望した (Bruner, 1985, 1986, 1990)。Brunerはこの新しい心理学を「解釈 (interpretation)」という方法に依拠して、精神の動態を「意味 (meaning)」の理解の問題として研究する立場として考えた (Bruner, 1990)。

先に述べたように、心理学における「物語への転回」を展望するための一つの方法論的枠組みとして提案された Bruner (1985, 1986) の「二つの思考様式」の区別は、1980年代以降の物語への転回の学際的気運の中で「思考の物語様式」に立脚する心理学の一つの思想的基盤として広く受容されてきた (Atkinson, 1995/2006; Bamberg, 2010; Brockmeier, 2000, 2009; Brockmeier & Harre, 1997; Crossley, 2000a/2009, 2000b, 2003; Gergen, 1994/2004; Gregg, 1991, 2011; Hermans & Kempen, 1993/2006; Josselson, 2004; Josselson & Lieblich, 1993, 1995, 1999, 2009; McAdams, 1985, 1993; McLeod, 1997/2007; Monteagudo, 2011; 森岡, 2013, 2015; Murray, 2000, 2002; Polkinghorne, 1988; Riessman, 2008; Sarbin, 1986; Shachter, 2012; Wertsch, 2008, 2009; White & Epston, 1990; やまだ, 2000a, 2006, 2007, 2013)。

では、1980年代を一つの基点として展開した、言わば、実証主義自然科学の方法論から解釈主義科学の方法論への転回は心理学の中でのみ起こった出来事だったのか。そうではない。人間科学の探求の方法論に係る方向転換を「物語 (narrative) ⁴⁾」という概念を主軸にして総

⁴⁾ ここで物語という概念について説明を付しておく必要がある。物語という用語は、その語義の定義が困難な用語として知られる。英語では、物語に該当する語句として一般に 'narrative' と 'story' が用いられる。だが、ナラティブ心理学 (narrative psychology) の学的潮流においても、双方の語義上の区別については厳密な定義論を展開してはこなかった。むしろ、学界においては、'narrative' と 'story' とを置き換え可能な語句として、同義のものとして用いているのが主立った現況である (Bruner, 1990, 2002; Crossley, 2000a/2009, 2000b; McAdams, 1993; 森岡, 2013, 2015; Murray, 2002; Sarbin, 1986, 1990; Polkinghorne, 1988; Riessman, 2008; やまだ, 2000)。本論も、厳密な定義論に入り込んでいくことはその目的ではない。従って、特別に断わりのない限りは、'narrative' と 'story' とを物語という語句と同義の用語として扱うこととする。ただし、学界において物語 (narrative, story) という概念について強調されてきた次の点は付言しておく必要がある。それは、'narrative' という語句を用いる場合、それが行為過程 (process) としての「語り」と、所産 (product) としての「物語」という二つの語意を内包するものとして用いられるということである。例えば、Polkinghorne (1988) は、'narrative' と 'story' とを同義の語句として扱うことを断わった上で、双方が、過程 (process) としての「語り」と帰結 (result) としての「物語」という二つの語意を含んでいることを指摘している (Polkinghorne, 1988, p. 13)。また、日本語の言い回しにおいては、野矢 (2005) が両者を区別するために行為としての語りには「物語り」という表記を、所産としての物語には「物語」という表記を用いることを提案している。要するに、所産としての「物語」は行為としての「物語り」を前提しており、行為としての「語り」は所産としての「物

説した Polkinghorne (1988) は、物語という概念を人間科学の研究の方法論として取り入れた歴史学、文学、心理学、人間学の識見を総説し、「物語への転回」を学際的な動向として整理している。Polkinghorne (1988) は、その主著 *Narrative knowing and the human sciences* (Polkinghorne, 1988) の序論で、このパラダイムの方法論的基底に「意味 (meaning)」という概念を位置づけている。

経験は、意味のあるものであり、人間の振舞いは、この有意性によって生み出され、理解される。故に、人間の振舞いに関わる研究は、人間の経験に外形を与える意味体系への探求を含まねばならない。この本は物語についての探求を進める。物語は、人間の経験を意味のあるものにする原初的な手段である。物語的意味は、人間の経験を現時において意味のあるエピソードへと組織立てる一つの認知過程である。一つの認知過程であると言ったのは、一つの心的作用であるということだが、要するに、物語的意味は、直接観察によって把捉される“物理的対象”ではないということである。だが、人間の物語作りの所産である自伝や歴史は、直接観察することができる。物語の例は、個人史や社会史、神話、おとぎ話、小説、そして、我々が自分自身や他者の行為を説明する時に用いている日常の物語を含むものである。

(Polkinghorne, 1988, p. 1)

こうした Polkinghorne (1988) の主張は、Bruner (1986, 1990) と並んで、人々の生きた人生や経験の「意味」を、諸個人によって語り出された物語を通して理解することを研究の主目的に位置づけるナラティブ心理学の思想的、理論的な足場の一つとして引用されてきた (Bamberg, 2010; Bruner, 1990; Clandinin, Pushor & Orr, 2007; Crossley, 2000a/2009; Josselson, 2004; Josselson & Lieblich, 2009; Monteagudo, 2011; Murray, 2000)。

Polkinghorne (1988) の主張の要点は次のように要約することができる。人間科学の研究は、人間の経験に外形を与える意味の体系の研究を必要としている。意味の体系とは、ここでは言語を介して構築された世界についての認識の総体を指している。この時、意味の体系を構築する手段の一つとして位置づけられるのが物語である。なぜならば、物語が人間の経験に意

語」を否応なく導出するという含意において、両者は不可分の統合的關係にある。このことを指標する用語として ‘narrative’ という用語が用いられるのである。また、‘narrative’ は、口述 (telling) されたものにも、記述 (writing) されたものにも、同様に用いられる。

味を付与する原初的な手段の一つとして理解されているからである。Polkinghorne (1988) の言葉を借りれば「物語は、『意味生成』の一様式」(Polkinghorne, 1988; p. 36) である。人生や経験の物語化の作業に伴って付与される人生や経験の「物語的意味」は、物語という所産が残ることによって直接観察や分析を行うことができる。こうして、我々は人々が語り出した物語を通して彼らの生きた人生や経験の意味という主題を、人間科学の研究対象の一つとして扱うことができるようになる。本論の主題に沿って言い換えれば、物語を通して人々の生きた人生や経験の意味といった「行為の意味」を研究することができるようになる。こうした主張に重ねて Polkinghorne (1988) は物語という概念について次のように述べている。

物語は人間が束の間の経験や個人的な行為に意味を付与するための一つの手段である。物語的意味には、人生や日常的な行為や出来事に参与する目的をエピソード単位にすることによって理解可能な様式にする機能がある。物語はある人の人生の過去の出来事と、未来にする行為の計画について理解するための枠組みを提供する。物語は人間の存在を意味あるものにするための原初的な手段である。従って、人間科学における人間の研究は、概して意味の領域に照準を合わせる必要があるものであり、特に、物語的意味に照準を合わせる必要があるのである。

(Polkinghorne, 1988, p. 11)

Polkinghorne (1988) の考え方に従うならば、我々は物語という手段に依拠することによって、人生や経験を意味のあるものにする。物語化の作業を通して我々の「行為」は何らかの意味を纏った経験へと転成する。裏返して言えば、物語の筋立ての中に組み込まれることのない「行為」は、意味を持ち得ないことになる。従って Polkinghorne の主張の要点は簡潔に次のように述べることができるだろう。人々の生きた行為が意味を有するためには、行為が物語化される必要がある。ここで言う物語化とは、特定の筋立てに沿って、2 つ以上の出来事を、それらを繋ぎ止める文脈を介して再配列することとして定義しておこう。「筋立て」というのは、何についての物語か、という物語の主題に関わるものであり、再配列される諸種の出来事が物語において果たす役割や意味の全体像を規定するものである。一方「文脈」というのは、諸種の出来事を特定の意味的関連の下に結びつけていくその仕方に関わる概念である (Polkinghorne, 1988)。

本節では Bruner の「二つの思考様式」というアイデアを道具立てとして、1980 年代を一つ

の基点に展開した「物語への転回」という学際的な思潮の移行について理解を試みた。そこには、人々の生きた人生や経験の意味は、物語化の作業を通して付与され、物語を通して我々は人々の生きた人生や経験の意味を理解することができる、という考え方が根付いていることが示唆された。

1. 3. 精神の理解に向けた文脈主義アプローチの台頭

前節で明らかにしたように、人間科学の研究は、人間の振舞いや心の状態についての不変法則の解明という目的のみに定位して知の構築につとめるのではなく、時代背景や社会情勢、文化的慣習といった人々が生きる生活世界に固有の状況の影響を受ける存在として、その影響の中にある多様な人間の有り様についての理解につとめるべきであるという学的思潮が 1980 年代を一つの基点として展開した (Bruner, 1985, 1986, 1990; Gergen, 1973, 1985; Polkinghorne, 1988; Sarbin, 1986, 1990)。Bruner (1985, 1986) は、この学際的な動向を「二つの思考様式」という枠組みによって理解し直すことを試みたのであった。

だが、心理学における「物語への転回」の気運を捉えていたのは Bruner だけではなかった (Gergen, 1973, 1985; Gergen, K. & Gergen, M., 1983, 1984, 1986, 1988; Sarbin, 1986, 1990)。今日では社会構築主義の立場を主唱する代表的な理論家の一人である Gergen (1973) は、その初期の論考 *Social psychology as history* (Gergen, 1973) の中で、社会心理学は、時代や場所を超えて不変の一般法則の解明ではなく、時代や場所に応じて変化する対象として人間の精神や行為の可変的な様態の理解を目指すべきであると主張した。彼は、実証主義自然科学の方法論に依拠する従来の社会心理学の考え方を次のように記述している。

心理学の領域は概して、人間の行動の科学 (science of human behavior) として定義されてきた。そして、社会心理学は人間の相互交渉を扱う科学の支流として定義されてきた。科学のもっとも重要な目的の一つは、体系的な観察を通して、一般法則の擁立を確かなものにするにある。社会心理学者にとって、この一般法則は、社会的な相互交渉を記述し、説明するための手段を、より精緻なものにする。科学的法則についてのこの伝統的な見解は、当該領域のもっとも基本的な条項として、形を変えながら、繰り返されてきた。

(Gergen, 1973, p. 309)

実証主義自然科学の方法論に立脚する学問として定義される心理学において、その中心的な研究の目的は、人間の精神の動態について文脈独立的に真となる一つの普遍法則を捉えることにある。社会心理学においては、それは対人関係的な脈絡における精神の有り様についての普遍法則を解明することになる。Gergen (1973) は、歴史、社会、文化的脈絡から独立に妥当される精神の諸法則の解明を目的とする、という見解が心理学の内部に広く浸透してきたことを指摘した。そして、この指摘に重ねて彼は文脈独立的な普遍法則の解明を主目的に据える心理学研究の限界を指摘し、その代替として人々の生活世界と密接に結びついた歴史、社会、文化的脈絡に相対的なものとして、いわば、人間の精神や行為の動態についての脈絡と不可分の特性について理解を深める社会心理学の研究を展望した。

社会心理学は、本質的に歴史的な探求である。自然科学とは異なり、社会心理学は、概して再現することができず、時代を経て大きく変動する現実を対象とする。人間の相互交渉の法則を、時代を超えるものとして発展させていくことは容易ではない。なぜならば、社会心理学が基礎におく現実、概して安定したままであることはないからである。従って知識を、通例の科学的含意において積み上げていくことが出来ない。というのも、知識は、その歴史的境界を越境していくことが出来ないからである。

(Gergen, 1973, p. 310)

人間の精神や行為の様態を研究するための分析の視座や説明概念は、人々に現前する生活世界と結びついた歴史、社会、文化的脈絡と不可分に機能する。そして、歴史、社会、文化的脈絡は、時代の変遷に伴って絶えず変化していく。それ故に、心理学者は人々の生活世界の変化と共に、絶えず自らの分析の視座や説明概念を更新していかなければならない。Gergen (1973) は社会心理学の研究は人々の生きる当世の生活世界と不可分に結びついた、言わば「歴史的脈絡 (historical context)」(Gergen, 1973, p. 319) に相対的な実践としてしか遂行し得ないと結論づけたのである。

社会心理学の研究は、本質的に歴史学的な企てである。我々は、基本的に同時代の出来事についての体系的な説明に携わる。我々は科学的な方法論を役立てる。しかし、その所産は伝統的な含意における科学的法則ではない。将来、歴史家が当世の生活についての理解を深めるために、かの説明を参照することがあるかもしれない。しかし、未来の心理学

者は当世の知識に対して、なんの価値を見出すこともないだろう。

(Gergen, 1973, pp. 316-317)

時代、場所、社会-文化的な制度や規則体系が異なれば、人々の振舞い、態度、信念、道徳、価値観、世界観を指標する分析概念も変化していく。それ故に、先に述べたように研究のための分析概念や方法論も、絶えず変動する社会、文化、歴史に相対的なものとして、人々が生きる生活世界の脈絡と不可分のものとして更新されていかなければならない。1970年代に公刊された Gergen の論考の中には、早くも実証主義自然科学の方法論に立脚して文脈独立的な精神の普遍法則の解明を目指す心理学ではなく、そうした志向からは明確に袂を分かつものとして、歴史、社会、文化の変化に応じて絶えず変化するものとしての文脈依存的な精神の動態の理解を目指す心理学が展望されていた。以上の展望が、先の論考の中で具体的な心理学の構想として論じられることはなかったが、この論考の10年後、Gergen は自らの心理学に「物語」という概念を取り込んでこの展望を具体的な研究構想の中に盛り込んだ (Gergen, K. & Gergen, M., 1983, 1984, 1986, 1988)。

以上、本節では Bruner (1985, 1996) の「2つの思考様式」のアイデアに重ねて、Gergen (1973) の心理学における「歴史相対主義」の議論を概説することを通して、心理学における「物語への転回」の思想的背景を理解することにつとめた。次節からは、もう一段本論の主題に踏み込んでナラティブ心理学の具体的な展開について論じていく。

1. 4. ナラティブ心理学の展開における三つの理論的立場

心理学における「物語への展開」は、ナラティブ心理学という呼称を伴って今日まで引き継がれてきた。本節では、この展開には少なくとも大きく三つの理論的立場があることを示し、続く議論のガイドを用意する。

人々の行為に意味を割り当てる所与の構造としての物語論. ナラティブ心理学の展開における第一の理論的立場は、物語という概念を、人間の行為に意味を割り当てる所与の構造として考える立場である (Mancuso & Sarbin, 1983; Sarbin, 1986, 1990; Sarbin & Allen, 1968)。この立場では、人々の生きた「行為に意味」を、当の行為の外部から割り当てる外的構造として物語を定義する。そして、物語を行為の意味を規定するための参照枠組みとして利用することによって、人々の生きた「行為の意味」が理解可能になると考える。この論立ての中では物

語が、人々の行為の外側にあるものとして定義される。人々の生きた行為の意味を、当の行為の外側から説明するための外的な参照枠組みとしての物語の発露を、人間の精神が有する内的なメカニズムに求めるにせよ、社会、文化、歴史といった外的な枠組みに求めるにせよ、物語と意味の生成原理については不可知論的な立場に立つ。従って、物語と意味の生成原理については不問とされている。

主観性や私的経験の世界を具現する手段としての物語論. ナラティブ心理学の展開における第二の理論的立場は、物語という概念を諸個人の主観性や私的経験の世界を具現する言語的な媒介として定義する立場である (Atkinson, 1995/2006, 1998; Crossley, 2000a/2009, 2000b, 2003; McAdams, 1985, 1993; McAdams, Josselson & Lieblich; White & Epston, 1990; Riessman, 2008)。この立場では、個人の主観性や私的経験の世界と、その具現としての物語世界とを平行な二重構造の関係にあるものとする。言葉を換えて言えば、諸個人の語り出す物語を、人生や自己の一つのメタファーとして理解する。主観性や私的体験といった諸個人に固有の内的世界は、物語を媒介して部分的に他者に開示される。開示される内的世界が部分的である所以は、我々は主観や私的体験の世界の全てを一回の物語に組み込むことはできないと考えられるためである。如何なる物語が構成されようとも、語り尽くされぬ個人の主観や私的経験の世界という前提に依拠することによって、この立場は個人というものに他者が立ち入ることの出来ない内的な領域が存在することを認める。その一方で、主観や私的体験の世界と、その部分的な表現としての物語世界とを平行な構造にあるものと仮定し、諸個人に固有の主観や私的体験の世界の存在を認めつつも、その十全な認識は不可能であるとする議論は、第一の理論的立場と同様に、一つの不可知論を主張することになる。また、この理論的立場においても、物語と意味の生成原理については、「人間はその本性において物語を語る存在である」(McAdams, 1993, p. 27)、「物語を語るということは、我々の血の中に受け継がれている」(Atkinson, 1995/2006, p. ix) といった人間についての存在論的前提の内に不問に処されている。

人々が生きる現実を構築する手段としての物語論. ナラティブ心理学の展開における第三の理論的立場は、物語や意味という概念を、人々が言語を用いて相互にやりとりする社会的交渉の所産と見なす立場である (Anderson & Goolishian, 1988/2013, 1992/2014; Bamberg, 2006, 2010; Bamberg & Georgakopoulou, 2008; De Fina & Georgakopoulou, 2012; Georgakopoulou, 2006; Gergen, K. & Gergen, M., 1983, 1984, 1986, 1988; Gergen, 1985, 1994/2004, 1999/2004)。この立場では、人々の言語を介した社会的交渉の所産として構築さ

れた物語が、我々が生きる現実を構成し、それらの現実の意味を付与していると考え。原初にあるのは社会的関係であり、物語が現前する具体的な社会的関係を越えた外部にあると仮定する立場とは対立する。物語や意味は、言語を介した人々のローカルな社会的交渉の産物としてその都度、その場限りにおいて構築されるものであって、社会的な相互交渉を超えて実在するものではない。この立場の研究の主題は、人々の心理学的現実が如何に社会的に構築されたものであるかを明らかにすることにある。この立場は本来、説明して然るべき問題の核心部を不可知論的な言説に任せておくことを批判する。そして、人々の生きる現実、関わり合う人々の間で交わされる言語を介した社会的交渉の所産としてその都度構築される一つのヴァージョンに過ぎないという考え方に立脚する。物語や意味は、諸個人に固有の主観性や私的体験の世界といった曖昧な出所から引き出されてくるものではなく、関わり合う人々の間で交わされる言語を介した社会的交渉の産物としてその都度作り上げられるものと考え。こうした立場は、一般に社会構築主義と呼ばれる (Gergen, 1985)。本論文では、こうした考え方に依拠して展開したナラティブ心理学の立場を社会構築主義的物語論と呼ぶことにする。社会構築主義的物語論に対する批判は、物語や意味の生成に関わる個人の役割や、諸個人に固有な主観や私的体験の世界といったレベルに位置づく議論を不問に処していることに向けられる (Crossley, 2000a/2009, 2000b)。また、物語と意味の生成原理については、『個人心の達成』ではなく、『関係性による達成』 (Gergen, 1994/2004, p. 273) という説明が為されるに留まり、その生成原理についての理論的検討が十分に為されているとは言い難い。

物語が物事に意味を付与するという共通の方法論的前提。 以上、ナラティブ心理学の展開を3つの理論的立場の展開として要約した。一つ目の理論的立場が、人々の行為に意味を割り当てる所与の構造としての物語論の展開である。二つ目の理論的立場が、主観性や私的経験の世界を具現する手段としての物語論の展開である。そして三つ目の理論的立場が、社会構築主義的物語論の展開である。ここではさらに、この3つの理論的立場に共通する方法論的前提を確認しておく。それは、いずれの理論的立場においても物語という概念が対象に意味を付与する手段として定義され、各々の議論に組み込まれてきたという事実である。第一の立場において物語は、人々の生きた行為に意味を割り当てる上位構造として理解される。第二の立場において物語は、主観性や私的体験の世界を具現し、それらに意味を付与する手段として理解される。そして第三の立場においても社会的に構築された物語は、人々の生きる現実の意味を付与する手段として理解される。要するに、いずれの理論的立場においても、物語は人々の生きた行為に意味を付与する手段として定義され、人々の生きた「行為の意味」は、物語化の作業

によって理解可能になるという方法論的前提に依拠している、ということである。こうした方法論的前提に依拠することによって、我々は、人々が語り出した物語を対象として人々の生きた「行為の意味」を問うことができる。ここに我々はナラティブ心理学の主立った議論の要点を、ひとまず次のように定式化することができる。つまり、ナラティブ心理学は、物語を物事に意味を付与する手段として定義することによって、人々の行為や精神の動態についての理解を深めることをその目的に据えて展開した心理学の一つの立場であるということである。さて、次節からは、本節で述べた三つの理論的立場と、ここで述べた定式化がナラティブ心理学の展開の中でどのように連なってきたのかを明らかにしていく。

1. 5. ナラティブ心理学の草創期の議論

人々の社会的な振舞いや心の状態についての心理学理論は、当世の時代背景や、歴史、社会、文化的な脈絡を反映し、この脈絡に拘束される。先に取り上げた Gergen (1973) の論考の要点はこのようなものであった。Sarbin (1986) は Gergen (1973) のこの論考を引用し、「ナラティブ心理学 (narrative psychology)」(Sarbin, 1986, p. vii) の具体的な構想に結びつけた。Sarbin (1986) は、もしも Gergen (1973) の結論を引き受け、社会心理学が歴史の変遷と不可分であるならば、歴史とは物語であり、それ故に、社会心理学は物語であるという三段論法を主張した (Sarbin, 1986)。

もし、我々が一つの三段論法の大前提として、**社会心理学は歴史である**という Gergen の結論を引き受けるならば、この前提に連結する小前提は、**歴史とは物語(narrative)である**、という先の議論の展開であり、故にこの三段論法の帰結は、**社会心理学は物語である**という命題に辿りつく。(人間心理学の各論が感覚生理学を扱うということを留保するならば、心理学と社会心理学は同等と見なし得る。故に、心理学は物語である、と付言しておこう。)

(Sarbin, 1986, p. 8: 強調は原文)

この引用部で Sarbin (1986) が「先の議論」と述べているのは、歴史学における実証主義から解釈主義への方法論的転回についての議論である。解釈主義の方法論に立脚する歴史観において歴史とは過去に起こった史実、あるいは今まさに起こっている出来事についての年号や

時系列毎の記録の集積ではない。そうではなく、複数の史実についての記録を、特定の筋立てに沿って再構成した一つの物語として定義されるものである。そこには、当の歴史物語の軸となる主題があり、それとわかる書き出しと、展開部、そして結末がある。ある史実と、別の史実との間の因果的結びつきを妥当するための挿話には多種多様なヴァリエーションが想定される (Mink, 1978; White, 1973, 1981/1987)。こうした解釈主義史観の下では一つの歴史として「現実には起きた事件の様子を述べようとすれば、物語以外の形式はとりえない」(White, 1981/1987, p. 17) という立場に立つ。この言葉の限りにおいて解釈主義史観の下で歴史家とは、物語の作り手であり、語り手である。同時に、歴史的眞実という言葉が指示するものは普遍的史実として実証可能な眞理 (truth) ではなく、物語の解釈妥当性に依拠した迫眞性 (verisimilitude) によって価値付けられるものとなる (Bruner, 1985, 1986, 1996; Mink, 1978; Spence, 1982; White, 1981/1987)。

Sarbin (1986) は、社会心理学は歴史であるという Gergen (1973) の心理学における「歴史相対主義」の議論と、歴史学における転回の契機であった「歴史とは物語である」とする解釈主義史観の立場 (Mink, 1978; White, 1973, 1981/1987) とを結びつけて、心理学は物語であるという一つの前提を導き出した。だが、心理学は物語である、とは何を意味しているのか。*The narrative as a root metaphor for psychology* (Sarbin, 1986) と題された論考における Sarbin の主張は次の一文に集約される。

物語は、心理学と他の人間科学にとって潜在的に有効なルートメタファーである

(Sarbin, 1986, p. 4)

この一文を読み解く鍵となる概念がルートメタファーである。Sarbin (1986, 1990) は、この概念を Stephen Pepper の *World Hypotheses* (Pepper, 1942) と題された論文から借り受けている。我々が、何らかの新奇な出来事に出会ったとしよう。そして、その出来事を理解するための勝手のよい参照枠や分類の基準が手近に見当たらないとする。新奇な出来事は、それが位置づく参照枠や分類の基準が与えられない限り、分類できず、具体的な説明を付与することもできないとしよう。この時、当の新奇な出来事は、それに直面している者にとって理解し難いものに留まっている。そこに、当の出来事を理解するための一助となるような、構造的、形態的に似通った事象が得られるとする。我々は元の出来事を対応づけて説明することを可能にするこの類似事象のことをメタファーと呼ぶ (Sarbin, 1986, 1990)。

Pepper (1942) は、我々が物事の真偽についての仮説を作り上げる際にも、我々は何らかのメタファーを活用することによって対象についての理解を深めようとする論じた。そして彼は、我々が人間科学の探求に関わる仮説を生成する際に深く依拠してきたメタファーのことをルートメタファーと呼んだ。Pepper は、人間科学の探求が歴史的に依拠してきたルートメタファーとして形態論 (formism)、機械論 (mechanism)、有機体論 (organism)、文脈主義 (contextualism) の 4 つをあげている (Pepper, 1942; Sarbin, 1986, 1990)。彼のルートメタファーの議論は、20 世紀の終わりに生じた「物語への転回」の動勢を理解するために有効な枠組みとして屢々引用される (Hermans & Kempen, 1993/2006; Mitchell, 1981/1987; Sarbin, 1986, 1990; White, 1973)。以下では Sarbin (1986, 1990) の論考を辿って Pepper (1942) の論じた機械論と文脈主義との関係を対比的に位置づけることで、Sarbin が捉えた心理学における「物語への転回」を理解する。

機械論のルートメタファーは機械である。機械の基本的特徴の一つは、機械を組み上げている各部品間に何らかの指令と、それを実行するために必要となるエネルギーが伝送されることによって動作する、ということである。特定の外的入力に随伴して、構造体を構成している各部品間に指令とエネルギーが伝送され、それらを引き受けた各部品が稼動し、特定の動作が実行される。部品や伝送のメカニズムに何らかの不具合が生じている時、動作は上手くいなくなる。このような時、我々は機械を分解して中を調べ、不具合の原因を突き止めようとする。そして不具合の原因が明らかになったならば、修理を試みたり、部品の交換を行ったりすることによって円滑な動作を維持しようとする。

このように考える時、機械をルートメタファーに位置づける立場が探求するのは、言うなれば、物事の成り行きについての不変の因果法則である。要するに、A という入力にたいして、X という出力が得られるという不変の因果関係を土台として、その過程で機能している因果の仕組みと、その仕組みの一般化可能性を希求することを目的に据える (Bruner, 1985, 1986, 1990, 1996)。機械論は、自然科学の方法論の中に深く埋め込まれてきた理解の枠組みの一つであり、行動主義や、人間の認知過程を計算機になぞらえて理解しようとした初期の認知心理学の仕事もまた、こうした視座の下に探求を進めてきた (Brockmeier, 2009; Bruner, 1990, 1996; Costall, 2006; Harre, 1992, 1999; Sarbin, 1986, 1990)。

これに対し、文脈主義のルートメタファーは「歴史的出来事 (historical event)」(Sarbin, 1986, p. 6) であるとされる。先に述べたように歴史的出来事とは、過去のある一時点に単体として残された年号と起こった出来事についての事実記録のことではない。ここで言われてい

る歴史的出来事とは、変化の途上にあるものとして現在にも脈打ち、将来に向かってさらなる変化を賦活していくような、連続する時間的経過に伴って変化していく出来事のことを指している。Pepper (1942; quoted in Sarbin, 1986, 1990) によれば連続する時間的経過に連なって「変化していく出来事」というルートメタファーに依拠して世界を理解しようとしてきたのは、Pirce、James、Dewey、Mead といったプラグマティズムに立脚する哲学者たちであった。プラグマティズムを信奉する哲学者たちにとって、真理は元来、迫真性によって価値づけられるものであった。すなわち、これと定まって不動の真理といったものは存在せず、全ては変化を前提とした束の間の関係や行為の過程の探求として問われてきた。

Sarbin (1986, 1990) は、連続する時間的経過に連なって変化していく出来事に焦点をあてる文脈主義のルートメタファーは、外的な入力を契機として何らかの因果的メカニズムに従って作動する機械をメタファーとする機械論とは全く異なる仕方で世界についての仮説を擁立すると主張した。そして Sarbin (1986, 1990) は「変化していく出来事」というルートメタファーを具現する方法論の中核に物語という概念を位置づけたのである。その理由について Sarbin (1986) は、次のように述べている。

文脈主義のルートメタファーは歴史の変転である。このメタファーは物語という叙述と対応づけることができる。私は、物語は人間の行為を精査し、解釈するための一つの有益なメタファーであることを論じてきた。

(Sarbin, 1986, p. 19)

物語は、諸種のエピソード、行為、行為の理由を組織立てる方法である。物語は、馴染み深い現実と、空想の産物とを一緒にして編み上げる。この時、時間と空間とは混ざり合っている。物語は、事件の原因だけではなく、行為に係る役者の思惑の含意にまで気を配る。私は、物語を人間の行為を組織立てる原理の一つに位置づけたい。

(Sarbin, 1986, p. 9)

上の引用に明らかなように Sarbin (1986, 1990) は、物語は、人間の行為と、当の行為と結びついた多様な人間の精神状態とを統合的に組織立てる手段の一つであると主張した。そして、人間の行為についての我々の理解は、根源的に物語の構造に従っているという主張を展開した。彼はこの原理を人間の行為の理解に係る「物語原理 (narratory principle)」(Sarbin, 1986, p.

8) と呼んだ。そして、この原理の機能を次のように説明した。「物語原理は、予測し難い出会いや、日常生活の中で経験したやりとりに意味を付与するものとして作用する」(Sarbin, 1986, p. 19)。こうして Sarbin (1986, 1990) は心理学の研究を、連続する時間的経過に連なって変化していく精神や行為の動態を捉える道具立てとしての「物語 (narrative)」というメタファーに依拠して展開することを提案し、この探求の中核に「意味 (meaning)」という概念を位置づけたのである。この定式に至って、我々は「物語」を通して、人々の生きた「行為の意味」を研究することができるようになる。Sarbin (1986) は、この新しい心理学の構想に「ナラティブ心理学 (narrative psychology)」(Sarbin, 1986) という呼称を与えた。

Bruner (1985, 1986) の「思考の物語様式 (narrative mode of thinking)」、Polkinghorne (1988) の「物語的意味 (narrative meaning)」、Sarbin (1986) の「物語原理 (narratory principle)」という 3 つの議論は、1980 年代を一つの基点として「物語への転回」という標語を伴って理解されてきた学際的な動向の中で、人々の生きた「行為の意味」を物語という手段を通して理解することに目的を据えるナラティブ心理学の思想的、理論的基礎として理解される (Bamberg, 2010; Crossley, 2000a/2009; Josselson, 2004; Josselson & Lieblich, 2009; Murray, 2000)。いずれの議論も、人々の絶えず変化していく振舞いや精神の様態を、「変化していく出来事」を捉える手段として定義される「物語 (narrative)」を通して研究することを主張するものであった。

1. 6. 物語の語り手は誰か

前節で明らかにしたように「物語は心理学と他の人間科学にとって根源的に有効なルートメタファーである」(Sarbin, 1986, p. 4) と主張し、ナラティブ心理学の一つの基礎を築いた Sarbin (1986) は、「物語」が人々の絶えず変転する行為や精神の様態を組織立て、解釈するための道具立てとして有効に機能することを主張した。この時 Sarbin (1986) は、物語という概念を、行為の担い手、すなわち、物語の登場人物の役割や行為に意味を割り当てる上位概念として位置づけた。実際、彼は次のように述べている。「何らかの行為者の振舞いに意味を割り当てるのは [物語の] 文脈の機能による」(Sarbin, 1986, p. 7: [] は筆者)。この論立ての中には、物語の登場人物の行為の現場からは切り離された存在として、物語の構成において特権的立場にある語り手の存在が仮定されている。つまり、物語の登場人物と、物語の語り手とは、異なる世界に足場を置いているということが前提されている。この前提に依拠して、

出来事の展開や登場人物の役割や行為の意味は、特権的立場にある語り手が構想する物語の全体的な筋立てのもとに割り当てられることになる。要するに、Sarbin (1986, 1990) の主張した「物語原理 (narratory principle)」(Sarbin, 1986, p. 8) は、物語の登場人物の行為の現場の外側から、彼らの行為や役割に「意味を付与する」原理として定義されることになる。言葉を換えて言えば、人々の生きた「行為の意味」を、彼らの生きる行為の現場の外部から意味づける手段が物語である、ということになる (Mancuso & Sarbin, 1983; Sarbin, 1986, 1990; Sarbin & Allen, 1968)。

こうした論立てに対し、Gergen, K. & Gergen, M. (1983, 1984, 1986, 1988; Gergen, 1994/2004) は、Sarbin ら (Mancuso & Sarbin, 1983; Sarbin, 1986, 1990; Sarbin & Allen, 1968) の論考と、それに類する諸種の議論は、人々の生きた「行為の意味」についての説明を、当の行為の外側に用意された所与の構造としての物語の筋 (plot) が割り当てるものとして論じているために、人々の生きた「行為の意味」を決定論的に理解することになっていると批判した。Gergen, K. & Gergen, M. (1983, 1984, 1986, 1988; Gergen, 1994/2004) はこうした批判に基礎づけて、人々の生きた「行為の意味」を、当の行為の現場の外側から割り当てる決定論的な概念としての「物語」という見方を退け、社会構築主義というメタセオリーから導出される方法概念の一つとして「物語」の概念を位置づけ直した (Gergen, 1985, 1994/2004; Gergen, K. & Gergen, M., 1983, 1984, 1986, 1988)。彼らは「自己物語」という概念を一つのキーワードにして決定論的な物語論の立場とは対比的に自らの立場を論じた。

規範概念 (Harre & Secord, 1972)、役割の筋書き (Sarbin & Allen, 1968-1969)、相互行為の儀礼 (Goffman, 1974)、そしてスクリプト (Shank & Abelson, 1977)。これらは全て、時間をまたいで連鎖する行為に関する心理学的基盤を扱おうと取り組んできた。いずれの場合においても理論家たちは、そこに人間の行為に寄与する自足的な基盤を仮定してきた。この点において、上に述べた諸概念は自己-物語という概念に類似する。しかしながら、後述の概念とは異なり、上に述べた理論家たちの場合、支配的、あるいは統制的な機能を諸種の構造にあてがう傾向にある。要するに、個人は、適切妥当な振舞いを直示するような関連する規範 (rule)、役割の筋書き (role prescription)、儀礼 (ritual) の把握、あるいはスクリプトを参照し、問い質すことを通して叙述される。

(Gergen, K. & Gergen, M., 1983, p. 256)

Gergen らは人々の生きた「行為の意味」についての説明を、当の行為の外部に位置づけられる所与の構造が有する筋書きが割り当てるものとして論じる立場を批判した。そして、社会構築主義というメタセオリーから導出される方法概念の一つとして物語という概念を位置づけ直した。彼らは次のように主張した。

我々において自己物語は所与の命令系統といったものをもたない。むしろ自己物語を、相互行為の進行に伴って、動的に構築され、絶え間なく変化するものとして捉える。この場合、個人は、情報としての物語から引き出されてくるものではない。自己物語は、関係の中にある人々によって構築され、再構築され、そして、様々な行為を支え、強め、付け加えるために関係的に採用される言語的手段である。

(Gergen, K. & Gergen, M., 1983, p. 256)

社会構築主義というメタセオリーに立脚する彼らの理論的立場は、心理学における知の適切妥当性は、絶えず変化していく人々の社会的交渉のその時々所産としてしか保証され得ないというものであった (Gergen, 1973, 1985)。こうした理論的立場の延長線上に Gergen らは、それまで精神の奥底に実在するものとして仮定されてきたような、自己、アイデンティティ、人格といった心理学的概念を、社会的関係の中での言語を介したやりとりとして遂行される「物語による構築 (narrative construction)」(Gergen, K. & Gergen, M., 1986, p. 23) という視点から捉え直すことを主張した (Gergen, 1985, 1994/2004; Gergen, K. & Gergen, M., 1983, 1984, 1986, 1988)。Gergen らにとって物語という概念は、人々の生きた「行為の意味」を、当の行為の外側から枠づける所与の構造ではなく、人々の社会的な相互交渉の産物としてその時々関係の中でその都度構築されていく現実についての言語的表象を指すものであった。

Gergen, K. & Gergen, M. (1983) は、自己という概念に関わる古典的な心理学の研究は 2 つの特性を有してきたと指摘する。一つは、機械論に依拠してきたということであり、もう一つは共時性に縛られてきたということである。既に言及したように機械論は、人間の精神の内部構造を、外的な作用に応答して起動する各部品間の仕掛けに統制されるものとして説明する議論である。一方、共時性に縛られてきたというのは、諸個人の精神の特性が、実験室などの閉じられた空間の中で、限られた時間でなされる課題遂行の一時的な応答関係に局在して類型化されてきたことを指している。これらの方法論の中では、自己が一つの通時的概念として他

者との関わりの中で時間をかけて醸成されていくといったような自己の生成史的、発達史的な特質への検討がなされない。Gergen らの言葉を借りれば、このようなアプローチにおいては「自己理解という省察的な再構築に資する個人の可能性は否定される」(Gergen, K. & Gergen, M., 1983, p. 255)。しかしながら、Gergen らにしてみれば「与えられた時間内での個人の自己についての見方というものは、彼、彼女の過去がどのようなものであったか、ということと結びつかない限り全く意味をなさない」(Gergen, K. & Gergen, M., 1983, p. 255)。自己概念に対する共時性に縛られた分析は、この点に全くもって無自覚であった。これに対し Gergen, K. & Gergen, M. (1983) は、人間が出来事を省察的、再帰的に振り返るという認知的能力と、発達の歴史性を背負った個人という視点を導入することによって、自己、アイデンティティ、パーソナリティといった心理学的概念の「物語」による構築という考えを主張したのである。

人々は、断片的になっている出来後を時間的な境界を超えて関係づける能力に根源的に依拠して自分たちのアイデンティティを維持していると信じている。ここに提示する分析は、特に個人による個人史の能動的な構築、つまり省察的で、通時的な構築に関心を向ける。このことは、受動的な実在に対置されるものとして、能動的な生成の形相に関心を向けるということである。我々は個人が、自己に関連する諸種の出来事の間を通過的に説明することを指して「自己物語」と呼ぶ。

(Gergen, K. & Gergen, M., 1983, p. 255)

Gergen, K. & Gergen, M. (1983) の定義に従うならば、個人が特定の主題に関連する諸種の出来事を選択的に選び出し、時系列的に結びつけて説明する行為が「物語」である。従って、「自己物語」と言えば、それは個人が自己という主題に関連する諸種の出来事を選択的に選び出し、時系列的に結びつけて再構成した「物語」のことを指している。では、言語を介した社会的交渉の所産として再構成される「自己物語」とは一体如何なるものであるのか。Gergen (1994/2004) の議論に従えば、我々は物語の構築を通して人生の様々な出来事を特定の収束点に向かって体系的に結びつけ、ひとつのまとまりとして理解しようとする。

われわれは物語の慣習を利用することによって、人生を首尾一貫したものにし、それらに方向性を与えている。人生は意味を獲得し、起こった出来事は理解可能なものとなる。物語形式のあるものは、文化の中で広く共有されている——頻繁に利用され、人々に熟知さ

れ、様々な場面で用いられる。ある意味で、こうした物語形式は「自己物語 (self narrative)」の可能性の源泉と言える。

(Gergen, 1994/2004, p. 258)

諸個人の生きた人生や経験といった「行為の意味」は、物語化の作業を介して付与され、理解可能になる。ただし、このような『自己についての語り』は、個人の所有物ではなく、関係性の所有物——社会的交流の産物——である」(Gergen, 1994/2004, p. 249)。こうした理論的立場に定位しながら Gergen, K. & Gergen, M. (1986) は、社会的に構築され、他者との間に共有され得る物語の基本要件について次のような定式化を行なった。

ナラティブによる説明が上手くいくためには、まずもって、**目標となる状態の設定**、あるいは価値づけられた収束点がなければならない。.... 目標となる状態の生成とともに、上手くいくナラティブは、**目標となる状態が多かれ少なかれありそうなことになるように工夫していくつかの出来事を選び出し、配列しなければならない。**

(Gergen, K. & Gergen, M., 1986, p. 23: 強調原文)

一つの物語を構成し得る複数の出来事の叙述が、目標となる収束点と無関係な出来事の羅列になっているならば、その物語の意味は次第に喪失し、曖昧模糊としたものになってしまう。要するに「一体、あなたの話の含意は何だったのか」と問い質されることになる。あるいはまた、出来事の配列が、ある出来事から、別の出来事へ、その「因果的な結びつき」(Gergen, K. & Gergen, M., 1986, p. 26) において、その物語を解釈しようとする他者にとって不可解な部分を多く持っている場合にも、やはりその帰結は先と同様になる。

従って、選び出された諸種の出来事が、価値づけられた収束点と連関する範囲内で結び合わせられ、ある出来事から別の出来事へとそれらしい因果的結びつきを維持している限りにおいて、一つの物語はその内容上の一貫性を保持することができる。Gergen, K. & Gergen, M. は、「ナラティブの構築に関わるこれらの諸原則が、時間をまたいで遂行される人間の行為を説明しようとする我々の試みを導いてくれる」(Gergen, K. & Gergen, M., 1986, p. 26) と結論づけた。

Gergen, K. & Gergen, M. (1983, 1984, 1986, 1988) は、こうして我々が語り出した物語には、その収束点の価値付けの位置取りと、そこへ向かって配列される出来事の結びつけ方にお

いて3つの基本形があるとした。彼らは物語の3つの典型的軌道を図示するために、直交する二軸から構成される平面図を用意した。平面図の横軸は、物語の時間的進行を表し、縦軸は、肯定と否定の二項からなる物語の主人公、ないし登場人物の価値付けの位置を表す。このようにして時間 (time) の軸 (横軸) と、価値 (evaluation) の軸 (縦軸) によって構成される座標軸上に物語の3つの典型的軌道が図示される。

(1) 前進するナラティブ：出来事の時間的配列が個人 (individual) によって価値づけられた肯定的 (+) な収束点に向かって進行していく物語。

(2) 後退するナラティブ：出来事の時間的配列が、個人 (individual) によって価値づけられた否定的 (-) な収束点に向かって進行していく物語。

(3) 不変のナラティブ：出来事の時間的配列が、個人 (individual) によって価値づけられた収束点に向かって変化なく進行していく物語。

(Gergen, K. & Gergen, M., 1986, p. 26; see also, 1983, 1984)

Gergen, K. & Gergen, M. (1983, 1984, 1986, 1988) は、物語の3つの基本形を組み合わせることによって、我々はより複雑な物語を構成することができると論じた。例えば、高い地位にあった人が絶望の淵に瞬く間に転落してく悲劇においては、前進するナラティブ (progressive narrative) に続いて、後退するナラティブ (regressive narrative) が組み合わせられる。また、喜劇やロマンスといった物語の構成は、穏やかな歳月の中に、突然の災難が降り掛かり、沢山の支えや、救世主の登場によって平穏を取り戻していくといった作りになっている (前進—後退—前進)。あるいはまた、苦悩の歳月の末に、喜びに満ちた生活を手に入れるといったシンデレラ物語 (後退—前進) や、夢や野望に向かって努力と挫折とを繰り返し、最後には栄光を手に入れるといった英雄物語 (前進—後退—前進—後退—前進) も我々に馴染み深い物語の様式であるという (Gergen, K. & Gergen, M., 1983, 1984, 1986; see also, Gergen, 1994/2004, 1999/2004)。

こうした複数の基本形の組み合わせとして構築された物語に、物語としての迫真性を付与する効果として Gergen, K. & Gergen, M. (1983) は「劇的組み合わせ (dramatic engagement)」 (Gergen, K. & Gergen, M., 1983, p. 262) という視点を付け加える。これは、(1) 種類の異なる物語の基本形 (前進、後退、不変) が複数組み合わせられることによって生じる物語の変化のコントラストの度合いと、(2) たとえば、前進するナラティブから後退するナラティブへ

と物語が変化していくといったように、出来事と出来事との結びつきが、特定の方向転換を伴うという二つの要件からなる。この要件が物語に与える効果は、物語の進行にドラマが生み出されるということである。物語が、終始、不変のナラティブ、前進のナラティブ、後退のナラティブのいずれか一つによって貫かれているとき、我々は通例、その物語をドラマティックだとは考えない。むしろ、出来事と出来事との結びつき方において、前進や後退のコントラストがはっきりと浮き彫りになり、その緩急が特定のダイナミズムを持って提示される時に、我々はその物語の展開をドラマティックだと感じる (Gergen, K. & Gergen, M., 1983, 1984; see also, Gergen, 1994/2004)。

続いて Gergen, K. & Gergen, M. (1983) は、個人が生の実験を複数の出来事の結びつきとして関連づけていく仕方には無数のヴァリエーションが想定されるが、それらは、物語が採用する時間的スケールによって類型することができるという。例えば、我々は物語の主題に関連する出来事を、遠大な歴史的時間の中に位置づけることもできれば、小さな日常の一コマとして位置づけることもできる。彼らは、前者を出来事が時間的に広いスケールの中に位置づけられるという含意において「巨視的物語 (macronarratives)」(Gergen, K. & Gergen, M., 1983, p. 263) と呼び、後者を出来事が時間的に小さいスケールの中に位置づけられるという含意において「微視的物語 (micronarratives)」(Gergen, K. & Gergen, M., 1983, p. 263) と呼んだ。異なる時間的スケールの中に関係づけられる出来事は、屢々、前者が後者を包含する「入れ子状の物語 (nested narratives)、あるいは、物語の中の物語 (narratives within narratives) を構築する」(Gergen, K. & Gergen, M., 1983, p. 268)。たとえば、一週間の生活の有り様についての叙述が、数年間の社会情勢の変動についての叙述と組み合わせられる場合、時間的スケールでは社会情勢の変動の物語の中に、一週間の生活の物語が包み込まれることになる。さらに、個人が構成する自己物語の中に、異なる時間的スケールをもった複数の物語が配置され、それらの間に、自己物語の一貫性を破綻させるような不整合が生じている場合、我々は、双方を包み込むより巨視的な物語を用意することによって自己物語の一貫性を保とうとする。これらの物語の構造的特徴は、いずれも我々の日常に非常に馴染み深いものであり、映画や小説、演劇の多くがこれらの基本構造を伴っている。こうした議論を重ねて Gergen (1994/2004) は、物語という概念について次のように述べた。

物語は、つまるところ記述の形式である。物語を記述対象と等値することは誤りである。語りは、社会的行為の中に埋め込まれている——語りは、様々な事象を観察可能にし、未

来の事象への期待を顕在化させる。日常生活における事象は語りで満たされているがゆえに、意味に満ちている——事象は、語りによって「始まり」「どん底」「絶頂」「終わり」などの意味を与えられ、現実となる。

(Gergen, 1994/2004, p. 248)

我々は、物語という道具立てによって、自らの人生や日常生活の中で出会った様々な出来事に意味を付与する。物語化の作業を通して我々の人生や経験は理解可能な様式へと変換される。つまり、我々の生きた「行為の意味」は、物語化の作業を通して付与され、理解可能になる。この時、Gergen らの議論に従うならば、対象の物語化の作業は一個人の認知的作業として為されるものではなく、言語を介した社会的交渉の所産として、他者とのやりとりを通して関係的に為される。こうした議論に基礎づけて Gergen (1994/2004) は自らの物語論の特徴を次のように述べている。

我々のアプローチは、物語の構築の社会的起源を強調する立場と軌を一にしているが、文化決定論を支持しない点、すなわち、我々が物語の技能を獲得するのは、文化によって規定されるのではなく、他者との相互作用を通してであると考えている点が異なる。また、われわれのアプローチは、物語における人間の能動性を重視する立場とも近いが、自己決定的な自我を強調するのではなく、社会的交流を強調する点が異なる。

(Gergen, 1994/2004, p. 251)

Gergen (1994/2004) の理論的立場において彼の「自己物語」という概念は、諸個人の生きた「行為の意味」を、当の個人の行為の外側から割り当てる所与の構造ではない。また、諸個人の生きた「行為の意味」を、精神内に宿る何らかの内的な動因が構造化したものでもない。Gergen の議論に従えば、自己物語は、人々の言語を介した社会的交渉の所産として、他者との関係のうちにもその都度構築され、絶えず更新されていく可変的な事象である。

人々は「物語」の社会的な構築を介して自らの人生が内包する様々な出来事に意味を付与し、自らがかつて生きた「行為の意味」を理解可能にする。Gergen (1994/2004) は、人々が社会的な関わり合いを通して語り出す様々な物語を、自己、アイデンティティ、パーソナリティといった心理学的な概念と相関させることによって、これらの諸概念を我々が精神の奥底に所有する普遍的な実体として考える本質主義的な思考を解体し、言語を介して営まれる人々の社会

的交渉の所産としてその都度立ち現れる関係的概念として再定義した。

ただし、Gergen の理論構築にはいくつかの矛盾が含まれている。それは、彼の自己物語論の中では、諸個人の省察的な行為に依拠する通時的な自己物語の構築の議論と、自己物語は関わり合う人々による言語を介した社会的交渉がその都度紡ぎ出すものであるという共時的な自己物語の構築の議論とが不自然に結びついている、ということである。Gergen は、物語の構築における特権的立場の擁立を退けた。従って、彼の自己物語論の中には、物語の構成に関わる作者の役割についての議論が入り込む余地がない（浅野, 2001, 2003）。言葉を換えて言えば、「私が、私自身について語る」という自己言及に係る二重構造を特徴とする自己物語の構成において物語の登場人物としての「語られる私(me)」と、現時の語り手である「語る私(I)」との関係に対応する自己の二重化された構造を吟味するための理論的な用意が Gergen の自己物語論にはないのである（浅野, 2001, 2003）。というのも、自己物語の構築における特権的立場の擁立を批判する Gergen の議論には、自己物語の構成に際して特権的立場を有する語り手についての議論が入り込む余地はなく、彼の議論の終着点には社会的関係しか残っていないからである。こうした理論的志向によって Gergen らの議論は、自己物語の構築に際しては諸個人の省察的な行為の役割を認めつつも、物語の作者や語り手についての議論は不問に処し、物語の作者や語り手の持つ特権的視点とは切り離されたものとして、社会的関係ただそのみが自己物語を構築する、という不自然な構図を有することになっているのである（浅野, 2001, 2003）。この理論的構図の中で物語の語り手は社会的関係の中に分散していると考えられるため、現時の語り手としての語る「私(I)」は社会的関係の内に消失し、物語には登場人物としての語られる「私(Me)」しか存在しないことになる。

1. 7. ナラティブ心理学の今日的展開

Gergen ら（Gergen & Gergen, 1983, 1984, 1986, 1988; Gergen, 1994/2004）の自己物語論は、自己やアイデンティティ、パーソナリティといった、従来、精神の奥底に実在すると仮定されてきた心理学的な概念を、関わり合う人々による言語を介した社会的交渉の所産としての物語として理解し直すことを主張するものであった。この時、物語という概念は、人々の生きた「行為の意味」を理解可能にするための関係的概念として定義されていた。Gergen らの主張したこうした理論的立場を、ここでは社会構築主義的物語論と呼んでおこう。社会構築主義的物語論の主立った主張の一つは、我々が生きる現実世界は、言語を介した社会的交渉の所産

として構築されたものである、というものである。自己、アイデンティティ、パーソナリティといった、人間の精神の奥底に実在すると考えられてきた心理学的概念もまた、関わり合う人々による言語を介した社会的交渉の所産としてその都度構築される関係的概念として再定義される。社会構築主義的物語論では、A という社会的関係の中で構築される自己物語と、B という社会的関係の中で構築される自己物語とは異なるという理論的前提に立脚する。特定の社会的関係を超えて、統一的で一貫性のある自己といったものは存在せず、自己は、絶えず変化する社会的関係に応じて常に相対的で、可変的なものとして理解される。

社会構築主義的物語論のこのような志向に対し、ナラティブ心理学の目標は人々の生きる現実が言語を介して構築されるという考え方に同意しつつも、自己を社会的関係に分散された束の間の断片として理解するのではなく、諸個人に固有の主観的世界と結びついた統一的で一貫性のある心理学的体験の問題として理解していくことにある、という批判が呈せられた。こうした批判を行ったのが Crossley (2000a/2009, 2000b, 2003) である。Crossley は、社会構築主義的物語論を次のように批判した。

社会構築主義者は、言語的構造と自己の概念との間を不可分の結びつきとして理解することによって自己を「脱構築する」ことに関わってきた。このことは、「自己」についての理解を、解釈、可変性、相対性、流動性、そして差異によって特徴付けられる一つの現象として理解することに帰結する。この視座からは、人間の自己や個人的な体験の特質についての統一的な主張を組み立てることは不可能である。なぜならば、自己や体験は、歴史的、文化的、実践的文脈との関係において異なるからである。このような統一性と一貫性の不在という理論的認識から、ポストモダニストたちは「主体の死」を宣言した。もしも、そこには本質的な特性なり記述可能な自己といった「何か」はないとすると、「ひとつの」自己や、自己を「持つ」、「有する」といった考え方は棄却せねばならない。

(Crossley, 2000b, p. 529)

社会的関係に応じて相対的な束の間の断片としての自己という論立てによって、社会構築主義的物語論は諸個人に固有の主観的世界と結びついた統一的で一貫性のある心理学的体験としての自己や経験の内実といった問題を不問に処した。このことの帰結として、社会構築主義を主とするポストモダンアプローチは「主体の死」を宣言することになった。主観性や私的体験といった個体内在的な概念を人々の生きる現実を理解するための概念として持ち込むこと

を一つの理論的誤謬とみなす社会構築主義の立場においては、統一的で一貫性のある私的な自己といった考え方は批判される。だが、Crossley はナラティブ心理学の研究は、人々が使用する言語や、人々が生きる社会的関係といった視点を重視しつつも、主観性や私的体験といった諸個人の精神の内的な特質の理解に向かう仕事まで棄却するべきではないと主張した。

[社会構築主義を主とするポストモダンのアプローチには] どうしても、主体の「喪失」の状態に陥りがちなところがある。人間の心理学が、言語学をはじめとする様々な枠組みにそって構成されたものだということを認めないわけにいかないにせよ、かといって、人間の精神の基盤にある、個々の異なる筋書きで裏打ちされた個人的体験や主観を表舞台から消し去るのではなく、その「特性」に配慮する、そういう研究態度が求められているのではないだろうか。

(Crossley, 2000a/2009, p. 63)

こうした主張に基礎付けて Crossley (2000a/2009, 2000b, 2003) は、人々が私的な体験に対して付与する意味や、自己についての一貫した考え方を研究することをナラティブ心理学の主目的に位置づけた。この時、彼女の立場は言語を介して人間の生の現実に向かう点においては、社会構築主義やポストモダンアプローチとその方法論的視座を共有している。その一方で両者がその考え方を異にするのは、個人というものの位置づけ方である。社会構築主義的自己論では、自己のアドホックな社会的構築の有り様を、言語を媒介した二者以上の関係を最小単位として分析する。言わば、言語を介した社会的関係に応じて相対的な複数の「自己」の様相を相互行為として担われる「語り」の分析を通して明らかにしようとする。これに対し Crossley (2000a/2009, 2000b, 2003) は、言語を通して「語られる私 (Me)」の背後に仮定される統一的で一貫性をもった一人称の「語り手としての私 (I)」の主観的な世界の見え方の内実を明らかにしようとする。ここでは、「語られる私 (Me)」と現時の「語り手としての私 (I)」との間に生じる差分に自己という主観的体験の意味を捉えようとする。そして彼女は、こうした諸個人に固有の私的な「体験を意味付けする手段」(2000a/2009, p. 26) が物語であると主張した。諸個人に固有の私的体験は、物語化の作業を通して意味を付与され、理解可能な形式に再構成される。このように考えるならば、これまでの議論においても度々言及してきたように、我々は、諸個人が語り出した物語を通して、人々の生きた「行為の意味」を研究することができる。Crossley (2000a/2009, 2000b, 2003) は、このような考え方に基づい

てナラティブ心理学の基本的な考え方を次のようにまとめている。

ナラティブ心理学的アプローチは自己とアイデンティティとが、言語と意味生成の「文化的」様式に基礎づいて、自己の経験の「内的」で「一貫性があり」、「私的」な性質を維持し続けるという考え方を取り戻すことを可能にする有効な道具立てを有している。

(Crossley, 2000b, p. 533)

人間の意識活動を特徴づける人間固有の「意味の形式」を把握するときの要は、言語への理解、つまり、体験を意味づける手段としての言語をしっかりと理解することである。ナラティブ心理学の基本原則、それは、我々は言語を媒介にして自分自身を理解する、つまり、話したり書いたりすることで自分を知るのものであって、それが、自分自身を創ることに繋がる。つまり、意味の付与や解釈に焦点を絞ることが重要だと考えることにある。ナラティブ心理学と従来の心理学的アプローチとの違いはここにある。

(Crossley, 2000a/2009, p. 26)

Crossley (2000a/2009, 2000b, 2003) は、主観性や私的体験といった個体内在的な概念の位置づく領域に自らの「ナラティブ心理学」の構想を位置づけた。そして、諸個人に固有の私的体験や自己の主観的意味を、諸個人の語り出した物語を介して理解することを主目的に位置づける心理学をナラティブ心理学と呼んだ。この時、Crossley が自らの研究の方法論的な足場としたのが McAdams (1993) の議論であった。

ナラティブ心理学の今日的展開において、その主要な論客の一人に数えられる McAdams (1993) は、人々が語り出す人生の物語の分析を通して、日常の生活者としての個人が持ち得るアイデンティティの問題を検討した。アイデンティティという概念の出所を、彼は Erikson の議論に求めている。McAdams の議論の中で「アイデンティティ」とは、人が自分自身を如何なる存在として見なすか、という問いに対する応答として理解される概念である。McAdams の言葉を借りれば、ある人が「私とは誰か」という問いかけに対して如何なる定義を与えるか、という問題に関わる概念がここで言うアイデンティティである。そして McAdams はこの問題に対して「アイデンティティは一つの生の物語である」(McAdams, 1993, p. 5) と応答した。

もしも、あなたが私のことを知りたいと思ったならば、あなたは私の物語を知らなければ

ならない。というのも私の物語が、私が誰かということ定義するからである。そしてもしも、私が私自身について知りたいと思ったならば、私自身の人生の意味についての洞察を得るために、私は私自身の物語を理解しなければならない。

(McAdams, 1993, p. 11)

「私とは誰か」という問いかけに対する応答は、私が私自身について語る物語と密接に結びついている。言わば、私が私自身について語る物語が、私を定義する。従って、アイデンティティは、私が私自身について語る物語を介して理解可能になる。McAdams (1985, 1993) はこうした論立てに依拠して、人々の人生の発達の段階毎の物語を分析し、個々の語りの基調となる主題によって類型化することのできるいくつかの特徴的な筋立ての構造を明らかにした。さらに彼は、諸個人によって語り出された自己物語の登場人物は、語り手にとっての「自己が人格化され、理想化された概念」(McAdams, 1993, p. 122) であると考えた。そして、この登場人物のことを語り手にとっての想像的な自己の表象という意味において「イマーゴ (imago)」(McAdams, 1993, p. 122) という概念で表した。自己物語には一人の優勢なイマーゴから、複数のイマーゴが登場し、彼らは物語の進行の中で相互に葛藤関係や協調関係にあると考えられる。自己物語に登場する優勢なイマーゴ、もしくは複数のイマーゴが、語り手の心的な自己の表象であるとする考え方に示されるように McAdams (1985, 1993) の議論では、諸個人が何らかの心的自己というものを持っており、それらが物語を介して表出されるという理論的前提に立っている。では、McAdams (1993) の言う「物語」とは何か。彼は物語という概念について次のように述べている。

人間はその本性において物語を語る存在である。.... 物語は多くの様々な種類の情報をまとめあげるための一つの理にかなった方法である。物語を語ることは、自分自身を表現し、我々の世界について他者に知らせる一つの根源的な方法であることは明らかである。

(McAdams, 1993, p. 27)

我々は皆、物語の語り手である。我々は各々に、人生のエピソードを物語の中に配置することによって、散在し、しばし混乱した経験に一貫性のある意味を付与しようと努める。

(McAdams, 1993, p. 11)

上の引用に明らかなように McAdams (1993) は、物語という概念を論じるに際して、「人間はその本性において物語を語る存在である」や「我々は皆、物語の語り手である」といった人間についての一つの存在論的前提として「物語」を位置づけることから議論を始めている。そして、物語に関わるこの存在論的前提を足場として、彼は物語を人々の生きた経験に意味を付与し、他者によって理解可能な様式に変換する手段として定義している。

だが、「人間はその本性において物語を語る存在である」や「我々は皆、物語の語り手である」といった人間についての存在論的前提から出発する時、この前提に立脚するナラティブ心理学の研究は少なくとも二つの問題を不問に処していると言える。一つは、「人は何故語るのか」という問いに対する何らかの理論的応答である。二つ目は、「人は語ることによって何を為そうとするのか」という問いに対する何らかの応答である。要するに、人間の心理学的な行為としての物語の生成原理や機能についての議論が不問に処されることになる。

McAdams (1985, 1993) の議論の新奇性は、精神の内的構造の理解に探求を進める精神分析学の諸理論と、ナラティブ心理学の展開とを結びつけたことにあった。つまり、彼の議論は、精神の内的な働きと、「私とは誰か」という問いに対する応答とを、物語という概念を媒介して繋げることを試みた点に特色がある。しかしながら、精神の内的な働きが自己を生み出すという彼の考え方は、自己を人々の言語を介した社会的交渉の所産として理解しようとする社会構築主義の立場からは批判されることになる (Gergen, 1994/2004)。なぜならば、精神の内的な動因に人間の精神の働きについての説明を委譲するという方法は、一つの不可知論に依拠することになるからである

一方で、ナラティブ心理学の展開においては McAdams (1985, 1993) の議論のように、人生を物語るという行為が、諸個人の生きた人生や経験に意味を付与すると同時に、自己やアイデンティティの理解や、個人の抱える心理的危機からの回復と結びつく手段であることを強調する議論は少なくない。例えば、人生を物語るという行為が、人生や経験に意味を付与するだけでなく、自己の深層の理解に結びつくことを強調し、人生の物語研究を構想した Atkinson (1995/2006, 1998) は、その主著 *The gift of stories* (Atkinson, 1995/2006) の中で人生の物語の主立った機能を次のように述べている。

人生の物語りは常に、語り手にも聞き手にも、語られた人生に秩序と意味をもたらすものである。それは、より広い自己理解の方法であり、未来に対して個人的な遺産を伝えていく方法でもある。人生の物語りは、もっとも重要な側面を強調するようにして人の生涯

を、全体性をもって表現する。

(Atkinson, 1995/2006, p. x iv)

物語は語り手と聞き手との言葉を介した相互的なやりとりを通して生成される。そうして語り出された物語は、語り手がそれまでに生きてきた人生に、一つの物語としての構造的な枠組みを与える。この人生の物語化の作業を通して、人生は何らかの意味を付与される。過去に経過した様々な出来事は、現時の語り手によって今回の人生の物語という筋立ての中に様々なアクセントを与えられて再配置される。ある出来事は物語全体の筋立てに照らして前景に位置づけられ、ある出来事は背景に位置づけられる。あるいはまた、今回の物語の筋立てには関係のないものとして、物語の外側に汲み残される。Atkinson (1995/2006, 1998) の議論に従えば、こうして再構成された人生の物語を通して、我々は自己の深層に通奏する生の意味を発見し、この発見を未来の生き方の一つの参照枠組にするとする。

Atkinson (1995/2006) は、もしも過去に生きられた人生が何らかの精神的な苦悩やトラウマ体験といったものを伴っていたならば、人は人生の物語を自らの生にとってより充足的な物語へと書き換えることによって、苦悩やトラウマを癒し、新たな生に向かっていくことができると主張する。物語療法と呼ばれる精神医学の臨床に求められる知識は、まさにこうした知識であると言えよう (Epston, White & Murray, 1992; McLeod, 1997/2007; McNamee & Gergen, 1992; 森岡, 2013, 2015; Schafer, 1981/1987; Spence, 1982; White & Epston, 1990)。

Atkinson (1995/2006) は、この問題に関わって次のように述べている。

人生の物語を語ることは、人生の意味付与の一つの手段である。人生についての物語を語ることで、ただ思索していたにすぎないことを整理し、人生をよりはっきりと理解するようになる。人生に新たな意味づけをすることによって、生涯触れられることなく残っていたかもしれない古いトラウマが癒される。人生への新しい意味付与によって、自己理解を深め、自己を受容できるようになる。

(Atkinson, 1995/2006, p. 7)

ある人の生きた人生を構成する多種多様な出来事は、仮定される経験世界の中に散在して留め置かれたままでは意味を持ち得ない。それらは一つの人生の物語という筋立ての中に組み込まれることによって初めて何らかの意味を付与される。そして、他者によって理解可能な形式

へと変換される。こうした議論の中では、人生を回顧的に物語るという行為は、諸個人の生きた人生や過去の経験に意味を付与する行為として理解される。そして、語り手と聞き手との言葉を介したやりとりを通して生成された人生の物語という所産を分析対象とすることによって、ナラティブ心理学者たちは諸個人の生きた人生や経験の意味は何か、自己やアイデンティティの内実は何か、といった問題に取り組んできた (Atkinson, 1995/2006, 1998; Crossley, 2000a/2009, 2000b, 2003; Hermans & Kempen, 1993/2006; McAdams, 1985, 1993; Riessman, 2008)。Atkinson (1995/2006) は繰り返し次のように述べている。

物語は人生の全体性を示してくれる道具である。物語を語ることによって人生により大きな意味付けができ、分裂していたものを統合し、全体的なものにする。物語はまた自己発見のための道具でもある。つまり、物語は、語らなければ気づくことのない私たち自身の新たな面を教えてくれる。

(Atkinson, 1995/2006, p. 3)

Atkinson (1995/2006) の議論に従えば、物語を媒介した生の意味の具体化が、ナラティブ心理学者が人々の生きた人生や自己の意味にアプローチする主要な方法である。ただし、人々の物語は私的に語られるのではない。Atkinson (1995/2006, 1998) は、人生の物語が語られる際の語り手と聞き手の役割を強調している。物語の聞き手がいることによって、語り手は自らの人生について語るができる。ただし、Atkinson (1995/2006, 1998) が指摘したようにインタビューは会話ではない。インタビュー状況には語り手と聞き手とに割り当てられた役割がある。従って、聞き手は語り手の人生についてより深く知るための質問や、詳しい説明の依頼を憚らない。この意味において人生の物語の主体は、語り手である一人称の個人であるということになるだろう。このことから、人生の物語研究における研究対象は一人称の個人の物語ということになる。

Atkinson (1995/2006) は「人生を物語ることは、人生に意味を与え、意味付けを必要とする過去の出来事を癒し、自己を受け入れるもっとも重要な方法である」(Atkinson, 1995/2006, p. 23) と主張した。この時、物語は人々によって生きた人生や経験の意味、あるいは自己やアイデンティティの内実といった主題を、過去想起的に理解するための手段とみなされる。要するに Atkinson (1995/2006, 1998) の主唱した人生の物語研究は、個人が自らの生きた人生を過去想起的に辿り直し、一つの筋書きの内に再構成した物語を対象として、その生きた

た人生や経験が内包する「行為の意味」を研究するものとして理解することができる。

こうした考え方は我が国におけるナラティブ心理学の展開においても同様に見出されるものである。我が国のナラティブ心理学の展開に重要な貢献を果たしてきたやまだ（2006）は、ナラティブ心理学の主要概念である「物語」について次のように論じている。

物語とは、「経験を有機的に組織化する行為、つまり経験や人生を編集する行為」をさす。
... 人間は、一瞬ごとに変化する行動を選択し編集し構成し秩序づけ、「経験」として組織し「出来事」を「意味づけ」ながら、生きている...。個々の要素が同じでも、それをどのように関連づけ、組織立て、筋立て、編集するかによって、全体の意味は大きく変化する。物語とは、経験を有機的に組織化すること（organization of experiences）、そして、それを意味づける「意味の行為」（acts of meaning: Bruner, 1990）である。

（やまだ, 2006, p. 440; やまだ, 2000a, 2007 も参照）

先に見た議論と同様に、やまだ（2000a, 2006, 2007）の議論においても物語は個人の人生や経験に意味を付与する手段として定義されている。そして、ナラティブ心理学の研究の目的は物語を介して、諸個人の生きた人生や経験の意味を理解することにあるとされる。この時、人生や経験を構成する「個々の要素が同じでも、それをどのように関連づけ、組織立て、筋立て、編集するかによって、全体の意味は大きく変化する」（やまだ, 2006, p. 440; やまだ, 2000a, 2007）。この言葉の限りにおいて、やまだ（2000a）は「物語を語り直す行為は、人生に新しい意味を生成する上で重要」（やまだ, 2000a, p. 2）な行為であると考えた。

こうした考え方が展開する一方で、ナラティブと言えど人生や自己についての自伝的物語といった大きな時間的枠組みの中に構成されるものだけに限られるわけではないだろう、という主張が呈せられた。むしろ、我々が日常生活の中で語り出す物語の殆どは、人生や自己を主題とした物語ではなく、より小さな時間的枠組みの中に構成される日常の些細な出来事を主題とした物語ではないか。例えば、朝の通勤時に遭遇した出来事や、休日にでかけた展覧会についての感想、昨晚見たテレビのスポーツ中継の結果や、家族の祝い事について、といったように。Bamberg & Georgakopoulou（2008）は、ナラティブ心理学の今日的展開が人生や自己に関わる自伝的物語といった大きな時間的枠組みの中に構成される「大きな物語（big stories）」（Bamberg & Georgakopoulou, 2008; see also Bamberg, 2006; Georgakopoulou, 2006）の分析に傾倒していることを指摘した。そして、ナラティブ心理学の研究は、我々の日常生活の中で、

他者との間に取り交わされる様々な小さな出来事についての語りに対しても同様に進められるべきである、と主張した (Bamberg & Georgakopoulou, 2008; see also Bamberg, 2006; Georgakopoulou, 2006)。彼らは、人々の間に交わされる日常の小さな出来事についての語りを、「大きな物語 (big stories)」に対置して「小さな物語 (small stories)」 (Bamberg & Georgakopoulou, 2008; see also Bamberg, 2006; Georgakopoulou, 2006) と呼んだ。そして、人々の語り出す小さな物語の分析を、彼らの日常のいま、ここ、の時空間において進行する「相互行為の中の語り (narratives in interaction)」 (Bamberg & Georgakopoulou, 2008, p. 379) の分析として展開することを提案した。

彼らによって「相互行為の中の語り」の分析を通して探求されるのは、インタビュアーによる積極的介入によって過去想起的に引き出される語り手の人生や自己に関わる私的体験の意味ではない。彼らが分析の焦点を当てるのは、二人以上の話者によって担われる日常の社会的な相互行為の中の「語り」に表れる発話者の立ち位置 (position) や志向の問題として定義される自己やアイデンティティの顕示である (Bamberg, 2006; Bamberg & Georgakopoulou, 2008; De Fina & Georgakopoulou, 2008, 2012; Georgakopoulou, 2006; Ochs & Capps, 2001)。これらのアプローチは、ナラティブという概念を、諸個人の生きた人生や経験に再帰的に意味を付与する手段として定義するのではなく、関わり合う人々によって、いま、ここ、に進行する言語を介した社会的なやりとりの過程として定義し直すことに特徴がある。そして、言語を介した社会的な相互行為として定義される「語り」の過程にアドホックに顕示される束の間の意味の問題として人々の自己やアイデンティティの有り様を理解しようとする。このようなナラティブ心理学の立場は、Gergen (1994/2004) の主唱した社会構築主義的物語論とその研究の方向性を同じくするものとして理解することができるだろう。

このアプローチでは、束の間の発話行為の中で用いられる言葉を通して顕示される発話者の立場の表明や感情的な志向を、社会的関係の中に分散した諸個人のアイデンティティや自己の顕示として理解しようとする。だが、こうした立場は、アイデンティティや自己といった概念を、一貫性や統一性を持たない、関係や状況に応じてその都度、可変的、流動的な、その場限りの断片として説明することを主張することになる。こうした方略は、物語という概念がもとももっていた行為としての省察性や、再帰性といった特徴を、物語概念から取り除くことによって、その草創期の議論の中で盛んに論じられていた心理学研究に物語という概念を取り込むことの意義を希薄化することになる。この意義とは、すなわち、物事の成り立ちにおける共時的側面にのみ研究の視点を縛られることなく、物事の成り立ちにおける発達の、歴史的側面

に研究の視点を向けることによって拓かれる心理学研究の視野の広がりである (Crossley, 2000a/2009, 2000b, 2003; Schachter, 2011)。

1. 8. ナラティブ心理学の臨床への展開

1. 8. 1. Roy Schafer の精神分析理論への物語概念の導入.

さて、人生や経験についての物語をそれまでとは異なる筋立てのもとに語り直すことが、諸個人の生きた人生や経験に新しい意味を付与することを可能にするという「物語」の方法論が有効に機能すると考えられたのが精神医療の分野であった。この意味において、精神医学の展開と、ナラティブ心理学の展開とは密接に結びついていると言える (Anderson & Goolishian, 1988; Atkinson, 1995/2006; Epston, White & Murray, 1992; Gergen, 1994/2004, 1999/2004; McLeod, 1997/2007; McNamee & Gergen, 1992; Polkinghorne, 1988; Schafer, 1981/1987; Spence, 1982; White & Epston, 1990)。精神医学における「物語への転回」を理解することが、ナラティブ心理学の基本的な考え方についての理解を深めることに結びつくと考えられるため、本節では心理療法の分野における理論的、臨床的な展開と、ナラティブ心理学の基本的な考え方との結びつきについて検討していく。

人間の精神の様態についての理解を如何なるメタファーに依拠して進めるか。この問題は、精神医療の分野においても 1980 年代に 1 つの転回期をむかえていた。Schafer (1981/1987) の議論はその一つの先駆けに位置づけられる。彼は、フロイトの思想を試金石として精神分析学における人間の精神についての理解は有機体論 (organism) と機械論 (mechanic) との間に深い理論上の葛藤を含んできたことを指摘した (Schafer, 1981/1987)。Schafer は人間の精神の様態についての仮説を擁立する際に、何らかのメタファーに依拠することが精神の理解にとって有効であることを認める。その一方で、精神に対する臨床医学的アプローチが重視すべきは、予め用意された精神についてのメタファーに合致するようにクライアントの精神の状態を説明することではなく、クライアントの精神の状態に合うように精神についてのメタファーを作り直していくことであると主張した (Schafer, 1981/1987)。この主張によって、Schafer は精神分析学の伝統に異議を唱えることになった。彼の主張は、古典的な精神分析学の理論に対して、構築主義の理論的立場に立脚する新たな精神分析学の方法論を提案するものであった。

私が推賞する説明においては、世界の中の主体のあるヴァージョン、あるいはあるヴィ

ジョンを構築する事だけをその目的とする。こうすることによって、状況は明確にされ、出来事には多数の意味が与えられることになる。これらの意味は、語り手（当の主体であっても、ほかの人間であってもかまわない）が解決したいと思うさまざまな問題の多少とも適切な答えとなり、語り手が従おうとする文脈の規則と、維持したいと思う観念の水準とに合致するのである。

(Schafer, 1981/1987, p. 81)

Schafer (1981/1987) は、どのような考え方が被-分析者の精神の状態についての妥当な説明となり得るかは予め決定付けられたものではなく、個々の被-分析者がおかれた状況に応じた相対的であり、かつ可変的であると考えた。そして、特定の状況というローカルな条件下で、もっとも理解しやすく、妥当と見なし得るメタファーへの依拠が精神に対する臨床医学的アプローチにとって有効であると主張した。この主張は、精神分析の方法論を被-分析者の精神の状態を、所与の権威付けられた枠組み（生活史、精神病理学、人格理論、社会的因子）に当てはめて理解しようとするのではなく、被-分析者の精神の状態を妥当する説明を、被-分析者自身が分析者とやりとりを重ねる中で共同的に理解していく過程として、再定義しようとする試みであった。Schafer の主張は言わば、個々の被-分析者の精神の状態に対する文脈依存的相対主義の立場に定位した精神分析学の構想として理解することができよう。そして、被-分析者の精神の状態を妥当する説明の構成作業においてもっとも有効に機能する手段として Schafer が辿りついたのが「物語」という概念であった。彼は、所与の類型に被-分析者の精神の状態を当てはめていくような古典的な精神分析理論の立場に自らの議論を対置して「精神分析を物語という点から論ずることは、実行可能なことであり、また有益な試みである」(Schafer, 1981/1987, p. 54) と主張した。そして彼は物語という概念について次のように説明した。

我々は絶えず自分自身についての物語を語り続ける。これらの自己物語 (self-stories) を**他者**に語る時、我々は概して一方向的な物語行為を行っていると言うことができる。だが、我々は自己物語を**自分自身**に対しても語っているという場合、我々は一つの物語を、別の物語の中に包摂している。別の物語とは、何かを語りかける対象としての自己がいる物語、自分自身でありながら同時に聞き手の役割を担う自己のいる物語である。我々が自分自身について他者に語る物語が、我々についての別の自己をその内容に持つ時、... 我々は再び、一つの物語を別の物語の中に包摂することになる。この見解から見れば、自己と

は一つの物語である。これらの物語が、見識ある観察者にとって、いかにまとまったものとして、安定し、信頼に値する妥当なものとして受容されるかについては、時により、人により、その程度を異にすることになる。

(Schafer, 1981/1987, p. 59)

上の引用で Schafer (1981/1987) が主張したことは次のように言い換えることができよう。私があなたに向かって「私について」語る時、そこには、あなたと共に「私について」の物語を聴いている私がいる。この時、あなたと共に聞き手の役割を担っている私は、先の「私について」の物語とは別の〈私について〉の物語をもっていることが想定される。この時私は、一つの「私について」の物語を、別の〈私について〉の物語の中に包摂していることになる。つまり、語り手としての私が持ち得る自己物語と、聞き手としての私の持ち得る自己物語とが二重構造をもって現前している、と仮定することができる。ここで、あなたに向かって語られている「私について」の物語は一つかもしれない。しかし、包摂という言葉によって示されるように、そこには語り手としての私があなたに提示している「私について」の物語と、あなたと共に「私について」の物語を語り聴かされている聞き手としての私が持ち得る〈私について〉の物語という二つの異なる物語の生成可能性が重層構造になって織り込まれていることになる。要するに、ある一時点において他者に向かって語られた「私について」の物語の背後に、その時には語られなかった別様の〈私について〉の物語が存立し得ることが仮定される。

さて、このように考える時、Schafer (1981/1987) は「自己とは一つの物語である」と結論づけた。なぜならば、自己物語には語り手の物語と聞き手の物語とが重層的に織り込まれているという Schafer の前提は、際限ない循環論法を繰り返すことになり、どちらが先か、という問題に何かしらの先入観をもって歯止めをかけたとしても、そこにあるのは自己についての物語である。従って、結局、自己とは物語である、という結論に至ることになる。

精神の奥底で駆動する精神装置に生じた何らかの不具合を診断し、不具合を発生させている問題群を特定し、問題を取り除くことによって精神疾患の回復を企図する。こうした機械論的メタファーに依拠した精神分析理論に対し、Schafer (1981/1987) は精神分析の過程は、被-分析者の生きてきた人生や経験についての物語の再解釈と語り直しの作業として再定義することが出来ると論じた。精神分析の過程で、被-分析者の自己物語は分析者とのやりとりを通して別様の自己物語に再構成される。何らかの精神疾患を発生させている問題群が精神の奥底に実在していると仮定するのではなく、精神疾患を発生させている問題群は、被-分析者の生

活史において一つの物語として構成されてきたものであるという仮定に立脚する。そして、これらの物語は被-分析者が分析者との対話を通して別様のものに再構成していくことができる。この対話的過程を通して、被-分析者にとっての問題の意味が書き換えられていく。Schafer (1981/1987) は、被-分析者が語り出す過去や現在の自分についての語りと、分析者がその語りを解釈し直して別様の物語に再構成する行為との対話的なやりとりを軸として精神分析の過程が進行する時、被-分析者の抱えている問題について「最終的には、根本的にまったく新しい共同製作の作品か、あるいは共同製作の方法が得られることになる」(Schafer, 1981/1987, p. 60) と結論づける。

語り直しは、臨床の文脈や関係に依存するが、その目的は、問題となっている人生や難問を、新たに理解しなおすことにある。分析が進むにつれ、被分析者は語り直し（再叙述、再解釈）に参加する。そのため、第二の現実とは、分析者と被分析者との共同の事業、共同の体験となる。

(Schafer, 1981/1987, p. 82)

「第二の現実」とは、ここでは被-分析者によって最初に語られた物語（被-分析者にとっての現実）についての全く新しい見方や捉え方のことを指している。Schafer (1981/1987) の議論は、精神分析学を本質主義的かつ実証主義的な自然科学の方法論に則って遂行することの限界を指摘するものであった。そして彼は、精神分析を分析者と被-分析者との間で交わされる語りと語り直しの協同作業の過程として捉え直すことによって、人々の多様な精神の状態についての理解を目指した。異なる解釈を施すことによって、被-分析者の抱える心的な苦悩に新たな意味を付与することを可能にする「物語」という方法に依拠することによって、精神分析の方法論を変革することが Schafer (1981/1987) の構築主義的精神分析理論の要点であった。

では、精神分析学への物語概念の導入という Schafer の先駆的な試みは、その後、どのように展開していったのか。以下ではその主要な議論として2つのアプローチを検討していく。一つは、White & Epston (1990) に代表される「書き換え療法」(Epston, White & Murray, 1992; White & Epston, 1990) と呼ばれる立場である。もう一つは、Anderson & Goolishian (1988) に代表される「対話的会話療法」(Anderson & Goolishian, 1988, 1992) と呼ばれる立場である。いずれも、物語療法と呼ばれる精神医療における今日的展開の道標として位置づけられる立場である。従って、ナラティブ心理学と精神医療における物語概念の導入との結びつきを検

討する本節の目的に照らして最適な足場を提供するものと考えられる。前者の議論は、物語による意味の「書き換え」に焦点をあてるという点において、Schafer (1981/1987) の議論を継承するものであるといえる。それに対して後者は、社会的過程としての物語と意味の構築に焦点をあてるという点において、Gergen (1985, 1994/2004, 1999/2004) の議論を代表とする社会構築主義的物語論の系譜に位置づくものであるといえる。

1. 8. 2. White, M. & Epston, D. (1990) の書き換え療法.

物語の解釈と語り直しという視点から精神への臨床医学的アプローチを展開する試みは、Schafer (1981/1987) の「物語としての精神分析理論」と呼応するようにして家族療法の学問的展開の中でも進行した。今日、その先導的な仕事の一つに位置づけられるのが White & Epston (1990) の提唱した「書き換え療法」(Epston, White & Murray, 1992; White & Epston, 1990) である。White & Epston (1990) は我々が現実についての認識を組み立てる際に、真正に客観的であると明言することは不可能であり、あらゆる認識は個人の解釈行為を伴っている、という前提に立脚した。この前提への立脚は、実証主義的自然科学の方法論に対する異議の表明としてここまで論じてきた転回の動向とその志向を同じくすると言えよう。

White & Epston (1990) は、心理療法の方法論は当該の実践が依拠する人間の精神についての解釈枠組を反映すると考えた。この解釈枠組のことを彼らはアナロジー (analogy) と呼んだ。ここでは先に Sarbin (1986) の議論を検討した際に言及したメタファー (metaphor) と同義と理解してよい。White & Epston (1990) は、特定の心理療法の実践を何らかの思想的系譜に位置づけながら、その実践の価値を評価しようとするならば、当の実践の方法論が人間理解に関わるどのようなアナロジーに依拠しているのかを理解することが、当の実践の評価を行うための有効な指針になると考えた (White & Epston, 1990)。そして彼らは自らの実践を 1970 年代の中頃から社会諸科学の中で展開した人間理解において言語の構成的な役割を重視する思想的系譜の中に位置づけた。そして、人間の様々な営為を「テキスト」というアナロジーの下に理解することを主張する立場に同意した。彼らは次のように述べる。

[テキストというアナロジーに依拠することによって] 人々のやりとりは、特定のテキストを巡っての読み手たちのやりとりとみなされることになった。このアナロジーは、あるテキストについての新しい読み方は、そのテキストについての一つの新しい解釈を生み出し、そして、その結果としてそのテキストについての一つの新しい叙述を生み出すその限

りにおいて、テキストを読んだり、書いたりすることとして人生や、関係性の展開を理解する事の可能性を生み出した。

(White & Epston, 1990, p. 9)

人間の営為を一義的に定められた因果法則を遂行する機械的動作として理解しようとするのではなく、多様な仕方で解釈し、再構成することのできる「テキスト」というアナロジーに依拠して理解することを試みるパラダイムが展開したことによって、人間科学の研究領域に、特定の文脈と結びついた意味の解釈の問題として人間の理解を目指す研究が求められるようになった (Bruner, 1985, 1986, 1990, 1991; Polkinghorne, 1988; Sarbin, 1986)。White & Epston (1990) はこうした学際的な動向に言及しながら、社会学者たちがテキストというアナロジーに依拠して人間の様々な行為についての説明や理解を試みるようになったことで、人々の経験を主題とした研究が展開してきたと述べる。

社会学者たちは、人々が彼らの人生について知っていることは、彼らが「生きた経験 (lived experience)」として知っていることである、と提案した。この提案は新しい問いを導出した。人々は、生きた経験の在庫をどのようにして組織化するのか？ 生きた経験に意味を与え、彼らの人生を理解するために、人々はこの経験に対して何をするのだろうか？ 生きた経験はどのようにして表現されるのであろうか？

(White & Epston, 1990, p. 9)

White & Epston (1990) は、人は自らが生きた経験を介して、自らの生を理解するようになる」と主張した。では、経験は如何にして、自分自身や他者によって理解可能な状態になるのか。

これに対し、テキスト・アナロジーを採用した社会学者たちは、人生を理解し、自分自身を表現するためには経験が「物語化」されなければならない、経験に帰せられる意味を決定するのはこの物語であると応答した。

(White & Epston, 1990, pp. 9-10)

人生や経験の意味の理解は、人々が自らの生きた経験を物語として再構成することを介して

可能になる。このように考えるならば、経験に意味を付与するのは物語の機能ということになる。White & Epston (1990) は、このような考え方に自らの主張の理論的足場を置きながら、人々の生きた人生や経験の物語化という主題に議論を進めた。

人生を理解する努力として、人々は、自分自身と自らを取り囲む世界についての一貫した説明を得られるような方法で、自分たちの出来事を経験を、時間を跨いだ筋立ての中に並べ直すという作業に取りかかることになる。過去と現在の出来事、そして未来に予測される出来事の具体的な経験は、この説明を作り上げるために、直線的な筋立ての中で結びつけられねばならない。この説明が物語や自己物語として言及され得るものになる (see Gergen & Gergen, 1984)。

(White & Epston, 1990, p. 10)

White & Epston (1990) は、「この経験の物語りの成功が、人々の生における連続性の感覚と意味を付与し、日常生活の慣習と更なる経験の解釈基盤を生成する」(White & Epston, 1990, p. 10)と主張した。諸個人の生きた個別具体的な経験の構成要素を、特定の主題と、その主題を達成する筋書きに沿って配列し直す言語的作業を White & Epston (1990) は「物語化」と呼んだ。彼らは、諸個人の生きた人生や経験の物語化が上手くいく時、人は自らの人生や経験に何らかの連続性を見出し、そこに何らかの意味を付与するという。このように考えるならば、人々が経過した人生や経験がいかなる意味を持ち得るか、という問いに対する応答は、人生や経験がどのような物語として再構成されるかによって決定される、ということになるだろう。要するに、人々の生きた人生や経験の意味は、物語化の作業を通して様々に付与される、ということになる。この主張の下に White & Epston は、物語という概念を人々の「生きた経験を枠付ける意味の単位」(Epston, White & Murray, 1992, p. 97)と定義している。

意味は、経験が物語のうちに組み込まれることによって付与される、ならびに、これらの物語の遂行は人々の人生や人間関係を構成していく。経験の物語は言語に依存しているので、この前提を引き受けるならば、我々は言葉によって経験に意味を付与し、我々の人生や人間関係を構成するという考え方を加えて提案することになる。

(White & Epston, 1990, p. 27)

人々が経過した経験の意味は、当の経験が何らかの物語の筋立ての中に組み込まれることによって付与される。そして、新しい意味を付与された経験の物語に沿った生き方をすることを White & Epston (1990) は物語の遂行 (performance) と呼んだ。White & Epston (1990) の主唱したナラティブセラピーにおいては、クライアントのこれからの人生や人間関係についての、一つの肯定的なモデルとして機能する概念が物語であった。彼らの議論に従って、我々は自らのこれからの人生や人間関係を、先立つ物語のシナリオへの参加を通して構成していくのだと考えるならば、我々の人生や人間関係は、物語を通して構成されていくという結論に辿り着くことになる。

ところで、この経験の物語化の作業が人々の生きた経験を構成する諸要素の選択的再構造化であるという意味において、この経験の物語化の過程は、個人が過去に経過した何らかの経験を一つの主題として展開しつつも、過去に経過した経験そのものの再構成にはなり得ない。我々は諸個人が過去に経過した経験を構成する全ての出来事を取りこぼさずに叙述することはできない。それ故に、経験の物語化の作業は諸個人が経過した経験を構成する特定の主題に関わる出来事を選択的な再構造化としてしか達成し得ない。このように考えるならば、経験の物語化の背後には、常に、当の物語には使われなかった、言わば、物語の外側に汲み残された経験の断片が在庫として残されていることになる。つまり、諸個人の生きた経験の中には、常に物語に組み込まれることなく物語の外側に汲み残された経験の断片が残っていることになる (White & Epston, 1990)。そして、これらの生きた経験の在庫は何らかの物語を構成する要素として選び出され、物語化の過程に組み込まれることのない限りは意味を持ち得ないことになる。なぜならば、彼らの定義に従えば、人々の生きた行為の意味は、物語化の作業を介して初めて付与されるからである。

物語の中に組み込まれる諸個人の生きた経験の背後に、物語の外側に汲み残された在庫としての生きた経験の存在を仮定することによって、White & Epston (1990) は経験の再構成としての物語と、実際に諸個人が生きた経験との間には何らかのズレが生じ得るという仮定を立てた。そして彼らは、諸個人が実際に生きた経験と、経験の再構成としての物語との間に生じ得るズレの度合いが誇大化する時、そのことが人々の精神的な苦痛の発露となるのであり、そこに心理療法のフィールドが位置づくのだと論じた。

人々が治療を求めてやってくるほどの問題を体験するのは、彼らが自分たちの経験を「物語っている」中での語りと／または彼らの経験が他者によって「物語られた」中での語り

とが十分に彼らの生きた経験を表わしていないときであり、そのような状況では、これらの優勢な物語 (dominant story) と矛盾する彼らの生きた経験の重要な側面が存在していると仮定することができる。

(White & Epston, 1990, pp. 14-15)

言うなれば、語られた物語の生きた経験からの乖離である。この生きた経験と構成された物語との間に生じ得る乖離が人々の精神的な苦痛の発露であるという仮定に立脚するならば、心理療法の目的は、諸個人の生きた経験と構成された物語との間に生じている乖離を緩和するような物語を構成することになる。White & Epston (1990) は、諸個人の生きた経験と構成された物語との乖離を緩和する物語の再構成を、「代替りの物語」(White & Epston, 1990, p. 15) の構成として理論化した。代替りの物語の構成が、クライアントの生きた経験から乖離した不都合な物語に取って代わり、クライアントの生きた経験に対して、より整合的で、充足した物語として語り直される時、ナラティブセラピーの一つの目的が達せられたことになる。そして White & Epston (1990) の議論に従えば、この代替りの物語の生成の契機となるのが優勢な物語の外側に組み残された在庫としての諸個人の生きた経験である。White & Epston (1990) は次のように主張する。

人々には豊かな生きた経験があつて、この経験の僅かな断片だけが物語として表現される。そして、多くの生きた経験が不可避免的に人々の人生や人間関係についての優勢な物語の外側に汲み残されることになる。優勢な物語 (dominant story) の外側に汲み残された生きた経験のいくつかの側面が、代替りの物語 (alternative story) の構成と再-構成によって豊かで肥沃な資源を提供する。

(White & Epston, 1990, p. 15)

彼らは、代替りの物語の生成の契機となるような、優勢な物語の外側に汲み残された諸個人の生きた経験の在庫を Goffman (1961) の議論を引いて「ユニークな動勢」(White & Epston, 1990, p. 15) と呼んだ。Goffman (1961) の定義において「ユニークな動勢」とは、言わば優勢を成す社会動勢の傘下にあつて、人々にとって馴染み深いものでありながらも、通例、無視されているような動勢のことを指している。では、「ユニークな動勢」はどのようにしてその機能を果たすのか。White & Epston (1990) は次のように述べている。

ユニークな動勢が同定されると、人々はそれらに意味を付与するように導かれる。意味が上手く付与されるためには、ユニークな動勢が代わりの物語（alternative story）や物語の中に筋立てられる必要がある。

(White & Epston, 1990, p. 16)

「優勢な物語」の外側に汲み残された「ユニークな動勢」を梃にすることによってクライアントの生にとって否定的な意味を有するような物語に亀裂を生じさせ、クライアントの生にとってより充足的な意味を有する「代わりの物語」を生成することが White & Epston (1990) の主張した「書き換え療法」の方法論的テーマであった。White & Epston (1990) は「ユニークな動勢」が意味を持ち得るためには「ユニークな動勢」が新しい物語の中に組み込まれる必要があるとした。「ユニークな動勢」が新しい物語の中に組み込まれることによって、「ユニークな動勢」に何らかの意味が付与される。そして、「ユニークな動勢」に対する意味付与を契機として再構成された「代わりの物語」の遂行がクライアントの新たな「人生や人間関係を構成していく」(White & Epston, 1990, p. 27)。

White & Epston (1990) のナラティブセラピーの功績は、以上に述べてきた彼らの心理療法の実践が依拠する物語論の理論的枠組みと、その臨床的な功績に対して付与されてきたと言える。ただし、彼らの議論には、それが物語という概念に依拠した心理療法の方法的提案であるという目的から引き出される合目的的な前提がある。それは、治療を必要としているクライアントは、何らかの精神疾患と考えられる状態に苦しんでおり、治療が上手く進んだ場合には、クライアントの今後の人生や人間関係にとってより充足的な在り方を発見することができる、という前提である。この前提は、一つの価値志向的な目的から引き出されるものであるが故に、人間の行為や、精神の動態の理解という目的を掲げる心理学研究の方向性とは若干異なるものであると言えよう。確かに、彼らの研究上の目標は、人間の精神の多様な様態の理解に向かっていると見えるかもしれない。だが、その最終的な目的は、臨床において人々が抱えている心理的困難の理解に努め、その困難を緩和するための方法をクライアントと共に模索し、提示することにあると言えよう。

さらに、カウンセリングルームという閉じられた空間の中で、その場で語られた物語しか知り得ないセラピストが、如何にしてクライアントの生きた経験に対して、彼らの生にとってより整合的な「代わりの物語」が生成された、と説明し得るのか。あるいは、クライアントの生

きた経験と乖離する「優勢な物語」は如何にしてそれと同定し得るのか。そもそも、セラピストとクライアントにとって生きた経験というものは一体何を意味するのか。White & Epston (1990) の議論の内にこうした問いに対する理論的応答は望めない。おそらくそれは、臨床の知として、セラピストとクライアントとの相互的なやりとりの中に立ち現れる整合としか言いようのないものとして説明されることになる。さらに、セラピーを通して得られた代替りの物語は、仮にクライアントの生にとってより充足的な物語であったとしても、見方によっては代替りの物語が新たな優勢な物語に転化したに過ぎないとみなすこともできる。もっと言えば、代替りの物語が有効に機能するのは、代替りの物語が有効に機能する状況に限ってのことであろう。従って、他の状況においては、当の物語は十全に機能しないという可能性が十分にあり得る。ここに、我々が充足的な生を営むためには、一体いくつの物語を保持すればよいのか、という疑問が提出される。同時に、充足的な生の有り様が、単一の代替りの物語の枠内に収束していくという議論の限界が明らかになる。つまり、この議論は、不確実性や未決定性と結びついた人々の日常生活の現実的脈絡の中での機能において大きな制約を伴っている。また、代替りの物語への適応という視点において、上の議論では物語が常に個人の人生に先行して存在することが仮定されている。つまり、人生を生きる、ということが、先行する望ましい物語の台本を生きる営為として説明されることになる。このような決定論的な物語論への批判は、Gergen が繰り返し行っていた (Gergen, 1994/2004; Gergen & Kaye, 1992/2014)。Gergen & Kaye (1992/2014) は物語の社会的機能に関わる領域固有性の問題として「書き換え療法」が抱える限界の次のように批判している。

物語は、単一または複数の言語ゲームや文化に固有のダンスの中で、意味の担い手となりうる。それが有効に機能するとすれば、特定のゲームやダンスの範囲内に限られる。物語の有用性は、当該の舞台の上での〈ゲームの手〉や〈ダンスの動き〉としてうまくいくこと、一つ前の〈手〉や〈動き〉に対する応答として、また、後に続く〈手〉や〈動き〉の導入として適切かどうかにかかっている。

(Gergen & Kaye, 1992, pp. 177-178)

ある物語が有効に機能するのは、ある限られた社会的、文化的脈絡のもとに限られている。従って、異なる社会、文化的脈絡の下でも先の物語が有効に機能するとは限らない。それ故に物語は当の物語が語られる行為の状況を含み込んで検討されなければならない。Gergen &

Kaye (1992) はこの問題を次のように指摘した。

物語は単なる筋書きではない。物語は、それ自体として状況に埋め込まれた行為であり、発話内効力を持った実践である。物語によって、社会的関係の世界が創造され、維持され、変容する。従って、現実的で、美的で、心地よい自己理解の新たな形式を、クライアントとセラピストが二人で取り決めるだけでは不十分である。そこで重要なのは、その二人の<意味のダンス>ではない。むしろ、新たな意味の形式がセラピー以外の社会的舞台においても有効に機能するかどうかの問題なのである。

(Gergen & Kaye, 1992, p. 178)

彼らは、物語をカウンセリングルームにおけるセラピストとクライアントという二者間の閉じられたやりとりに完結させるのではなく、当の物語を、それらが埋め込まれる社会、文化的脈絡も含めて検討することが重要であると主張した。要するに、人々の生きた人生や経験の物語的意味の研究に専心するのではなく、不確実性や未決定性に満ちた現実の脈絡との関係において、物語が如何なる意味の遂行をなし得るのかを問うことが重要であると主張したのである。社会構築主義というメタセオリーに立脚して為された Gergen & Kaye (1992/2014) の批判は、物語を物語の分析で終わらせるのではなく、当該の物語が位置づく社会的、文化的脈絡の中での物語の機能を同時に研究しなければならないという論点において適切なものであった。

さて、社会構成主義の立場から為された上の批判の妥当性を確認したところで、ここではナラティブセラピーの今日的展開が採用してきた物語についての一つの方法論的前提に注目したい。この方法論的前提とは、人々の生きた「行為の意味」は、物語化の作業を介して付与される、というものである。この方法論的前提が、ナラティブ心理学の展開における方法論的前提と同様のものであることは、今や明らかであろう。

1. 8. 3. Anderson, H. & Goolishian, H. (1988) の会話／対話療法.

物語をこれからの人生や人間関係の在り方に関わる一つの先導的モデルとして位置づけ、物語世界と経験世界との二重構造を仮定することによって、クライアントにとってより充足的な人生の物語を再構成することを心理療法の目的に位置づける「書き換え療法」(Epston, White & Murray, 1992; Schafer, 1981/1987; White & Epston, 1990) に対し、Anderson & Goolishian (1988/2013) は社会構築主義の立場に定位した別様の心理療法の方法的基礎を固めた。

Anderson & Goolishian (1988/2013) の心理療法の目的は、個人としてのクライアントが、セラピストとの対話的やりとりを通して自らの人生にとってより充足的な物語を再構成していくことではなかった。そうではなく、彼らのアプローチはクライアントとセラピストという社会的な役割関係をも解体したところに現出する人々が言語を用いて互いにやりとりする過程として心理療法を再定義するものであった。このような考えのもとに構想された Anderson & Goolishian (1988/2013) の心理療法は「会話的対話療法」と呼ばれる。彼らの心理療法の中核に位置づく方法概念は会話である。特定の主題を巡って複数人の間で交わされる会話の進行の途上で、物事についての見方や考え方が変化していくとき、この変化の過程を Anderson & Goolishian (1988/2013) はセラピーと呼んだ。

ある物事についての見方や考え方、彼らの言葉を借りれば物事の意味の成立は、根源的に関係的な達成として理解され、それは決して個人的な達成ではないとされる。Anderson & Goolishian (1988/2013) は人間が日常生活の中で引き受けている社会的現実、実体的な社会を司る何らかの上部構造がその下部構造の機能原理を規定し、それに対して下部構造が上部構造の機能原理を遂行し、全体の安定的機能が維持されるといったスタティックな構造体ではないと主張した。そして、人々が生きる社会的現実、所与の実体的構造が分配する役割や規則の体系などではなく、人々の間で「常に進行する対話的コミュニケーションの中で共同して築かれた意味の形式」(Anderson & Goolishian, 1988/2013, p. 57) にすぎないと主張した。彼らの考えでは、人々の対話的やりとりの所産として局所的に現出する意味の体系は「流動的で、常に変化し、安定は長続きせず、固定的なものではない」(Anderson & Goolishian, 1988/2013, p. 32)。それ故に、「いかなる意味も、理解も解釈も、その場の交渉による産物であり、その場限りのものである」(Anderson & Goolishian, 1988/2013, p. 63)。彼らは次のように述べた。

私たちは、現実が人々間のコミュニケーションと社会的交流をとおしてダイナミックに創り上げられる複数の意味であると説明してきた。... そこでは、事物はリアルなものとして私たちの外には存在しない。コミュニケーションをして言葉を使う個人個人があるのみである。言葉の使用によって進化し動き続ける現実、そのプロセスがあるだけである。

(Anderson & Goolishian, 1988/2013, p. 51)

こうした考え方に依拠するならば、我々が所与の社会システムのように考えがちな社会的組織や社会制度といったものも、固定化され、普遍的な構造などではなく、人々の間で交わされ

る言語を介した局所的なやりとりの、その都度、その場限りの達成ということになる。こうした考え方が Gergen (1985, 1994/2004) の主張する社会構築主義の立場と重なるものであることは明らかである。Anderson & Goolishian (1988/2013) は次のように述べる。

組織や構造は、集団ごとでおこる対話的交流やその時、その場のコミュニケーションを通して——つまりローカルに——決定されていくことになる。…社会システムと言っても、それは偶然と選択があいまって出来上がるものなので、相互に関係し合う人々の間でおこる交渉過程の結果というように考えたほうが正しい。

(Anderson & Goolishian, 1988/2013, p. 43)

Anderson & Goolishian (1988/2013) は、心理療法という実践もまた関わり合う人々の間に進行する言葉を介した社会的交渉の過程に他ならないと主張した。そして、彼らの構想する心理療法における正しい言葉の使い方において、心理的問題は、精神という構造体を構成する特定部位の機能不全として説明されるべきものではなく、問題を問題として作り上げている関係の変更によって現れたり、消え去ったりするものとして説明される。このような主張の下に彼らは次のように述べている。

セラピーは、いわゆる治療的会話という領域内での、言語的な出来事である。治療的会話とは、対話をとおして人が共に探索し、互いにとって新たな領域に足を踏み入れることを言う。それは、双方向の交流であり、異なる意見が交差する場である。その中でたえず新たな意味が生まれ、問題の解消へと一步を踏み出す。

(Anderson & Goolishian, 1988/2013, p. 31)

Anderson & Goolishian (1988/2013) が心理療法の過程において重視するのは、クライアントの今後の人生や人間関係を望ましい方向に先導する新しい単一モデルとしての物語の構成ではない。Anderson & Goolishian (1988/2013) の考えでは、このような考え方に依拠する時、「優勢な物語」であれ、「代わりの物語」であれ、語り出された物語はクライアントにとって常に人生に先行する一冊の台本のように位置づけられることになる。言わば、クライアントは自らがセラピストと一緒に作り上げた望ましい物語の筋書きに適応していくことが期待される。こうした議論には望ましい物語と見なされた人生の先導モデルが、再び苦悩と矛盾に

満ちた「優勢な物語」へと転化する危険性が多かれ少なかれ含まれている。

これに対し、Anderson & Goolishian (1988/2013) は諸個人の人生に先行して人生の役割や方向性を枠付けるような所与の構造としての物語を仮定する議論を退けた。そして、人々が相互に関わり合う過程で「言葉を介して創り上げた意味こそ、私たちが生きる現実」(Anderson & Goolishian, 1988/2013, p. 49) であると主張した。Anderson & Goolishian (1988/2013; 1992/2014) の議論の要点は、我々の生を取り囲むあらゆる現実には、言語を介して人々の間で交わされる対話的やりとりの所産として構築される束の間の意味の一形式である、というものである。

物事の意味の成立や理解の達成は、束の間に取り交わされる人々の中の相互的な解釈行為に依存している。この時、意味の成立や理解の達成に関して、これと定まった正しい解釈の仕方があるわけではない。意味の成立や理解の達成は、各々に固有の世界の持ち主である会話の参加者たちが、会話の途上でその都度作り上げていくものである。そうして作り上げられた意味や得られた理解が、諸個人の生きる現実を構築していくと考えられる。Anderson & Goolishian (1992/2014) は次のように述べる。

意味と理解は、会話によって言葉を交わす人々のあいだで構成されていく。人の行為は、人々の構成作業と対話によって創造された<現実>の中でなされる。他者とともに創り上げた物語的な<現実>が、個人の経験に意味とまとまりを与える

(Anderson & Goolishian, 1992/2014, p. 49)

彼らは、個人としてのクライアントの心的状態や、自己の重層性や歴史性といったことに論点を合わせることは、クライアントが抱えている心理的困難を、クライアント自身が保有する個体内在的な問題として位置づけることになるが故に、問題の在所を曖昧にするのみならず、治療の過程においてはセラピストが常に優位に位置づけられることになるという。なぜならば、ここでのセラピストにはクライアントの抱えている問題の在所を明らかにし、問題を解決へと導く先導者の役割が期待されているからである。代わって Anderson & Goolishian (1988/2013) が主唱したのは、むしろ、クライアントが抱えているように見える心理的困難は、個人に内在的なものではなく、人々の対話的な関係の内に局所的、一時的に構築された意味の一形式に過ぎず、それは対話的關係の更新と、変化によって消無していくという考え方である。Anderson & Goolishian (1988/2013) は、心理療法の過程において個人の水準を検討する必要はなく、

人々の間で為される言語を媒介した社会的交渉が、クライアントの心理的困難を如何なる意味の問題として立ち上げているのかを検討すればよいと考えた。そして、会話が継続する過程で心理的困難の意味が、別様のものへと編み変えられ、やがては消失していくことがセラピーの最終的な目標であるとした。

セラピーというものを、言語を介した人々の社会的な関わりそのものの変遷過程として位置づけ、心理的問題の個人的な解決ではないと考えるならば、セラピストとクライアントといった役割の分化も批判される必要がある。なぜならば、このような役割の分化はセラピーの最終的な目的を、社会的関係の編みかえではなく、クライアント個人の心理的問題の解決として位置づけることになるからである。このことから Anderson & Goolishian (1988/2013) は「セラピーの対象を、コミュニケーションする人々、お互いに働きかける者の集まりという単位(ユニット)で捉えていく」(Anderson & Goolishian, 1988/2013, p. 55) ことを主張した。この関係的ユニットに期待されることは、問題と見なされていた物事の意味が消失するまで会話を継続することである。Anderson & Goolishian (1988/2013) はこのことを次のように表現している。

新たな意味やこれまでとは異なる言い回しが話し合いの中から現れると、「問題」と呼んできたことが、少なくとも言葉の上では、そぐわないものとなる。セラピーは、問題が消失するまで入念に会話を洗練しその中に留まっていること、と言い換えてもよい。

(Anderson & Goolishian, 1988/2013, p. 69)

だが、ここに一つの疑問が呈せられる。それは、束の間の言語を介した社会的関係の内に達成された何らかの意味が有効に機能するのは、その関係が維持されている限りでのことではないか、というものである。実際、Anderson & Goolishian (1988/2013) はこのことを認めている。つまり、ある社会的関係の中での問題の消無は、別の社会的関係の中での問題の顕在化の可能性を常に含んでいると言えるだろう。社会的関係に応じて変化する意味という考え方は、問題の消無と顕現とを、関係を最小単位として取り扱うことを意味する。従ってもしも、問題を消無させる社会的関係があると同時に、問題を顕現させる社会的関係があるという前提に立つならば、彼らのセラピーの最終的な目標は、問題を消無させる社会的関係そのものの選択ということになる。だが、我々の日常的現実において社会的関係の選択ということの困難性は指摘するまでもない。また、Crossley (2000a/2009) が指摘しているように、社会的関係に分散さ

れた断片としての自己という考え方を採用する理論的立場には、自己についての統一的な感覚や、諸個人の私的体験についての主観的な意味づけの仕方といった問題を取り扱う用意がない。例えば、社会構築主義的物語論の立場に立脚する時、個人が実際に経過した現実や、感受した心的な苦悩や悶えは、社会的関係や会話の脈絡に応じて無かったことになるのか。そうではないだろう。過去に現実として経験された苦悩は、現在の生に引き継がれ、現在の生の中に何らかの痕跡を残していると考えるのが順当ではないか。ナラティブセラピーの臨床において、問題の意味が物語的、あるいは関係的に書き換えられることによって、クライアントの精神の様態に平静が取り戻されることの利点は否定すべくもない。だが、このことは実際にその人の心身に現実として起こったことが、無かったことになるわけではない。Crossley (2000a/2009, 2000b, 2003) が的確に指摘したように、物語にせよ、社会的関係にせよある出来事を取り囲む「枠組の違いで同じ出来事が全く別の意味を帯びるからといって、実在としての事実までが否認されるわけではない」(Crossley, 2000a/2009, p. 110)。言語を介した社会的関係に基礎を置いた現実のアドホックな構築という視座は、Anderson & Goolishian (1988/2013, 1992/2014) の言い方を敷衍すれば、当初、解決すべきであった問題を、無かったことにする、ということの意味している。クライアントによって実際に感受されていた何らかの心的なジレンマを、対人的な関係を編みかえ、言葉がやりとりされるその脈絡を変化させることによって解決ではなく、解消に導くという志向は、視点の取り方によっては問題について無責任な姿勢を貫徹することになりはしないだろうか。実際に感受された心的なジレンマに解決の糸口を見出そうとする個人の精神のダイナミズムに対する検討は、如何にしてなされるのか。この点について社会構築主義的物語論は多くを語ってこなかったように思われる。以上に見てきたように、社会構築主義的物語論は、人々の生きた行為の意味は、関わり合う人々によって為される言語を介した社会的交渉の所産として生成され、更新されていくと主張する。だが、彼らの議論は、当の意味が生成されるその原理については、十分な理論的検討を行ってこなかったように思われる。

1. 9. ナラティブ心理学の展開とは何であったか

本章では、1980年代を一つの基点として進行した「物語への転回」という学際的動向の中に位置くナラティブ心理学の展開について論じ、その基本的な考え方を明らかにしてきた。ここまでの議論で明らかにされたことは、ナラティブ心理学の展開における主立った議論は、物語を人々の生きた「行為の意味」を探求するための道具立てとして定義し、人々の生きた「行

為の意味」は、物語化の作業によって付与されるという方法論的前提に依拠してきた、ということである。こうした方法論的前提に依拠することによって、ナラティブ心理学の展開は、人々が語り出した物語を研究対象として人々の生きた「行為の意味」を問うことができるようになった。

以下、ここまでの議論の要点を整理しておく。ナラティブ心理学の展開は、実証主義自然科学の方法論に依拠して人間の精神についての普遍法則の解明を目指す心理学の動向と併存する心理学の新たな方法論的可能性を模索する運動として始まった (Atkinson, 1995/2006, 1998; Bamberg, 2010; Brockmeier & Harre, 1997; Bruner, 1985, 1986, 1990, 1991, 1996, 2002; Crossley, 2000a/2009, 2000b, 2003; Epston, White & Murray, 1992; Gergen, 1994/2004, 1999/2004; Gergen, K. & Gergen, M., 1983, 1984, 1986, 1988; Gregg, 1991, 2011; Harre, 1999; Josselson, 2004; Josselson & Lieblich, 2009; McAdams, 1985, 1993; McLeod, 1997/2007; Monteagudo, 2011; Murray, 2000, 2002; Parker, 1994, 2005; Polkinghorne, 1988; Riessman, 2008; Sarbin, 1986, 1990; Schachter, 2012; Schafer, 1981/1987; Spence, 1982; White & Epston, 1990; やまだ, 2000a, 2006, 2007, 2013)。実証主義自然科学の方法論に立脚する心理学の研究は、上に述べたように人間の精神機能についての文脈独立的な普遍法則の解明に向かってきた。これに対し、新しいパラダイムは実証主義自然科学の方法論に立脚する研究は、人間の精神の理解という心理学の仕事の半分を達するにすぎないと主張した。そして、実証主義自然科学のパラダイムと併存し、それを補完するものとして、人々の生活世界の脈絡と切り離すことの出来ない人間の精神の様態を、物事の位置づく脈絡と不可分に規定される意味の理解の問題として研究する心理学の展開可能性を模索した (Bamberg, 2010; Brockmeier & Harre, 1997; Bruner, 1985, 1986, 1990, 1991; Gergen, 1973, 1985; Gergen, K. & Gergen, M., 1983, 1984, 1986, 1988; Josselson, 2004; Josselson & Lieblich, 2009; McAdams, 1985, 1993; Parker, 1994, 2005; Polkinghorne, 1988; Sarbin, 1986, 1990)。

こうした新しい志向を持つ心理学の方法論上の中心に位置づけられた概念が、「物語」と「意味」であった。「物語」と「意味」というメタファーに依拠して人間の精神の様態についての理解を進めるという提案によって、人間の行為や精神の動態を、人々が生きる生活世界の脈絡と不可分に規定される意味の理解の問題として研究することができると考えられた。その出発点において、人々の生きた経験や行為の意味は、それらが物語化されることによって付与されるという方法論的前提が擁立された。こうした方法論的前提に依拠することによって、ナラテ

ィヴ心理学の展開は、人々が語り出した物語を対象として人々の生きた「行為の意味」を理解することを目指してきた（Atkinson, 1995/2006, 1998; Crossley, 2000a/2009, 2000b, 2003; Josselson, 2004; Josselson & Lieblich, 1993, 1995, 1999, 2009; Riessman, 2008; やまだ, 2000a, 2006, 2007）。

さらに、ナラティブ心理学の展開は長らく精神の奥底に実在すると仮定されてきた自己やアイデンティティ、パーソナリティといった心理学的な概念を、諸個人が語り出す物語上の意味の問題として再定義することによって心理学研究の可能性を拡張した（Atkinson, 1995/2006, 1998; Bamberg & Georgakopoulou, 2008; Bamberg, 2010; Bruner, 1990, 1987, 1991, 1994, 1997, 2002; Georgakopoulou, 2006; Gergen, K. & Gergen, M. 1983, 1984, 1988; Gergen, 1994/2004, 1999/2004; Gregg, 1991, 2011; McAdams, 1985, 1993; Hermans & Kempen, 1993/2006; Polkinghorne, 1988; Sarbin, 1986, 1990; Schachter, 2011）。

また、ナラティブ心理学の展開と歩調を合わせるように精神医療の臨床においても物語と意味という概念を取り込んだ実践が展開した。ここでは、個人の精神疾患を、諸個人の精神機構の中に埋め込まれた何らかの問題に起因するものとして考えるのではなく、人生や経験についての物語上の意味の問題として捉え直すことが試みられた。このような考え方に依拠する心理療法は、一般に物語療法 (narrative therapy) と呼ばれている (McLeod, 1997/2007; McNamee & Gergen, 1992)。物語療法の立場には大きく二つの立場が展開している。一つは、人生や経験についての物語を語り直すことによって、クライアントの人生や経験に対する意味付けの仕方を更新し、この意味の更新によって治療の目的を達しようとする立場である (White & Epston, 1990; Epston, White & Murray, 1992; 森岡, 2013, 2015; Schafer, 1981/1987; Spence, 1982)。もう一つは、言語を介して結びついた社会的関係そのものの更新を治療の過程とみなし、諸個人が生きる社会的関係そのものの更新が、それまで問題とみなされてきたことの意味を編みかえ、その結果として当初、問題であった事柄が問題ではなくなると考える立場である (Anderson & Goolishian, 1988, 1992)。後者は、人々の生きる現実は言語を介した社会的交渉の所産であるという社会構築主義の立場に深く立脚したものとして理解することができる。

本章では、ナラティブ心理学とナラティブセラピーの今日的展開を、3つの理論的立場の展開として理解した。一つ目の理論的立場は、人々の行為に意味を割り当てる所与の構造としての物語論の展開であった (Sarbin, 1986, 1990; White & Epston, 1990; Schafer, 1981/1987)。二つ目の理論的立場は、主観性や私的経験の世界を理解可能にする手段としての物語論の展開であった (Atkinson, 1995/2006, 1998; Crossley, 2000a/2009, 2000b, 2003; McAdams, 1985,

1993; Riessman, 2008; やまだ, 2000a)。そして三つ目の理論的立場は、社会構築主義的物語論の展開であった (Anderson & Goolishian, 1988/2013; Bamberg & Georgakopoulou, 2008; Gergen, 1994/2004; Gergen, K. & Gergen, M., 1983, 1984, 1986, 1988;)。本章では、この3つの理論的立場が絡まり合いながら今日のナラティブ心理学の研究が展開していることを明らかにしてきた。その一方で、この3つの理論的立場に共通するナラティブ心理学の方法論的前提として、いずれの立場においても物語を対象に意味を付与する手段として定義し、物語化の所産として付与された意味の問題として、人々の生きた「行為の意味」を研究することができると考えてきた点を明らかにした。

1. 10. ナラティブ心理学の閉塞と今日的危機

さて、ナラティブ心理学の展開が、物語化の作業を通して付与される意味の問題として、人々の生きた「行為の意味」の研究に傾倒してきた結果、そこに不問に処されてきた問題がある。本節では、そのことによってナラティブ心理学の今日的展開の中に生み出された課題と危機について論じていく。

人々の生きた「行為の意味」の研究を主目的に位置づけるナラティブ心理学の研究は概して、「彼の人の生きた人生の意味は何か」、「彼の人の経過した経験の意味は何か」といった問いを出発点として研究を進める。このような個別的な人生や経験の意味を問う研究が価値をもつと考えられるのは、希有な経験を持った個人や、社会的、文化的なマイノリティを対象とした研究であろう。ナラティブ心理学の展開の中には、既に、このこと自体を目的化してきた傾向もある (やまだ, 2006; Crossley, 2000a/2009, 2000b, 2003; Riessman, 2008)。例えば、移民のナラティブや、病いのナラティブ、喪失のナラティブといった事例研究は、一般化可能性の枠内からは例外的なケースとして検討の外に置かれ、あまり理解されることのなかった人々の具体的な人生や経験の有り様に焦点をあてるという点において重要な貢献を果たしてきた。

ただし、このような問い立ての下に進められる研究は、言わば、希有な経験を持った個人や、社会的、文化的なマイノリティを対象として彼らの人生や経験について問えば、その意味が語られる、という方法論に依拠している。この考え方に従って研究を進める時、対象の意味が物語の主題と、当の主題に関わる物語の数に比例して際限なく増えていくことを方法論上は認めることになる。人々が語り出す物語の数に比例して人生や経験の意味が措定されるという理論的仮定は、一方ではナラティブ心理学の研究可能性を無制限に拡張しているように見える。し

かしながら他方では、こうした研究の今日的展開が、「彼の人の生きた人生の意味は何か」、「彼の人が経過した経験の意味は何か」といった問い立てと、その所産として際限なく語り出される物語と、それに伴って規定される意味の飽和状態にあるという認識を抱くことができるならば、ナラティブ心理学の現況は一つの閉塞状況を迎えていると言えるのではないか。

さて、物語化の所産として規定される意味の問題として人々の生きた「行為の意味 (meaning of acts)」を問う研究が、物語の生成原理に関わる問題として、その前提に位置づけてきた考え方は、人間はその本性において、物語を作り出し、語る存在であるという人間についての存在論的前提であった (Atkinson, 1995/2006, 1998; Crossley, 2000a/2009, 2000b; Gregg, 1991, 2011; Josselson, 1995, 2004; McAdams, 1985, 1993; Murray, 2002; Polkinghorne, 1988)。例えば、ナラティブ心理学の展開を総説する中で Murray (2002) は次のように述べている。

ナラティブ心理学に立脚する時、人間の特質についての主だった定義は、我々は物語を作り出し (story-creating)、物語を語る (story-telling) 生き物である、というものである。我々は皆、物語の作り手であり、物語の語り手である。物語は、人間が自らの現実についての解釈を組織立てる手段である。物語の基本的な機能は、我々が日常生活の中で出会った出来事に意味を付与することである。

(Murray, 2002, pp. 653-654)

人間はその本性において物語を作り出し、語る存在であるという存在論的前提に立脚し、物語は人々が経過した人生や経験に意味を付与する手段である、という定式に依拠して立論する時、不問に処されている問題がある。それは、「人は何故語るのか」、「人は物語によって何を、如何に為そうとするのか」といった物語の生成原理と機能についての問題である。

言葉を換えて言えば、人間が、意味を生成し、使用する過程として理解されるような意味生成の原理や機能についての問題が不問に処されているのである。つまり、人生や経験の意味と言った人々の生きた「行為の意味」を研究するための行為レベルの前提に位置づくはずの、人間が意味を希求し、生成する過程として理解されるような「意味の行為」の研究が不問に処されているのである。「行為の意味」を問う研究の中ではこれらの問題が、人間についての存在論的前提の内に不問とされているのである。

第二章において論じるように、ナラティブ心理学の草創期の議論として、その宣言書の一冊に数えられる *Acts of meaning* (Bruner, 1990) によって、人間の意味生成と意味使用の原理

と機能の解明を主唱した Bruner (1990) の議論さえ、その元来の主題であった「意味の行為」の研究ではなく、人々の生きた「行為の意味」を研究する立場の方法論的前提として受容されるに留まった。そして、後に見るように Bruner の「意味の行為」論の「行為の意味」論としての受容の転倒は、人間が意味を生成し、使用する過程として理解されるような「意味の行為」の一つの行為論としての探求を、人々の生きた「行為の意味」の研究の背後に隠すことになってしまった。

では、ナラティブ心理学の展開が人々の生きた「行為の意味」の研究に傾倒することによって人間が意味を希求し、生成する行為として理解されるような「意味の行為」の研究を不問に処してきたことの一体何が問題なのか。

一つには、このことによって物語と意味の生成原理が不問に処されたまま、物語化の所産として出現した結果としての意味が問題にされてきた、ということである。言葉を換えて言えば、研究それ自体が「過程」を問わずに「結果」を問うという論理構造の破綻を含んできたということである。この点についてより具体的に考えておきたい。物事の成り立ちを考えてみれば明らかのように、物事の結果は、その生成過程の先に導出されるのが本来であって、結果だけ独立に存立しているわけではない。従って、物事の結果を問うためには、その生成過程から問う必要がある。もしも、過程を問わずに、結果だけが問われるならば、その時、物事の成り立ち、その生成過程の論理的必然性から切り離されたものとして検討されることになる。「過程」から切り離された「結果」の検討が、事の内実を十分に捉え得ないことを鑑みるならば、「意味の行為」の研究から切り離された「行為の意味」の研究もまた、人間の生の意味の内実を十分に捉え得ないことになるだろう。つまり、人々の生きた「行為の意味」は、当の意味が生成される行為過程の先に展望されるのが本来であって、「意味」だけが独立に存立するわけではない。従って、人々の生きた「行為の意味」を研究するためには、その意味が生成されるに到った過程から研究を始める必要がある。すなわち、人間が意味を希求し、生成する過程として理解されるような「意味の行為」の研究から始める必要があるのである。

だが、ナラティブ心理学の展開は概して、人々の生きた「行為の意味」という結果を問う議論に傾倒し、当の「行為の意味」が導出されるに到った過程、つまり、人間が意味を希求し、生成する行為過程として理解される「意味の行為」については不問に処してきたように思われる。もしも、ナラティブ心理学の展開が、これまで通り人々が語り出す人生や経験の物語の数に比例して、人生や経験の意味が成立するという理論的前提に依拠して、結果としての「行為の意味」を、その生成過程から切り離して問い続けるならば、ナラティブ心理学の今日的展開

は、「過程」から切り離された宙づりの「結果」としての物語と意味の飽和状態という閉塞を抜け出すことはできないだろう。

このような今日的な閉塞に対し、我々はナラティブ心理学の研究に対して、次の視点を持つ必要があると考える。つまり、人間が意味を希求し、生成する過程として理解される「意味の行為」の研究があって、この研究を基礎において人生や経験の意味といった人々の生きた「行為の意味」の研究が展開するという物事の成り立ちに関わる時間的順序に沿ったナラティブ心理学の研究構想である。要するに、「過程」の先に展望される「結果」、「行為」の先に展望される「意味」という視座を有するナラティブ心理学の研究構想である。

では、「意味の行為」の研究とは如何なるものを指すのか。この問い立てに対し第 2 章では Bruner (1990) が「意味の行為 (acts of meaning)」と呼んだ、まさに人間の意味生成と意味使用の原理と機能が如何なる精神の行為であるか、という問題の解明に取り組む。この探求は、言わば、Bruner の「意味の行為 (acts of meaning)」の精神の行為論としての読解という仕事を意味している。

第Ⅱ部

Jerome Bruner と「意味の行為」の照準

第2章 「意味の行為」とは何か

本章の目的は、Bruner (1990) の *Acts of meaning* の理論的読解を基点として、彼が「意味の行為 (acts of meaning)」と呼んだ人間の心理学的な行為の内実を明らかにすることにある。本章で明らかにされることは、Bruner の「意味の行為」とは、前提や常識の破壊として定義される混乱の発生に対峙した精神が、その破綻を修復し、平静を取り戻そうとする「混乱と修復のダイナミズム」として理解することのできる過程である、ということである。この過程は、混乱の発生に伴って生じた、今、この時点においては理解し難い出来事が、いずれ何らかの意味を獲得することによって理解可能になるような可能性の脈絡希求の行為として定義される。この解明は、Bruner (1990) の「意味の行為」の議論を、人々の生きた「行為の意味」を問う議論の方法論的前提として転倒させて受容してきたナラティブ心理学の今日的展開に対し、一つの再考を迫るものである。

2. 1. Bruner の「意味の行為」論の「行為の意味」論としての受容の転倒

前章を通して我々が明らかにしようと試みてきたことは、ナラティブ心理学の展開の基底に位置づく方法論的前提の一つが、物語を人々の生きた人生や経験に意味を付与する手段として定義し、人生や経験の意味は物語化の作業を介して付与され、理解可能になると考えるものであった、ということである。物語と意味という概念を中心に据えるこの方法論的定式に依拠することによって、我々は、諸個人が語り出した物語を対象として人々の生きた「行為の意味」を問うことができると考えられる。こうした考え方は、個人の主観性や私的体験の世界の理解という主題を強調してきた個人構成主義的物語論 (Atkinson, 1995/2006, 1998; Crossley, 2000a/2009, 2000b, 2003; McAdams, 1985, 1993) の立場においても、言語を介した社会的交渉の所産が我々の生きる現実を構築するという主題を強調してきた社会構築主義的物語論 (Anderson & Goolishian, 1988, 1992; Gergen, 1994/2004, Gergen, K. & Gergen, M., 1983, 1984, 1986, 1988) の立場においても、同様に見出されるものであった。両者が異なっていたのは、物語や意味の構成が、諸個人の生得的な心的機能に依拠するものなのか、言語を媒介し

た社会的交渉の機能に依拠するものなのか、という論点であった。一方の、個人構成主義的物語論に立脚する論客たちは、人間は生来的に物語を作り出し、語る存在であるという存在論的前提に立脚し、人々の生きた「行為の意味」を諸個人が語り出す人生や経験の物語の分析を通して明らかにすることを試みた (Atkinson, 1995/2006, 1998; McAdams, 1985, 1993)。他方の社会構築主義的物語論に立脚する論客たちは、関わり合う人々によって取り交わされる言語を介した社会的交渉の過程が、人々の生きる「行為の意味」を、そのその時、その場のものとして、その都度規定していくという論を展開した (Anderson & Goolishian, 1988/2013, 1992/2014; Bamberg, 2006, 2010; Bamberg & Georgakopoulou, 2008; De Fina & Georgakopoulou, 2012; Georgakopoulou, 2006; Gergen, K. & Gergen, M., 1983, 1984, 1986, 1988; Gergen, 1985, 1994/2004, 1999/2004)。

だが、こうした議論が展開してくる一方で、いずれの立場も、人間が物語を生成するその原理や機能、もっと言えば人間の意味生成の原理と機能については十分な理論的検討を行ってこなかったように思われる。つまり、「人は何故語るのか?」、「物語によって何を如何に為そうとするのか?」といった問いや、そもそも「人間が意味を生成する行為とは如何なる行為であるか?」、「意味というものが人間の行為において果たす機能は何か?」といった問いに対して十分な理論的応答を返して来なかったように思われるのである。その結果、ナラティブ心理学の展開は人々の生きた「行為の意味」の研究については十分な事例研究を蓄積してきたが、人間が意味を希求し、生成する行為として理解されるような「意味の行為」の研究については未だ納得のいく理論的定見を持ち合わせていないように思われる。このような不足に対し、本論文は Bruner (1990) が「意味の行為」と呼んだ、まさに人間の意味生成と意味使用の原理と機能が如何なる行為過程であるか、という問題の解明に取り組む。ただし、この主題の探求に先立って、本節では Bruner (1990) が人間の意味生成と意味使用の原理と機能の問題を問おうとした「意味の行為」の議論さえ、ナラティブ心理学の展開の中で、人生や経験の意味といった人々の生きた「行為の意味」を問う研究の方法論的前提として受容されてきたことを明らかにしておく。

Bruner (1986, 1990) の仕事は、ナラティブ心理学の今日的展開における一つの思想的原点として学界において広く受容されてきた。特に、1980年代中頃に発表された「2つの思考様式」(Bruner, 1986) というアイデアは、ナラティブ心理学の展開の一つの契機としてしばしば言及される (Gergen, 1994/2004; Hermans & Kempen, 1993/2006; Josselson, 2004; McAdams, 1993; Murray, 2002; Polkinghorne, 1988; Sarbin, 1986, 1990; やまだ, 2000a, 2006, 2007,

2013)。Bruner (1986) は、「2つの思考様式」の一方である「思考の物語様式 (narrative mode of thinking)」(Bruner, 1986) を「人間の、あるいは人間らしい意図や行為、そして、それらの成り行きを特徴づける変化やその帰結」(Bruner, 1986, p. 13) を扱う思考様式として定式化した。この考え方が、人々が経過した多様な人生や経験の意味を、物語を手段として研究するというナラティブ心理学の一つの思想的基盤として広く受容されてきたのである (Atkinson, 1995/2006, 1998; Bamberg, 2010; Brockmeier, 2000, 2009; Brockmeier & Harre, 1997; Crossley, 2000a/2009, 2000b, 2003; De Fina & Georgakopoulou, 2012; Gergen, 1994/2004; Gregg, 1991, 2011; Hermans & Kempen, 1993/2006; Josselson, 2004; Josselson & Lieblich, 1993, 1995, 1999, 2009; McAdams, 1985, 1993; McLeod, 1997/2007; Monteagudo, 2011; Hermans & Kempen, 1993/2006; 森岡, 2013, 2015; Murray, 2000, 2002; Polkinghorne, 1988; Riessman, 2008; Sarbin, 1986, 1990; Shachter, 2012; Wertsch, 2008, 2009; White & Epston, 1990; やまだ, 2000a, 2006, 2007, 2013)。例えば、Polkinghorne (1988) は、Bruner (1986) の「思考の物語様式」の考え方を要約し、この議論を足場にして次のように論じている。

物語という組織化の様式は、人間の活動を理解するという目的に照らして極めて重要である。物語様式は、人間に関わる物事の目的と方向性を開示し、個人としての人間の生を全体として理解可能なものにする。我々は、自分自身と他者の振舞いを、物語の様式に依拠して理解する。そして、物語の様式を介して、我々が計画した行為が、望んだ目標に到るものであるかどうかを知る。

(Polkinghorne, 1988, pp. 17-18)

そして、「二つの思考様式」(Bruner, 1986) に続いて、1990に Bruner が上梓した単著 *Acts of meaning* (Bruner, 1990) も、前章に明らかにしてきたナラティブ心理学の基本的な考え方に沿う形で受容されてきた。すなわち、物語という概念を人々の生きた人生や経験に意味を付与する手段として定義し、人々の生きた人生や経験の意味は、物語化の所産として理解可能になる、という考え方に沿う形で受容されてきた。例えば、Josselson (1995) は、Bruner の思考の物語様式を「論理的な実証主義者が作り出す変数や類型よりも、人々の生きた経験の固有性に寄与する思考様式であり、この思考様式は、所与の狭量なレンズを通してではなく、むしろ脈絡との関係において人間の生の理解を目指すものである」(Josselson, 1995, p. 32) と要

約し、この思考様式の下では「意味は、個々の行為や経験に内在するものではなく、社会的な談話を通して構築される」(Josselson, 1995, p. 32) と論じ、人間は自らや他者の生を、社会的に構築される物語を通して理解可能にすると主張している。また、Atkinson (1998) は、Bruner (1986, 1987, 1990) は「物語を、人間が自らの生をどのように構成するのかを理解するための重要な手段として位置づけた」(Atkinson, 1998, p. 4) と要約し、次のように述べている。

認知心理学者である Jerome Bruner (1986, 1987, 1990) は、私的な意味（あるいは現実）は、実際、個人が作り出し、語る物語を通して構築されると主張した。自分自身の経験は、自分たちが経験について語る際に用いた物語の形式に依拠する。そして、これらの物語は、全ての経験の基調となる連続性の感覚を維持すると共に、我々の経験を、組織立て、解釈し、そこから意味を作り上げるための手段である。

(Atkinson, 1998, p. 7)

また、McAdams (1993) は、Bruner (1986, 1990) の議論を枕において、「思考の物語様式に依拠することによって、我々は行為主体としての人間が、時間を跨いで物事を成し遂げようとするという観点から、諸種の出来事を説明することができる」(McAdams, 1993, p. 30) と主張した。Murray (2000, 2002) は、Bruner (1986, 1990) の議論をナラティブ心理学の一つの思想的基盤に位置づけながら、「物語の基本的な機能は、我々が日常生活の中で出会った出来事に意味を付与することである」(Murray, 2002, p. 653) と主張している。また、Crossley (2003) は、Bruner (1990, 1991) の議論を参照しながら、「人間の経験は、物語の構造と同種の複雑な時間的構造によって特徴づけることができる」(Crossley, 2003, p. 292) と主張している。このように、今日のナラティブ心理学の展開を支える論者の議論を辿ってみると、1980年代中頃から1990年にかけて発表された Bruner (1986, 1987, 1990, 1991) の議論は、概して、ナラティブ心理学の展開における一つの思想的基盤として、人々の生きた「行為の意味」を問うための方法論的前提として受容されてきたと行うことができよう。このような Bruner 受容は、我が国のナラティブ心理学の展開においても、同様に見出されるものである。

Bruner (1986, 1990) の仕事は、我が国のナラティブ心理学の展開においても一つの思想的基盤に位置づけられる (やまだ, 2000a, 2006, 2007, 2013; 森岡, 2013, 2015)。例えば臨床心

心理学の立場から森岡（2013）は、Bruner（1986）の思考の物語様式の議論をナラティブ心理学の今日的展開の思想的基点に位置づけて次のように述べている。

心理学でナラティブの視点を明確に位置づけた Bruner は、人間科学のパラダイム転換を課題として「人間の心理学」を積極的に提示した（Bruner, 1986）。その中心的概念は意味であり、意味の構成（constructuin of meaning）に関わるものであることを強調した。生きる行動の主体として人は、他者との関係の中で、生の営みをどのように展開し、それを意味づけていくのだろうか。人間の心理学はこのような全体存在としての個人に焦点があたる。

（森岡, 2013, p. 278）

また、我が国のナラティブ心理学の展開において、その先導者として重要な役割を果たしてきたやまだ（2000a, 2006, 2007, 2013）もまた、Bruner の仕事をナラティブ心理学の今日的展開の一つの思想的基点に位置づけて次のように述べている。

Bruner（1990）が言うように、自然科学を手本としてきた心理学は、行動主義や認知科学を経たあと、ナラティブ研究を中核として、意味の行為（acts of meaning）を扱う心理学へと発展してきた

（やまだ, 2013, p. 4）

そして、Bruner（1990）の「意味の行為（acts of meaning）」の議論を、人生や経験といった人々が生きた「行為の意味」を、物語を介して問うための方法論的前提として位置づけた。やまだ（2007）は Bruner の議論を次のように引いている。

Bruner（1990）の記念碑的な本は、『意味の行為（Acts of meaning）』（原題）と名づけられている。「意味」とは、語り手と聞き手の相互作用のなかで共同作業として行われる、進行するプロセスとしての「意味づける行為」をさす。物語とは、意味づける行為あるいは経験の組織化のしかたのことである。

（やまだ, 2007, p. 126）

物事の「意味」は相互行為として進行する「意味づける行為」の所産であり、「物語」とは「意味づける行為」の手段ないし方法である。そして、「意味づける行為」は、ここでは経験を組織化する行為と同義、すなわち、物語と同義である。ここに次の定式が成り立つ。つまり、我々は物語という手段を介して、自らの生きた経験を組織立て、それらに意味を付与するという定式である。

やまだ (2000a, 2006, 2007) は、Bruner (1990) が「意味の行為 (acts of meaning)」と呼んだ議論を、人間が物語という手段を介して、経験を組織立て、そこに意味を付与する行為として読解した。つまり、物語は人々が経過した行為や経験に意味を付与する手段であるというナラティブ心理学に馴染みの方法論的定式に沿うものとして Bruner (1990) の「意味の行為」の議論を受容した。この受容は、やまだ (2006) の次の言明によっても確認される。

物語とは、「経験を有機的に組織化する行為、つまり経験や人生を編集する行為」をさす。人間の経験は、外在化された個々の知覚や行動 (behavior) を寄せ集めたら、その総和として自動的に出来るわけではない。.... 人間は、一瞬ごとに変化する行動を選択し編集し構成し秩序づけ、「経験」として組織し「出来事」を「意味づけ」ながら、生きているからである。個々の要素が同じでも、それをどのように関連づけ、組織立て、筋立て、編集するかによって、全体の意味は大きく変化する。物語とは、経験を有機的に組織化すること (organization of experiences)、そして、それを意味づける「意味の行為」(acts of meaning : Bruner, 1990) である。

(やまだ, 2006, p. 440; やまだ, 2000a, 2007 も参照)

先に述べたようにやまだ (2000a, 2006, 2007) は、Bruner (1990) の「意味の行為 (acts of meaning)」の議論を、我々が日常において経過する様々な出来事を一つの経験としてまとめあげ、それらを「意味づける行為 (acts of giving meaning)」として受容した。そして、我々が経験に何らかの意味を付与する行為の主要な手段が物語であると結論づけた。それ故、この受容の中では、「意味の行為」(Bruner, 1990) は、「意味づける行為」としての物語行為を指示することになる (やまだ, 2000a, 2006, 2007)。ここで物語行為とは「2 つ以上の出来事をむすびつけて筋立てる行為」(やまだ, 2000a, p. 1) を指している。

だが、Bruner (1990) の主張した「意味の行為 (acts of meaning)」と、その受容された「意味づける行為 (acts of giving meaning)」(やまだ, 2000a, 2006, 2007) とは果たして同義とし

て理解してよいだろうか。後に見るように Bruner (1990) は、「意味の行為 (acts of meaning)」という主題を、人間の意味生成 (meaning-making) と意味使用 (meaning-using) の原理と機能の研究を強調するものとして位置づけている。すなわち、意味が如何なる原理のもとに生成され、生成された意味は人間の行為の中で如何なる機能を果たすのか、という問いこそ Bruner (1990) が *Acts of meaning* と題した著書の冒頭で提起した問題であった。

この問い立てが「人々の生きた人生や経験の意味は何か」といった、言わば人々の生きた「行為の意味」を諸個人の語り出した物語を介して研究する立場と異なっていることは明らかであろう。要するに Bruner (1990) は、「意味の行為 (acts of meaning)」という主題によって、人々の生きた「行為の意味 (meaning of acts)」を研究することを主唱したのではなく、人間が意味を生成し、使用する、その原理と機能を研究することを主唱していたのである。だが、上で明らかにしたように、Bruner (1990) の「意味の行為」の議論は、人々の生きた「行為の意味」を問うための方法論的前提として受容されるか、あるいは殆ど関心を向けられずにきたといっても過言ではない。本論文では、この問題を、Bruner (1990) の「意味の行為 (acts of meaning)」論の「行為の意味 (meaning of acts)」論としての受容の転倒と呼ぶことにする。あるいは、Bruner (1990) の「意味の行為 (acts of meaning)」論に対する方法論的無関心と言ってもよいだろう。

Bruner (1990) の「意味の行為 (acts of meaning)」論の「行為の意味 (meaning of acts)」論としての受容の転倒、ないし Bruner (1990) の「意味の行為 (acts of meaning)」論に対する方法論的無関心によって、人間が意味を生成し、使用する、その原理と機能についての研究、言葉を換えて言えば、人間が意味を希求し、生成する行為そのものについての研究は、人々の生きた「行為の意味 (meaning of acts)」の研究の背後に隠され、殆ど不問に処されることになってしまった。

では、ナラティブ心理学の今日的展開の中で、Bruner (1990) の「意味の行為 (acts of meaning)」の議論はどのように受容されてきたのか。この問題について検討するには、ナラティブ心理学の展開の中核に位置づく「物語」と「意味」という概念が、Bruner (1990) の「意味の行為」論の「行為の意味」論としての受容の転倒の中で、どのように扱われてきたのかを検討することが一つの出発点となる。ここでは、ナラティブ心理学の今日的展開の出発点としての Bruner (1986, 1990, 2002) の仕事を高く評価し、Bruner (1990) の「意味の行為 (acts of meaning)」という概念をナラティブ心理学の一つのキーワードに位置づけて論じてきたやまだ (2000a, 2006, 2007) の議論に焦点を当てる。

やまだ (2000a, 2006, 2007) の議論に従えば、人生や経験といった人々の生きた「行為の意味」は語り手と聞き手との共同作業として担われる物語行為を介して付与される。ナラティブ心理学の展開における主観性の強調は、ともすると社会、文化、歴史的な脈絡から切り離された諸個人の内的な精神世界への内観主義的アプローチの再興と誤解されてしまう。それに対しやまだ (2013) は、個人の生きた人生や経験についての物語は、精神の外側からあてがわれる客観的な構築物でも、精神の内側から生み出される内発的な構築物でもなく、特定の社会、文化、歴史的な脈絡のもとで「人と人との間に共同生成されたもの」(やまだ, 2013, p. 10) として理解する必要があると主張した。このような考え方は、Gergen (1994/2004) の主張した「関係性理論」に立脚する社会構築主義的物語論とその理論的志向を共有していると言える。ここで関係性理論とは『頭の中の知識』という常識を超えて、『関係性が現実を創る』ことを主張する理論的立場」(Gergen, 1994/2004, p. 247) を指示するものである。ただし、Gergen (1994/2002) の関係性理論が個体能力的、あるいは社会文化歴史的な所与性をいずれも批判し、言語を介した社会的関係ただそれのみが我々の生きる現実を構築すると主張したのに対し、やまだ (2000a, 2006, 2007, 2013) の考えは物語の構築に関わる社会的関係や語り手と聞き手との相互行為という視点を重視しつつ、物語行為を含む人間の行為を包摂するより大きな構造としての社会・文化・歴史的脈絡を重視する点において Gergen (1994/2004) よりも柔軟な構築主義の立場をとっている。やまだ (2000a) はこの点について「ストーリーは、語り行為として状況的文脈の中に埋め込まれているだけではなく、より大きい社会・文化・歴史的な文脈と生態的文脈の中に埋め込まれている」(やまだ, 2000a, p. 24) と表現している。こうして、物語の相互行為的、かつ、社会・文化・歴史的な構築という視点を強調しつつ、やまだ (2000a) は物語行為によって付与される「意味」という主題に向かう。つまり、「意味づける行為 (acts of giving meaning)」としての物語という主題に向かった。

意味は、時間の流れのなかで、2つ以上の出来事をむすびあわせる物語行為のなかで発生する。ただし「むすぶ」ということばを、個々の出来事が先に実在し、それを紐でむすぶようにイメージしてはならない。個々の出来事は、むすばれ、意味化される前には、ひとまとまりの出来事として認識されていない。したがって、出来事自体も、むすぶ過程で、出来事としてのまとまりを帯びながら意味化されていく。.... 要素としての出来事は、文章の筋立てと構造化の過程でまとまるのであり、それを支えるコンテキスト (文脈) なしに、前もって実体として孤立して存在しているわけではない。文脈を与え、筋書きをつく

る行為によって、個々の出来事が組織されるとともに意味化される。

(やまだ, 2000a, p. 11; やまだ, 2006, 2007 も参照)

やまだ (2000a) の議論に従えば、意味は物語行為の中で発生する。物語の筋立ての中に組み込まれる前段階において、個々の出来事は意味を持ち得ない。出来事が意味を持つためには、当の出来事が他の出来事との間に、ある特定の関連性を持つような仕方で結ばれる必要がある。この時、物語の収束点との関連において物語全体の構想を方向付ける骨組みを「筋 (plot)」と呼ぶ。そして、物語全体の構想を方向づける骨組みに沿って、物語の素材となる出来事を結びつけていくその仕方を「文脈 (context)」と呼ぶ。物語の素材となる諸種の出来事は、物語の筋の中に組み込まれ、文脈を与えられることによって特定の意味を付与される。この含意において物語行為は「意味づける行為 (acts of giving meaning)」に他ならないのである。

物語の素材となる諸種の出来事の結び方は一様に定まっているわけではい。出来事の結び方は多様性に拓かれている。どのような筋立ての中に、どのような文脈によって諸種の出来事を結びつけるかによって、物語の素材となる諸種の出来事と、全体としての物語が帯びる意味とは変化していく。やまだ (2000a, 2006, 2007) は、出来事のむすび方によって物語の部分と全体の意味が同期的に変化していくという特質を、ナラティブ心理学の方法論にとって本質的に重要な論点として強調している。というのも、このような考え方をすることによって人間の生のダイナミズムを一義的に実証可能な自然法則として研究する方向にではなく、「人が自分自身の経験をどのように組織するか、どのように意味づけるか、という問題」(やまだ, 2000a, p. 5) として、多義的に解釈可能な意味の問題として研究する方向に心理学の研究を進めることができるからである。やまだ (2006) は、物語の意味が語り手 (書き手) と聞き手 (読み手) との応答的なやりとりの過程で多様に生成されたり、変容していくという考え方を物語についての生成的定義として次のように述べている。

[物語の生成的機能を重視する定義では、] ある「トポス (場所)」における「むすび」(結び・産び) によって、新しい意味が生成されたり、ズレによって変異することが、物語にとって本質的に重要と考えるのである。物語は、「完成品」ではなく、絶えざる修正と生成による語り直し、構成と再構成の連続とみなされる。

(やまだ, 2006, pp. 440-441)

やまだ (2000a, 2006, 2007) の議論に従えば、物語行為とは人々の生きた行為の過程に、多様な意味を付与し、また意味を付与し直していく社会的な共同作業である。すなわち、ここで物語行為には人々の生きた人生や経験を「意味づける行為 (acts of giving meaning)」としての方法上の役割が与えられている。そして、この「意味づける行為」としての物語行為の理論的参照点が Bruner (1990) の「意味の行為 (acts of meaning)」の議論であった。

だが、我々の考えでは Bruner (1990) の「意味の行為 (acts of meaning)」の議論は「意味づける行為 (acts of giving meaning)」と同義ではない。本章の以降の議論で明らかにするように、Bruner (1990) が「意味の行為」という主題によって強調したのは、人間が意味を希求し、生成する過程として理解される「意味の行為」の研究であって、人生や経験といった人々の生きた「行為の意味」の研究ではなかった。ここに、Bruner (1990) の「意味の行為」論の「行為の意味」論としての受容の転倒という事態が明らかになるのである。

こうした受容の転倒は、やまだ (2000a, 2006, 2007) の議論における Bruner 受容に留まるものではなく、本章で明らかにしてきたようにナラティブ心理学の展開において広く浸透してきた転倒であると言える。すなわち、Bruner (1990) の主張した「意味の行為 (acts of meaning)」とは、人々が生きた行為に物語を手段として意味を付与する行為を指しており、経験を「意味づける行為」としての「意味の行為」の方法論に依拠して、我々は人々の生きた「行為の意味」を研究することができるという通説である。Bruner (1990) の「意味の行為」論の「行為の意味」論としての受容の転倒によって、人間が意味を生成し、使用するその原理と機能を問うという人間の「意味の行為」の研究は事実上不問に処されることになった。代わって、興盛してきたのは、人生や経験の意味といった、人々の生きた「行為の意味」を、物語を対象として研究するアプローチであった。

「意味の行為 (acts of meaning)」の研究を伴わずに「行為の意味 (meaning of acts)」の研究を進めるというやり方は、言わば「過程」を問わずに「結果」を問うという形崩れの論理構造の上に一連の研究をのせることを意味する。だが、物事の成り立ちの検討において明らかなように、物事の結果というのは、過程の帰結として導出されるのが本来であって、結果だけ独立に存立しているわけではない。従って、物事の結果を問うためには、その生成過程から問う必要がある。もしも、「過程」を問わずに「結果」のみを問うならば、我々は、物事の成り立ちをその生成過程の論理的必然性から切り離して検討することになる。「過程」から切り離された「結果」の検討が、事の内実を十分に捉え得ないのと同様に、「意味の行為」から切り離された「行為の意味」もまた、意味の内実を十分に捉え得ないのではないか。このような不

足に対し、我々は Bruner (1990) が「意味の行為 (acts of meaning)」と呼んだ、まさに人間の意味生成と意味使用の原理と機能が如何なる行為過程であるか、という問題の解明に取り組む。この探求は、言わば Bruner の「意味の行為 (acts of meaning)」の議論を、人々の生きた「行為の意味」を問う研究の理論的前提としてではなく、その本来の位置取りである人間が意味を生成し、使用する行為過程として理解されるような「意味の行為」の研究を進めるための理論的前提として読解し直すことを意味している。

2. 2. Bruner が「意味の行為」に至るまで

さて、Bruner (1990) の「意味の行為」の検討に先立って、彼が「意味の行為」の議論に辿り着く一つ手前の議論を確認しておくことが、我々の論究の一つの有用な道標となる。既に多くの論者によって言及されてきたことであるが、ナラティブ心理学の展開の思想的原点に位置づけられる Bruner の仕事は主だって 2 つの著作に集約される。1 つ目の仕事は、1980 年から 1984 年の間に公刊された諸論文をまとめた論文集 *Actual minds, possible worlds* (Bruner, 1986) の第 2 章に再掲された「二つの思考様式 (two modes of thought)」(Bruner, 1986, p. 11) の議論である。この論考の中で彼は、物語という概念を、人間の思考の一つの在り方として定式化し、それを思考の物語様式と呼んだ。そして 2 つ目の仕事が、本論が論究の照準を合わせる単著 *Acts of meaning* (Bruner, 1990) である。同著で Bruner は「解釈学的心理学」(Bruner, 1990, p. 118) という構想のもとに、文化的脈絡の中で為される人間の意味生成と意味使用の過程についての探求という主題に取り組んだ。Bruner には、*The culture of education* (Bruner, 1996) と *Making stories: Law, literature, life* (Bruner, 2002) と題された後に続く 2 冊の論集と単著があるが、いずれもその論考の土台は先の 2 つ著作にあると言ってよい。まずは Bruner が物語という概念の心理学への導入を主張した議論から見ていこう。

2. 3. 1. 思考の一様式としての物語.

Bruner が人間の思考の一様式としての物語というアイデアを提出したのは 1984 年 8 月 25 日、カナダのトロントで開催されたアメリカ心理学会 [American Psychological Association: APA]、第一分科会での招待講演である。この招待講演の演題が「思考のナラティブ様式とパラダイム様式 (Narrative and paradigmatic modes of thought)」であった。この講演のハンドアウトは 1985 年に E. Eisner の編纂による *Learning and teaching the ways of knowing* (Eisner, 1985) に転載され、1986 年に自身の論文集 *Actual minds, possible worlds* (Bruner,

1986) の第 2 章に「二つの思考様式 (Two modes of thought)」(Bruner, 1986, p. 11) として大幅な加筆が施されて再掲された。人間の思考の様式としての物語の定式化によって、同論考は Sarbin (1986) の編纂による *Narrative psychology: The storied nature of human conduct*、Polkinghorne (1988) の *Narrative knowing and the human sciences* と共に、物語というルートメタファーに依拠して人間科学を展望する展開の道標に位置づけられる (Murray, 2000)。

ただし我々は、これらの主張を当世の時代精神と切り離して文字通りに受け取るだけでは不足である。「思考の物語様式」(Bruner, 1986) を初めとする一群の主張の背景には、1 章で述べたように心理学は実証主義的自然科学の方法論に依拠して、その探求を専ら文脈独立的、一義的に観察可能な真理として成り立つ普遍法則の解明に努めるべきであるという考え方に対し、それを否定するものとしてではなく、それを補完するものとして、社会、文化、歴史の変遷や、物事が位置づく脈絡に応じて多義的に変化する物事の文脈依存的な意味の理解に専心する人間科学の展開可能性を求める気運があった。Bruner (1985, 1986) の「思考の物語様式」というアイデアはこうした歴史的脈絡の中に、人間の心の働きに関わる探求の焦点を、文脈依存的な意味の理解の問題として研究する心理学の展開可能性を模索するものであった。

そしてこの時、新しい心理学研究において有用なメタファーとして採用されたのが物語という概念であった。というのも、我々が物語に対峙する技巧は、変転する文脈に応じて変化する意味を、解釈という方法に依拠して理解していく行為に支えられていると考えられたからである。人間の心の働きに関わる研究の焦点を、変転する文脈に応じて絶えず変化していく意味の問題として、物語の解釈という方法論に依拠して研究することを目指す心理学を Bruner は解釈学的心理学と呼んだ。「思考の物語様式」というアイデアは Bruner にとってその前置きとなる議論であった。論文集 *Actual minds, possible worlds* (Bruner, 1986) の緒言の中で彼は William James の一文を引いている。

あらゆる人間の思考は、本質的に 2 つの種類からなると言うことができる。一方には推理論証に付する、他方には物語、描写、黙想に付する思考がある。このことは、あらゆる読書家の経験が証拠立てるだろうことを言っているに過ぎない。

William James

(Bruner, 1986, p. x iii)

Bruner の「二つの思考様式」(Bruner, 1985, 1986) の議論は、言わば James の上の言明を心理学の方法論として論じ直したに過ぎないとも言える。だが、Bruner は心理学の研究が、仮説の検証という思考様式に偏った研究を進めてきたが故に、人間の精神についての理解は、その仕事を十分に為し得てこなかったと考えた。そして、そうした不足を補完するものとして、Bruner は物語の解釈という方法論に依拠して展開する解釈学的心理学の構想を立ち上げたのである。では、「二つの思考様式」という議論はどのように提示されたのか。Bruner の「二つの思考様式」(Bruner, 1986, chap. 2) についての論文は、次のように書き出されている。

初めに、私の論点を出来るだけ簡潔に述べ、それから、その基本的なところと、帰結とを精査していくのがよかろう。それは、こういうことである。認知機能、思考には二つの様式がある。各々は経験をまとめあげ、現実を構成するに当たって異なった仕方を提供する。二つ（相補的ではあるが）は、相互に還元されえない。一方の様式を他方に還元しようとしたら、一方を他方の帰結として無視しようとしたらする試みは必然的に思考についての豊富な多様性を捉え損ねることになる。

(Bruner, 1986, p. 11)

Bruner (1985, 1986) の議論に従えば「二つの思考様式」は、それぞれに全く異なる機能原理と、物事の信憑性についての判断基準を有している。「一方は、形式だった証明手続きと経験的証拠に依拠して真理の証明に向かう。他方は、真理 (truth) ではなく、本当らしさ (truth likeness) ないし迫真性 (verisimilitude) を立ち上げる」(Bruner, 1985, p. 97: 強調原文) ことに依って物事の信憑性を担保する。また別の視点から述べるならば「一方は文脈独立的な普遍的特性の解明を目指し、他方は文脈依存的な個別具体的特性の解明を目指す」(Bruner, 1985, p. 97)。

Bruner (1985, 1986) はこうした特徴付けに続いて、前者を思考の「パラダイム様式 (paradigmatic mode)、もしくは論理-科学的様式 (logico-scientific mode)」(Bruner, 1986, p. 12) と呼び、後者を思考の「物語様式 (narrative mode)」(Bruner, 1986, p. 13) と呼んだ。そして、我々は人間の心理学の研究において数学的な証明手続きに依拠して、再現可能な観察事実から一つの一般法則を導き出すための前者の思考様式については多くを知っているが、「人間の、あるいは人間らしい意図や行為、そして彼らの生き方を特徴づけている生の移り変わりやその帰結」(Bruner, 1986, p. 13) を取り扱おうとする後者の思考様式については不十分

な理解しか持ち合わせていないと結論づけた。

2. 3. 2. 行為の中の諸理論 (Theories in action) .

こうして Bruner (1985, 1986) の「二つの思考様式」の議論は、1980 年代に Sarbin (1986) や Polkinghorne (1988) の仕事と重ねられ、思考の物語様式に定位した「もう一つの心理学」の展開可能性を示唆するものとなった (Murray, 2002)。だが、このもう一つの心理学は、どのようにその研究プログラムを開始したのか。そこに展望されたのは、実証主義自然科学の一分野としての心理学ではなく、人文科学の一分野としての心理学の展開可能性であった。

科学は人間の意図や人間の苦境を超えて不変のままに留まる世界を制作しようと目論む。... 他方、人文学者は、主にそれを見る者の立場とスタンスに伴って変化する世界を取り扱う。科学は、それを理解しようと求める人びとの生活状態の変化を越えて、事物や事象の不変性と結びついて「存在」する世界を作り出す...。人文科学はその世界に住まうことによって求められることを反映するものとして世界を理解しようとする。言語学の用語で言えば、文学ないし文芸批評の研究は、文脈依存性を通じて普遍性を達成するが、科学研究は文脈独立性を通じてそれを為すのである。

(Bruner, 1986, p. 50)

思考の物語様式に定位した解釈学的心理学の構想がその研究対象に位置づけるのは「人間の、あるいは人間らしい意図や行為、そして彼らの生き方を特徴づけている生の移り変わりやその帰結」(Bruner, 1986, p. 13) であった。こうした主題は、仮説とそれを検証するための数学的な証明手続きに依拠して、文脈独立的にいつも定まった普遍法則を導き出すことを目指す研究とは異なる方法論を必要とする。こうした主張の下に Bruner (1986) は次のように述べた。

人間の状態について市井の人々がもっている理論は、語りの端々に使われるメタファーや言葉の中に埋め込まれている。こうした市井の人々の語りは、我々が最も厳密な科学的方法を用いて構築するあらゆる心理学理論に匹敵する程度に「現実」を主張する資格を持っている。.... このような心理学は、人間の「行為の中の諸理論 (theories in action)」についての、より含蓄の深い、ただしより具体的な解釈を与えることを課題とする点で、当然のことながら、実証主義的というよりも「解釈学的」である ...。このことは我々を真

っすぐに人文学者の活動へと引き込むことになる…。

(Bruner, 1986, p. 49)

Bruner(1986)がもう一つの心理学に与えた研究課題は、人間の「行為の中の諸理論(theories in action)」についての解釈学的理解にある。そして、「物語は、行為の脈絡の中で人間の意図の解明に関わっている」(Bruner, 1985, p. 99)。人々が日常の行為の中で遂行している諸理論についての解釈学的理解という目的に照らして、彼の心理学が新たな方向へと向かう道標が用意された。我々はここで Bruner (1986) が「行為の中の諸理論 (theories in action)」と表現した点を見落とすべきではない。なぜならば、彼が主張したのは「行為についての理論 (theories on action)」ではなかったからである。本論の主旨に沿って言い換えるならば、ここで Bruner (1986) が主張しているのは「行為の意味」についての研究ではなかった。そうではなく、人々が日常の行為の中で如何なる理論を遂行しているのか、という問題を研究することが Bruner (1986) が思考の物語様式に定位した心理学の構想に与えた研究課題だったのである。

2. 4. 解釈学的心理学の構想

思考の物語様式に定位した「解釈学的心理学」(Bruner, 1990, p. 118)の構想が具体的に論じられたのが1990年に発表された単著 *Acts of meaning* (Bruner, 1990)であった。この著書が Bruner 自身にとって、彼の心理学者としての思想を背負わせた現代心理学への一つの問題提起であったことは同書の緒言に表れている。*Acts of meaning* (Bruner, 1990)は、次のように書き出される。

書物はそれぞれ、海面からそびえ立つ山頂のようなものだ。個々には独立した島々に見えるかもしれないが、それらは1つの基底からなる地勢の隆起であり、1つ1つは局在して見えるが、同時に全ては1つの全体的なパターン的一部分である。したがって、これらの書は、その時その場を反映することは避けられないとしても、より全体的な知の地勢の一部をなしている。本書もまたその例外ではない。

(Bruner, 1990, p. ix)

個々の書物は、それ自体として一つの完結した思考の集成であるかのように見える。だが、実際にはそれらは、より大きな知の地勢の隆起の一部であり、個々別々に切り離されたものではない。一冊一冊の書物は、思考の基底をなす大きな脈絡の上に位置づけられており、その時その場の時代や場所の精神を反映することはあっても、大きな思考の脈絡から切り離されるわけではない。Bruner (1990) にとって *Acts of meaning* もまたそうした思考の一つの表現であった。この書き出しの主語を Bruner の書物として読み進める時、我々は *Acts of meaning* もまた彼の研究の基底に流れる思考の脈絡を反映するものであると理解し得る。事実、Bruner (1990) は次のように書き記している。「読者は、本書に一人の心理学者としての私の長い歴史の『投影』をただちに見出すだろう」(Bruner, 1990, p. xii)。そして、「本書は、多くの点で私の最も新しい考えの表現であるのみならず、いってみれば、心の中に抑え込んできたものの復活である」(Bruner, 1990, p. xv)。この一文に Bruner が同著の執筆に込めた志向が理解される。それが一体、どのような志向であったのか。この問いを解明していくことが本節の目的である。

Acts of meaning (Bruner, 1990) は、Bruner 心理学の基底に流れる思想の反映であると同時に、現代心理学への確固たる課題提起という特質をもった書物であるということを先に述べた。このように考えるならば、同著が Bruner の思想への探求を進める道具立てとしても、その理論的再検討に足る書物であることが示唆される。実証主義的な自然科学の方法論に定位した「科学的心理学 (scientific psychology)」(Bruner, 1990, p. 17) の遂行ではなく、人文学の史的展開が洗練させてきた解釈学の方法論に定位した「解釈学的心理学」(Bruner, 1990, p. 118) の構想は、「二つの思考様式」(Bruner, 1986) の存在を論じた Bruner にとって彼が長年心の中に抑え込んできたもう一つの心理学の再興を目指すものであった。

単純な「因果」という観点からの説明に固執することは、我々が、人間が自らの世界を如何に解釈し、そしてまた**我々が、人間の解釈**という行為を如何に解釈するか、という問題について理解しようとする試みから引き離す。さらに、心理学の目的が(あらゆる知的企てと同様に)理解の達成にあるとするならば、なぜ、人間がおかれるあらゆる状態について、現象が観察されるのに**先立って**理解する必要があるのか

(Bruner, 1990, p. x iii: 強調原文)

Bruner (1990) は、「実証主義科学がその理想に据えてきた**還元主義 (reductionism)**、**因**

果的説明 (causal explanation)、そして予測性 (prediction)」(Bruner, 1990, p. x iii: 強調原文) という方法論に定位する心理学研究の限界を指摘して上のように述べた。そして、人間は日常生活の中で経過する世界との出会いを如何に解釈しているのか。そして、解釈学的心理学というパラダイムを実践しようとする心理学者たちは、人々の世界経験に付する解釈行為を、如何に解釈するのか。さらには、心理学の目的を、精神に係る文脈独立的な普遍法則の解明にではなく、精神の文脈依存的な、可変的動態の理解に位置づけるとするならば、人間の精神の動態について、当の現象が観察される前に先立って理解しようとする必要は果たしてあるか。

こうした研究の視座を持ち合わせた解釈学的心理学の構想の理論的中心に Bruner (1990) は意味という概念を位置づけたのである。ここまでの議論において既に、Bruner (1990) の思考が、人々の人生や経験の意味を問う議論、換言すれば人生や経験といった人々の生きた「行為の意味」を問う議論として読解されるよりも、遥かに広い視野を持って論じられていたことが示唆される。そして彼は同著を *Acts of meaning* (Bruner, 1990) と題した所以を、次のように記しているのである。

私がこの本を *Acts of Meaning* と名付けたのは、次のような大きな主題を強調するためである。すなわち、意味の生成 (meaning-making) に係る特質とその文化的組成、ならびに、意味が人間の行為 (human action) の中で果たす中心的な役割について強調するためである。

(Bruner, 1990, p. xii)

人間が「意味を生成」する過程とは如何なる特質を有する過程であるのか。また、意味の生成に際して文化というものが果たす役割は何か。さらに、意味というものが人間の行為の中で果たす役割とは何か。こうした問い立てに対する何らかの応答を用意するために Bruner (1990) は、同著を *Acts of meaning* と名付けたのである。そして彼は、意味という概念を心理学の理論的中心に据えるべきことを同著の中で繰り返し強調した。

意味は「曖昧だから」という理由に基礎づいて、意味を心理学の理論的中心に据えることを拒否すべきではない。

(Bruner, 1990, p. 65)

私は、心理学はその説明体系の中で「意味を使わずに」やっ払いこうとするのを辞めるべきであると論じてきた。

(Bruner, 1990, p. 20)

... 人間の心理学の中心となる概念は意味にあり、意味の構築に関わる、その過程と、やりとりにある。

(Bruner, 1990, p. 33: 強調原文)

心理学は人間を文化に結びつけている意味生成 (meaning-making) と意味使用 (meaning-using) の過程を巡って組織されなければならない。

(Bruner, 1990, p. 12)

ただし、意味という概念の以上の引用に示されるような強調を Bruner の視座から為された現代心理学へ一つの問題提起として引き受けるにせよ、その具体的な構想の内実が明らかにされ、この言明が単なる宣言に留まるものでないことが明らかにされる必要がある。Bruner (1990) の言葉を借りれば「意味という概念と、意味が共同体の中で生成され、交渉される過程を巡って精神科学を如何に構築するのかという問い」(Bruner, 1990, p. 11) に彼自身が応えなければならない。

一方で、*Acts of meaning* (Bruner, 1990) の学界における受容を辿ってみるならば、そこに散見されるのは概して、Bruner の新しい心理学——意味中心の心理学 (Brockmeier, 2009; Shweder, 2008)、あるいは文化心理学 (Cole, 1996; Gergen, 1999/2004) ——の宣言としての評価が一般的であり、その心理学の構想の内実が体系立てて論じられ、十分な吟味検討に晒される機会は、これまで殆どなかったと言ってよい (横山, 2015)。我々が気をつけるべきは、*Acts of meaning* (Bruner, 1990) を Bruner による新しい心理学の「宣言書」という位置づけに留めておくことは、同著の評価を「宣言」という視点において高める一方で、その「構想」の内実が同時に捉えられるのでなければ、この内実は次第に忘れ去られ、不明瞭なままに留め置かれることになる、ということである。本論の筋立てに沿って言うならば、Bruner の *Acts of meaning* における主張の要点が、人々の生きた人生や経験の意味を問う「行為の意味」の研究の方法論的前提として引用されていても、何ら問題はないことになる。また、Bruner という

心理学者に対しても 20 世紀の心理学を牽引してきた心理学における重要なコンセプトメーカーや宣言者というアイデンティティを与えて彼の仕事を理解したつもりになる、ということにもなりかねない。

こうした帰結を導出する「宣言」と「構想」との乖離という事態を回避するためには Bruner の著作を丁寧に読み解き、その「宣言」と「構想」とをひと繋がりのもものとして検討し直すことを通して Bruner の意味中心の心理学、あるいは文化心理学の構想の内実を彼の心理学に固有のものとして掬い取ろうとする地道な作業が必要になる。こうした作業を通して初めて彼の文化心理学がその構想の内実を明らかにし、その吟味や拡張が可能になると言えよう（横山, 2015）。

さて、Bruner (1990) は同著の緒言において、「心理学がその主要な関心を意味に向ける時、その心理学は如何なる様相を呈するのか、そしてまたその心理学は如何にして不可避免的に文化心理学になっていくのか」(Bruner, 1990, pp. x ii - x iii: 強調原文) と問いかけた。この言葉に明らかなように、意味の心理学の構想に深く関わる問題として Bruner (1990) が取り上げたのが文化という概念であった。彼の議論の内に文化とは何か、という問い立てに対する明白な論述が展開されているわけではない。だが、彼は、「個人が意味を生成する過程で使用する象徴体系」(Bruner, 1990, p. 11) は、文化と、文化の有する言語や記号の体系と密接に結びついていると主張した。Bruner (1990) の考え方に従えば、人間が協同生活を営む上で不可欠な心理的道具としての言語や記号を主とする「共有された象徴システム」(Bruner, 1990, p. 11) は、発生的な産物ではなく文化-歴史的な産物である。人間の意味生成や意味使用の過程は、文化の有する言語や記号を主とする象徴体系の使用に依存する。このような考えの下に彼は「人間は文化の中に参加し、文化を通して心的な力を実現するが故に、人間の心理学を孤立した個人に基礎づいて構築することは不可能である」(Bruner, 1990, p. 12: 強調原文) と明言した。そして、人間の心の働きが文化と不可分であるという前提を敷く限りにおいて「心理学は人間を文化に結びつけている意味生成と意味使用の過程を巡って組織されなければならない」(Bruner, 1990, p. 12) と主張した。

だがしかし、人間を文化に結びつけている媒介過程が意味生成と意味使用の過程であるという言明はいかにも唐突である。それに、この言明の意味するところがよく分からない。というのも、(1) 言語や記号を主とする人々の間に共有された象徴体系が発生的な所産ではなく文化-歴史的な所産であるという論点を認め、また、(2) 我々の精神機能はそれらの文化-歴史的な象徴体系に避け難く依存するものであるという理論的前提を引き受けるにせよ、なぜ、意味

生成と意味使用の過程が、人間の心の働きと文化とを結びつける過程であると明言できるのかについて、なんら説明がなされていないからである。要するに、意味生成と意味使用の過程がいかなる意味において、人間の精神機能と文化とを媒介する過程であるのかについての説明が全くもって不十分なのである。従ってまずはこの問題から明らかにしていかなければならない。

Bruner(1990)が「人間の心理学の中心となる概念は意味(meaning)にあり、意味(meaning)の構築に関わるその過程(processes)と、やりとり(transactions)にある」(Bruner, 1990, p. 33: 強調原文)と主張した際、彼はこの確信を二つの連関する議論に基礎を置くものとして論じていた。

この確信は、二つの連関する議論に基礎づけられている。第一に、人間を理解するためには、人間の経験と行為とが、当人の志向的状态(intentional states)から如何に形作られるのかを理解しなければならない。第二に、この志向的状态の形相は、文化のという象徴体系に参加することを通してのみ具体化される。

(Bruner, 1990, p. 33)

Bruner(1990)の議論に従えば、第一に、人間についての理解は人々の経過した経験と行為とが、当人の「志向的状态(intentional states)」(Bruner, 1990, p. 8)と如何に結びついているのかを問うことに連関している。ここで言われている志向的状态とは何か。Brunerは、志向的状态という概念について、何かを信じる、何かを願う、何かを欲する、何かを意図する、何かに責任や義務を感じるといった、何ものかに向けられているという意味での向性を伴った心の状態として説明している(Bruner, 1990)。Bruner(1990)においてこの概念は、発話行為理論の主要な論客の一人であるSearle(1983/1997)の*Intentionality: An essay in the philosophy of mind*の論考に依拠している。Searle(1983/1997)は同著の中で、心の志向性(intentionality)という考え方について次のように論じていた。

志向性とは世界内の対象や事態に向けられ、あるいはそれらに関わり、あるいはそれらについて生じているような、多くの心的な状態ないし出来事の特長である...。たとえば私に信念があるとき、それはかくかくのものが、しかじかであるということについての信念でなくてはならず、私が恐れを抱いているときには何かを恐れ、何かが起こることを恐れているのでなくてはならない。私に願望があるのなら、それは何かをしようとする願望、

あるいは何かが起こったり、それが実情であるべきことを欲する願望でなくてはならない。
私に意図があるのなら、それは何かを行う意図でなくてはならない。

(Searle, 1983/1997, p. 1)

Searle (1983/1997) はこの議論の中で「心的状態には志向的であるような場合と、志向的でないような場合がある」(Searle, 1983/1997, p. 1) とし、両者を区別する手がかりは、心が何ものかに向けられている、その対象がある場合と、ない場合とにあると主張した。付け加えておこなれば、この時、「対象のある場合だけが志向的である」(Searle, 1983/1997, p. 1)。続いて Searle (1983/1997) は、志向的状态であり得る状態について、いくつかの具体例をあげて論じている。

以下に志向的状态でありうるいくつかの状態の例をあげる。信ずる、恐れる、望む、欲する、愛する、憎む、忌避する、好む、嫌う、疑う、いぶかる、喜ぶ、得意になる、気落ちする、心配する、誇る、後悔する、悲しむ、嘆く、罪悪感をもつ、歓喜する、いらだつ ... 。このリストにあげられたものの特徴は、これらが愛する、憎む、信ずる、欲するなどの場合のように本質的に何かに向けられているか、あるいは気落ちするや得意になるの場合のように少なくとも何かにむけられていることが可能であるか、のいずれかであるということである。

(Searle, 1983/1997, pp. 5-6)

要するにここでは「志向性とは何かに向けられている向性のこと」(Searle, 1983/1997, p. 4) である。「志向性」という概念を使うことについて、実証主義自然科学の方法論に依拠する論客ならば、こうした概念使用は不可知論的であり、理論的曖昧さを払拭しきれないと訝るかもしれない。だが、「志向性」という概念に依拠して研究を進める心理学の近年の展開を見てみると、この概念には人間の精神機能についての一つの有用な説明可能性が含まれていると考えられる。例えば、そのような議論の一つとして Tomasello (2014) は、人間は、「共有志向性ないし我々志向性 (shared intentionality, or “We” intentionality)」(Tomasello, 2014, p. 3) と呼び得るような原初的志向性に依拠することによって、関わりの中にある他者との間で注意や目標を共有し、他者と共に協力的な活動を作り上げていくことができるという議論を展開している。彼はこのような理論的前提を「共有志向性仮説 (shared intentionality hypothesis)」

(Tomasello, 2014, p. 1) と呼び、その上に自らの論究を組み立てている (Brockmeier, 2009; Tomasello, 2008, 2014; Tomasello & Carpenter, 2007)。そして、Tomasello らが志向性の問題に関わる議論の基礎においているのも発話行為理論の思想家たちの仕事であった。

Bruner (1990) は実証主義的自然科学の方法論に依拠する科学的心理学の視座からはただちに棄却されるべき概念と目されてきた心的状態 (mental states) や志向性 (intentionality)、行為主体性 (agency) といった諸概念を自らの新しい心理学の構想の中に進んで取り込んでいる (Brockmeier, 2009)。そして彼は Searle (1983/1997) の「志向性」の議論を土台にして、人間の志向的状态の形相は、言語や記号を主とする文化・歴史的な象徴体系に依拠する事によって他者との関係の中に表出され、具体化されると論じた。Bruner (1990) はこれらの諸概念を個人の精神の内側に閉じ込めておくことはしなかった。むしろ、これらの諸概念を文化の有する言語や記号といった公共的な象徴体系と不可分に機能するものとして定式化したのである。Bruner (1990) は次のように述べている。

私が提案しようとしている見解は裏返して言うと次のようなものである。人間の生と、人間の精神に形を与え、行為の基底にある志向的状态を解釈可能な体系の中に位置づけることによって行為に意味を付与するのは、文化であって、生物学的機能ではない。それを成すのは、文化の有する象徴体系に固有のものとして備わっている諸種の様式、たとえば、言語と談話の様式、論理的、物語的な説明の様式、相互依存的な共同生活の様式に負っている。

(Bruner, 1990, p. 34)

Bruner (1990) は上の言明に「これらは、私が“文化”心理学と呼んできたものに関わる議論の骨子となるものである」(Bruner, 1990, p. 35) と書き添えている。人間が自らの世界を解釈するその仕方を理解し、そしてまた、人間の解釈行為それ自体を我々が解釈する仕方を理解するという Bruner (1990) の解釈学的心理学の目論みは、ここに至ってその研究の焦点を一方では、言語や記号といった文化・歴史的な象徴体系に媒介されつつも、他方では、精神の志向的状态に基礎付けられた我々の日常の行為に合わせることになる。人間の多様な精神の志向的状态と、これらの志向的状态を理解可能な様式へと変換する文化・歴史的な象徴体系との合流地点は、我々の日常的な行為の中にある。言葉を換えて言えば、精神の志向的状态と、文化・歴史的脈絡とが出会う現場において人間の意味生成と意味使用の過程が進行していると考え

ることができる。

こうして Bruner (1990) の解釈学的心理学の構想は、人々の「生活の中のありふれた行為」(Bruner, 1990, p. 19) にその研究の焦点を合わせることになる。特定の文化-歴史的脈絡の中に位置づけられつつも、精神の志向的状态に基礎づけられた人々の日常の行為を、両者を媒介する「意味」という概念を軸に解釈という方法に依拠して理解へと導く心理学を Bruner は「文化心理学」(Bruner, 1990, p. x iii: 強調原文) と呼んだ。では、彼の言う文化心理学はどのような研究を進める心理学なのか。Bruner (1990) は次のように述べている。

文化心理学は、その基点となる定義において、「行動 (behavior)」についての研究ではなく、「行為 (action)」についての研究に専心する。それは、志向性に基づいたその対応物としての行為、もっと明確に言えば、状況に埋め込まれた行為、つまり、文化的場面の中に位置づけられた行為、複数の参加者の志向的状态が互いにやりとりする最中に位置づけられた行為の研究に従事する。

(Bruner, 1990, p. 19)

「行為」という概念は、志向性に基礎を置いているという意味において「行動」という概念とは異なる。行動という概念に対応しているのはここでは行動主義心理学の方法論に立脚した「刺激」という概念であろう。つまり、ここで使われている行動という概念は、特定の外的刺激に対する一義的応答として因果的に誘発される人間の振舞いのことを指している。これに対し Bruner (1990) が展望しているのは人間の行動の原理についての因果法則的な説明を可能にする心理学ではない。彼の展望する文化心理学は、一方では精神の志向的状态に基礎をおきながらも、他方では特定の文化-歴史的脈絡のなかに位置づけられた行為についての研究を進める心理学である。言うなれば、精神の志向的状态と文化-歴史的脈絡という二項一対の関係の中に進行する人間の行為についての研究に焦点があてられている。そして彼は、精神の志向的状态と文化-歴史的脈絡との言わば二重拘束の状況の中に「意味の行為 (acts of meaning)」の過程が進行すると考えたのである。

だが、二項一対の関係という時、我々は如何にして当の二項を一対として進行する統合的過程の中に見出すのか。つまり、精神の志向的状态と、行為の位置づく文化-歴史的脈絡とが出会う現場において、両者を異なる水準に位置づくものとして理解しつつも、不可分の統合的過程として進行するものとしてどのように理解したらよいのか。ここには、精神の志向的状态と

文化-歴史的脈絡という二項を不可分の統合的關係にあるものとみなしつつも、異なる水準に位置づくものとして理解するための何かしらの方法論が必要になる。さもなければ、ここに述べた議論は、一方の過程を他方の過程に如何にして還元して説明し得るか、という二者択一の形而上学的な論考に向かうことになってしまうだろう。だが、Bruner が目指したのはそのような議論ではなかった。そのことを裏付けるように、彼は次のように主張している。

精神を理解するということは、哲学的探求が、いかに役に立つにせよ、それを超えて非常に実践的な思考の中に埋め込まれた探求なのである。

(Bruner, 1996, pp. 160-161)

そして彼は、精神の志向的状态と文化-歴史的脈絡という異なる二項の結びつきを検討するための主概念として「意味」という概念を用意したのであった。では、Bruner の言う「意味」とは何であったか。

2. 5. Bruner の「意味」とは何か？

Bruner の議論において「意味」という概念は何を指示しているのか。先にも言及したように彼は自らの「意味」の議論の理論的背景に発話行為理論の展開を位置づけていた。実際、彼は *Acts of meaning* (Bruner, 1990) の中で次のように述べている。

直接的には John Austin に、間接的には Wittgenstein によって触発された発話行為の理論家たちに導かれ、精神の研究者たちは、この 30 年間、意味を巡る議論の中に、コミュニケーションの脈絡を復活させることに精力をかたむけてきた。

(Bruner, 1990, p. 62)

上の引用に示唆されていることは次のことである。物事の意味は、物事が位置づく脈絡との関係において規定される。我々が行う様々な発話や行為の意味は、当の発話や行為が置かれた脈絡に応じて変化する。それ故に、脈絡から切り離して、言わば脈絡から独立に意味の問題を検討することはできない。脈絡から独立に機能する意味の問題は通例、不変的な対象指示機能を有する語義 (sense) の問題として扱われてきた。要するに、物事が位置づく脈絡に応じて

可変的な指示機能を有する「意味 (meaning)」と、物事が位置づく脈絡とは独立に不変的な指示機能を有する「語義 (sense)」とは言葉の定義上、区別して考えなければならない。二つの言葉を区別した上で Bruner が心理学研究の中核に位置づけるべき概念として強調したのは「意味」の議論であった。

ところで、上の議論で脈絡と呼ばれているものは、物語の文脈のことではない。文脈というのは、物語の素材となる複数の出来事を、物語の全体の筋立てに沿ってどのように結びつけていくか、という物語の構成に関わる概念である。言わば、過去想起的な出来事の再構成として語り出される物語の作り方に関わる概念が文脈である。それに対し、ここで言われる脈絡というのは、我々の今、この発話や行為が位置づくその背景として、時々刻々と変化していく時間的、空間的な流れを意味する概念である。

さて、Bruner (1990) の議論に従えば、物事が位置づく脈絡とは独立に不変的な対象指示機能を有する「語義」の研究を進める言語学の展開の背後に「使用と関係づくものとしての意味という人間学的な考え方は、事実上放置されることとなった」(Bruner, 1990, p. 62)。これに対し、「意味」は物事が位置づく脈絡との関係においてその都度可変的に決まっていくという主張を展開したのが発話行為理論の理論家たちであった。言葉が実際に使用される脈絡と不可分に決まっていく概念としての「意味」という考え方は、言葉が使用される当の脈絡の研究を、意味の規定を巡る問題の中核に位置づける。要するに、物事が位置づいている脈絡を理解することが、当の物事の意味の理解にとって根源的に重要な主題であると考えるのである。

Bruner (1990) は、物事の意味の研究は、それらが位置づく脈絡の研究を必要とするという考え方を足場として、我々が他者や自らの行った発話や行為の意味を解釈し、理解することができるのは、当の発話や行為が位置づく脈絡を把握するその程度に依存する、と主張した。このような考え方をとる時、「意味生成の行為に関わる確証的な原因は存在しないのであって、解釈されることになる行為、表現、そして脈絡があるだけである」(Bruner, 1990, p. 118)。すなわち、意味は行為者の発話や行為と、それらが位置づく文化-歴史的脈絡、そして発話や行為の受取手による解釈という三項の多様な結びつきの中にその都度生成されるものとして理解されることになる。Bruner (1990) に従えば、Wittgenstein の格言に依って「意味は使用から芽吹いて来る」(Bruner, 1990, p. 118) のであって、人々が特定の文化-歴史的脈絡の下で行う、何らかの志向的状态に基礎づいた発話や行為が常に意味の生成に先行することになる。この言葉の限りにおいて Bruner は、意味の研究は、行為の研究として展開すべきであると考えていたことが伺える。Bruner は次のように述べている。

我々が、何らかの原則に基づいた仕方の意味を解釈し、意味を生成することが出来るのは、我々が特定の意味が生成され交流されるより大きな脈絡の構造と一貫性とを明確にすることができるその程度に依存すると私は信じている。

(Bruner, 1990, pp. 64-65)

人びとは文化現象を理解するにあたって、世界における出来事ごとに対処しているのではないし、またテキストの中のセンテンスに対しては、そのセンテンスごとに対処しているのではない。人びとは出来事やセンテンスをより大きな構造の中に枠付ける ... 。これらのより大きな構造が、その中に含まれる構成要素を解釈するための脈絡をもたらすのである。

(Bruner, 1990, p. 64)

同様の視座は、彼の近年の論文の中にも同じように見出すことができる。2008年に発表された論文の中で Bruner は文化の認識という主題に関わって次のように主張している。

一言で言えば、ある文化を、有機体を超え出た実体として記述することは実質的には不可能である。つまり、ある情報提供者が「現実」として取り上げ、語ったことを参照することなしには不可能である。そして同時に、我々は、その情報提供者の局所的な現実についての考え方を、その局所性が現れた「文化全体」についての仮説的に一般化された特質にいくらかの参照を得ることなく十分に理解することは出来ない。あらゆる文化の人びとは、...自分たちの局所的な生活の中にある「現実」についてなんらかの考え方を持っているだけでなく、同時に、我々がそれらの現実に対峙する中で如何に振る舞うべきかについての、より全体的な規範や「規則」を持っている。文化はこの含意において、義務的であると同時に、認識論的なのである。

(Bruner, 2008, p. 30)

「ある部分の意味は、全体の意味についてのある仮説に依存しており、他方、全体の意味は、それを構成している各部分の意味についての我々の判断に依存している」(Bruner, 1996, p. 6)。Bruner (1996) は、全体と部分との意味の規定関係を巡る「解釈学的循環」(Bruner, 1996,

p. 6) と呼ばれるこの過程が「意味生成の核心に位置づいている」(Bruner, 1996, p. 6) と結論づけている。物事の意味は、それを取り囲む脈絡との関係において規定される。それ故に、物事は、それ自体として独立には意味を持ち得ない。物事が何らかの意味を持つためには、当の物事が位置づけられる脈絡が必要になるのである。それ故に、我々が物事の意味を理解しようとするならば、我々は先立って、当の物事が位置づけられる脈絡が如何なるものであるか、ということを理解しなければならないのである。それ故に、Bruner (1990) は次のように述べたのであった。

文化心理学は、人間が文化的脈絡の中で意味を生成する際に引き受ける諸種の規則について探求する。これらの脈絡は、つねに**実践の脈絡**である。我々は人々がそれらの脈絡の中で**行っている**、あるいは**行おうとしている事**について常に問う必要がある。意味は使用から芽吹いてくるという言明は捉え難い問題ではないが、それがしばしばキャッチフレーズとして用いられるのにも関わらず、その含意が問い質されずにいることが多い。

(Bruner, 1990, p. 118: 強調原文)

人々が生活の日常的脈絡の中で引き受けている規則、ここでは、法律のように明文化された規則というよりも、日常の通例性、あるいは、当たり前さと結びついた「常識」(Bruner, 1990, p. 35) とも呼び得る暗黙の規則を解釈枠組として利用することによって、我々は他者の発話や行為の意味を理解することができる。そしてこれらの暗黙の規則は、我々の日常の実践的脈絡のいたるところに張り巡らされている。それ故に、我々は人々が日常の実践的脈絡の中で何を規則として引き受け、さらにその中で何を「行っている」のか、あるいは何を「行おうとしている」のかを問わなければならない。Bruner (1990) はこのように主張したのであった。

だが、ここには未だ方法論上の問題が残されている。すなわち、特定の文化-歴史的脈絡の中に張り巡らされた諸種の規則と、精神の志向的状态に基礎づけられた発話や行為という共約不可能な二項を、人々の日常の実践の直接的現前において我々は如何に見取り得るのか、という問題である。Bruner (1990) は、精神の志向的状态と、それらが位置づく文化-歴史的脈絡との関係を、いずれか一方に還元可能なものとしては論じなかった。それ故に、言わば、精神に対応する個人的な水準と、規範的な脈絡に対応する文化-歴史的な水準とは、Bruner においては共約不可能の関係にある。言い換えれば、双方は互いに全く異なるシステムの下に機能している現象であるがゆえに、一方を他方に還元して説明することはできないと考えられている。

相互いに還元不可能な複数のシステムの実践的脈絡における統合的現前という論の立て方は、彼の「二つの思考様式」(Bruner, 1985, 1986) という考え方にも同様に見出せるものである (Bruner, 1986, chap. 2)。人間の精神の志向的状态と、それらが位置づく規範的な文化-歴史的脈絡とは両者が奇麗に分断された状態で、いわば時間的、空間的に分け隔てられたものとして我々に現前するのではない。両者は複雑に絡まり合った統合的な過程として、ある特定の時間的、空間的な脈絡の中に現れてくる。この時、この統合的な過程について、どこまでが精神の志向的状态の領分で、どこからが規範的な文化-歴史的脈絡の領分なのか、といった問いに明白な答えを用意することは容易ではない。先にも述べたように、諸個人に固有な精神の志向的状态と、人々の間に張り巡らされた規範的な文化-歴史的脈絡とは、認識論的な視座においては相互に共約不可能な関係にあるが故に互いに還元し得ない。しかしながら、人々の日常的な精神の働きとして我々に現前するに至っては、それらは統合的な過程として我々の前に現れる。この時、二項一対の関係として現前する精神の志向的状态の水準と規範性を纏った文化-歴史的脈絡の水準との複雑な結びつきを如何にして異なる水準に位置づく二項の統合的現前として見取るのか。ここに何かしらの方法論が必要になることに疑いはないのである。

2. 6. Bruner の「意味の行為 (acts of meaning)」とは何か？

人間の意味生成と意味使用の過程の研究が、人々の日常の実践的脈絡の中で彼らが引き受けている規範の研究を必要とする、という逆説的な言明の中に我々は Bruner (1990) が「意味の行為」と呼んだ過程についての論究を進める。そして、ここに我々は未解決の問いとして残されている Bruner (1990) の方法論が隠されていると考えている。人々の日常の実践的脈絡の中で彼らが引き受けている暗黙の規範を Bruner (1990) は、人々が日常生活を営む中で当然と見なしていること、言葉を換えて言えば、人々の日常の行為に関わって仮定されている「あたりまえさ」として論じた。Bruner (1990) は、次のように述べている。

文化に根ざした心理学がその中核に据えることは、行為と発話 (経験していること) の間を取り結ぶ関係が、生活における日常的行為 (*ordinary conduct of life*) の中に解釈可能であるということである。この心理学は、発話、行為、そして発話と行為とが生起する環境との間には公的に解釈可能な適合性があるという立場をとる。言わば、我々の発話の意味と、我々が与えられた環境の中ですることとの間には同意された規範的關係というもの

がある。そして、このような関係が、我々が他者と共に生活していく、その仕方を統制している。

(Bruner, 1990, p. 19: 強調原文)

我々が日常の中で行う何らかの発話や行為と、それらが位置づく脈絡との間には妥当性、ないし適切性に関わってある種の約束された規範的結びつきというものがある。それを Bruner (1990) に従って「常識」(Bruner, 1990, p. 35) と呼んでよいだろう。この約束された規範的關係としての「常識」が維持されている限りにおいて、我々は、物事が通例性や当たり前さを保持し、円滑に進行しているものとする。要するに、何らかの発話や行為に対応して、それらが位置づいている脈絡が適切妥当なものである時、あるいは反対に、何らかの脈絡に対応して、そこに位置づいている発話や行為が適切妥当なものである時、我々は物事が滞り無く進んでいるものとする。Bruner (1990) は、我々の日常の実践的脈絡において感受されているこうした心理学的な事実を「同意された規範的關係」と呼んだのである。Bruner (1990) は、この点について次のように述べている。

我々が話すことの意味は、発話が行われる行為の脈絡によって強力に規定される ... 同様に我々の行為の意味は、行為者がしようとしたことについて彼らが言うことを参照する事によってのみ解釈可能になる。

(Bruner, 1990, p. 18)

話すことと、することとは、文化を志向する心理学において機能的に不可分の単位を為している。

(Bruner, 1990, p. 19)

Bruner (1990) は人々が日常生活の中で引き受けている同意された規範的關係の原理、すなわち常識の心理学的遂行を「フォークサイコロジー (folk psychology)」(Bruner, 1990, p. 35) と呼んだ。彼はフォークサイコロジーとは何か、という問いに対して次のように答えている。

フォークサイコロジー (folk psychology) とは、人間がいかにか「暮らしていく」のか、われわれ自身の精神と他の人びとの精神はどのようなものなのか、ある状況下での活動が

どのようなものと予測できるのか、それぞれの文化に可能な生き方とは何か、どのように他者と関わっていくのかなどについて、それらを多少とも関係づけ、規範的な形で述べるものである。

(Bruner, 1990, p. 35)

何らかの仕方で、我々の日常の振舞い、特に社会生活における日常の立ち居振る舞いは、**だれもが心理学者であること (everybody be a psychologist)**を必要としている。誰もが、なぜ自分たちがするように他者もまた振る舞うのかについての諸理論を持っている。それをエスノサイコロジー (ethno-psychology) と呼ぼうと、フォークサイコロジー (folk-psychology) と呼ぼうと、他者の精神とその働き方についての信念を持たなければ、我々は途方に暮れてしまう。

(Bruner, 1996, p. 162: 強調原文)

Bruner (1990) の言う「フォークサイコロジー」とは、人々が日常生活の中で抱いている人間の行為や精神の状態についての素朴理論として理解してよいだろう。先述のように Bruner (1990) はそれを、人々の日常の至るところに張り巡らされた「同意された規範的關係」あるいは単に「常識」と呼んでもよいとしている。我々が日常生活の中で引き受けている「あたりまえさ」についての感覚、つまり「常識」は我々にとって、通例そうあるべきもの、という意味において規範性を含んでいる。それ故に Bruner (1990) は、「フォークサイコロジー」は「規範」の問題に関わっていると主張した。彼は、フォークサイコロジーが有する規範性について次のように述べている。

私はここで、フォークサイコロジーの規範的様相について読者の注意を喚起しておきたい。つまり、フォークサイコロジーは、単に、物事がいかに在るかだけでなく、(しばし暗黙裡にではあれ) 物事が如何に在るべきかということを総括するものである。

(Bruner, 1990, pp. 39-40)

フォークサイコロジーは、規範性を帯びている。フォークサイコロジーは、人間の状態に関わって当然と見なし得ることや、当たり前になっていることの双方、またはいずれかに焦点をあてる。

(Bruner, 1990, p. 47)

我々の日常の行為に際してある種の規範として感受される「常識」、Bruner (1990) が「フオークサイコロジー」と呼んだ人々の素朴理論が円滑に機能することによって、我々は日常の中で出会う様々な出来事に、その都度の行き当たりばったりとしてではなく、ある程度の見通しを持って臨むことができる。もしも、フオークサイコロジーが円滑に機能しなければ、Bruner の言うように我々は、途方にくれてしまうだろう。しかしながら実際に、我々の日常が常に常識の範囲内に収まって進行しているかと問われるならば、この問い対してはすぐに「そんなことはない」と応えることができるだろう。我々の日常には、常識や通例性から逸脱し、抱いていた前提や期待から外れ、想定を超えた出来事というものが常に起こり得る。要するに、「同意された規範的關係」として仮定されていた「常識」が脆くも破壊されてしまうような出来事の発生もまた、我々の日常には馴染みのものである。あるいは、ある常識が行為の遂行に際して円滑に機能する範囲は、その常識が円滑に機能し得る状況や場面に応じて相対的である、ということもできるだろう。このように考えるならば、常識は人々の時間的、空間的な移動に伴って常に覆される可能性を持っているということができる。

そして、我々が日常生活の中で引き受けている「同意された規範的關係」としての「常識」が破壊される瞬間に、Bruner (1990) は人間の「意味の行為 (acts of meaning)」の原点を見て取ったのである。人は、自身がそれまでに依拠してきた常識や前提の破壊に対峙する時、屢々、動揺し、狼狽える。だが、我々は想定外の出来事を目の前にして、いつまでも動揺し、狼狽えたままではいるわけではない。自身がそれまでに依拠してきた前提や常識を立て直そうと、破壊によって生じた亀裂の修復を試み、あるいは、新たな常識や前提を採用することによって精神の平静を取り戻そうとする。この時、我々の精神が辿る破壊の帰結として生じた混乱からの修復のダイナミズムは、他者との間に相互に理解可能な意味を作り上げようとする「脈絡希求のダイナミズム」であると言える。どういうことか。前節に述べたように、我々が日常の中で為す様々な発話や行為の「意味」は、それらが位置づく「脈絡」との関係において他者に解釈され、理解される。この言葉の限りにおいて、Bruner (1990) は、「意味」の研究は「脈絡」の研究を必要とすると論じたのであった。物事の意味を決めるのは、脈絡の機能によるという定式に依拠するならば、この定式を敷衍して、脈絡を探す行為が、意味を探す行為であるということができるのではないか。つまり、今、この時点においては、不可解な出来事として我々の前に横たわっている出来事が、いずれ何らかの意味を獲得し、理解可能になるために必

要な可能性の脈絡を探し求める行為が、意味を探し求める行為であると言うことができるのではないか。この意味において、我々は、人間が意味を希求し、生成する行為の過程は、いずれ何らかの意味が落ち着くであろう可能性の脈絡希求の行為である、と結論づけることになる。つまり、Bruner (1990) が「意味の行為 (acts of meaning)」という言葉によって主張しようとしたことは、常識や前提の破壊を契機として目の前に出現した理解し難い出来事について、人が他者との間に相互に理解可能な意味を築き上げようとする可能性の脈絡希求のダイナミズムだったのである。ここでの「希求」という言葉は「今、この時点においては無いものが、いずれ何らかの形で達成されたり、獲得されたりするように強く願い求めること」を指している。したがって、「意味の行為 (acts of meaning)」として理解される脈絡希求の行為は、今、この時点においては無い脈絡を、新たに作り上げようとする行為であるという意味において、可能性への投企という特徴を持った行為であると言うことができる。「意味の行為」についてのこうした考えの一つの論拠となる Bruner の言葉を引用しておこう。

我々の発話の意味と、我々が与えられた環境の中ですることとの間には同意された規範的關係というものがある。そして、このような関係が、我々が他者と共に生活していく、その仕方を統制している。ここには、これらの規範的關係が破壊された時に、元どおりに戻すための交渉の手段もある。このことが、解釈と意味とを文化心理学の、あるいはあらゆる心理学、精神科学の中心的問題たらしめている。

(Bruner, 1990, p. 19)

この引用部で Bruner (1990) は、「同意された規範的關係」としての常識が破壊された時に、我々の精神が平静を取り戻そうと運動するその修復のプロセスと手段こそが、解釈と意味という概念を、あらゆる心理学、精神科学の中心的問題たらしめていると主張している。Bruner (1990) が「あらゆる心理学」とまで明言したこの主張の中に、我々は Bruner 心理学の一つの思想を見出すことができる。本論文では、Bruner が注目した人間の精神の働き、すなわち、常識の破壊に対峙した精神が平静を取り戻そうとする修復のダイナミズムの過程を、人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム (dynamism of confusion and restoration)」と呼ぶ。そして、この精神の「混乱と修復のダイナミズム」の過程として理解することのできる行為が、Bruner (1990) が「意味の行為 (acts of meaning)」と呼んだ人間の行為であったと考える。ここで「意味の行為」とは、常識や前提の破壊として定義される混乱の発生を契機として、出

現した不可解な出来事について、人が他者との間に相互に理解可能な意味を築き上げようとする行為を指している。さらに我々は「意味の行為」の重要な特徴として、この行為が可能性への投企という特質を有する脈絡希求の行為であるということを主張した。脈絡希求の行為というのは、今、この時点においては、理解の行き場を持たない出来事が、いずれ何らかの意味を獲得することによって理解可能になるであろう可能性の脈絡を探し求める行為のことを指している。

「意味の行為」が、可能性への投企という特質を有する行為である限りにおいて、「意味」という概念は時間的に言えば「意味の行為」の先に、未決定性と不確実性に基礎付けられたものとして展望されるに留まる概念である。従って、「意味の行為 (acts of meaning)」の研究と例えば、それは人々の生きた人生や経験の物語という所産を対象とした結果としての「行為の意味 (meaning of acts)」を問う研究ではなく、人間が意味を希求し、生成する行為過程が如何なるものであるか、という過程を問う研究になる。そして、Bruner (1990) の考えに従えば、「意味の行為」の過程は、個人的な実践として為されものではない。Bruner が「交渉」という言葉を好んで用いているように「意味の行為」の過程は関係的な実践として理解されることになる。

我々の行為が企図していた意味が不明瞭になった場合、自身の逸脱を「弁解する」ための標準化された手段さえある。それは、意味をおおやけのものにし、我々が企図していたことを再び正当化するための標準的方法である。我々の談話が如何に曖昧で多義性に満ちたものであっても、それでも尚、我々は意味をおおやけの領域に持ち込み、おおやけの場で交渉することができる。言わば、我々は公的な意味と、解釈と交渉に係る共有された方法に依拠することによって公的に生活している。

(Bruner, 1990, p. 13)

Bruner (1990) の *Acts of meaning* の理論的読解を通して明らかになることは、彼が研究しようとしていたのは、人生や経験といった人々の生きた結果としての「行為の意味」ではなく、人間が意味を希求し、生成する行為過程は如何なるものであるか、という「意味の行為」の過程であった、ということである。つまり、彼の新しい心理学が目指していたのは「結果」の研究ではなく、「過程」の研究であった。ここにナラティブ心理学の展開における Bruner 受容の転倒が起こっていることは既に指摘した通りである。

我々の読解では、Bruner (1990) の主唱した「意味の行為」とは、我々の日常に張り巡らされた「同意された規範的關係」としての「常識」の破壊に対峙した精神が、平静を取り戻そうと運動する「混乱と修復のダイナミズム」として描き出すことの出来る過程である。この過程は、今、この時点においては理解し難い出来事が、いずれ何らかの意味を獲得することによって理解可能になるような可能性の脈絡希求のダイナミズムとして説明することができる。言わば、可能性への投企という特徴を有する「意味の行為」の過程において、意味という概念はこの行為の先に、未決定性、不確実性に基礎づいたものとして展望されるに留まる。Bruner (1990) の「意味の行為」論のこのような読解のもとに我々が研究すべきは、物語化の所産として具体化された人々の生きた結果としての「行為の意味」ではない。そうではなく、人間が意味を希求し、生成する過程として理解される「意味の行為」の過程であろう。本節の最後に Bruner (1990) が「意味の行為」の議論に関わって述べた心理学に対する一つの展望を引用しておこう。

私は、心理学はその説明の体系において「意味を用いなくて」おこうとする努力をやめるべきであると主張してきた。心理学の主題である人間と文化こそ、共有された意味と価値によって統制されている。人々は、自らの生を、共有された意味と価値の希求と達成にあて、それらに生をかけるのである。

(Bruner, 1990, p. 20)

この一文には、Bruner が「意味の行為」という言葉によって表現しようとした人間が意味を希求し、生成する行為過程の研究が、人間科学としての心理学に対する一つの展望であることが示されていると言えよう。

2. 7. Bruner の「物語 (narrative)」、それは何を捉える方法なのか？

ナラティブ心理学の今日的展開において、Bruner の仕事の一つの思想的基盤に位置づけられてきたことは本章の冒頭において論じた通りである。彼は 1980 年代中頃に発表された「思考の物語様式」(Bruner, 1986) というアイデアを皮切りに、心理学研究に物語 (narrative) という概念を取り込むことによって拓かれる研究可能性について一貫した主張を続けてきた。1990 年に発表された *Acts of meaning* (Bruner, 1990) は、人々の生きた人生や経験の意味を

問う心理学とも概説し得るナラティブ心理学の基本的な考え方に沿うものとして受容されてきた。つまり、Bruner (1990) の主張した「意味の行為」とは、人々の生きた人生や経験を「意味づける行為」としての物語行為のことであり、我々は物語を介して人々の生きた「行為の意味」を研究することができる、という理解のされ方をしてきた。本論文では、学界におけるこのような受容を Bruner の「意味の行為」論の「行為の意味」論としての受容の転倒と呼んできた。

この転倒に対し、前節で提示した結論に依拠してここで述べておくべきは、Bruner にとって「物語」という概念は、諸個人の生きた人生や経験の意味といった、人々の生きた結果としての「行為の意味」を具体化するための手段ではない、ということである。つまり、Bruner にとって物語という概念は、人々の生きた「行為の意味」という結果を研究するための手段ではなかった。では、Bruner にとって物語とは、一体何を捉えるための手段だったのか。そのことを明らかにすることが本節の目的である。

Bruner (1990) は、ナラティブ心理学の展開が「彼の人の生きた人生の意味は何か」、「彼の人の経過した経験の意味は何か」といった「行為の意味」の研究の背後に不問に処してきた「人は何故語るのか」、「物語によって何を為そうとするのか」といった物語の生成原理と機能の問題として物語概念の検討を行っていた。「行為の意味」の研究が物語の内容に専ら焦点を当てると考えるならば、Bruner の「意味の行為」の研究は物語の生成原理と機能に焦点を当てていると考えることができる。この点において Bruner の「意味の行為」論の「意味の行為」論としての受容の転倒は、既に大きな読み違いをしていることになる。というのも、内容を問う議論と、機能を問う議論とではその研究の方向性が全く異なるからである。

では、Bruner の考えた物語の生成原理とは一体何であったか。Bruner (1990) は、この問いに対して次のように応答している。我々が自分の身の回りで進行している物事を、いつも通りのこと、当たり前のこと、と見なしている時、我々は当の物事がそのように進行している理由を敢えて問い質したりはしない。このことは自分自身や他者の振舞いについても同様に当てはまる。つまり、自分自身や他者の振舞いが、いつも通りのこと、当たり前のことと見なされている時、我々は当の振舞いがそのようである理由を敢えて問い質したりはしない。振舞いは単に当然のことが為されていると見なされるにすぎず、それについての込み入った説明は不要とみなされる。要するに我々は、いつも通りであり、過去の経験に照らして妥当され、敢えて問い質す必要もないような自明な事柄については逐一の説明は不要と考えるのが常である。Bruner (1990) は、この点について次のように述べている。

既に自明のことと考えられていることにどうしても説明を加えなければならないとしたら、話し手は、数量的な形容（“皆がそうしているから”）や義務的な叙法（“それはあなたのすべきことだから”）を伴って応答することになるだろう。これらの説明の焦点は、問い質されている行為の位置取りが脈絡に妥当していることを示すことに向けられるだろう。

(Bruner, 1990, p. 49)

これに対し、常識外れや、想定外の出来事が発生し、それに対して「一体これは何事か」と問い質されるような場面においては、我々は出来事の発端からその経緯や、それが起こった理由などについての何らかの説明を始めるのが通例であろう。上の引用に続けて Bruner (1990) は次のように述べている。

これとは対照的に、あなたが、通例から外れた例外に出会い、誰かに何が起こったのかと尋ねたならば、その人は、決まって理由（あるいは、志向的状态についてのなんらかの説明）を含む物語を語るだろう。もっと言えば、その物語は、殆ど例外なく、出会った例外事象が何らかの形で理解可能で、「意味」を持ち得るような可能世界についての詳述を伴うものとなるだろう。

(Bruner, 1990, p. 49)

そして、こうした議論の末尾に Bruner (1990) は物語の機能を次のように定式化した。

物語は、例外的な振舞いに、主人公の志向的状态 (intentional state) ...と何らかの文化の規範的要因 (canonical element) ...との双方を含ませる仕方で意味を与えるように構成される。物語の機能は、規範的な文化的通例性からの逸脱を緩和し、少なくとも理解可能にするような志向的状态を見出すことにある。このことが、物語に迫真性をもたらすのである。

(Bruner, 1990, pp. 49-50: 強調原文)

以上に重ねて引用した部分の読解を通して明らかになることは次のことである。Bruner

(1990) はここで、物語の生成原理とその機能についての検討を行っている。順番に見ていこう。まず、物語の生成原理について Bruner が次のように考えていることが分かる。つまり、物語は我々が日常生活の中で引き受けている「同意された規範的關係」としての「常識」が破壊された時に、精神がその破壊を契機として、破壊によって生じた亀裂を修復し、精神の平静を取り戻そうとする時に生成される。次いで、物語の機能については Bruner が次のように考えていることが分かる。物語は、想定外の出来事の発生によって通例性や常識の破壊に対峙した精神が、今、この時点においては未だ理解し難い出来事に対し、何かしらの意味を持たせ、いずれ理解可能なものにしようとする精神の志向性に基礎づけられた可能性の脈絡希求の行為である。以上の二つの論点をまとめて述べるならば、要するに Bruner は物語という概念を、人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」として描き出すことのできる「意味の行為」の過程、もっと言えば、いずれ何らかの意味が落ち着くであろう可能性の脈絡希求の行為を媒介する行為として考えていることが分かる。

さて、ここに Bruner によって提示された物語の機能に関わるもう一つの論点を加えておこう。それは、諸個人に固有の精神の志向的状态と、「同意された規範的關係」として感受される文化的通例性との結びつきについての議論である。Bruner (1990) は「物語は、文化という規範的世界と、信念、欲求、希望といった、より個人特有の世界との間を媒介する」(Bruner, 1990, p. 52) と論じていた。では、「物語」によって両者の関係はどのように理解可能になるのであろうか。ここに我々は、規範性に付する文化-歴史的な水準と、精神の志向的状态に付する心理学的な水準との認識論上の区別の問題についての一つの定見を提示しておく必要があるだろう。

Bruner (1990) の「意味の行為」の議論の理論的読解を通して明らかになってきたことは次のことである。我々の日常の実践的脈絡の中では通例、文化-歴史的な規範性と、諸個人に固有の精神の志向的状态とは統合的な過程として現れてくるために両者を区別して認識することは難しい。だからといって、二つの異なる過程を安易な一元論の内に溶かし込んで理解しようとしたら、一方の過程を他方の過程に還元して説明することを試みたりすることは、かえって事の本質から離れていくことになる。では、Bruner (1990) はこの難問に対してどのように考えたのであろうか。彼は次のように考えたのではなかろうか。特定の文化-歴史的脈絡の中で「同意された規範的關係」として感受されている「常識」の破壊を契機として、諸個人に固有の精神の志向的状态が、常識の枠外に押し出される。常識の枠外に押し出された精神は、逸脱事象を何とか理解可能なものにしようとする「意味の行為」を開始する。この過程において、

文化-歴史的な規範性の領域と、諸個人に固有の精神の志向的状態の領域とは、二つの過程の間で引き合ったり、反発し合ったりという緊張関係を内包しながら各々別個の過程として進行する。要するに、常識や前提の破壊という意味での「混乱」の発生に観察の焦点を合わせることによって、Bruner は人々が引き受けていた文化-歴史的な規範が如何なるものであったか、という問いに対する応答と同時に、規範性から飛び出した精神の志向的状態がどのように平静を取り戻していくのか、といった精神の変化のプロセス、本論で言う人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」の過程を理解しようとしたのである。そして Bruner の物語概念にはこのような心理学研究の構想を支えるものとしての役割、すなわち、人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」として描き出される「意味の行為」を媒介する行為としての位置づけが与えられていたのである。

[混乱 (trouble)] が物語の状況に組み込まれることによって——つまり、物語が、文化的慣習と、文化的慣習からの逸脱との双方を含み込むことによって、ある個人の志向的状态に関わる問題を解明することができる。このことが、物語に道徳的立場のみならず、認識論的立場をも与えることになる。

(Bruner, 1990, p. 51)

混乱の発生を契機として、それまでに維持されてきた文化的慣習の経路と、文化的慣習からの逸脱として描かれる経路の二つの経路が分岐する。二つの経路は、両者の間に緊張関係を含みながら展開していく。この緊張関係の中を進行する精神の志向的状態のダイナミズムを理解しようとする試みが Bruner の主張した「意味の行為」の研究なのである。精神の「混乱と修復のダイナミズム」として描き出される「意味の行為」の過程を捉えるために何らかの混乱の発生に注目するという Bruner の方法論は、彼の近年の論考においても同じように提示されている。例えば、2002年に発表された *Making stories* (Bruner, 2002) の中では、物語の原理について彼は次のように述べている。

生とは「いつもの人々が、いつものことを、いつもの場所で、いつもの理由からしている」ことである。この当たり前さの中に、破綻が生じる時に、物語の豊かなダイナミクスの引き金がひかれる。つまり、その破綻にどのように対処し、その破綻をどのように引き受け、事態をどのように馴染みの平常へと取り戻すのか、といったダイナミクスである。

(Bruner, 2002, p. 89)

物語は、人間が驚きや奇妙さに対処するための手段であり、そうした人間の状態についての不十分な理解に対処するための手段である。物語は予期せぬことに対する驚きや奇異感をより小なものにする。物語は予期せぬことに、よくあることとしての輝きを与え、馴染みのことに変える。

(Bruner, 2002, p. 90)

このようにしてみると、人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」として描き出される「意味の行為」の過程を捉えようとする Bruner の研究志向には一貫したものがあるように思われる。我々はこの志向を Bruner 心理学の思想と深く結びついた方法論であると仮定したい。そして、「意味の行為」の方法論と密接に結びついた方法概念として提示された Bruner の物語概念は、人々の生きた「行為の意味」という結果を研究するための手段ではなく、人間が意味を希求し、生成する過程として理解される「意味の行為」を媒介する行為を指示するものであった。この読解は、Bruner の主張した物語を人々の生きた「行為の意味」を研究するための方法論的前提として人生や経験を「意味づける行為」として受容してきたナラティブ心理学の今日的展開に対して一つの再考を迫るものである。

第3章 通奏する「意味の行為」の方法論

Bruner (1990) の「意味の行為」を巡る議論が彼の思想と結びついたものであるという前章の仮説を検証するためには、人間が意味を希求し、生成する行為として理解される「意味の行為」の過程を研究するための Bruner の方法論が *Acts of meaning* (Bruner, 1990) の中でのみ提示された一過性のものではないことを明らかにする必要がある。この課題に取り組むのが第3章である。本章では Bruner の研究史を辿り、(1) Bruner の研究生生活の最初期にあたる 1940 年代後半にハーヴァードを拠点に行われた一連の知覚実験研究、(2) 英国オックスフォードに拠点を移して 1970 年代に行われた乳幼児の言語獲得研究、(3) 1980 年以降、ニューヨーク大学を拠点に今日まで続けられているナラティブ心理学の研究、の 3 つに焦点を当てる。その結果、上記のいずれの研究においても Bruner 心理学の観察の焦点は人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」として描き出すことのできる「意味の行為」の過程に向けられてきた、ということである。

3. 1. 「意味の行為」を問う方法論

我々は前章において Bruner (1990) の主唱した「意味の行為」は、我々の日常に張り巡らされた「同意された規範的關係」としての「常識」の破壊に対峙した精神が平静を取り戻そうと運動する「混乱と修復のダイナミズム」の過程を辿ると結論づけた。この過程は、今、この時点においては理解し難い出来事が、いずれ何らかの意味を獲得することによって理解可能になるような可能性の脈絡希求のダイナミズムとして定義される。そして Bruner の主張した物語概念は上の意味において人間が意味を希求し、生成する行為過程としての「意味の行為」を媒介する行為を指示するものであった。最後に我々は人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」として描き出される「意味の行為」の過程を捉えようとする Bruner の志向は、彼の心理学の思想的側面と深く結びついたものであるという仮説を提示した。だが、Bruner の「意味の行為」の方法論が彼の心理学の思想的側面と深く結びついたものであると明言する限りにお

いて、我々はこの方法論を Bruner の研究史において束の間に採用された一過性のものとして論じるわけにはいかなくなる。従って、我々は彼の研究史を辿ってみる必要がある。そして、「意味の行為」の方法論が束の間に採用された一過性のものではなく、Bruner の研究史を通して繰り返し提示されてきたものであり、この意味において彼の思想と深く結びついたものであるということを明らかにしなければならない。本章の目的は、以上の論点を明らかにすることにある。

3. 2. 方法論のない心理学者、Bruner

Bruner という心理学者は、屢々、その思考に一貫性を持たない学者として言及されてきた。言葉を補って言えば Bruner という心理学者についての言及の一つのひな形は、Bruner は一貫した思考や理論の体系を持たず、時代の趨勢をいち早く捉え、当の趨勢に適う諸学の知見を幅広く取り入れながら、それらを上手く組み合わせて奔放に新たな主題を切り拓いていくパイオニアといったようなものである。Bruner に対するこのような評価は、例えば次のような言及の中に表れている。

研究者として、Bruner は「ムラのある選手」である。彼は主題を切り拓き、上澄みをすくいとって、後は他の人に引き継がせる。細部には短気をおこし、そのプロジェクトの先が見えると退屈してしまう。こうした仕事の癖は、方向が示されれば前進させようと待ち構えている人びとがたくさんいる心理学のような領域、あるいはことによるとどの領域でもそうなのだが、その必要にうまく合うのである。

(Levin, 1984, pp. 720-721)

あるいはまた次のような言及にも表れている。

科学研究の大半は問題の根気強い追求を必要としていて、Bruner は、そうした基礎研究を他人に委ねるのを概して好んできた。その結果、確かに Bruner の感性、流儀、科学的信条は存在するが ... Bruner の法則、証明、教科書的中心項目というものはほとんどない。

(Gardner, 1983, p. xx)

これらの言及に表れているように Bruner の仕事は概して「理論的徹底性や体系の厳密な一貫性にはさほどこだわらない」（岡本・池上・岡村, 2004, p. 298）もの、あるいは「特定化した理論的純潔にも、また他極の局所化した実験的無垢にも組しな」（岡本・池上・岡村, 2004, p. 299）いものとして位置づけられてきた。実際、このような評価に応えるように Bruner は自らの仕事の特徴を次のように振り返っている。「私は、『壮大な』あるいはすべてを包括するような思考体系を作ることには、全くもって興味がなかった」（Bruner, 1983b, p. 291）。それ故に、我々は Bruner の仕事に対して屢々「彼の理論はあいまいだとか、一貫した体系性を欠くとの批判」（岡本・池上・岡村, 2004, p. 298）を向けてきた。ここに Bruner という心理学者についての一つのイメージが立ち上がってくる。それは、折衷主義の立場に立つ心理学者としての Bruner 像である。Bruner に対するこのような評価は、次のような言及の中に表れている。

Bruner は、一つの考え方がそれ自体として絶対的、排他的に存在することはありえず、その考え方とならんで他の可能な考え方の選択肢を考え、それらを合わせた中でその課題にとってもっとも適切と思われる選択肢を、他者との意見と折衝しながら選び出していく過程こそが重要であるとする。そこに Bruner 流の弁証法を築こうとしているとも考えられる。

(岡本・池上・岡村, 2004, pp. 300-301)

Bruner の著作は、異なるアプローチ間の統合へ向けた探求として特徴づけられる。彼は、文化、認知、子どもについての心理学的モデル、あるいはナラティブといった領域の中に存する対照をなす理論やモデルの間の潜在的な集合点を探求していくことを好んでいる。このような相互補完がいつも上手くいくわけではないが、そうでなくても、我々は彼の比較と対照から学ぶことができる。

(Monteagudo, 2011, p. 299)

一貫した思考の体系や思想を持たない奔放な折衷主義者としての Bruner 像は、いずれも彼の仕事の仕方に対する印象を的確に表現しているようにも思われる。だがしかし、思想なき折衷主義者という Bruner に対するイメージは、あまりにも表層的な評価であると言えよう。そもそも、「思想なき折衷主義者」と呼ばれるような心理学者が、如何にして世紀を跨いで心理

学の発展を常にリードしてこられたのか。このことを考える時、次のような疑念を検討する余地が出てくる。つまり、我々は単に、Bruner の「思想」を知らないだけなのではないか、という疑念である。この疑念を出発点として我々が本章を通じて明らかにしようとすることは、「思想なき折衷主義者」というような表層的な印象によって評価されるような Bruner 像ではない。そうではなく、一人の心理学者としての Bruner の研究史に一貫して示されている彼の人間の精神を観る見方であり、彼の心理学の問いの立て方である。これらを本論では Bruner の思想と結びついた心理学の方法論と呼ぶ。さて、思想と結びついた方法論の解明という目的に先立って Bruner の研究史を概観しておくことが後に続く論究の有効なガイドラインになるはずである。従って次節ではまず Bruner の研究史についてその概要を示す。

3. 3. 心理学者 Jerome Bruner の研究略史

Jerome Bruner は、1915 年 10 月 1 日、ニューヨーク郊外の富裕なユダヤ教徒の家庭に生まれた。アメリカ心理学界においては行動主義が主流を為していた 1933 年に米国デューク大学に入学し、学士課程を 3 年で終え、1 年早く大学院での研究生活を始めている。デューク大学では、Adams や Zenner といった論客の講義を通してゲシュタルト心理学を学び、その考え方に影響を受けた。1938 年にデューク大学の修士課程を終え、同年の初秋、ハーヴァード大学の博士課程に進学する。1939 年には第二次世界大戦が勃発し、Bruner が学位論文の研究に取り組み始めた 1940 年代初旬は既に大戦の最中であった。このような政況下にあつて彼の学位論文は交戦国のプロパガンダ放送の言葉に現れる軍事情勢と精神状態の質的調査を主題とするものであった。1941 年 6 月、彼は学位論文を仕上げ、その直後には連邦通信委員会直属の外国放送監視施設に勤務し、戦時中は情報局などの仕事に携わっている。そして終戦の翌年にあたる 1946 年から彼は母校ハーヴァードで教鞭をとることになる。

この 1946 年以降を彼の心理学者としての本格的な研究生活の始まりと見ることができる。その後のよく知られた仕事として、1940 年代後半に一連の共同研究として着手された知覚研究（ニュールック運動）、1950 年代中頃にかけて行なわれ、後に認知革命の狼煙と目されることになる *A study of thinking* (Bruner, Goodnow, & Austin, 1956)、1959 年には、後に教育の現代化運動の嚆矢と呼ばれることになるウッズホール会議の成果報告書 *The process of education* (Bruner, 1960) をまとめ、1960 年代には、Piaget 課題を用いた子どもの認知発達に関わる比較文化研究をジュネーヴ、ケンブリッジ、モスクワ、セネガル、メキシコに渡って

展開し、児童期の認知発達やその機能における文化の役割を検討した (Bruner, Olver & Greenfield, 1966)。これらの諸研究は 1960 年に G. A. Miller と共に設立したハーヴァード認知研究センターがその活動拠点となっている。1972 年、彼はハーヴァードを離れ、乳幼児の言語発達とその使用についてのより機能主義的な研究を求めて英国オックスフォードに移籍する。オックスフォードでおよそ 8 年に渡って行なわれた乳幼児の言語獲得研究は、家庭の中で日常的に営まれている母子間の前言語的、言語的な相互行為の徹底した観察研究であった。この時期の研究成果の一つとして報告された母子間の「共同注視 (joint attention)」(Scaife & Bruner, 1975) の発見は、その後の乳幼児発達研究、心の理論研究に大きな影響を与えた (Bruner, 1983a; Scaife & Bruner, 1975)。

そして今日、我々がナラティブ心理学や文化心理学の嚆矢として Bruner の仕事を評価する際に議論の指標となるのは、彼が乳幼児言語獲得研究に区切りをつけてオックスフォード大学を退官した 1980 年以降の仕事にあたる。彼の 1980 年以降の主要な仕事として英国での乳幼児言語獲得研究における成果をまとめた論文集 *Child's talk* (Bruner, 1983a)、自らの研究史を振り返って綴られた自伝 *In search of mind* (Bruner, 1983b)、心理学に文学理論や解釈学の視座を取り込んで心理学の新たな方向性を展望した論文集 *Actual minds, possible worlds* (Bruner, 1986)、そして、彼が文化心理学という呼称を伴って自らの心理学の新たな構想を論じた単著 *Acts of meaning* (Bruner, 1990) が位置づく。その後、文化心理学の視座から教育に対する展望を検討した論文集 *The culture of education* (Bruner, 1996) が出されている。

2000 年以降の彼の仕事として、人間の精神生活におけるナラティブの役割とその特質について論じた *Making stories* (Bruner, 2002)、文化の有する堅固な規範体系とされる法とナラティブとの連関を議論した共著 *Minding the law* (Amsterdam & Bruner, 2000) をあげることができる。また、2006 年には Bruner の研究史を教育と心理学という視点から網羅した論文集 *In search of pedagogy Vol. I - II: The selected works of Jerome S. Bruner* (Bruner, 2006) が編纂されており、彼の研究史に対する学際的な称賛を伺い知ることができる。その後も、今日に至るまでナラティブ、精神、文化という主題と、それらの連関を問う論考を発表し続けている (Bruner, 2002, 2006, 2008, 2010)。ここに概略した限りでも今秋 10 月 1 日に 100 歳を迎えた彼の仕事は、一世紀に渡る心理学の趨勢の中で、その時々時代の精神に呼応しながら漸進し、多くの実りある学問的遺産を遺してきたと言える。さて、およそ一世紀にわたる Bruner のこうした研究史の中に、果たして彼の思想と結びついた方法論と呼び得るものがあるのだろうか。次節からは我々の考えを探っていくことにしよう。

3. 4. 反転実験

ナラティブ心理学の展開における重要な道標の一つに数えられる論文集 *Actual minds, Possible worlds* (Bruner, 1986) の第3章において、Bruner (1986) は自らが行ったある知覚実験研究について言及している。

Leo Postman と私は、もう何年も前に、ある興味深い実証実験を行った。この実験は、瞬間露出機によって提示されるトランプの認知に関わるものであった。被験者は、我々が1000分の1秒の間だけ提示するカードを見る。この提示時間は段々と延長されていく。提示されるトランプには、通常のトランプと、色と絵柄が反転したもの——例えば、赤いクラブの6といったものが混ざっている。予想される通り、反転したカードの認知には時間がかかる。だが、より興味深い事実は、被験者たちが、反転カードを自分たちに馴染みの規範的なパターンの中に「標準化」しようと非常な努力を惜しまなかったということである。私は、我々の提示した赤いクラブの6が、本当はただのクラブの6で、瞬間露出機の中の照明が赤みがかっているのだと言い張った被験者の報告を思い出す。

(Bruner, 1986, p. 47)

この実験は、*On the perception of incongruity: a paradigm* (Bruner & Postman, 1949) と題された論文で報告されたものである。第二次世界大戦の終戦の直後にあたる1946年にBrunerは自身の出身校であるハーヴァードに教職を得た。心理学者としての本格的な学界活動の出発点となった仕事が、後にニュールック心理学 (newlook psychology) と呼ばれることになる一連の知覚実験研究であった (Bruner, 1983b)。彼は人間の知覚は、外界からの物理刺激と、精神機構の中に予め備えられた感覚データとの単純な照合として説明しきれものではないと考えた。そして、人間の知覚は、行為主体が外界に対して抱いている価値、期待、要求、規範といった精神の志向性と分ち難く結びついていると主張した。言葉を換えて言えばBrunerの行った一連の知覚研究は「世界についてどのように考えるかによって世界が違って見える」(Bruner, 1983b, p. 65: 強調原文) ということを実験的に明らかにしようとして計画されたものであった。外的な物理刺激の一方向的な入力として説明されてきた知覚の問題に、精神の志向性という概念を取り込むというその試みは、やがて1956年を一つの基点とするに認知革命に結びついていくことになった。Bruner (1983b) の言葉を借りて言えば、ニュールック

心理学は「受動的な受信者や反応者から、経験の能動的な選択者や構成者へと人間についてのイメージを変換する、より広くより深い文化的運動の一部であった」(Bruner, 1983b, p. 103)。そして、1949年に発表された彼らの知覚実験の中に、我々は Bruner の「意味の行為」の方法論を見て取ることができるのである。以下、そのことを明らかにしていこう。彼らはこの実験を「脈絡と規範に対する知覚の敏感性の研究に向けた第一歩として考えていた」(Bruner, 1983b, p. 85)。Postman とのこの共同研究を Bruner は「我々が一緒に取り組んだ 10 あまりの、他のどの研究にも増して我々に驚きと楽しみをもたらすものであった」(Bruner, 1983b, p. 85) と振り返っている。

では、Bruner 心理学の一つの出発点ともなった同実験について、ここでは詳しくみていこう。この実験の被験者は、ハーヴァードとラドクリフに通う 28 人の学生であった。実験は、5 枚の種類異なるトランプを瞬間露出機 (tachistoscope⁵) で 1 枚ずつ順番に被験者に提示していく、というものである。被験者は、提示されたトランプの絵柄と数字が何であったか、あるいは何に見えたか、を口頭で答えることを求められる。ただし、5 枚のトランプの中には我々が日常的に馴染んでいるトランプとは種類異なるカードが混ざっている。トランプの絵柄と色とが反転しているのである。たとえば、「赤色のクラブの 6」のように、である。この反転カードが被験者に提示される 5 枚のカードの中に 1 枚から 4 枚までのヴァリエーションで混ぜてある。1 枚 1 枚のカードは、正確に認知されるまで連続して提示され、3 度毎に提示時間が延長されていく。最長の提示時間に至っても正確な認知が得られなければ新しいカードが提示される。ここで正確な認知とは、2 回連続でカードを正確に言い当てられた場合を指している (Bruner & Postman, 1949)。実験に使用されたカードは次の通りである。

普通のカード (正規の色で印刷されている) : ハートの 5、ハートの A、スペードの 5、スペードの 7

トリックカード (反転した色で印刷されている) : ハートの 3 (黒)、ハートの 4 (黒)、スペードの 2 (赤)、スペードの 6 (赤)、ダイヤモンドの A (黒)、クラブの 6 (赤)

(Bruner & Postman, 1949, p. 209)

⁵ タキストスコープ (tachistoscope) は、知覚刺激を 1000 分の 1 秒単位で提示することのできる実験装置である。刺激の提示時間を調整することができ、文字・図形などの見え方、認知時間などを測定するために使用される。

Bruner & Postman (1949) は、反転トランプという方法によって被験者の知覚的な前提を破壊し、人間の知覚が、前提の破壊にどのように対処していくのかを観察した (Bruner, 1983b, chap. 6)。ここで反転トランプの正確な認知が、正規のトランプの正確な認知に比べて時間を要したことは驚くにあたらない (Bruner & Postman, 1949; Bruner, 1983b, chap. 6, 1986a, chap. 3)。つまり、被験者たちはそれまでに自分たちが抱いてきた正規のトランプについての知覚的な前提を固持しようとする。それ故に、反転トランプという前提の破壊に戸惑い、その結果として正確な認知に時間がかかるのである。この時、被験者たちは、前提の破壊に対処し、そこに生じている破綻をやりすごす方略を編み出す。被験者たちが編み出した諸種の方略を Bruner & Postman (1949) は 4 つに分類した。以下、順番に確認していく。

支配的応答 (dominance reaction) 「知覚の拒否 (perceptual denial)」 (Bruner & Postman, 1949, p. 213) とも呼ばれる方略である。被験者は例えば「赤のスペードの 6」という反転トランプの提示に対し、「スペードの 6」や「ハートの 6」と答える。つまり、「絵柄の形がスペードである」とか、「赤色のトランプはハートかダイヤである」といったように正規のトランプとして自分たちに馴染みのトランプの特徴に一致する知覚刺激を優位に位置づけ、言わば前解釈的 (pre-interpretive) に馴染みの形式に当てはめることによって、反転トランプの存在を知覚的に拒否する。もしも、絵柄の方が優位に知覚されたならば、色は正規のトランプの絵柄に一致するように知覚的に調整される。反対に、色の方が優位に知覚されたならば、絵柄は正規のトランプの色に一致するように知覚的に調整されることになる。つまり、スペードの形状を捉えた被験者は、そのトランプは「黒の」スペードであると知覚しようとし、赤という色を捉えた被験者は、そのカードは「ハート」か「ダイヤ」のトランプであると知覚しようとするのである。要するに、自分たちに馴染みのトランプの特徴に一致する知覚刺激を優位に位置づけることによって反転トランプの存在を知覚的に拒否する方略が、ここで言われる「知覚の拒否」である。

折衷的応答 (compromise reaction) 「知覚の中間領域をとる (perceptual middle ground)」 (Bruner & Postman, 1949, p. 215) とも呼ばれる方略である。この応答では、被験者は例えば「黒のハートの 4」という反転トランプの提示に対し、「灰色っぽいスペードの 4」のように応える。あるいは、「赤のクラブの 6」の提示に対して「赤い照明に照らされたクラブの 6」や「赤い縁取りのあるクラブの 6」と応えたりする。ここでは被験者は、正規のトランプという馴染みの前提に定位した知覚的な期待を維持しつつも、馴染みの前提に新奇な事象が上手く折り合いを得るような理由を作り上げる。この方略においても被験者の知覚は、正規のトランプ

という規範的な前提に収束していくような過程を辿る。

破綻 (disruption) この応答は、トランプのどこかが違っている、ということが知覚されていながらも、被験者が自らの仮定している規範的な前提や期待を、反転トランプという新奇な刺激に合わせて上手く調節することができずに、混乱のうちに知覚の達成に失敗する場合を指している。ある被験者は課題に嫌気がさし「一体、ここで何か起こっているのかが分からない。これがトランプなのかどうかさえ怪しくなってきた」(Bruner & Postman, 1949, p. 214) と混乱を露にしている。要するに被験者は、何かが違っていることには気が付くが、自らの仮定している規範的な前提や期待に変更を加えることができずに、混乱の内に課題の達成を諦めてしまうのである。

変則の認知 (recognition of incongruity) 被験者が「支配的応答」や「折衷的応答」を繰り返していると、唐突に、あるいは徐々に、提示されているトランプの何かが違っていることに気付きはじめる。そして、たとえば突然、「ああ、なるほど。なんと言ったらいいですかね？それは赤のスペードの6ですね。」(Bruner & Postman, 1949, p. 222) といったように反転トランプを正確に言い当てるようになる。いわば、新しい知覚的前提を立ち上げ、課題を難なくこなすようになる。

それまでに自らが抱いてきた規範的な前提が破壊される時、被験者たちは往々にして、自らの抱いてきた前提に反する事象の知覚に抵抗を示す。そして、どうにかして、それまでに自分が抱いてきた前提に折り合いを得るような説明を捏ち上げようとする。本論の主題に沿って言えば、反転トランプという新奇な事象の意味が落ち着し得るような可能性の脈絡希求の行為が展開する。だが、いよいよそれが適わないことに気付くと、ある人は混乱の内に愚痴をこぼしながら課題の達成を諦めてしまう。また、ある人は全く新しい前提を心得て、難なく課題を解決するようになる。人間の知覚は、諸個人の精神の志向的状态と結びついた前提や期待が作り上げる仮説的モデルと密接に結びついている。我々は、こうした仮説的モデルを参照枠組みとして利用することによって外界の様々な事物を知覚している。これが Bruner & Postman (1949) が提出した結論であった。Bruner (1986) は *Actual minds, possible worlds* (Bruner, 1986) の中で、この知覚実験を振り返って次のように述べている。

驚き (surprise) は、精神の研究者にとって極めて有効な現象の1つである。というのも、驚きによって、我々は人びとが、何を当たり前のことと見なしているのかを明らかにすることが出来るからである。驚きは、前提について知るための1つの手段を提供する。つ

まり、驚きは前提の破壊に対する 1 つの応答なのである。もちろん、前提とは、当たり前と見なされていることであり、出来事について期待されていることである。

(Bruner, 1986, p. 46)

驚きとは、前提の破壊に対する 1 つの応答である。前提とは、当たり前と見なされていることである。当たり前さの破壊によって生じる精神の動揺を Bruner (1986) はここで驚きと呼んでいる。この驚きに焦点を当てることによって、我々は、ある人が何を当たり前のこと、規範的なことと見なしているのかを理解することができる。というのも、驚きは前提の破壊によって引き起こされる精神の応答だからである。この時、時間的な流れにおいては驚きの手前にある事柄が、その人にとって当たり前と見なされていた事柄ということになる。つまり、先の実験で言えば、反転ランプが提示されている場合も含めて、被験者が正規のランプを知覚している状態（支配的応答）がこれに当たる。これに対し、何かが変わり、いつもと違っているという知覚（反転ランプの知覚）が得られた状態が驚きに当たる。この時、驚きの原因となっている事象は、当たり前さからは外れた事象として理解されることになる。先の実験状況では、反転ランプの提示に該当する。

それまでに当たり前と見なしていた前提や通例性が覆される時、つまり、それまでに抱えてきた前提の破壊に対峙する時、我々の精神は狼狽える。だが、我々の精神は狼狽えたままでいるわけではない。破壊によって生じた亀裂を修復し、精神の平静を取り戻そうと逸脱事象が理解可能になるような可能性の脈絡を希求しはじめる。この時、精神が平静を取り戻そうとする修復のダイナミズムが、当初の規範的な前提の側に収束していくか、あるいは、全く新しい前提を取り入れる方向に収束していくかには、2 通りの可能性があると言えよう。要するに、先の知覚実験を例にとって述べるならば、折衷的応答 (*compromise reaction*) や破綻 (*disruption*) においては、修復の過程が当初の規範的な前提の側、つまり正規のランプの知覚という側に収束していくことになる。これに対し、変則の認知 (*recognition of incongruity*) においては、修復の過程は反転ランプの正確な知覚という全く新しい前提を取り入れる側に収束していくことになる。

人がそれまでに当たり前のことと見なしてきた前提が破壊される時、つまり、驚きが感受される時、我々は、その驚きを宥めず、精神の平静を取り戻そうと逸脱事象を理解可能にするような可能性の脈絡を希求しはじめる。我々は、この脈絡希求の過程を人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」と呼んだ。そして、精神の「混乱と修復のダイナミズム」として描き出

されるこの過程が、Bruner が「意味の行為」と呼んだ人間の行為であった。彼は、「意味の行為」の過程を捉えるために、人々が抱いている前提や常識が破壊される瞬間に観察の焦点を合わせた。これが Bruner の「意味の行為」の方法論だったのである。反転実験は、Bruner の「意味の行為」の方法論が有効に機能している最初期の研究の一つであると言えよう。

Kuhn (1962/1971) はその主著 *The structure of scientific revolutions* の中で、自らの「パラダイム」(Kuhn, 1962/1971, p. 13) という考え方を的確に説明し得る最適なメタファーとして Bruner & Postman (1949) のこの実験を引いた。

一つのメタファーとしても、また加えてそれが精神の本質を明らかにしたのものであるが故に、この心理学実験は、科学発展の過程に実に明快な図式を提供している。科学では、トランプの実験と同じように、革新的なものは、期待に反するという困難の中から、抵抗を受けながら、ようやくあらわれて来る。最初は期待した通りの当たり前のことだけが、次第に、変則性が認められるような事情の中でも経験されるようになる。しかしさらに事情が分かってくると、どこかがおかしいということに気が付き始め、今までもどこかがおかしかったのではないかと考えるようになる。変則性に気が付くと、初めから変則的なものを予測し得るように概念のカテゴリーを適応させる努力をする期間が生じる。この点において発見は完成されたことになる。このような過程は、あらゆる基本的な科学上の革新の出現に必ず伴う、ということを私はこれまで指摘してきた。

(Kuhn, 1962/1971, pp. 71-72: 一部筆者改訳)

Kuhn (1962/1971) は、Bruner & Postman (1949) の知覚実験を科学革命の構造を説明するための一つの有効なメタファーとして敷衍した。ただし、Bruner & Postman (1949) の知覚実験は、第一に、その変則性を、実験状況における計画的な物理刺激として用意したものであり、自然状況の中に見出されたものではなかった。第二に、被験者が示した方略は、物理的刺激に対する束の間の応答としてカウントされたものであり、我々が主張する意味での精神の「混乱と修復のダイナミズム」の過程、すなわち「意味の行為」の過程を明らかにするものではなかった。Bruner (1983b) は後にこの点について自身の研究を振り返り、以下のような批評を加えている。

束の間になされる一つの「反応」に集中するのではなく（たとえ、1000 分の 1 秒単

位で反応を測定することができたとしても)、人々が進んでいく足取りの経過を見る必要がある。彼らの足取りの経過は、反応ではなく、むしろ方略について我々に教えてくれるだろう

(Bruner, 1983b, p. 113)

物理刺激に対する束の間の反応の集計ではなく、人が問題の解決に向かって進んでいくその過程を、人々の思考の方略の解明を目的として研究する。1956年に発表された *A study of thinking* (Bruner, Goodnow & Austin, 1956) は、概念達成 (concept attainment) という課題によって、人々の問題解決の方略を人間の思考の問題として明らかにすることを目的として計画されたものであった。Bruner, Goodnow & Austin (1956) が行った実験課題は、被験者に提示された知覚刺激が、どのような分類枠組みに属するものなのかを推論してもらい、その分類枠組みが何であるかを同定してもらい、というものであった。彼らは、この実験を 81 枚の各々に異なる属性をもつ幾何模様のカードを使って行った。カードはいくつかの共通する属性に基づいて、特定の分類によって括ることができる。ここに生成可能な分類枠組みは多数ある。カードは、被験者と実験者との双方に開示されている。被験者は 81 枚のカードの中から 1 枚ずつを選んで実験者に提示する。実験者はそのカードが「真」のカードであるか、「偽」のカードであるかを被験者に伝える。被験者は、カードを順番に引きながら複数のカードに共通する属性を見つけ出し、選び出したカードを総括する分類枠組みが何であるかを推論する。Bruner, Goodnow & Austin (1956) は、こうして人が推論を進めていく際に用いている方略を、人間の思考の方略として調べていったのである。邦訳すれば「思考の研究」と題されたこの研究の総括は、後に認知革命の旗揚げを記するものとして評価されることになった (Gardner, 1987)。だが、Bruner (1983b) は自身のこの研究についても後にその限界を振り返って、次のような批評を加えている。

現実の生活の中で多くの人々が多くの場合、扱ったり求めたりする多くの概念は、こうした形式的なチェックリストのような種類のものではない。

(Bruner, 1983b, p. 118)

「自然」であるとはどういうことか？ 人々に普通の生活の脈絡からはなれて分類問題を与え、一人で、手助けもなしに「それをすぐに解いてください」というのは、彼らにとっ

て「自然」であろうか？

(Bruner, 1983b, p. 128)

我々の見出した方略は、結局われわれが被験者たちに取り組ませた、その世界の中でのみ当てはまるものであった。

(Bruner, 1983b, p. 127)

要するに、彼らが被験者に与えた実験課題と、結論として導き出された思考の方略とは、共にその「生態学的妥当性」(Brunswik, 1956; see also Cole, Hood & McDermott, 1994, 1997; Cole & Scribner, 1974) を欠いたものであった。人々が日常生活の中で用いている方法を知るためには、人々が日常生活の中で用いている方法を、人々の日常生活の中に研究しなければならない。このような考え方を具体的な研究計画の中核に位置づけて展開したのが、英国オックスフォードを拠点として行われた Bruner の乳幼児言語獲得研究であった。

3. 5. 子どもとことば

1972 年、Bruner はおよそ 25 年間奉職したハーヴァードを退官し、英国のオックスフォード大学に籍を移した (Bruner, 1983b)。英国で約 8 年間に渡って行われた Bruner の乳幼児の言語獲得研究は、知の生態学的妥当性に関わる先の教訓を引き受けたものであった (Bruner, 1983a)。彼は人間の乳幼児が如何にして前言語的コミュニケーションから言語的コミュニケーションへと移行していくのかを研究した。一連の研究において Bruner は母親と子どもとのやりとりを詳細に観察した。ただし、この研究で行われた Bruner の観察は、概して実験室の中での子どもと母親とのやりとりの観察ではなかった。

[我々は] ビデオカメラをもって子どもたちの家庭を訪れ、心理学者たちが何の課題も課していない時に子どもたちがしたことを観察した。すぐに明らかになったことは、母親と子どもはコミュニケーションを通して、それぞれの意図を交流し、つまり、利用できる慣習的な手段は何でも使い、慣習的なものが何も無い場合にはそれを発明し、上手くやりとりしているということであった。

(Bruner, 1983b, p. 167)

[我々は] 実験室の中ではなく家庭において、たいていは遊んでいる子どもたちと、その母親を観察した。その際、我々はその遊びの参加者に加わった。他にどのような方法があり得ただろうか？ 他の方法をとることは、その状況を不自然なものにし、我々が研究したいと考えていることを歪めてしまうことになる。

(Bruner, 1983b, p. 169)

上の引用に明らかなように、Bruner (1983a) は人々の心の働きを日常生活の中に観察した。実験室の中での研究によって得られた心理学的な識見が、日常生活の中での人々の心の働きについても同様に当てはまるものであるかどうかについて、認知革命以後、学界においても再検討の機運が高まっていた (Cole & Bruner, 1972)。これらは、知の「生態学的妥当性 (ecological validity)」(Brunswik, 1956; see also Cole, Hood & McDermott, 1994, 1997; Cole & Scribner, 1974) と呼ばれる問題として提起されていた。人々の日常が進行する現場においては、実験室のように統制条件を整えた上で比較実験によって有意差を抽出し、何らかの心理学的な法則を解き明かしていくような研究を行うことはできない。なぜならば、人々の日常が進行する現場は、特定の行為に対応する直接的な原因系として措定し得るような変数を決定するには、あまりにも不安定で、不確実性に満ちたフィールドであるからである。仮に、人々の日常が進行する現場で発見された何らかの因子を、特定の行為を誘発する原因系として措定したとしても、その帰結として導出されたと仮定される行為が、先の因子の直接的な機能によるものであったかどうかを同定することは非常な困難を伴う (Cole & Scribner, 1974; Cole, Hood & McDermott, 1994, 1997)。

従って、人々の日常が進行する現場の中に、人間の精神の動態を捉えようとするならば、我々はそれを因果論的に研究するのではなく、人々の日常の行為の有り様を、一つの「常態の極致」(Bruner, 1983b, p. 171) として観察し、観察された諸種の出来事に、出来事の信憑性という評価基準に基づいた解釈を加えていく、という研究を行うことになる。ここで問題とされるのは、ある事象が、普遍的な真理たり得ているかどうかではなく、むしろある事象が、特定の脈絡との関係において、その理解の妥当性を十分に全うしているかどうかである。1972 年からおよそ 8 年間に渡って行なわれた乳幼児言語獲得研究において Bruner らが採用したのはこうした研究上の立場であった (Bruner, 1983a, 1983b)。

とはいえ、人々の日常が進行する現場の中に人間の精神の動態を捉えようとするならば、

我々は人々の行為の観察に際して、何等かの目印を用意する必要があるだろう。さもなければ、我々は膨大な観察記録の内にたちまち問うべき問いを見失ってしまうことだろう。従って、ここでは我々は Bruner の観察のメルクマークを見つけ出さなければならない。Bruner は家庭の中で日常的に為される母子間の絶え間ないやりとりの一体どこに注目したのであろうか。Bruner の観察のメルクマークは、そのまま、Bruner 心理学の方法論として読み替えることができるはずである。従ってここでは Bruner の観察記録をそのまま引用し、そこに本論の主題に沿った考察を加えていくことによって、Bruner 心理学の「意味の行為」の方法論を浮き彫りにしてみたい。以下に引用する事例は、母子間のやりとりの中に見られる「要請」の過程を捉えた事例の一つとして Bruner (1983a) が注目したものである。事例は Richard という男の子が 21 ヶ月の時のものであり、自身が遊んでいて壊してしまった鍋ぶたを母親に直してもらおうと助けを求めた場面でのやりとりである。

リチャード：(鍋の蓋の取っ手をいじりながら) oh-oh, ah スクー (scoo)

母親：スクリュー！（Screw!）

リチャード：(蓋をいじる；ねじが外れて、取っ手が落ちる；母親を見上げる) hah-hah

母親：ほら。ここに穴があいちゃったわよ。

リチャード：(蓋と取っ手を持って母親に差し出す) hah-heh ... 穴、穴、穴

母親：あなたが、壊したんでしょう。

リチャード：(蓋と取っ手を持って母親に差し出す) こわれた、こわれた、こわれた
(しっこく)

母親：ドライバーをとってこないダメね。

リチャード：ooh ドライバー (蓋と取っ手を母親に渡して、ぶつぶつ言う)

母親：私にドライバーを取ってきてもらいたいの？

リチャード：(一) こわれた、こわれた、ドライバー (しっこく)

母親：台所からドライバーをとってきましょうか？

リチャード：(むずがり、うめき声をあげる)

母親：そうしたら、それを直せるわよ。

リチャード：(母親の手元の蓋に目をやる) スクリュー、スクリュー (しっこく
泣き叫ぶ)

母親：(ドライバーをとりにいく)

リチャード：(床の上に座ったまま、母親がいない間、一人でつぶやいている)

acoo dider (screw driver) scoo diver scoo diver scroo scroo scroo scroo ...

(母親がドライバーを持って戻って来るまで、つぶやいている)

.... 母親の手助けが終わった後、リチャードは、自分の遊びを続けた。

(Bruner, 1983a, pp. 108-109)

以下、Bruner の観察に考察を加えていく。21 ヶ月のリチャードが鍋蓋の取っ手をいじっている。母親はリチャードの「scoo」という不明瞭な発声を解釈し、はっきりと言い直して「screw!」と言い返す。事態が動き出すのはこの直後である。つまり、リチャードがいじっていた鍋蓋の取っ手が取れてしまう。リチャードは母親を見上げるが、母親は「ここに穴があいちゃったわよ」と平然と突き返す。リチャードは、壊れた蓋と取っ手とを母親に差し出し、母親の「穴」という言葉を拾って、「穴、穴、穴」と繰り返す。それに対して母親は「あなたが、壊したんでしょう」と彼の責任を問い質す。リチャードと母親との間に生じている双方の志向のズレはここでは修復に向かわない。リチャードは、母親の「壊した」という言葉を引き継いで、「こわれた、こわれた、こわれた」としつこく繰り返す。それに対し母親は、蓋を直すためには「ドライバーをとってこないダメね」と提案する。だが、この場でリチャードにできたことは、母親の言葉を引き継いで、母親の発した言葉と同じ言葉を繰り返すことだけであった。恐らくそれが、この場でリチャードに使うことのできた混乱の修復に向けた唯一の手段であった。それ故に、リチャードはただただ母親の発した言葉を繰り返している。「ドライバー」という言葉もそうである。この発話に対し、母親は「私にドライバーを取ってきてもらいたいの？」と問いかける。

一向に事態が修復に向かわない状況に対してリチャードは母親の発話である「こわれた」という言葉と「ドライバー」という言葉を重ねて繰り返す。だが、それでも母親はリチャードから何らかの依頼の言葉が発せられることを期待するかのようその場を動かない。そして、今一度リチャードに「台所からドライバーをとってきましょうか？」と尋ねるのである。だが、リチャードからおもむろに「ドライバーをとってきて」などという言葉が発せられることはない。やがてリチャードはむずがり、うめき声をあげる。それでも母親は動かない。そして「そうしたら、それを直せるわよ」と淡々と突き返している。母親のこのような応答に対し、リチャードは事例の冒頭で彼の「scoo」という発声に対して母親が言い直した「スクリュー (screw!)」という言葉に唐突に連呼し始める。母親の発話を引き継いで同じ言葉を繰り返すというリチャ

ードの事態の修復を志向する行為の最後に残された選択肢が「スクリュー」という発話だったのではないか。ここに至って母親はようやく重い腰を上げる。母親がドライバーを取りにいつている間、リチャードは「scoo diver」と繰り返しつつやいている。これはリチャードにしてみれば、母親の発話の繰り返しとして発声した「scoo」と「diver」という言葉が、事態の修復にもっとも有効に機能したからではないだろうか。これに対し、母親がリチャードに期待していたことは「手助けをして欲しい」というリチャードからの明白な依頼であった。だが、21ヶ月のリチャードにそれは困難であった。

リチャードの側の「壊れた蓋を直して欲しい」という要請と、母親の側の「助けて欲しいと頼むこと」への期待とは、やりとりの途上で明らかな双方の志向のズレを含んでいる。だがリチャードの視点に立ってみれば、母親の発話を引き継いで同じ言葉を繰り返す、という行為が結果的に混乱の修復の契機として有効に機能したことになる。そして「母親の手助けが終わった後、リチャードは、自分の遊びを続けた」のである。つまり、混乱の修復は達成され、平静が取り戻された。Bruner (1983a) はこれらの事例の検討を総括する中で、次のように述べている。

自分自身のすることが上手くいかない時、子どもたちは、普通、事態を「修復」し、あるいは、なにかしらの平常に戻すために、行為を誰かに託す。

(Bruner, 1983a, p. 107)

一方、母親たちについてはどうだろうか。

母親たちは、自分の子どもたちが、声を出したり、身振りをしたりする時に、彼らが何を思っているのかを知らないことがよくあるし、自分たちの発話が子どもたちに理解されているのかも分からないことがよくある。しかしながら母親たちは、理解可能な「何か」が立ち上がり得る、という暗黙の信念の内にやりとりを続けていこうとする。

(Bruner, 1983a, p. 86)

Bruner (1983a) が 1970 年代に行った一連の研究を通して明らかにしようとした主題は、人々の日常生活の中の精神の動態であった。母親たちは自分の子どもたちが自身に何を伝えようとしているのか、あるいは、自分の子どもたちが何をしようとしているのかについて分から

ないことが屢々ある。また、自分が話したり、伝えようとしたことが、子どもたちに十分に理解されているかどうかについては不確かなことが多い。このことは子ども達の立場に立ってみても同様である。それ故、母親と子どもとの間で取り交わされるやりとりは、お互いに相手の志向が分からない中でのやりとりになる。従ってそこには互いの志向がズレることによって生じる混乱や驚き、衝突、葛藤といったものが否応無く含み込まれる。ただし、我々の精神は、そうして生じた混乱や驚き、衝突、葛藤といったものをそのままに放っておいたりはしない。混乱や驚き、衝突、葛藤といった不測の事態を、お互いにとって何とか理解可能なものにし、精神の平静を取り戻そうと心を働かせる。この過程を本論文では人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」と呼んだ。そして、Bruner (1990) が「意味の行為 (acts of meaning)」と呼んだ人間の行為は、まさにこうした精神の「混乱と修復のダイナミズム」を媒介する行為であると結論づけた。「意味の行為」は、今、この時点においては理解し難い出来事が、いずれ何らかの意味を得ることによって理解可能になるような可能性の脈絡希求の行為として定義される。Bruner の心理学が捉えようしてきたのは、「可能性への投企」という特質を有するこうした人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」の過程だったのである。

3. 6. 物語のダイナミズム

1980年、Bruner はオックスフォードでの一連の乳幼児言語獲得研究に区切りをつけてニューヨークに帰ってくる。その後、しばらくの研究休暇を利用してオックスフォードでの一連の乳幼児言語獲得研究の総括である *Child's talk: learning to use language* (Bruner, 1983a) をまとめ、同時に、自らの自伝 *In search of mind: essays in autobiography* (Bruner, 1983b) を書き上げた。一方で彼は、実証主義的自然科学の方法論に依拠した科学的心理学の遂行とは別の方向、即ち、心理学の展開に解釈学的な学問の知見を取り込んだ解釈学的心理学の展開可能性を模索していた。彼は学会での報告を重ね、そこでのいくつかの提案を一冊の論文集としてまとめた。それが1986年に公刊された *Actual minds, possible worlds* (Bruner, 1986) であった。その中で彼は、後にナラティブ心理学の展開における一つの思想的出発点として位置づけられることになる「思考の物語様式」(Bruner, 1985) というアイデアを提出した。

以来、Bruner にとって物語とは何であったか。1980年代当初の論考において Bruner の物語は「人間の、あるいは人間らしい意図や行為の移り変わりとそのなりゆきを捉える」(Bruner, 1986, p. 13) 手段であった。やがて Bruner の議論において物語は、人間の精神の「混乱と修

復のダイナミズム」を媒介する行為として定式化されていく (Bruner, 1986, 1987, 1990, 1996, 2002, 2006, 2008, 2010; Bruner & Lucariello, 1989)。まずは *Acts of meaning* (Bruner, 1990) において Bruner が強調を伴って記述した物語の機能について今一度引用しておこう。

物語は、例外的な振舞いに、主人公の志向的状态 (intentional state) ...と何らかの文化の規範的要因 (canonical element) ...との双方を含ませる仕方で意味を与えるように構成される。物語の機能は、規範的な文化的通例性からの逸脱を緩和し、少なくとも理解可能にするような志向的状态 (intentional states) を見出すことにある。

(Bruner, 1990, pp. 49-50: 強調原文)

[混乱 (trouble)] が物語の状況に組み込まれることによって——つまり、物語が、文化的慣習と、文化的慣習からの逸脱との双方を含み込むことによって、ある個人の志向的状态に関わる問題を解明することができる。このことが、物語に道徳的立場のみならず、認識論的立場をも与えることになる。

(Bruner, 1990, p. 51)

Bruner (1990) の考えに従えば、物語行為とは、文化的な通例性や常識から外れる振舞いの「意味」が妥当されるような脈絡希求の行為を指している。今、この時点においては理解し難い出来事が、いずれ何らかの意味を獲得することによって理解可能になるような脈絡希求の行為を媒介する行為が我々の物語である。そして、何らかの意味が投企される脈絡希求の過程において、物語は当該の過程に文化の規範的な通例性と、通例性からの逸脱との双方を含み込む。そして物語は、通例性からの逸脱がどのようにして理解可能なものへと変換されていくのか、という問題に関わって進行していく。Bruner (1990) は、意味生成の行為とも呼び得るこの可能性の脈絡希求のダイナミズムが、精神の志向的状态と結びついていると主張した。以上の主張を Bruner (1990) の言葉を引いて述べるならば、物語とは「現前する例外が、何らかの形で理解可能であるか、あるいは『意味』を持ち得るような可能世界について説明する」(Bruner, 1990, p. 49) ものであり、「通例性からの逸脱を一つの理解可能な仕方に展開することによって、その意味を達成する」(Bruner, 1990, p. 47) ことを目指す人間に固有の行為である。

さて、我々が人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」と呼び直したこの過程が駆動する

ためには、何らかの混乱 (trouble) の発生が必要となる。混乱の発生を前提しなければ、修復のダイナミズムは駆動しない。それ故に Bruner は物語行為が駆動するためには前提や常識の破壊といった混乱の発生が必要になると論じているのである。

当たり前さの中に、破綻が生じる時に、物語の豊かなダイナミクスの引き金がひかれる。つまり、その破綻にどのように対処し、その破綻をどのように引き受け、事態をどのように馴染みの平静へと取り戻すのか、といったダイナミクスである。

(Bruner, 2002, p. 89)

物語は、人間が驚きや奇妙さに対処するための手段であり、そうした人間の状態についての不十分な理解に対処するための手段である。物語は予期せぬことに対する驚きや奇異感をより小なものにする。

(Bruner, 2002, p. 90)

上の引用にも明らかなように、Bruner の物語は人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」を媒介する行為に他ならない。そして Bruner (2002) は、物語行為は「物事の規範的状態の破綻を修復するというよりも、むしろ修復に向けた希求に内在する認識論的、道徳的な洞察へと向かっている」(Bruner, 2002, p. 20) と述べている。要するに、Bruner (2002) は、物語は混乱の修復という帰結を研究するための手段であるというよりも、むしろ混乱の修復を希求する精神の志向的状态の変化の過程を研究するための手段であると主張しているのである。この一文には、精神機能の「結果」の研究ではなく、精神機能の「過程」の研究を進めるべきであるという Bruner 心理学の一つの方向性が表現されていると言えるだろう。

1986年に公刊された *Actual minds, possible worlds* (Bruner, 1986) の中で、「思考の物語様式」に立脚した解釈学的心理学の構想という主題を立ち上げて以来、Bruner は物語についての上述の定式を一貫して繰り返してきた。この定式とは、物語行為は、常識や前提の破壊といった混乱の発生を契機として駆動し、行為の展開は、精神が平静を取り戻そうとする志向性に基礎づけられた「混乱と修復のダイナミズム」の過程を辿るというものである (Bruner, 1986, 1987, 1990, 1996, 2002, 2006, 2008, 2010; Bruner & Lucariello, 1989)。

以下、物語行為についての Bruner の考え方について簡潔にまとめられ、かつ、彼の近年の論考の中で述べられているものを引用しておく。我々はこの記述の中に物語行為の定式に関わ

る 1986 年以來の Bruner の一貫した考え方を見出すことができる。以下にその抜粋を引用する論文は、2008 年にアメリカ人類学会 (American Anthropological Association: AAA) の発行する機関誌 *Ethos* の招待論文として掲載された論文である。もともとの草稿は 2000 年 11 月にサンフランシスコで催されたアメリカ人類学会での招待講演として発表されたものである (Bruner, 2008)。論文は、*Culture and mind: Their fruitful incommensurability* (Bruner, 2008) と題されている。言わば、文化と精神の共約不可能性と題されたこの論文の中に、我々は人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」の過程を捉えようとする Bruner の志向を読み取ることができる。この論文の中で Bruner (2008) は物語とは何かという問いに対して次のように応えている。

物語は、期待されていたことに対する、期待されていなかったことによる侵入を叙述する。物語は共有された通例性 (ordinary) の破壊 (violations) に関わっており、これらの破壊がどのようにして解決されるか、に関わっている。1 つの物語は、その特徴として、共有された通例性としての、何らかの前もって予想される前提から始まる。そして、前提の破壊へと移っていく ... そして、はじめの通例性を修復 (restoring) していくか、あるいは、新たな前提を作り上げる (creating a new version) ために取り上げられた主題を展開していく。そして最後に、1 つの解決がもたらされる。

(Bruner, 2008, p. 36)

一見して非常に固定的な物語についての定式の中に、我々は Bruner の一貫した物語の方法論を読み取ることができる (Bruner, 1986, 1987, 1990, 1996, 2002, 2006, 2008, 2010; Bruner & Lucariello, 1989)。ナラティブとは何か、という問い立てに対して Bruner はそれを人間が言語や記号を用いて行うあらゆる行為を包括して指標する概念として定義することはしなかった。なぜならば、このような概念定義は、物語という概念を心理学研究の中に取り込もうとしたその元来の主旨を曖昧化することに帰結し、ともすると物語という概念を心理学研究に持ち込むことの必然性すら曖昧化することに帰結しかねないからである。それ故に、Bruner はむしろ、物語という概念についてのアリストテレス以来の学問史の中で練り上げられてきた古典的定義に立脚し、近年のナラティブ心理学の展開の中に見られるような多様なレトリックの重ね合わせによって都合のよい物語概念を作り上げるのではなく、物語行為は人間の精神の

「混乱と修復のダイナミズム」を媒介する行為である、という一見して固定的な定式にこだわってきたのである (Bruner, 1986, 1987, 1990, 1996, 2002, 2006, 2008, 2010; Bruner & Lucariello, 1989)。そして、物語は人間の精神生活において、「同意された規範的關係」として人々の日常生活の中に張り巡らされた文化-歴史的な規範性と、それらに対峙する諸個人の精神の志向的状态との間の多様な結びつきのダイナミズムを媒介する行為である、と主張したのである。このことを裏付けるように Bruner (2008) は先の論文の中で次のように述べている。

精神生活というものはどこへ行っても、当たり前さと、予期しないこととの間の、平凡さと、例外との間の、絶え間ない弁証法のように思われる。物語というものは、両者を文化的に、そして認知的に、処理可能な様式に翻訳するための我々の自然な方法のように思われる。

(Bruner, 2008, p. 37)

Bruner の物語概念は、人々の「行為の意味」を研究するための「意味づける行為」を指示するものではない。そうではなく、彼の物語概念は、人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」の過程として描き出すことのできる「意味の行為」の過程を研究するための彼の方法論と密接に結びついた方法なのである。それ故に、Bruner の物語論は、彼の「意味の行為」の方法論から自由ではない。方法という視点のみから彼の物語概念を利用しようとするならば、我々は Bruner の物語についての考え方を固定的で、汎用性に欠ける使いにくいものとして否定的に評価することになるだろう。だがしかし、Bruner の物語概念が、彼の心理学に通奏する「意味の行為」の方法論と密接に結びついたものであるという我々の理解のもとでは、物語についての固定的な定義は、むしろ Bruner 心理学の明白な研究目的と深く結びついた方法としての立場を与えられていると言えるだろう。

第Ⅲ部

「意味の行為」の方法的展開

第4章 「意味の行為」の心理学

本章の目的は、Bruner (1990) の「意味の行為」の行為論としての読解が、ナラティブ心理学の今日的展開に対して果たし得る寄与を考察することにある。「行為の意味」の研究は、物語の構成に伴って規定されていく結果としての意味を問う。これに対し「意味の行為」の研究は、人間が意味を希求し、生成する過程が如何なる行為過程であるのかを問う。本章では双方が問題としている精神の有り様が異なることを指摘し、前者を「構成する精神」の研究、後者を「希求する精神」の研究として整理しなおした。このように整理してみると、我々はナラティブ心理学の展開において「構成する精神」の過程には注目してきたが、「希求する精神」の過程にはあまり目を向けてこなかったように思われる。このような現況に対し、Bruner の心理学がその解明を目指してきたのは「希求する精神」のダイナミズムであったことを確認する。最後に我々は、希求する精神のダイナミズムの解明を目指す「意味の行為」の心理学の先に Bruner が眼差していたのは、心理学の知による平和の達成であったと結論づけた。

4. 1. 「行為の意味」の研究と「意味の行為」の研究との違いは何か

本章の目的は、Bruner (1990) の「意味の行為」の行為論としての読解が、ナラティブ心理学の今日的展開に対して果たし得る寄与を考察することにある。言葉を換えて言えば、「意味の行為」の心理学の展望を考察することが本章の目的である。先立って本節では「行為の意味 (meaning of acts)」の研究と「意味の行為 (acts of meaning)」の研究との違いについてその要点を整理して述べる。

人生や経験の意味といった人々の生きた「行為の意味」を問う研究において、物語という概念は、彼らが過去に経過した人生や経験の過程に、省察的に意味を付与する手段として理解される。ここには、当の出来事が過ぎてしまった後に、言わば、当の出来事の外部から、物語化の作業を通して当の出来事に意味を付与する、という方法論が機能している。出来事の意味は、物語化の所産として具体化されると考えられるため、物語と意味とは不可分の概念として理解される。我々は「行為の意味」の研究において機能している方法論を、いま、ここ、において

為される人生や経験の物語による再構成の内に、過去に生きられた人々の「行為の意味」が時間を逆に遡るようにして付与されるという意味において「時間逆行的方法論」と呼ぶことにする。物語が語られる現在の時点において、物語の主題となる人生や経験は、既に過ぎ去った過去の過程として理解されることになる。そして、物語化の所産として具体化される意味は、人生や経験の物語を構成する諸種の出来事の選択的配列と、それらを物語全体の筋立てに沿って結び合わせる文脈の機能に依存して規定される。個々の出来事がどのような文脈の内に結びつけられるかによって、諸種の出来事の意味は変化し得る。ただし、物語が一つの形を得た時点で、それに随伴して出来事の意味も規定される。この意味において、物語は、結果としての「行為の意味」を問うための有効な手段として位置づけられることになる。

これに対し、「意味の行為」の研究は、何らかの「行為の意味」が規定されるに至る手前に遂行されているはずの行為レベルの過程を明らかにしようとするものである。すなわち、「意味の行為」の研究は、人間が意味を希求し、生成する過程が如何なるものであるのかを問う。この立場においては、物語を、人間が意味を希求し、生成する過程を媒介する行為として位置づける。Brunerの考えに従えば、「意味の行為」は、前提や常識の破壊といった混乱 (trouble) の発生を必要とする。今、この時点においては理解し難い出来事の発生が「意味の行為」の契機となる。我々の精神は、この不測の出来事がいずれ何らかの意味を獲得することによって理解可能になるような、可能性の脈絡を探し求める。この過程を、本論では人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」と呼んだ。この立場では意味という概念は、「意味の行為」の先に未決定性、不確定性に基礎づけられた概念として展望されるに留まるものである。「意味の行為」の過程は、前提や常識の破壊といった混乱の発生を契機として、時間の流れに沿って進行する。この視点において「意味の行為」の研究は「時間順行的方法論」に依拠していると言うことができるだろう。

「行為の意味」を研究する立場において、意味は、物語化の作業に伴って規定されると考えられる。従って、意味という概念は屢々、物語という概念と等値される。この時、意味という概念も、物語という概念も、いずれも物事の成り立ちにおける「結果」としての位置付けを与えられることになる。これに対し「意味の行為」を研究する立場において、意味は希求の途上にあるという論点において、未決定性、不確定性に基礎づけられた概念として理解される。この時、意味という概念も、物語という概念も、いずれも物事の成り立ちにおける「過程」としての位置付けを与えられることになる。

このように整理する時、人々の生きた「行為の意味」という結果を研究する立場と、人間が

意味を希求し、生成する行為として理解される「意味の行為」の過程を研究する立場とでは、その研究目的が明らかに異なると言えよう。つまり、前者が、物語の構成に随伴して規定されていく結果としての意味が如何なるものであるのかを問うのに対し、後者は、人間が意味を希求し、生成する過程が如何なる行為過程であるのかを問うている。より簡潔に述べるならば、前者は意味を問い、後者は行為を問うている。

そして、物事の結果の検討は、その生成過程の検討から切り離してはなし得ないという考え方に依拠する限りにおいて「行為の意味」の研究と、「意味の行為」の研究とはナラティブ心理学の展開において不可分の主題として研究されるべきものなのである。しかしながら、ナラティブ心理学の今日的展開は人々の生きた「行為の意味」の研究に大きく傾倒することによって、本来、その行為レベルの前提に位置づいているはずの「意味の行為」の研究を不問に処してきたように思われる。

4. 2. 希求する精神のダイナミズム

では、「意味の行為」の研究は心理学研究にどのような寄与と展望をもたらし得るのか。Bruner (1990) は、常識や前提の破壊といった混乱 (trouble) の発生に伴って生じた、今、この時点においては理解し難い出来事が、いずれ何らかの意味を獲得することによって理解可能になるような可能性の脈絡希求の行為を「意味の行為 (acts of meaning)」と呼んだ。この時、我々の精神の志向性に関わる問題として Bruner が重視したのが、可能性の希求という主題であった。希求という言葉は「今、この時点においては無いものが、いずれ何らかの形で達成されたり、獲得されたりするように強く願い求めること」を指している。

Bruner (1990) は「意味の行為」を媒介する行為として位置づけられる物語について論じる際にも、可能性の希求という論点を強調していた。彼は、物語は「現前する例外が、何らかの形で理解可能であるか、あるいは『意味』を持ち得るような可能世界について説明する」(Bruner, 1990, p. 49) 行為であると述べたのであった。彼は、近年の議論においても物語の機能が、可能世界の創出と結びついていることを繰り返し強調している (Bruner, 2002, 2008)。

物語は、可能世界 (possible worlds) をつくりあげる。ただし、可能世界が我々の知る世界をどれ程超えようとも、その世界は我々の知っている世界から想定されるものである。可能性の技巧は冒険に満ちた技巧である。それは我々の知っている生を心に留めおか

ねばならないが、我々が所与の生を超え出て、多様な可能性を考えることに関心をむけるには、十分に所与の生から離れなければならない。可能世界は安心を与えると同時に挑戦を試みる。最終的には、可能世界は、我々が何を現実と考え、何を規範的と考えているのかについての慣習を変化させる力となる。

(Bruner, 2002, p. 94)

以上の引用に明らかなように、Bruner は人間が、自らの生きた所与の生を基点に持ちながらも、所与の生を超え出て、多様な可能性を展望し、実現していく精神のダイナミズムに関心を向けていた。本論の主題に沿って敷衍するならば、彼の心理学は人々の生きた「行為の意味 (meaning of acts)」の研究をその視野に捉えてはいるが、そこに留まるのではなく、むしろ「行為の意味」の所与性を越え出て、多様な可能性を展望し、実現していく人間の精神の「意味の行為」のダイナミズムに、心理学の研究課題を位置づけていたと言える。2000 年に上梓された *Minding the law* (Amsterdam & Bruner, 2000) の中でも Bruner の可能性を志向する主張は一貫している。

人間に固有の精神の能力は、我々に、通例性や、期待可能性や、正当性を越え出た想像を駆り立てずにはおかない。そして、他者を自身の想像の中に巻き込まずにはおかない。我々は、絶えず、我々の周囲の状況をしのぎ、今、ここにとって代わることについて思いを巡らせ、現実と反するものを生み出し、そこにはない、いまだかつて経験したことの無いものを生み出す。この傾性は、言語の創造的な力によって助長されている。言語——ストーリー、ドラマ、象徴体系、宗教的な啓示——といったものを通して我々は、現在の制約を超えていくことができる。

(Bruner, 2000, p. 235)

さて、こうした主張に続けて Bruner (2000) は次のように論を展開している。如何なる文化においてであれ、そこに暮らす人々が引き受けている現実についての規範的な見方というものがあつた。個々の文化が有するこのような同意された規範性は、そこに暮らす人々に対して、「常識」のように暗黙的に機能するものもあれば、「法律」のように制度的に具体化され、明示的に機能するものもある。我々の日常生活は、個々の文化の有するこのような規範性を暗黙的、明示的に引き受けながら営まれている。だがその一方で、我々の日常生活はこれらの規範

性に常に縛られているわけではない。我々は、同意された規範性として引き受けられている馴染みの慣習や常識、制度といったものに対して様々な解釈を施すことによって、それまでに前提や常識とされてきたような慣習や常識、制度の中に内部矛盾を発生せしめる。そして、時に我々は、現行の慣習や制度に取って代わる可能性の世界を想像することによって矛盾を解消しようとし、あるいはまた時には馴染みの慣習に立ち戻る事によって矛盾を解消しようとする。このような議論を足場としながら Bruner は次のように結論づけている。

我々の**社会生活**の未完結性は、我々が、言語を介して、あるいは「お互いの精神状態を読み取り」、自分たちの理想の内に仲間を呼び込んで来るといふ我々の種に固有の能力を介して、他者との間に可能世界を共有することができるという我々の能力に内在している。

... それが如何なる形であれ、個人の可能世界が難なく集合的なヴィジョン ... になることができたならば、やがてそれらは、可能世界の共同体の中で、政治的、宗教的、法的に制度化されることになるだろう。おそらく、人間の想像力の際限ない自由度は、その持ち主をして、共に歩んでくれる人々の承認を探し求めることへと駆り立てる。

すべての文化は、可能世界の支援者の集まりを内包している。各々は、修正を加え、乗り越え、あるいは既存の規範的秩序を破壊し、——そして時には別のものにさえしようとする活力を持っている。

(Bruner, 2000, pp. 235-236)

想像の物語の共有によって個人の可能世界が集合的な可能世界の景観を生み出すことに結びつくならば、それらはやがて可能世界の中で政治的、宗教的、法的に制度化される。そして、我々は自らの描き出した可能世界に賛同し、共に歩んでくれる他者を探し求める。その帰結として、もしも可能世界の想像が個人の想像から、集合的な想像へと変化していったならば、我々はやがて現行の慣習や規範に修正を加え、あるいは時には既存の規範的な秩序を破壊し、とって代わり得る可能性の世界を実現していくことができる。「意味」の未決定性、不確定性に基礎づけられた行為過程の研究として理解される「意味の行為」の研究は、可能性の希求という人間の精神のダイナミズムを解明する仕事を心理学の中核に位置づけようとする試みなのである。

この論点を「行為の意味」の研究との対比によって、より明示的に検討しておこう。人々の生きた「行為の意味」を問う研究において「意味」という概念は、物語の構成に伴って付与さ

れるものであった。言葉を換えて言えば、物語の構成が、意味生成の行為と同義として理解されていた。たとえば、Gergen, K. & Gergen, M. (1983, 1984, 1986, 1988) の提起した自己物語論を振り返ってみよう。彼らは、我々が構成する物語には、その物語の収束点の価値付けの位置取りと、そこに向かって配列される出来事の結びつけ方に応じて3つの基本形があると論じた。彼らは物語の構成に関わる3つの基本形を図示するために、直交する二軸から成る平面図を用意した。平面図の横軸は、物語の時間的進行を表し、縦軸は、肯定と否定の二項からなる語り手、もしくは登場人物の価値付けの位置を表すものであった。このようにして時間 (time) の軸 (横軸) と、価値 (evaluation) の軸 (縦軸) から成る座標軸上に彼らは、「前進するナラティブ」、「後退するナラティブ」、「不変のナラティブ」という物語の構成に関わる3つの基本形を図示したのであった (Gergen, K. & Gergen, M., 1983, 1984, 1986, 1988; see also Gergen, 1994/2004, 1999/2004)。そして物語の構成に関わる3つの基本モデルの提示に続いて、彼は「われわれは物語の慣習を利用することによって、人生を首尾一貫したものにし、それらに方向性を与えている。人生は意味を獲得し、起こった出来事は理解可能なものとなる」(Gergen, 1994/2004, p. 258) と述べたのであった。さて、物語の構成を、個人的に為されるものとする立場 (個人構成主義的物語論) にせよ、社会的に為されるものとする立場 (社会構成主義的物語論) にせよ、意味は物語の構成に随伴して付与される、という考え方に相違はない。「構成」という言葉は、いくつかの諸要素を組み立てて一つのまとまりのあるものにするを指している。要するに、既にそこにあるものを材料として、それらを組み合わせで何かを作り上げていく行為を指している。物語の構成と、意味の付与とを不可分の関係にあるものとして理解する「行為の意味」の心理学は、この意味において「構成する精神」の解明をその目的に位置づけてきたと言えるだろう。

これに対し、Bruner の「意味の行為」の方法論に立脚する心理学がその解明を目指すのは「希求する精神」のダイナミズムである。「意味の行為」の研究において、意味は、行為の先に未決定性に基礎付けられたものとして展望される概念であった。「意味の行為」は、今、この時点においては理解し難い出来事が、いずれ何らかの意味を獲得することによって理解可能になるような可能性の脈絡希求の行為として定義される。意味は、この可能性の脈絡希求の行為の先に展望されるに留まる概念であった。「希求」という言葉は、先述したように、今、この時点においては無いものが、いずれ何らかの形で達成されたり、獲得されたりするように強く願い求めることを指している。要するに、未だそこには無いものを、探し求め、作り上げていく行為を指している。人間の意味生成と意味使用の過程の理解を志向する「意味の行為」の心

心理学は、この意味において「希求する精神」の解明をその目的に位置づけると言えるだろう。

以上に考察したように「構成する精神」の研究と、「希求する精神」の研究とでは、その問題としている精神の有り様が異なる。例えば、前者が「人々が自らの生きた人生や経験にどのような意味を付与したか」を問うとするならば、後者は「人々が現前する不測の事態をどのように理解可能にしていくか」を問う。言葉を換えて言えば、前者が意味生成の結果を問題にしているのに対し、後者は意味生成の過程を問題にしている。このように整理し直してみると、我々はナラティブ心理学の展開において「構成する精神」の過程には注目してきたが、「希求する精神」の過程にはあまり目を向けてこなかったのではないだろうか。このような現況に対し、我々は Bruner の「意味の行為」の方法論の解明を足場とすることによって、「希求する精神」のダイナミズムを研究する心理学の展開可能性を展望することができるのではないか。

4. 3. 精神、文化、ナラティブ

では、希求する精神のダイナミズムは如何にして理解可能になるのか。Bruner (1990) の「意味の行為」の方法論が焦点をあてたのが混乱 (trouble) の発生であった。混乱という概念は、人々にとっての通例性や常識、前提の破壊を意味するものである。Bruner の考えに従えば、時間的にみて何らかの混乱が発生する手前の時点において、文化の有する通例性や常識といった規範性の側面と、諸個人に固有の精神の志向的状态の側面とは、言わば並行して進んでいる。要するに、文化的に当たり前だと思われていることと、個人的に当たり前だと思っていることが並行している状態であり、この時、物事は、普段通りに、滞り無く進行していくものと考えられる。この状態においては、規範性の側面と、志向的状态の側面とは、我々の日常的な行為の中に並行する過程として進行するために見分けがつかない。ただし、そこに規範性の破壊に該当する混乱が発生した時、混乱の発生を契機として、それまでに維持されてきた慣習や常識といった文化的規範性の経路の外側に、精神の志向的状态が押し出される。つまり、俄には理解し難い不測の事態の発生によって、我々の精神は規範性の経路の外側に飛び出していく。この時、我々の精神は、逸脱をそのままに放っておこうとはしない。逸脱を何とか理解可能なものにし、精神の平静を取り戻そうと「意味の行為」を展開する。ここに我々が上で述べた希求する精神のダイナミズムが現れるのである。Bruner は、規範性の破壊として定義される混乱の発生に観察の焦点を合わせることによって、人間が可能性を希求する精神のダイナミズムを捉えることができると考えた。これが、Bruner (1990) の「意味の行為」の方法論に

内在する心理学に対する展望であった。そして彼の物語概念は、人間の精神が可能性の脈絡を希求するダイナミズム、すなわち、人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」を媒介する行為としての位置づけを与えられていた。彼は次のように述べていたのであった。

生とは「いつもの人々が、いつものことを、いつもの場所で、いつもの理由からしている」ことである。この当たり前さの中に、破綻が生じる時に、物語の豊かなダイナミクスの引き金がひかれる。つまり、その破綻にどのように対処し、その破綻をどのように引き受け、事態をどのように馴染みの平常へと取り戻すのか、といったダイナミクスである。

(Bruner, 2002, p. 89)

精神生活というものはどこへ行っても、当たり前さと、予期しないこととの間の、平凡さと、例外との間の、絶え間ない弁証法のように思われる。物語というものは、両者を文化的に、そして認知的に、処理可能な様式に翻訳するための我々の自然な方法のように思われる。

(Bruner, 2008, p. 37)

Bruner (1990) は、*Acts of meaning* において構想した自らの新しい心理学に「文化心理学」(Bruner, 1990, p. x iii: 強調原文) という名称を与えていた。そこには、人々が日常生活の中で引き受けている文化-歴史的な規範性と、諸個人に固有の精神の志向的状态とがどのように結びついているのかを、混乱の発生に焦点を合わせることによって解明するという方法論が内在している。この方法論は、文化と精神との結びつきに係る難題に取り組んできた文化心理学の今日的展開に対しても一つの有用な指針を与え得るものではなかろうか。

4. 4. 「意味の行為」の先にあるもの

では、希求する精神のダイナミズムの解明を目指す「意味の行為」の心理学の先に Bruner は何を見ていたのか。結論から言えば、それは心理学よる平和の達成であった。彼は、混乱の発生に対峙した精神が、他者との間に理解可能な意味を達成し得るような可能性の脈絡を希求し、生成する、その心理学的才の解明の先に、心理学の知による平和の達成を見ていたのである。そのことを示唆する主張が *Acts of meaning* の中で為されている。

人間は、怨恨、内紛、合併、移ろう同盟関係に付随する利害の対立に永遠に苛まれるだろう。だがしかし、これらの手に負えない現象について興味深いことは、それらが如何に我々をバラバラにするかではなく、それにもまして如何に多くの場合、それらが中和され、許容され、恩赦に組するか、ということである。霊長学者の **Frans de Waal** は、動物行動学者たちが、霊長類（人間を含む）の攻撃性を誇張する一方で、これらの高等動物が平和維持のために使う無数の手段を過小評価（過小観察）する傾向にあると警告を発している。人間について言えば、驚くべき物語の才を持つ人類にとって、平和維持の主要な方法の一つは、いつも通りの生活の中に生じる衝突の脅威となる危機的状況を緩和する状況を提供し、表現し、展開するその人間の才にある。

(Bruner, 1990, p. 95)

たとえ、甚大なる個人的犠牲を伴っても尚、人々が共に生きていくことを何が可能にせしめ、何がそれを実現せしめているのか...。これこそ心理学の出発すべき原始点である...

(Bruner, 1990, p. 32)

ここに我々は、**Bruner (1990)** の「意味の行為」を巡る議論の基底に脈打つ彼の思想を読み取ることになる。人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」として表現することのできる「意味の行為」の研究は、心理学の実践による平和の達成にまでその視野を広げる。「意味の行為」の方法論に立脚する「解釈学的心理学」の探求が、人間の精神的な、そして、文化的な平和の達成に寄与することこそ **Bruner (1990)** の「意味の行為」を巡る議論が、その眼差しの先に捉えていたものであった。ここに我々は、**Bruner** 心理学の一つの思想を読み取るることができる。この思想が、人々の生きた「行為の意味」の研究よりも、遥かに広い視野を持ち合わせたものであることは今や明らかであろう。

第5章 物語という行為

本章の目的は、Brunerの「意味の行為」論の理論的読解に基づいたBruner心理学に通奏する「方法論」と「方法」の解明を足場として、人間が意味を希求し、生成する行為として理解される「意味の行為」の過程を、物語を介して研究するナラティブ心理学の具体的構想を実際の「語り」の分析を通して検討することにある。この際、我々は精神の「混乱と修復のダイナミズム」の過程として表現し得る「意味の行為」の過程の検討を、語りの繋ぎ方、すなわち語りの「文脈の変化」に注目することによって行うことを試みる。次いで、同じ語りに対して、人々の生きた結果としての「行為の意味」の検討を行うことによって「意味の行為」の研究と「行為の意味」の研究との具体的な違いを明らかにする。「意味の行為」の研究をナラティブ心理学の探求の一つの基点に位置づけることの可能性を探ることによって、本章では「過程」の先に展望される「結果」、「行為」の先に展望される「意味」という視座に定位したプラグマティックなナラティブ心理学の展開を展望する。同時に「意味の行為」の過程を、ナラティブの分析を通して明らかにすることの困難性も明らかになる。

5. 1. 行為としての物語

本論文の中核となる議論において我々はBruner(1990)が「意味の行為(acts of meaning)」と呼んだ人間の行為は、経験を有機的に組織し、物語化することによって「意味づける行為(acts of giving meaning)」とは異なる、ということを論証してきた。代わって本論が主張してきたことは、Bruner(1990)が「意味の行為(acts of meaning)」と呼んだ人間の行為は、人間が意味を希求し、生成するその原理と機能が如何なるものであるか、という問いに関わるものであった、ということである。そして2章での論究を通して我々はBruner(1990)が「意味の行為」と呼んだ人間の行為は、「同意された規範的關係」としての「常識」の破壊に対峙した

精神が、そこに生じた破綻を修復し、精神の平静を取り戻そうとする可能性の脈絡希求のダイナミズムであると結論した。今、この時点においては理解し難い出来事が、いずれ何らかの意味を得ることによって理解可能になるような脈絡希求のダイナミズムを Bruner (1990) は「意味の行為」と呼んだのであった。この解明によって我々の研究の焦点は、物語化の所産として具体化される人々の生きた「行為の意味」の研究から、人間が意味を希求し、生成する行為として理解される「意味の行為」の研究に移行することになる。言葉を換えて言えば、研究の焦点が人々の生きた「行為の意味」という結果を問う議論から、人間が意味を希求し、生成する行為としての「意味の行為」の過程を問う議論に移行することになる。この移行は、人間の精神の様態についての理解を、「構成する精神」の研究から、「希求する精神」の研究へと展開する契機ともなり得る。

さらに「行為の意味 (meaning of acts)」の研究から「意味の行為 (acts of meaning)」の研究への移行は、物語という概念の方法上の位置づけに対しても考え方の変更を迫ることになる。即ち、物語という概念を、諸個人の生きた人生や経験に意味を付与する手段として位置づけるのではなく、人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」の過程を辿る「意味の行為」を媒介する行為として位置づけ直すことになる。要するに、物語という概念を物語化の所産として具体化される結果としての「行為の意味」を問うための方法として位置づけるのではなく、人間が意味を希求し、生成する行為としての「意味の行為」の過程を問うための方法として位置づけ直すことになる。

本章の目的は、Bruner の「意味の行為」論の理論的読解に基づいた Bruner 心理学に通奏する「方法論」と「方法」の解明を足場として、人間が意味を希求し、生成する行為として理解される「意味の行為」の過程を、物語という手段を介して研究するナラティブ心理学の具体的な構想を検討することにある。我々が一つの行為論として読解し直した「意味の行為」の研究をナラティブ心理学の一つの基点に位置づけることによって、本章では、過程の先に展望される結果、行為の先に展望される意味、という物事の成り立ちにおける時間的順序に沿ったナラティブ心理学の研究可能性を探っていく。

5. 2. 方法論と結びついた方法としての物語

最初に、Bruner (1986) が「物語という発話行為 (narrative speech acts)」(Bruner, 1986, p. 25)、ないし「発話行為としての物語 (narrative as a speech act)」(Bruner, 1986, p. 25)

と呼んだ人間の行為について明らかにしておこう。Bruner (1986) は物語という発話行為において、その「発話や文章の志向性は、可能性としての意味の諸相へと意味の希求を開始し、意味の希求へと導かれる」(Bruner, 1986, p. 25) と論じた。この過程は「いま」、「ここ」の時点においては不確定である出来事の意味が、発話行為の宛先である聞き手や、読み手との関係を加味しながら、いずれ何らかの意味を達成するであろう可能性の脈絡希求の行為過程として理解される。このことについては、行為論としての「意味の行為」の読解によって既に十分に明らかにしてきた。残されている問題は、「意味の行為」の過程は、どのように研究可能になるのか、という問題である。

この主題に関わって Bruner (1990) は次の点を強調している。つまり、物語を一つの発話行為として理解する研究が焦点を合わせるのとは、物語の「筋立て、すなわちファースト (fabula) ではなく、語り方 (way of telling)、すなわちスジェット (sjuzet) である」(Bruner, 1990, p. 123) ということである。Bruner (1990) がロシア・フォルマリズムの分析概念に依拠して物語のファースト (fabula) と呼んでいるものは、実際の物語を編み込んでいる文脈とは独立に物語の全体構造を統括する主題を指標する概念であり、言わば、物語の全体的な意味の収束点を指示する概念である。これに対し、物語のスジェット (sjuzet) と呼ばれるものは、言わば、特定の主題を巡って多様に展開しながら実際の物語を編み込んでいく複数の文脈を指示する概念である。そして Bruner (1990) は、発話行為としての物語の研究は、物語を統括する何らかの主題的な意味の研究ではなく、何らかの主題を巡って多様に展開する文脈の研究を進めるものであると主張した。Bruner のこの主張が、物語化の所産として具体化される人々の生きた「行為の意味」の研究ではなく、いずれ何らかの意味が投企される可能性の脈絡希求の行為として理解される「意味の行為」の研究を志向するものであることは明らかである。この事実は、人生や経験の意味といった人々の生きた「行為の意味」の研究に傾倒してきたナラティブ心理学の展開に対する一つの問題提起としても理解することができる。

さて、Bruner (1985, 1986, 1987, 1990, 1991, 1994, 1996, 2002, 2006, 2008, 2010; Bruner & Lucariello, 1989) が物語に関わる議論において一貫して依拠してきた一冊の本がある。Kenneth Burke の *A grammar of motives* (Burke, 1945/1982) と題された古典である。Bruner が物語の議論に関わって Burke の議論に言及したのは「二つの思考様式 (Two modes of thought)」(Bruner, 1985, 1986, chap. 2) が恐らく最初であろう。以来、Bruner の物語についての言及は、一貫して Burke の議論に依拠している。では、Bruner が依拠してきた Burke の議論とは一体どのようなものか。Burke は *A grammar of motives* (Burke, 1945/1982) に

において人間の動機の在所という問題を考えていくための基礎となる分析枠組として劇学の五基語という考え方を提出した。それは以下の引用に示される考え方である。

いま、人が何かをやっていると。そして、彼が何をやっているのか、そしてそれを行っている理由を述べなければならないとする。そのような時、どのような要素が説明の中に含まれてこなければならないのだろうか。

(Burke, 1945/1982, p. 17)

それらは、「行為」、「場面」、「行為者」、「媒介」、「意図」の5種類である。.... まず、思考または行動のかたちをとって生じたもの、すなわち「行為」を描写することば、つぎに、その行為の背景、それが発生した状況を名付けることば（「場面」）が必要である。さらにわれわれは、誰が、またはどのような種類の人間（「行為者」）がその行為を行なったか、どのような方法、もしくは道具（「媒介」）を使用したか、しかもどのような「意図」で行なったか、を指摘することばを持たなければならない。

(Burke, 1945/1982, p. 17)

Burke (1945/1982) は人間の動機の在所を理解しようとするならば、行為、場面、行為者、媒介、意図という5つの基礎となる用語のいずれかに基点を置き、ある基語と他の基語との影響関係を問うことによって、人間の動機の在所を特定することが出来ると論じた (Burke, 1945/1982)。Bruner (1985, 1986, 1987, 1990, 1991, 1994, 1996, 2002, 2006, 2008, 2010; Bruner & Lucariello, 1989) は Burke (1945/1982) の提示したこの考え方に依拠し、Burke の5つの基語の議論は、人間の志向性を伴った行為の分析枠組みとして優れた識見を提出するものとして評価した。Bruner は、Burke の議論について繰り返し次のように言及している (Bruner, 1985, 1986, 1987, 1990, 1991, 1994, 1996, 2002, 2006, 2008, 2010; Bruner & Lucariello, 1989)。

Burke は、今や古典となった *Grammar of motives* (1945) において、物語は最低限、一人の行為者 (actor)、一つの行為 (action)、一つの目標 (goal) ないし意図 (intention)、一つの場面 (scene)、そして、一つの手段 (instrumentality) を必要とすると論じた。これらが Burke の“5つの基語”の骨組みである。物語の“ドラマ”は5つの基語の要

素間に生じる不安定から生じる。我々は物語の“ドラマ”よりもむしろ、物語の中に暗黙であれ明示的であれ常に生じる“混乱 (trouble)”について述べたい。混乱は、行為が目的に到っていない、場面と行為者とが合っていない、手段が目的に合っていない、といったようなことを意味する。物語は“混乱”の成り行きを、特徴づけ、探求し、予想し、熟考し、和らげ、順序だてて述べる手段である。

(Bruner & Lucariello, 1989, pp. 76-77)

物語は常に、暗黙であれ明示的であれ、何らかの規範性 (normativeness) や適切性 (appropriateness) に関わる要件を含んでいる。我々はこれを物語の**規範性 (canonicity)**と呼ぶことにする。混乱 (trouble) によって意味されることは、混乱が物語の原動力であるということである。混乱は、正当性の破壊、想定 of 破壊、適切性の破壊である。そして物語の成り行きは、正当性の維持、修復、ないし再定義に関わっている。

(Bruner & Lucariello, 1989, p. 77)

精神の志向性に基礎をおく概念としての行為に言及する際、行為についての言及は行為者、行為、目的、場面、手段という 5 つの基語を必要とする。Bruner の論点に従えばこれらが物語の基本要素である。ただしここで注意すべきは、ここに示されたのは、我々が人間の行為について叙述する際に利用することのできる物語の基本的な要素のリストに留まる、ということである。この指摘によって強調したいことは、この言明の中に心理学の方法論と呼べるものはなにもない、ということである。Burke (1945/1982) も Bruner (1990) もそのことを理解していた。それ故に、後で見るように論究の焦点は 5 つの基語というよりもむしろ、「混乱 (trouble)」という概念によって指示される現象に当てられていた。

にもかかわらず、ここでこのことを述べた訳は、ナラティブ心理学の考え方に依拠する諸研究が、しばしば、物語の基本的な特徴をあげることを、あたかも心理学研究の確たる方法論の提示であるかのように解している傾向が見受けられるからである。しかしながら、物語の基本的な特徴についての言及が、それ自体として心理学研究の方法論にはなり得ないことは明らかではなからうか。要するに、人間の精神のどのような側面について、どのように問うための方法なのか、という論点を不問に処したまま物語という方法を用いることは本来できないはずではないか。

Bruner の場合はどうか。Bruner (1990) にとって物語の方法論は明白であった。それは、

人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」の過程として描き出される「意味の行為」の過程を媒介し、理解可能にするための方法であった。そして、人間の精神の「意味の行為」のダイナミズムを捉えるためのメルクマークとして提示された概念が「混乱 (trouble)」であった。Bruner の言う「混乱 (trouble)」は、常識や前提の破壊、正当性や適切性の破壊、あるいは期待への背反といった事象に関わるものである。物語のダイナミクスは、「混乱」の発生を契機として、常識や前提、正当性や適切性の維持、修復、ないし再定義に向かって進行する。この過程は、今、この時点においては理解し難い出来事が、いずれ何らかの意味を獲得し、理解可能になるような可能性の脈絡希求の行為過程を辿るものと考えられる。Bruner (1990) は物語という発話行為に媒介される「混乱と修復のダイナミズム」の過程に人間の精神の「意味の行為」の有り様を捉えようとしたのである。

ナラティブ心理学の今日的展開は、その展開の思想的基盤の一つに Bruner の物語論を位置づけてきた。だがその一方で Bruner の物語論を、Bruner 心理学の思想とも呼び得る「意味の行為」の方法論と結びつけたものとしては理解してこなかった。こうした動向に対し、本章では、Bruner の物語論を、彼の心理学に通奏する「意味の行為」の方法論と結びつけたものとして理解し直していく。要するに、物語という概念を、人生や経験の意味といった人々の生きた「行為の意味」を問うための手段としてではなく、人間が意味を希求し、生成する行為過程として理解される「意味の行為」を媒介する行為として理解し直していく。このような視点を持って Bruner の物語論を読み直していくと、先にも述べた通り、そこには一貫した考え方があることが分かる。それが、物語は人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」の過程、すなわち「意味の行為」の過程を媒介し、理解可能にする行為である、という考え方なのである。この考え方は Bruner (2006) の近年の論考においても同じように主張されている。

諸種の物語は、否応無く 5 つの要素、あるいは「5 基語 (pentad)」の構造に依拠している。ここには、ある目的 (Goal) をもって、ある行為 (Action) を行なう行為主体 (Agent) と、その引き受け手 (Recipient) としての対象がある。そして全ては、何らかの局所的な場面 (Setting) の中で起こる。行為主体、行為、目的、受取手、場面。興味深いことに、これらは、哲学者たちが普遍的な「行為の理論」として言及しているものに対応している。行為の基底となるこの普遍論理を、わたしは、行為の基底となる心理学的枠組 (psychological frame) として位置づけたい。だがしかし、物語の構成には、これらの要素間の、なんらかの、それと見て取ることのできる不適合が必要となる。ある行為主体

の**行為**が、特定の**場面**に不適切である。あるいは、ある**行為**が、目指されている**目標**を達成するのに役に立ちそうにない。あるいはまた、**行為**の**受取手**が、その**場面**に相応しくない、といったように。Burke は、こうした不適合を**混乱** (Trouble) と呼んだ。そして、彼にとって**混乱**は、「物語の起動力」であった。**混乱**は、当たり前のことが、予期しないことに直面する時に生じるものである。こうしたことは、あらゆる文化の中での生活が頻繁に経験していることである。そして、物語という様式は、**どんなに固有な文化の内に生じ得る驚きや葛藤をも枠付ける手段を我々に提供する。**

(Bruner, 2006, p. 231: 強調原文)

物語とは何か？ 我々が物語という言葉で言わんとしていることは何か？ 1つの物語は、どんな物語であっても、ある世界の中での通例、ないし慣習的である事柄から始まる。これは、我々が物語の**最初の規範的状态** (*initial canonical state*)、と呼んでいるものであり、我々の精神が予め調律している因習的慣習としての、前提や、何らかの安定した通例話である。.... いつも通りであり、慣習的であり、馴染み深く、局所的であるような、**規範的な始まり** (*canonical opening*)。これが始まりである。

しかし、注記すべきは、物語は、これらの通例性をひっくり返すことを求めるということである。言うところの物語の内包する、**破綻** (*peripeteia*) である。.... **破綻**は、アリストテレスが詩学の中で用いた言葉であるが、慣習や期待されていることの破壊を表わしており、古代ギリシア語の字義どおりに言えば「変事」である。

続く物語の構成素は、**行為**である。行為は、変事をもとにもどし、物事の規範的状态を修復あるいは、更新しようと骨を折る過程である。

.... **解決**は、物語の四つ目の構成素である。解決は、物語の行為を終焉の結末へと導く。物語はまた、何らかのしめくくり、意見、あるいは「教訓」をもつかもしれない。...

冒頭の規範、破壊、行為、解決、暗黙の、あるいは明示的なしめくくり、これらが典型的な物語の過程である。

(Bruner, 2006, pp. 232-233: 強調原文)

上の引用に要約し得る Bruner の物語論の中に、Bruner 心理学に通奏する「意味の行為」の方法論が息づいていることを我々は読み取ることができるだろう。次節では、このような Bruner の物語論に定位にして、人間が意味を希求し、生成する行為過程として理解される「意

味の行為」の過程を、物語を通して研究する方法について具体的な語りの分析を通して検討していく。語りの分析を通して我々が明らかにしようとするのは、人々の生きた結果としての「行為の意味」ではなく、人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」の過程である。

5. 3. 物語と「混乱と修復のダイナミズム」

本章でナラティブという言葉を用いる時、我々は Bruner の物語論に依拠した狭義の意味でこの言葉を使っている。従って、本章の議論においては、ナラティブという概念を、人間の様々な表現行為に伴って構成される多様な媒体を総括する広義の概念としては捉えていない。むしろ本論では、人間の様々な表現行為とその所産とを包括する広義の概念としてナラティブを定義することは、ナラティブ研究の展開可能性を広範囲に拡張するというメリットがある一方で、ナラティブという概念の指示対象を極端に曖昧化することによって、ナラティブ研究の問の焦点が不明瞭になるというデメリットも大きいと考えている。

本章の目的は Bruner の「意味の行為」の方法論と密接に結びついた方法としての物語の可能性を検討することにある。従って、ここでは Bruner (2006) の物語の定義に従って、典型的な物語の過程は「冒頭の規範、破壊、行為、解決、暗黙の、あるいは明示的なしめくり」(Bruner, 2006, p. 233) を持ち、加えて「物語は避け難く語り手の視点を反映する」(Bruner, 2006, p. 233: 強調原文) という定式に依拠する。物語という概念についての Bruner の上の定式化は、ナラティブ心理学の今日的展開におけるナラティブ概念についての広義の定義からすれば、古典的で、汎用性に欠ける定義であるという批判も為され得るだろう。だが、Bruner の物語についての定式は、Bruner 心理学に通奏する「意味の行為」の方法論と密接に結びついたものである、という理解の下ではこの批判は当てはまらない。要するに、Bruner の物語は、人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」の過程を媒介し、理解可能にする行為であり、この意味において、物語は Bruner 心理学の「意味の行為」の方法論と密接に結びついた方法なのである。

さて、ここからは Bruner (1986, 1990) の議論を足場としつつも、物語を一つの発話行為として人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」の過程を理解することを目的に据えるナラティブ心理学の具体的な研究構想について検討を進める。以下ではまず、物語という発話行為が如何なる行為であるか、という問題から考えていきたい。

我々が物語という発話行為を遂行する世界は、いま、ここ、という絶えず束の間の瞬間とし

で進行していく現在という世界である。我々は、いま、ここ、に東の間として現前する世界を背後に見送り、新たな、いま、ここを眼前に迎える、という絶え間ない瞬間の連続性の中を生活している。そして、我々が何らかの行為を為す世界は、こうした絶え間無い東の間の連続によって維持されている世界である（浜田, 2002, p. 54）。浜田（2002）は、こうした、いま、ここ、に絶え間ない東の間の連続として進行していく世界を「0 次の世界」（浜田, 2002, p. 54）と呼んだ。「0 次の世界」の中で進行する行為は、東の間の連続性の中で漸次的に展開していく。いま、ここ、に為された発話や行為の意味は、それらが位置づく脈絡の中でその都度、決まっていく。そして、東の間の脈絡の中で規定された意味が、後につづく新たな発話や行為の方向性を規定していく。

だがしかし、いま、ここに現前した東の間の「0 次の世界」で起こった何らかの出来事や行為を記憶にとどめ、常に進行していく「0 次の世界」がすでに別の脈絡に移ってしまった後に、改めて先の「0 次の世界」で起こった出来事を他者に伝えようとするならば、我々は現時の「0 次の世界」から距離をおいたもう一つの世界を用意する必要がある（浜田, 2002）。浜田（2002）は、この世界を「0 次の世界」に対応させて「I 次の世界」（浜田, 2002, p. 55）と呼んだ。換言すれば、この「I 次の世界」が物語の世界ということになる。Bruner（1986, 1990, 2002）が、人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」の過程を、物語を通して理解することを主張した時、彼の議論は行為のレベルにおいて「0 次の世界」の検討を志向しながら、対象のレベルにおいて「I 次の世界」の検討を志向することになる。

物語の世界は、言わば、絶え間なく進行していく「0 次の世界」に身をおく我々が、他者による問いかけや、呼びかけに対する一つの応答として、ある時空間における発話や行為の進行を他者に伝えるために「I 次の世界」として再現したもの、ということになる。浜田（2002）はこうした世界の二重化の過程を経ずに、常に東の間の瞬間として流転していく「0 次の世界」に癒着したままでは、「I 次の世界」としての物語の世界は成立し得ないと結論づける。

従って物語を研究対象にするという時、我々は次の点を考慮に入れる必要がある。それは、「0 次の世界」において、いま、ここ、に東の間の連続性として進行していく発話や行為の分析は、いま、ここ、に進行する交渉の最中にある諸個人にとって、その場で進行中の発話や行為の成り行きから自由ではない、ということである。換言すれば、「0 次の世界」に進行する行為の分析は、東の間の連続性として進行する「いま」、「ここ」の脈絡に縛られた行為の分析を志向することになる。

これに対し、「I 次の世界」として再現された物語の分析は、すでに過ぎ去った「0 次の世界」

での出来事について、いま、ここ、に新しく進行し続けている「0 次の世界」を生きる語り手の視点から過去想起的に再構成された世界に対する分析ということになる。換言すれば、「I 次の世界」の分析は、「0 次の世界」において束の間の連続性として進行する「いま」、「ここ」の脈絡からは距離をおき、それらの脈絡とは切り離されたところに構成される再現世界の分析を志向することになる。

先にも述べたように、Bruner (1986, 1990) の発話行為としての物語という論点は、行為のレベルにおいては「0 次の世界」の検討を志向しながら、対象のレベルにおいては「I 次の世界」の検討を志向するという、言わば二つの世界の往還を分析するものとして理解される。

行為レベルにおける物語は、他者の問いかけや呼びかけに対する一つの応答として、いま、ここ、に進行する「0 次の世界」に足場をおいている。物語は、一つの発話行為として、何らかの働きかけに対する応答として出発し、この意味において、行為の宛先を持っている。

これに対し、対象レベルにおける物語は、語られた物語の内容が如何なるものであるか、という意味において「I 次の世界」として構成された世界の内実に分析の焦点を当てる。言葉を換えて言えば、行為レベルにおける物語の分析は、物語という発話行為が如何に遂行されるのか、という視点に立って物語の「語り方 (a way of telling)」(Bruner, 1990, p. 123) の分析を行う。これに対し、対象レベルにおける物語の分析は、語り手の生きた生活世界の内実がどのようなものであったか、という視点に立って物語の「内容」や「主題」の分析を行う。

以上を本論の主張に沿って整理しておくならば、人々の生きた「行為の意味」の研究は、対象レベルにおける物語の内容分析に焦点をあてると言える。これに対し、人間が意味を希求し、生成する行為として理解される「意味の行為」の研究は、行為レベルにおける物語の「語り方」の分析に焦点をあてると言える。では、行為レベルにおける物語の「語り方」の分析とは、一体どのようなものであろうか。

人々の語り「行為」として分析する試みの先例の一つとしてここでは Wooffitt (1992/1998) の研究をあげておこう。Wooffitt (1992/1998) は、「超常現象や怪異現象を直接体験した人々が、それを描写するときどのように言葉を用いるか」(1992/1998, p. v) という問題を研究した。その際、彼は会話分析や談話分析の手法に基づいて、超常現象や怪異現象についての体験者の「語り」を一つの発話行為として分析することを試みた。本論の主題に沿って言い換えれば、超常現象や怪異現象との遭遇は、体験者にとって予期せぬ出来事の発生、あるいは想定してきた前提の破壊に該当する。Bruner (1990) の「意味の行為」の方法論に従うならば、超常現象や怪異現象との遭遇という、予期せぬ出来事に対峙した精神が、その出来事をどのよ

うに理解可能なものにしていくのか、その過程の解明が研究の焦点となる。だが、Wooffitt (1992/1998) の研究が焦点を当てたのは、超常現象や怪異現象との遭遇が、体験者によって「どのように語られるのか」という問題であった。つまり、彼が明らかにしたのは超常現象や怪異現象についての体験者の「語り」の「方法」に留まるものであった。ただし、Wooffitt (1992/1998) の研究の注目すべき点の一つは、インタビューを通して得られた独白形式の「語り」の分析に、人々の相互行為の過程を分析するために開発された会話分析の手法を応用し、発話行為としての「語り」の分析手法を提案したことにある。そしてこの研究の結果、超常現象や怪異現象に遭遇した体験者の「語り」には、ある共通する発話行為の特徴があることが明らかになった。それは、体験者が超常現象や怪異現象との遭遇について語る際に、多くの場合「ちょうど X しているとき…そのとき Y」(Wooffitt, 1992/1998, p. 139) という発話様式をとるということであった。発話中の「X」の部分には、日常のごくありふれた状況や行為の描写が入る。例えば、「ベッドに横になったとき」や「部屋のドアを開けたとき」といったような描写である。それに対し「Y」の部分には、不可思議な現象に体験者(語り手)が気付いたことを明示する内容が入る。例えば、「体が動かなくなった」や「不思議な音が聞こえてきた」といったような描写である。Wooffitt (1992/1998) は、ごくありふれた日常の行為についての描写と、不可思議な出来事との遭遇についての描写とを、対照性を持ったペアとして語ることによって、語り手は不可思議な出来事の特徴を浮き立たせると同時に、自らがごく普通の平凡な生活者であることを顕示しているのだと説明した。Wooffitt (1992/1998) は、超常現象や怪異現象との遭遇についての体験者の過去想起的な語りを分析対象とすることによって、その体験報告がどのような物語行為として遂行されているのかを明らかにした。そして、物語行為の実践によって、語り手が何を顕示し、何を隠そうとしているのかを明らかにすることを試みた。Wooffitt (1992/1998) の分析には、語りを「行為」として分析するという視点が貫かれている。だが、「物語行為」に対する緻密な分析が為されている一方で、Wooffitt (1992/1998) の分析には体験者が超常現象や怪異現象との遭遇を、どのように解釈し、どのように理解可能にしていくのか、という Bruner (1990) が「意味の行為」と呼んだ人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」の過程については検討が為されていない。言葉を換えて言えば、体験報告の方法としての物語行為の分析は緻密に為されているが、人間が意味を希求し、生成する行為として理解される「意味の行為」の過程については考察がなされていない。

では、ナラティブ心理学の今日的展開の中に、Bruner (1990) の「意味の行為」の方法論に立脚するナラティブ研究と呼び得るような先例はないのであろうか。この問い立てに対し、

ここではやまだ (2000b) の「喪失と生成のライフストーリー」と題された論考に焦点をあてておきたい。やまだ (2000a) は、Bruner (1990) の「意味の行為」の議論を、人間が経験を有機的に組織化し、意味づける物語行為として読解した。このことによってやまだ (2000a) は、Bruner の「意味の行為」論を「行為の意味」論の方法論的前提として受容することになった。ここに Bruner (1990) の「意味の行為」論の「行為の意味」論としての受容の転倒がおこっていることは既に指摘した通りである。だが、こうした受容の転倒の一方で、やまだ (2000b) の「喪失と生成のライフストーリー」の論考は、Bruner (1990) の主張した行為論としての「意味の行為」の過程を具体的なナラティブの分析の中に捉えることを試みていると言える。やまだ (2000b) は、死や離別、といった人生における喪失の体験は、我々にとって物語の生成が必要となる典型的な場の一つであるとする。そして、喪失の体験を経過する時、我々の精神は、それまでに身近であった存在が不在になるという現実を引き受け、この喪失の体験から立ち直るために運動を始めると言う。やまだ (2000b) の論考に従えば、この時、精神が平静を取り戻すために我々が用いる手段の一つが物語行為である。ここで言われる喪失の体験は、本論が解明した Bruner (1990) の「意味の行為」の方法論に照らして言えば、前提の破壊、ないし混乱 (trouble) の発生に該当する。Bruner にとって混乱の発生は、物語という発話行為の契機であり、精神の「混乱と修復のダイナミズム」、すなわち人間が意味を希求し、生成する過程として理解される「意味の行為」の契機である。「意味の行為」は、今、この時点においては理解し難い出来事が、いずれ何らかの意味を獲得することによって、理解可能になるような可能性の脈絡希求の行為として定義される。

やまだ (2000b) もまたこのような考え方の下に、人生における喪失の体験を人間の物語行為の一つの契機として位置づけている。そして、「人は喪失の体験からどのように立ち直っていくのか」という問いを立て、精神の回復のダイナミズムを、喪失体験をした人々の語りの方に焦点をあてることによって明らかにすることを試みている。このような視点において、やまだ (2000b) の論考は、理論的な受容においては Bruner (1990) の「意味の行為」論を「行為の意味」論の方法論的前提として転倒させて受容しているのであるが、具体的な研究においては、Bruner の「意味の行為」論の行為論としての視座に定位したナラティブ研究を展望していると言えるのである。

では、不在の現実を突きつけられることを伴う喪失の体験から人はどのように立ち直るのか。やまだ (2000b) が注目したのは、Bruner (1986) が物語という発話行為の一つの特徴としてあげた「仮定法」の使用であった。やまだ (2000b) は Bruner (1986) の論考を引用して仮

定法とは「その形式が、想像された行為や状態をさす」（やまだ, 2000b, p. 91; Bruner, 1986, p. 26) ために用いられる叙法であるとし、仮定法の使用によって我々は、喪失の体験に新たな可能性の文脈を与え、不在の現実という理解し難い出来事の意味を否定的なものから肯定的なものへと変換することによって、喪失の苦悩から立ち直っていくのだと結論づけた。Bruner (1986) は、仮定法という叙法は「決定づけられた確実性よりもむしろ、人間の可能性に関わっている」(Bruner, 1986, p. 26) と主張している。しかし、やまだ (2000b) が指摘したように、Bruner は、どのような時、どのような仮定法が用いられるのかを具体的な物語行為の中に分析してはいない。そこでやまだ (2000b) は、人々が喪失の体験から立ち直っていく過程についての語りの中で、仮定法の使用がどのような形であらわれ、どのように機能するのかをテキストとしてのナラティブ分析を通して検討した。その結果、仮定法の使用は、語りの中で「もし……したら、……かもしれない。だったら……」という型を基本として用いられることが明らかになった。そして、仮定法の使用によって、人は、喪失や離別といった受け入れ難い現実を、「もし……したら」という可能性の世界に置いてみることによってやわらげ、否定的なものから、肯定的なものへ、未来の人生と折り合いを得るようなものへと喪失体験の意味を変換し、精神の平静を取り戻していくのだと結論づけた。

「仮定法」の使用を契機として、精神の「混乱と修復のダイナミズム」が遂行されるというやまだ (2000b) の論考は、人間が意味を希求し、生成する行為として理解される Bruner (1990) の「意味の行為」の過程を、物語を介して研究する試みの一つの先例として理解することができよう。

だが、やまだ (2000b) の分析は、人生における「喪失」や「離別」の体験として、既に何らかの意味を与えられている人々の過去の体験に対して、今、この時点を生きる現時の語り手である個人が、語りの聞き手との関係において、その体験の物語的意味を、過去に経過した出来事を辿り直しながら再構成していく過程を考察したものとなっている。この意味において、やまだ (2000b) の分析は、言わば「喪失」の体験という既決の「行為の意味」から出発して、当の意味が希求され、生成される過程としての「意味の行為」の過程を、時間を現在から過去に遡りながら再構成したものとしての物語を考察した研究になっている。言葉を換えて言えば、やまだ (2000b) の研究は、Bruner (1990) の主張した行為論としての「意味の行為」の過程を研究する試みとして評価することができるが、「行為」の過程の先に未決の「意味」を展望する「意味の行為」の研究にはなっておらず、既決の「意味」から「行為」の過程を推論する「意味の行為」の研究になっているのである。しかしながら、人間が意味を希求し、生成する

行為としての「意味の行為」の元来の過程を研究しようとするならば、「過程」の先に展望される「結果」、「行為」の先に展望される「意味」という時間の順行的な流れの中に「意味の行為」の研究を位置づける必要があるだろう。この関係を転倒させて「結果」から「過程」を問う研究を展開するならば、「意味の行為」の研究の一つの重要な視点である、意味が未決定性に基礎づけられているが故に展望される可能性への投企という視点が欠落することになるだろう。

とはいえ、やまだ（2000b）の研究は、人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」として描き出すことのできる「意味の行為」の過程を、喪失体験の語りの中に用いられる「仮定法」の使用に注目することによって分析するものであった。ただし、やまだ（2000b）の研究は、「意味の行為」の過程を、人々の精神の志向的状态が混乱の発生を契機として平静を取り戻そうと移り変わっていくその過程を辿って分析するものにはなっていなかった。また、本章では「行為の意味」の分析というものが如何なるものであるかについても未だ考察を行っていない。

従って以下では2つの語りの分析を例にとり、過程としての「意味の行為」の分析と、結果としての「行為の意味」の分析とを併置して論じていくことにする。ナラティブ心理学の展開においては、話されたものであるか、書かれたものであるかの相違を問わず、人間の言語使用にはダイナミックで、構成的な特質があることを認めている。それ故、本論では言語の様式が如何なるものであれ、そこには何らかの人間の心理的な機能が関わっているという論点は既に共有された前提とみなす。また、人々が日常生活の中で作成した手紙、日記、作文といったドキュメントは、ナラティブ研究の妥当なデータソースとして位置づけられることを記しておく。これは人々が自身の手によって作成する様々なドキュメントは、諸個人の私的体験や、彼らの生活世界である社会、文化、歴史的な現実を反映すると考えられるためである（Flick, 1995/2011）。

以下に例示する2つの語りは、小学校の宿泊学習として行われた一週間の農場での生活に参加した小学校5年生（10歳～11歳）の2人の少年が、「農場での生活を通して一番心にのこったことは何か」という問いかけに対する応答として綴った作文である。問いかけは、小学校という制度的な教育の現場で為されたものであり、農場での宿泊学習を振り返って重要な経験、鍵となる経験について綴るように促されている。語りの宛先は、作文の読み手である教師、保護者、友人といった他者に向けられていると考えられる。尚、プライバシー保護を目的として、語りの中の人物名や地名については全て仮名を用いている。

例解 Narrative 1 いもりのいのち たけだ ゆうじ

Initial Canonical State

- 01 僕は、宿泊学習では4日目くらいまではイモリをとっていた。 < I 次の世界 >
02 そのうちに、“底の方を探るととれる”とか、“午後の方が沢山とれる”というようなコツをつかんでみんなで合計 24 匹とれた朝だった。
03 僕はさかい君に「もう逃がそうよ」と言った。 < 行為の叙述 >
04 さかい君は「嫌だよ」と言った。 < 他者の行為 >
05 それで逃がすのをやめてしまった。 < 行為の叙述 >

Trouble

- 06 それが間違いだった。 < 0 次の世界 >
07 昼になって水そうを見ると、24 匹のイモリが死んでいた。 < 前提の破壊 >

Action

- 08 (なんでだろう) そう思い水に手を触れてみると熱湯だった。 < 理由の希求・開示 >
09 (イモリにとってはおそらく) < 理由の開示 >
10 僕はイモリにとっても可哀想なことをしてしまったと思った。 < 同情の叙述 >
11 正直悲しかった。 < 哀惜の叙述 >
12 イモリの死体は池に入れた。 < 行為の叙述 >
13 生きているイモリはその後、なかたさんが1匹とっただけだった。 < 他者の行為 >
14 これで農場の池のイモリは絶滅寸前となったかもしれない。 < 仮定法 >
15 だとすると30匹近くのイモリが数匹にまで減ったことになる。 < 一般化 >
16 もう少し適切な判断ができるとよかった。 < 後悔の叙述 >

Resolution

- 17 しかし今度の事は僕にとって命を考える大切なチャンスとなった。 < 肯定的再解釈 >

Coda

- 18 これからはこの経験をもとに生き物を大切に、水の管理などをしっかりと、生き物を飼ったり、育てたりしていきたい。 < 希望の叙述 >

まずは、Bruner (1990) の主張に従ってナラティブの「語り方」に注目し、精神の「混乱と修復のダイナミズム」として描き出される「意味の行為」の過程を捉えていこう。物語は語

り手の生活世界において通例と見なされていることから始まる。このことを Bruner (2006) は物語の「冒頭の規範的状态 (initial canonical state)」と呼んだ。では、たけだ君のナラティブにおける冒頭の規範的状态とはなんだろうか。それは、「生きているイモリ」である。さて、たけだ君の語りは、冒頭から物語の登場人物としての「僕」の視点に定位して語り出されている。すなわち、物語世界である「I 次の世界」の登場人物としての「僕」の視点に定位して語り展開していく。そして、たけだ君の語りは、01 行目の「4 日目くらいまで」という表現に示されるように、不定の過去の A 地点から B 地点まで (4 日目くらいまで)、という過去完了によって指標される 2 つの時制の間に起きた出来事を、その発生の時間的順序に沿って叙述したものになっている。

続いて、物語は前提の破壊に移行する。つまり、「イモリの死」という前提の破壊である。僕のイモリを「逃がそう」という志向 (3 行目) と、「さかい君」のイモリを逃がしたくない (「嫌だよ」という志向 (4 行目) とが拮抗し、結果として 2 人の登場人物はイモリを逃がすのをやめる。「I 次の世界」の時間進行においてこの時点で 24 匹のイモリは生きている。「生きているイモリ」という前提が破壊されるのはこの後である。「生きている」はずの「イモリが死んでいた」 (07 行目：前提の破壊) のである。前提の破壊を契機として精神は事態の修復へと運動を始める。すなわち、「混乱と修復のダイナミズム」が駆動する。

たけだ君の語りにおいて修復のダイナミズムの最初に登場するのが「理由の希求」である。「生きている」はずの「イモリが死んでいた」という前提の破壊を生じさせた、その理由が最初に問われる (08 行目：理由の希求)。次いで、「イモリの死」の理由を妥当する説明が添えられる。すなわち、イモリが入った水が熱湯になっていたからである、という理由が開示される (08 行目・09 行目：理由の開示)。この時、「イモリにとってはおそらく」という言葉によって対象への視点の転換がなされている (9 行目)。たけだ君の語りにおいて修復のダイナミズムは「理由の希求」と「理由の開示」によって開始されていると言えるだろう。

ついで、「感情の喚起」に関わる叙述である。ここでは二つの視点にたつて感情の喚起が叙述されている。一つ目の視点は、対象の視点にたつて「イモリにとっても可哀想なことをしてしまった」 (10 行目：同情の叙述) という形で述べられているものである。つまり、イモリにとって、という対象の視点に定位した感情表現である。ここでは、同情の感情表現と呼ぶことにしよう。二つ目の視点は物語の主人公としての「僕」の視点にたつて「悲しかった」 (11 行目：哀惜の叙述) という形で述べられているものである。これは主人公としての「僕」の視点に定位した感情表現である。ここでは、哀惜の感情表現と呼ぶことにしよう。

続く 13 行目の「生きているイモリ」という表現は、「イモリの死」という前提の破壊によって既に「僕」にとって前提ではなくなっている。いわば、前提が破壊されていることを前提として、「生きている」という言葉が用いられていると言える。「死」という前提の破壊に対して、その修復のダイナミズムは前提そのものの修復という形ではなし得ない。死んでしまったイモリは生き返らないからである。従って、前提の破壊は別の方法によって修復のダイナミズムを進行させる必要がある。

たけだ君の物語の「語り方」が変化するのは 14 行目の「これで」という因果接続に続く部分である。物語の冒頭から起こった出来事を時間順行的に辿ってきた登場人物としての「僕」の視点を離れ、ここでは、いま、この「0 次の世界」を生きる現時の語り手の視点から農場の池の現況が一般化されている。たけだ君の語りにおいて「I 次の世界」に定位した登場人物の視点から、「0 次の世界」に定位した現時の語り手の視点への転換は、「これで ... かもしれない」、「だとすると ... 減った事になる」(14 行目・15 行目) という仮定法の使用によってなされている。このことは、この仮定法が現在形の末尾を持っていることにも示されている。仮定法の使用による現況の一般化によって、語り手は「イモリの死」を巡る一連の出来事を登場人物の生きる「I 次の世界」の視点から引きはがし、「0 次の世界」を生きる現時の語り手の俯瞰的な視点の中に位置づけ直していると言えよう。言わば、この視点は全てを知り得た後の現在を生きる「僕」の視点である。そしてこの俯瞰的な視点から彼は「もう少し適切な判断ができるとよかった」(16 行目：後悔の叙述) という後悔を叙述する。この時、「適切な判断」という言葉は、採ったイモリは逃がしてあげる、ということを示すものと推察される。ただし、この「適切な判断」(16 行目) は、イモリを逃がさない、という「間違い」(06 行目) の判断の帰結として生じたイモリの死という出来事の流れを前提しなければ立ち上がってこない。それ故に、「間違い」(06 行目) という言葉を現時の語り手が、規範からの逸脱行為を指標するものとして用いたと解釈するならば、ここでの「適切な判断」(16 行目) は、生き物の扱い方についての新たな規範の擁立として理解することができる。

そして「0 次の世界」を生きる現時の語り手は、イモリの死を巡る一連の出来事を「しかし」という接続詞によって否定的な出来事から、肯定的な出来事に位置づけ直している。イモリの死を巡る一連の出来事に、「今度のことは僕にとって命を考える大切なチャンスとなった」(17 行目：肯定的再解釈) という文脈が与えられることによって、出来事は、否定的なものから、肯定的なものへと解釈し直される。この肯定的再解釈について、未来への希望が叙述される。つまり、「これからは ... していきたい」(18 行目) という未来時制を伴った表現である。「こ

れからは ... していきたい」という未来時制による一文には、「この経験をもとに」という間違っ
た判断として位置づけられる行為への省察と、「水の管理などをしっかりと」という
適切な判断として位置づけられる行為への展望とが、対比的に組み込まれていると言えよう。

以上の分析を要約するならば、たけだ君の「意味の行為」の過程は「イモリの死」というト
ラブルの発生から (1) 理由の希求、(2) 理由の開示、(3) 感情に関わる叙述 (同情・哀惜)、
(4) 仮定法による出来事の一般化、(5) 後悔の叙述 (新たな規範の擁立)、(6) 出来事の肯定
的再解釈、(7) 未来への希望、という文脈の変化として特徴づけることができるだろう。

だが、単一の事例分析だけでは人間の「意味の行為」の過程に関わるその一般化可能性や、
個別具体性についての吟味、検討を行うための見通しを得る事ができない。従って以下では「イ
モリの死」を巡る一連の出来事についての、異なる語り手による異なる語りの分析を行うこと
によって、この見通しの糸口を用意する。

例解 Narrative 2 イモリ さかい けんた

Initial Canonical State

- 01 宿泊学習に行ってからあった自由時間にイモリをとった。 <0次→1次の世界>
02 一日目は3匹、二日目は14匹、三日目は1匹だった。 <0次→1次の世界>

Trouble

- 03 とった時はうれしかったけれどとても悲しい出来事があった。 <0次→1次の世界>
04 それは二日目の出来事だった。 <0次→1次の世界>
05 たけだ君が「イモリ逃がそう」と言った時、イモリを逃がしに行ったら何か様子がおか
しいと思った。 <0次→1次の世界>
06 そして水そうの所に行ったらイモリが24匹大量死していた。 <前提の破壊>

Action

- 07 死んでいた原因はなんと水が40度以上あがっていたからだ。 <理由の開示>
08 なぜ水がすごく熱くなっていたかということ、イモリが入った水が日なたにおいてあっ
たからだ。 <理由の開示>
09 太陽の暑さが冷水を温水にしてしまったんだなと思った。 <理由の開示>
10 僕は自分で総合の係としてとてもひどい事をしたと思った。 <同情の叙述>
11 むしろ僕は総合の係として失格だなと思った。 <詰責の叙述>

- 12 本当にかわいそうな事をしてしまった。 <同情の叙述>
- 13 ぼくは自分を責めつづけた。 <詰責の叙述>
- 14 僕はその死んでしまったイモリを池の中においてあげた。 <行為の叙述>
- 15 本当にかわいそうな事をしてしまった。 <同情の叙述>
- 16 ぼくは自分を責めつづけた。 <詰責の叙述>
- 17 でもそんな事をしてもどうにもならないから池においたイモリをぜんぶ陸に上げてう
めてあげた。 <希望の叙述><行為の叙述>
- 18 それだけど、なかたさんがたまごもちのイモリをとった。 <他者の行為>
- 19 それが全部というよりほとんど生きのびて大きくなれば、またあの池にイモリが復活
するなと思った。 <希望の叙述>
- 20 もう少しいると思うからそのイモリが子孫をつないでほしいと思った。 <希望の叙述>
- 21 本当にひどい事をしたと思った。 <同情の叙述>
- 22 次はその失敗をしないように採った日にちゃんと逃がしてあげるようにしたいし、そ
れに、もしもとっておきたいな、という時には水そうを日かげにおいて日があたらない
ようにしてあげたい。 <仮定法・希望の叙述>
- 23 とてもショックだった。 <哀惜の叙述>
- 24 そのイモリが死んでしまった時の事を気づいた時には一気にそのイモリを採りたくな
くなったし、あの池を見たくもなくなった。 <逃避の叙述>

Resolution

- 25 もう一つの池にはカエルが沢山いた。 <0次の世界>
- 26 やっぱイモリだけでなくゲンゴロウ、コウイムシなどほかの生き物も同じだと思っ
た。 <一般化>
- 27 この池の生き物が全部死んでしまわないようにできたらいいと思った。 <希望の叙述>
- 28 イモリはとてもかわいい生き物だが生き物とは人間も同じだ。 <一般化>
- 29 もしもずっと 40度の気温の中でずっと僕がいたとしたら僕をつかまえた巨人がその場
所に僕を入れたのと同じだ。 <仮定法>
- 30 それを考えると生き物というのは熱すぎてもだめだし冷たすぎてもだめだ。 <規範>
- 31 それぞれ生き物というのはその生き物に合った温度で飼わないと、また育てないとい
けないんだなと思った。 <規範>
- 32 それに温度だけではなく環境もその生き物に合った環境でないといけない。 <規範>

- 33 たえばカエルでその事をやってみると体が必ずぬれてないといけない。 <規範>
 34 それにずっと水の中にいるとカエルという生き物は呼吸ができない。
 35 だから分類で分けてはいけない。 <規範>
 36 だから前も書いたようにその生き物に合った環境でないといけない。 <規範>

Coda

- 37 これでまた一つ勉強した。 <肯定的再解釈>
 38 でもひどいことをしたのにかわりはない。 <同情の叙述>
 39 これからは、そういうふうにするようにする。 <希望の叙述>
 40 本当にひどいことをした。 <同情の叙述>

まずは、Bruner (1990) の主張に従ってナラティヴの「語り方」に注目し、精神の「混乱と修復のダイナミズム」として描き出される「意味の行為」の過程を捉えていく。さかい君の語りは物語の登場人物としての語り手の人称代名詞（たとえば「僕」）が設定されずに語り出されている。それ故に、語りは「0 次の世界」を生きる現時の語り手の視点を維持したまま、その視点を「I 次の世界」に生きる登場人物の視点にそのまま引き延ばしたような語り方になっている。言わば、「0 次の世界」を生きる語り手の視点と、「I 次の世界」を生きる登場人物の視点との区別が不明瞭な語り方になっているのである。それ故に、語りの冒頭が、語り手の視点を時間逆行的に「I 次の世界」に引き延ばしたような語り方になっているのである。物語の登場人物として「I 次の世界」を生きる行為者の人称を不在にし、「0 次の世界」を生きる現時の語り手の視点から出来事についての叙述を時間逆行的に積み重ねていく語り方にさかい君の語りの1つの特徴がある。このことは次のような叙述にも見出すことができる。例えば、「自由時間」が「あった」、「イモリをとった」(01 行目)、「一日目」、「二日目」、「三日目は1匹だった」(02 行目)、「とった時はうれしかったけれど、とても悲しい出来事があった」(03 行目)、「それは二日目の出来事だった」(04 行目)といった叙述に見られるように、二日目の出来事までを「0 次の世界」を生きる現時の語り手の視点を維持したまま、「I 次の世界」に貫入させて積み重ねていくような語り方になっているのである。そして05 行目で「I 次の世界」の登場人物としての他者、「たけだ君」が登場してくることによって、語りの視点は不在の登場人物としての「僕」と「たけだ君」との間のやりとりとして「I 次の世界」に定位することになる。

続いて物語は前提の破壊、トラブルの発生へと展開する。「生きている」はずの「イモリが

24 匹大量死していた」(06 行目：前提の破壊)のである。前提の破壊を契機として、精神は事態の修復へと運動を始める。先のたけだ君の物語と同様に、修復のダイナミズムの最初に位置づくのが「理由の希求」と「理由の開示」である。なぜ、イモリは死んでいたのか。その理由が希求され、理由を妥当する説明が希求される。常識や前提の破壊に対峙する時、人は、屢々その理由を明らかにしようとする。Bruner (1990) はこの事実について、次のように言及していた。

通例から外れた例外に出会い、誰かに何が起こったのかと尋ねたならば、その人は、決まって理由(あるいは、志向的状态についてのなんらかの説明)を含む物語を語るだろう。もっと言えば、その物語は、殆ど例外なく、出会った例外事象が何らかの形で理解可能で、「意味(meaning)」を持ち得るような可能世界についての詳述を伴うものとなるだろう。

(Bruner, 1990, p. 49)

「イモリの死」の理由について、さかい君は、その理由を妥当する説明を作り上げている。「死んでいた原因は ... 水が 40 度以上あがっていたからだ」(07 行目：理由の開示)。「なぜ水がすごく熱くなっていたかという ... 水が日なたにおいてあったからだ」(08 行目：理由の開示)。「太陽の暑さが冷水を温水にしてしまった」(09 行目：理由の開示)という叙述がこれにあたる。イモリの死を妥当する理由が用意されることによって、「イモリの死」という前提の破壊が不可思議な出来事ではなく、理解可能な出来事として位置づけ直される。

「理由の開示」に続いて叙述されるのが感情の喚起に関わるものである。「理由の希求」と「理由の開示」から「感情の叙述」に移行する語りの繋ぎ方は、たけだ君の語りとの間に一つの共通点を明らかにしている。さて、さかい君の語りにおいても感情の叙述は二つの視点から為されている。一つ目の視点は、対象の視点にたって為される「ひどい事をした」(10 行目・21 行目・38 行目・40 行目)、「かわいそうな事をした」(12 行目・15 行目)といった同情の感情表現である。二つ目の視点は詰責の感情表現である。つまり、「総合の係として失格だ」(11 行目)として「責め続けた」(13 行目・16 行目)という叙述に表れているように、イモリの死という出来事に付した自らの行為を問い詰める感情表現である。「総合の係として」(10 行目・11 行目)という表現の背後には、何らかの義務を背負った役割を担っている者、という規範性が伴われている。つまり、「僕」によって何らかの「総合の係」のあるべき姿が仮定されており、この仮定に照らしてみるとイモリを死に追いやってしまった「僕」の行為は規範からの逸

脱に該当する。この規範からの逸脱に、「失格」や「責めつづけた」という詰責の感情が入り込んでくると言えよう。

ついで、さかい君が叙述するのが「希望」である。いかようにもし難い「イモリの死」という現実に対し、「そうであつたら」、「そうなって欲しい」、「そうしたい」という希望の叙述が為される。さかい君の「希望の叙述」は3つの視点から為されている。一つ目の視点が、死んでしまったイモリに対する希望である。二つ目の視点が、生き残ったイモリに対する希望である。そして三つ目の視点が、現時の語り手の視点から展望される未来への希望である。それぞれについて順に見ていこう。

死んでしまったイモリに対する希望は、反語的に叙述されている(14行目・17行目)。「死んでしまったイモリを池の中においてあげた」(14行目)、「でもそんな事をしてもどうにもならないから池においたイモリをぜんぶ陸に上げてうめてあげた」(17行目)という部分である。ここに敢えて叙述された「そんな事をしてもどうにもならないから」という言葉の裏返しには、死んだイモリを池の中に入れたら、もしかしたら元気になるかもしれない、という不可能への希望が託されていると解釈することができる。イモリは瀕死ではあるがまだ息を残しているのではないか。池の水の中に戻してやれば息を吹き返すのではないか。この言葉の裏側には、死んでしまったイモリに対する不可能への希望が託されていると言えるのではないか。

この死んでしまったイモリに対する不可能への希望は、その後「なかたさん」のとった「たまごもちのイモリ」(18行目)に対する希望へと転嫁する。つまり、二つ目の視点である生き残ったイモリに対する希望である。このことが示されているのが「なかたさんがたまごもちのイモリをとった」(18行目)、「(もしも)それが全部というよりほとんど生きのびて大きくなれば、またあの池にイモリが復活する」(19行目)、「(たぶん生き残ったイモリが)もう少しいると思うからそのイモリが子孫をつないでほしい」(20行目)という部分である。ここに叙述されているのは、生き残ったイモリへの仮定的な希望の転嫁であると言えよう。「僕」のとったイモリは死んでしまった。それ故に生き返らない。「僕」は、池に戻してやれば元気になるかもしれないという不可能への希望を断念し、「なかたさん」のとった「たまごもちのイモリ」や「(たぶん)もう少しいる」と仮定された生き残ったイモリに希望の対象を転嫁させている。

そして最後に、「0次の世界」に生きる現時の語り手の視点から「次は」という言葉に続いて過去の体験を現時において引き受け、未来の行為に向けた希望が叙述される。すなわち、「次はその失敗をしないように採った日にちゃんと逃がしてあげるようにしたい」、「(次は)もしもとっておきたいな、という時には水そうを日かげにおいて日があたらないようにしてあげた

い」(22行目)という叙述である。ここで言及されている「失敗」は、イモリを死に至らしめたという過去の体験事実を指示するものと理解される。そして、失敗として位置づけられる過去の体験事実との対比において、未来への希望が叙述されているのである。

いま、この「0次の世界」を生きる現時の語り手の視点を基点に据えて、「1次の世界」として構成される過去のある時点での体験の記憶を引き受け、この先の未来における行為の可能性を展望する。言葉を換えて言えば、現在の視点を基点に、過去の体験事実を引き受け、未来の行為可能性に対する希望を叙述する方略は、過去は決して変えられないが、次はそうなる欲しい、あるいは、次はそうしたいという仮定の叙述として成立する。Bruner (2002) はこうした言葉の用い方の一つとしての「仮定法」(Bruner, 1986, p. 26, 1990, p. 54, 2002, p. 13) という叙法を重視したのである。そして、仮定法の使用によって生み出される現実の世界と結びつきつつも現実の世界とは異なる可能性の世界を、彼は「可能世界」(Bruner, 1986, p. 45, 2002, p. 94) と呼んだ。「可能世界」の生成に関わる彼の議論は、人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」、即ち「意味の行為」の過程を捉えようとする Bruner の方法論にとって、一つの重要な概念として理解される。なぜならば、Bruner (2002) の議論において「可能世界」の生成は、「混乱と修復のダイナミズム」の一つの帰結として位置づけられているからである。

物語を通して、我々は昨日と明日を構成し、再構成し、ある意味においては全く新しく作り出す。記憶と想像とは、この過程の中で融和する。我々が架空の可能世界を作り出す時でさえ、我々は馴染みのことを捨て去るのではなく、それを有り得ただろうことや、有りそうなこととして仮定法化する。人間の精神は、その記憶を洗練させ、あるいは記録システムを如何に精密なものにしようとも、過去を十全に、真実のままに捉えることは決してできない。しかしそれと同時に、決して過去から逃れることもできないのである。記憶と創造とは、相互いの領分において、相互に補完しあうのである。

(Bruner, 2002, p. 93)

さかい君の語り中使用されている「次は ... したい」や「もしも ... したい」という叙述は、Bruner の強調した「仮定法」の使用を介して、「0次の世界」を生きる現時の語り手の視点を基点として、失敗として位置づけられた過去の体験についての記憶を引き受け、次はそうありたいという未来への展望をそこに結びつけることによって、精神の「混乱と修復のダイナミズム」を遂行しようとしていると解釈することができる。

さて、さかい君の語りにおいて3つの視点から叙述された希望に接続されるのが、逃避感情の叙述である。彼は、「イモリが死んでしまった時の事を気づいた時には ... イモリを採りたくなくなったし、あの池を見たくもなくなった」(24行目)と書いている。何らかの前提の破壊に対峙した精神が、その破壊を認めまいとして事象から目を背ける方略を逃避と呼ぶならば、ここに叙述されているのはまさに逃避と呼び得るものであろう。

そして、26行目の「イモリだけでなく ... 他の生き物も同じだ」という言葉によってイモリの死を巡る一連の出来事が一般化される。26行目の言葉を引き継いで、出来事を一般化した叙述がそれと分かるのは28行目の「イモリはとてまあかわいい生き物だが生き物とは人間も同じだ」という部分からである。出来事の一般化の叙述において仮定法が用いられるのは、たけだ君の語りにも共通して見出すことのできる特徴の一つである。ただし、たけだ君の語りでは一般化は「農場の池のイモリ」という言葉を基点として為されていた。一方、さかい君の一般化は、「農場の池のイモリ」に留まらず、イモリ以外の水生生物(カエル、ゲンゴロウ、コウイムシ)や人間をも含む生き物全般にまで拡張されている。そして、イモリに視点を投入し、イモリが死に直面したその状況を仮定法の使用によって再現している。例えば、「イモリはとてまあかわいい生き物だが生き物とは人間も同じだ。もしもずっと40度の気温の中でずっと僕がいたとしたら僕をつかまえた巨人がその場所に僕を入れたのと同じだ」(29行目)という叙述である。ここでのさかい君の仮定法の使用は、たけだ君の仮定法の使用とはその種類が異なっている。というのは、たけだ君が用いた仮定法は語り手の視点に定位して、農場の池の現況を俯瞰的に推論するものであった。これに対し、さかい君が用いた仮定法は語り手の視点を離れ、自分がイモリの視点に定位して世界を眺めてみたならば、という視点投入の推論になっている。そして、イモリの視点に定位した仮定法を「それを考えると」という因果接続によって引き継ぎ、今一度、語り手の視点に立ち戻って一つの「規範」が提示される(30行目)。この規範は要約すれば、生き物はその生き物に合った環境でなければ生きられない、というものである。この部分では「生き物というのは熱すぎても ... 冷たすぎてもだめだ」(30行目)、「その生き物に合った温度で飼わないと、また育てないといけない」(31行目)、「温度だけではなく環境もその生き物に合った環境でないといけない」(32行目・36行目)、「分類で分けてはいけない」(35行目)、といった「規範」が繰り返し提示される。この規範は、イモリの死の原因についての理由付け、すなわち、太陽光によって水槽の水温が上昇したため、という理由付けを引き受けたものとなっている。そして37行目において「0次の世界」を生きる現時の語り手の視点から彼は、生き物はその生き物に合った環境でなければ生きられない、という新たな規範に

立脚してイモリの死を巡る一連の出来事を肯定的な出来事へと解釈し直している。すなわち、イモリの死を巡る一連の出来事に「これでまた一つ勉強した」(37行目)という一言が付されることによって、出来事は未来志向的なものへと肯定的に解釈し直されるのである。

以上の分析を要約するならば、さかい君の「意味の行為」の過程は、「イモリの死」というトラブルの発生から(1)理由の開示、(2)感情に関わる叙述(同情・詰責)、(3)希望の叙述、(4)現実からの逃避、(5)仮定法による出来事の一般化、(6)新たな規範の擁立、(7)出来事の肯定的再解釈、という過程を辿るものとして特徴づけることができよう。

Bruner が「意味の行為」という言葉によって捉えようとした人間の精神の動態は、不測の事態の侵入によって生じた常識や前提の破壊を理解可能にし得るような可能性の脈絡を探し当てることによって、精神の平静を取り戻そうとする「混乱と修復のダイナミズム」として表現することのできる過程であった。そして、Bruner にとって物語は、こうした精神の「混乱と修復のダイナミズム」の過程、すなわち「意味の行為」の過程を媒介する行為を指示する概念であった。2つの語りの分析によって試みたことは、「混乱と修復のダイナミズム」として描き出される「意味の行為」の過程を、語りの繋ぎ方を検討することを通して明らかにすることであった。

5. 4. 物語を通して問う「行為の意味」と「意味の行為」

では、イモリの死を巡る2つの語りにおける「行為の意味」の検討を分析の主目的に位置づけていたならば、どのような知見が得られたのであろうか。「行為の意味」の研究は、人々が過去に生きた人生や経験の過程に、現時の語り手がどのような意味を付与しているのかを理解することに目的を置いている。本章で示した事例に沿って言えば、「イモリの死」という出来事に対して、2人の語り手がどのような意味を付与したのかを検討する。つまり、語られた物語が何を主題とし、語り手がその主題に対してどのような意味を付与したのかが検討される。物語は、語り手による出来事の解釈学的な再構成として理解される。従って、物語の分析は、語り手の出来事に対する解釈を、分析者がどのように解釈するか、という点において2重の解釈過程を伴っていると言える。では、本章で例示した2つの語りにおける「行為の意味」は、どのようなものとして解釈することができるのか。2つの語りの主題は「イモリの死」であった。語りはいずれもこの主題に沿って「宿泊学習でイモリ採りをしたが、集めていたイモリが太陽熱による水温の上昇によってみんな死んでしまった」という筋立てを持っている。では、

2人の語り手は、「イモリの死」という出来事に対して一体どのような意味を付与したのか。言葉を換えて言えば、「イモリの死」を巡る一連の出来事をどのように解釈し、意味付けたのか。

一つ目に例示したたけだ君の語りでは「イモリの死」を巡る一連の出来事に対して、次のような意味が付与されていたと解釈することができる。具体的には「今度の事は僕にとって命を考える大切なチャンスとなった」(17行目)という一文である。自らの不適切な判断によって、採集した24匹のイモリを死に追いやってしまった。このことで、農場の池のイモリは絶滅寸前になったかもしれない。「しかし今度の事は僕にとって命を考える大切なチャンスとなった」(17行目)のである。つまり、たけだ君の語りにおいて「イモリの死」を巡る一連の出来事は「命を考える大切なチャンス」として意味づけられていると言える。換言すれば、「命を考える大切なチャンス」というのが「イモリの死」を巡る一連の出来事に、たけだ君が付与した意味ということになるだろう。

では、二つ目に例示したさかい君の語りでは「イモリの死」は、どのような意味を付与されていたと解釈することができるのか。さかい君の語りではそれは「これでまた一つ勉強した」(37行目)という一言に収束するものとして解釈することができる。さかい君の語りでは、「イモリの死」という出来事に対し、自らの行為を責め、イモリに対して酷いことをした、という言葉が繰り返されていた。そして、語りの終盤では、生き物は、その生き物に合った環境でないと生きられない、という規範的な言明が重ねられた。そしてこの規範的な言明に続いて「イモリの死」の巡る一連の出来事を「これでまた一つ勉強した」と締めくくっていた。要するに、さかい君の語りにおいては「これでまた一つ勉強した」という一言が「イモリの死」を巡る一連の出来事に彼が付与した意味ということになる。

このようにしてみると「イモリの死」を巡る2つの語りから解釈可能な「行為の意味」は、「命を考えるチャンス」(たけだ君:17行目)や「また一つ勉強した」(さかい君:37行目)といった教訓として理解することができるのではないか。そして、いずれの語りも「イモリの死」という出来事を、自身の責任として引き受けつつも、そこに教訓としての意味を付与することによって出来事の意味を否定的なものから、肯定的なものへと変換する語りの構造を持っていると言える。このような構造を持った語りを例えば「教訓のナラティブ」と呼ぶこともできるだろう。

ナラティブ心理学の展開は、人々の生きた人生や経験の意味を問う、という目的のもとに人生や経験を「意味づける行為」として定義される物語を手段として研究を進めてきた。こうした展開の中で主だって問われてきたのは、物語化の所産として具体化される人々の生きた「行

為の意味」であった。だが、ナラティブ心理学の研究が人々の生きた「行為の意味」の研究に傾倒してきた結果、「行為の意味」の研究は蓄積されてきたが、その行為レベルの前提に位置づくはずの人間が意味を希求し、生成する行為として理解される「意味の行為」の研究は不問に処されることとなった。このような現況に対し本論文は、人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」として表現することのできる「意味の行為」の過程を心理学の探求すべき課題として位置づける Bruner の方法論の解明によって、人間が意味を希求し、生成する行為過程の研究を、物語を媒介して行うナラティブ心理学の研究を展望した。本章ではその具体的提案として、語りの繋ぎ方、すなわち語りの「文脈の変化」に注目することによって精神の「混乱と修復のダイナミズム」の過程を捉えることを試みた。

「イモリの死」を巡る 2 つの語りを比較してみると興味深いことが分かる。それは、「混乱と修復のダイナミズム」の過程、すなわち「意味の行為」の過程が 2 つの語りにおいて共に「イモリの死」というトラブルの発生を起点として、(1) 理由の希求、(2) 理由の開示、(3) 感情に関わる叙述、(4) 仮定法による出来事の一般化 (5) 新たな規範の擁立、(6) 出来事の肯定的再解釈、という過程を辿るものとして特徴づけることができる、ということである。もちろん、2 つの語りにおいては感情に関わる叙述の相違や、希望の叙述の位置取りにおいて各々に固有の語り方も見出される。この点は、個々の語り手に固有の語りの特徴として理解することができる。しかし、一方で興味深いのは、2 つの語りに共通する「意味の行為」の過程が見出された、ということである。ただし、ここに示し得たのは「意味の行為」の一般化可能性の検討に向けたわずかな見通しに留まるものである。従って、この論点については今後、より精緻で広範囲に渡る語りの比較研究が必要であることは疑いない。

語りの構造的な共通性に注目して検討を行った研究の先例として Wertsch (2002, 2008, 2009) の研究をあげることができる。Wertsch (2002, 2008, 2009) は、複数の異なる語り手によって叙述されたある歴史事象についての語りの中に、一定の共通する語りの構造があることを見出し、その構造を“schematic narrative templates” (Wertsch, 2009, p. 128; see also Wertsch, 2002, 2008) と呼んだ。そして、特定の歴史事象についての世代を跨いだ複数の語りに共通する語りの構造を、文化の保有する集合的記憶 (collective memory) と結びつけた文化的道具の一つとして位置づけた。だが彼は、複数の世代を跨いだ語り手によって叙述された特定の歴史事象についての語りを、歴史の渦中を生きる諸個人の志向性に根ざした視野として分析することはしなかった。そうではなく彼は、人々の歴史事象についての語りを、彼らの物語行為の外側に立って分析した。つまり、特定の歴史事象についての複数の語りの中に見出され

た共通構造を、人々が特定の実践の中で用いている当該の歴史事象に対する文化的フレームとして定義したのである。

これに対し、本論文が問題にしてきたのは、出来事のただ中を生きる一人の行為主体としての個人が持つ、出来事の渦中を生きるものの視野である。この視野は、諸個人の精神の志向的状态と結びついたものとして理解される。そして、本論文ではこの視野を精神の「混乱と修復のダイナミズム」として表現することのできる Bruner (1990) の「意味の行為」の方法論に依拠して明らかにしようとしてきた。

だが、語りの繋ぎ方、つまり語りの文脈の変化の過程に、人間が意味を希求し、生成する行為として理解される「意味の行為」の過程が捉えきれていると言えるか。この問い立てに対して本論は一つの混乱を抱えている。というのも、先にも述べたように、人々が語り出したナラティブの分析を行う限りにおいて、「意味の行為」の過程は、当の行為の実際の過程の再構成という位置づけを与えられてしまうからである。つまり、ナラティブの分析は、再現された「1 次の世界」の分析という位置づけを与えられる。出来事の再構成として位置づけられるナラティブの構造が、「0 次の世界」で進行する実際の行為の過程の正確な再現であるという保証はない。従って、「意味の行為」の研究は、本来であれば「0 次の世界」で進行する人々の関わり合いの現場における相互行為の分析として展開すべきであるという指摘が成り立つ。たとえば、Bruner が 1970 年代に展開した乳幼児言語獲得研究において行った家庭の中での母子の日常的なやりとりの緻密な観察は、相互行為の中に「意味の行為」の過程を捉える研究の一つの先例と見なし得るだろう。また一方では、人間が意味を希求し、生成する過程は、ナラティブの生成に関わる問題として検討することができるのであり、この意味において「意味の行為」の研究は、人々の相互行為の所産として多様に構成されるナラティブの構造分析として展開すべきであるという立場も成り立つだろう。いずれの立場に依拠するにせよ、ナラティブ心理学の展開の中には、人間の行為としてのナラティブの分析と、人間の精神のダイナミズムを捉えるという心理学研究の目的との接続を巡る困難というものが存在している。要するに、人々の語り出すナラティブの分析を通して如何にして人間の精神のダイナミズムを解明していくのか、という方法上の課題が常に横たわっている。この課題に対して本論文は、Bruner 心理学に通奏する「意味の行為」の方法論の解明によって、Bruner の物語概念を「意味の行為」を媒介する行為として読解し直し、人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」の過程を、行為としての物語という視点から明らかにすることを試みた。

第6章 結論

本章の目的は、論文で行った議論を総括し、その学問的意義を述べ、最後に今後の研究課題を提示することにある。本論文の学問的意義は、次の3点に要約することができる。第一に人生や経験の意味を問う心理学と概説されてきたナラティブ心理学の展開に対し、人々の生きた「行為の意味」の研究に専心することの限界を指摘し、その行為レベルの前提に位置づくはずの、人間が意味を希求し、生成する行為として理解される「意味の行為」の過程を研究することの必要性と意義を明らかにしたことである。第二に、この論究の核心となる議論において、人々の生きた「行為の意味」を問う研究の方法論的前提として、人生や経験を「意味づける行為」として受容されてきた Bruner (1990) の「意味の行為」の議論を、その本来の主題である行為論として読解しなおしたことにある。第三に、人々の生きた「行為の意味」の研究に傾倒することによって、その行為レベルの前提に位置づくべき人間が、意味を希求し、生成する過程として理解される「意味の行為」の過程を不問に処してきたナラティブ心理学の不足に対し、Bruner の「意味の行為」の方法論に依拠したナラティブ心理学の具体的な研究の方向性を展望したことである。

6. 1. 本論文が明らかにしたこと

本論文の中心的課題は、人生や経験の意味を問う心理学、と概説されてきたナラティブ心理学の展開に対し、人々の生きた「行為の意味 (meaning of acts)」の研究に専心するのではなく、人間が意味を希求し、生成する行為としての「意味の行為 (acts of meaning)」を研究することの必要性と意義を明らかにすることにあつた。特に、ナラティブ心理学の主唱者の一人に数えられる Bruner (1990) の「意味の行為 (*Acts of meaning*)」の議論を基点としてこの論究を進めてきた。ナラティブ心理学の展開は概して、物語という手段を介して人々の生きた人生や経験の意味を問う、という方法論に依拠して展開してきた。Bruner の「意味の行為」

もまたこうした論立てに沿って、人生や経験を物語によって「意味づける行為」として読解され、受容されてきた。だが、ここには Bruner (1990) の「意味の行為」論を「行為の意味」論として受容するという転倒が見出された。この転倒によって人間の「意味の行為」の過程を問う議論は、「行為の意味」という結果を問う議論の背後に不問に処されることになった。だが、本論文は「行為の意味」を問う研究は、「意味の行為」を問う研究を前提する必要があると考えた。なぜならば、「結果」としての「行為の意味」を問うための前提に位置づくはずの、「過程」としての「意味の行為」の探求が為されなければ、「行為の意味」の探求は、過程の先に位置づく結果という物事の生成の論理的必然性からは外れた議論として展開することになるからである。ナラティブ心理学の展開が内包し得るこのような課題に対し、本論文は Bruner (1990) の「意味の行為」の議論の原始点に立ち戻り、この議論を人間の心理学的な行為の一つとしての行為論として読み直すことによって、「行為」の先に展望される「意味」という視座を有するナラティブ心理学の新たな方法論を提示することを目指した。同時に我々は、これまであまり省みられることのなかった心理学者 Jerome Bruner の思想研究の一つの布石を打つことを企図した。以下、各章で展開した議論を総説する。

序論では、論文の目的、ならびに研究の学問的な位置付けを示した。本論文は、人々の生きた人生や経験の意味を、物語という手段を介して理解することに研究の主目的を位置づけてきたナラティブ心理学の今日的展開が抱える課題の解決を目指すものであった。その中心的主題は、人生や経験の意味を問う心理学、と概説されるナラティブ心理学の展開に対し、人々の生きた「行為の意味 (meaning of acts)」の研究に専心するのではなく、人間が意味を希求し、生成する行為として理解される「意味の行為 (acts of meaning)」(Bruner, 1990) の過程を研究することの必要性と意義を明らかにすることにあつた。

第 1 章ではナラティブ心理学の展開を一つの学説史として概観した。ここでは 1980 年代に一つの基点をみる学際的動向としての「物語への転回 (narrative turn)」を軸に、ナラティブ心理学の基底に流れる一つの方法論的前提を確認した。この前提は、ナラティブ心理学の展開は、物語を対象に意味を付与する手段として定義し、物語化の所産として具体化される意味の問題として、人生や経験の意味といった人々の生きた「行為の意味」を研究することを主目的に位置づけてきた、というものである。ついで、ナラティブ心理学の今日的展開が「行為の意味」の研究に傾倒してきた結果、その行為レベルの前提に位置づくはずの人間が意味を希求し、生成する行為としての「意味の行為」の研究が不問に処されてきたことを指摘した。物事の成り立ちの検討においてその生成過程を問わずに、結果のみを独立に問うならば、その理解

には不足がともなう。同様に、ナラティブ心理学の今日的展開の中には、過程としての「意味の行為」を問わずに、結果としての「行為の意味」のみを独立に問う議論が少なからず存在してきた。こうした学問上の不足に対し、ナラティブ心理学の思想的指導者の一人に数えられる **Jerome Bruner** の「意味の行為」(Bruner, 1990) の議論の再読がこれらの不足を解消する一つの糸口になることを確認した。

第2章では、**Bruner** (1990) の *Acts of meaning* の理論的読解を基点として、彼が「意味の行為 (acts of meaning)」と呼んだ人間の心理学的な行為の内実を明らかにした。2章の論究を通して明らかにされたことは、**Bruner** の「意味の行為」とは、前提や常識の破壊として定義される混乱の発生に対峙した精神が、その破綻を修復し、平静を取り戻そうとする「混乱と修復のダイナミズム」として理解することのできる過程である、ということであった。この過程は、混乱の発生に伴って生じた、今、この時点においては理解し難い出来事が、いずれ何らかの意味を獲得することによって理解可能になるような可能性の脈絡希求の行為として定義される。この解明は、**Bruner** (1990) の「意味の行為」の議論を、人々の生きた「行為の意味」を問う議論の方法論的前提として転倒させて受容してきたナラティブ心理学の今日的展開に対し、一つの再考を迫るものとなった。

第2章の末尾で我々は **Bruner** の「意味の行為」に対する志向は、彼の心理学者としての思想と結びついているという仮説を提示した。しかしこの仮説を立証するためには、人間が意味を希求し、生成する行為として理解される「意味の行為」の過程を研究するための **Bruner** の方法論が、この言葉を標題に持つ *Acts of meaning* (Bruner, 1990) の中でのみ提示された一過性のものではない、ということ論証する必要があった。この論証に取り組んだのが第3章である。

第3章では、**Bruner** の「意味の行為」の方法論が、彼の研究史の中で繰り返し提示されていることを明らかにした。本章では彼の研究史の中から選択的に、(1) **Bruner** の研究生活の最初期にあたる1940年代後半にハーヴァードを拠点に行われた一連の知覚実験研究、(2) 英国オックスフォードに拠点を移して1970年代に行われた乳幼児の言語獲得研究、(3) 1980年以降、ニューヨーク大学を拠点に今日まで続けられているナラティブ心理学の研究、の3つに焦点をあてた。第3章の論究を通して明らかになったことは、上記のいずれの研究においても **Bruner** 心理学の観察の焦点は人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」の過程として描き出すことのできる「意味の行為」の過程に向けられてきた、ということであった。

続く第4章では、**Bruner** (1990) の「意味の行為」の行為論としての読解がナラティブ心

理学の今日的展開に対して果たし得る寄与を考察した。「行為の意味」の研究は物語の構成に随伴して規定されていく結果としての対象の意味を問うてきた。これに対し「意味の行為」の研究は、人間が意味を希求し、生成する過程が如何なる行為過程であるのかを問う。4章では双方が問題としている精神の有り様が異なることを指摘し、前者を「構成する精神」の研究、後者を「希求する精神」の研究として位置づけ直した。このように整理してみると、我々はナラティブ心理学の展開において「構成する精神」の過程には注目してきたが、「希求する精神」の過程には目を向けてこなかったことが明らかになってきた。このような現況に対し、Brunerの心理学がその解明を目指してきたのは「希求する精神」のダイナミズムであった。最後に我々は、希求する精神のダイナミズムの解明を目指す Bruner の心理学の先に彼が見ていたのは心理学の知による平和の達成であったと結論づけた。

第5章では、Bruner (1990) の *Acts of meaning* の理論的読解に基づいた Bruner 心理学に通奏する「方法論」と「方法」の解明を足場として、人間が意味を希求し、生成する行為として理解される「意味の行為」の過程を、物語を介して研究するナラティブ心理学の具体的構想を実際の「語り」の分析を通して検討した。この際、我々は人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」の過程として表現し得る「意味の行為」の過程の検討を、語りの繋ぎ方、すなわち語りの「文脈の変化」に注目することによって行うことを試みた。次いで、同じ語りに対して人々の生きた結果としての「行為の意味」の検討を行うことによって、「意味の行為」の研究と「行為の意味」の研究との具体的な違いを明らかにした。「意味の行為」の研究をナラティブ心理学の探求の一つの基点に位置づけることの可能性を探ることによって、本章では「過程」の先に展望される「結果」、「行為」の先に展望される「意味」という視座に定位したプラグマティックなナラティブ心理学の展開を展望した。同時に本章の議論を通して「意味の行為」の過程をナラティブの分析を通して明らかにすることの困難性も明らかになった。

最後に、本論文の学問的意義について考察しておく。本論文の学問的意義は以下のように要約することができる。ナラティブ心理学の今日的展開における主立った議論の一部は、人々の生きた人生や経験の意味といった、人々の生きた「行為の意味」の研究に傾倒してきた。この時、当の「行為の意味」が規定されるに到った過程、すなわち、人間が意味を希求し、生成する行為として理解される「意味の行為」の過程については屢々、不問に処されてきた。この結果、物事の成り立ちの検討において重視すべき「過程」の先に展望される「結果」という視座を、研究の方法論的枠組の中に十分に捉えてこなかった。だが、物事の成り立ちの検討において明らかなように、物事の「結果」は、「過程」の帰結として導出されるのが本来であって、「結果」

だけ独立に存立しているわけではない。それゆえに、「結果」を検討するためには、「過程」の検討から始める必要がある。だが、ナラティブ心理学の今日的展開における主立った議論の一部は、「過程」としての「意味の行為」を問わずに、「結果」としての「行為の意味」の研究に傾倒してきた。しかしながら、「過程」の理解を伴わない「結果」の検討が物事の内実を十分に捉え得ないのと同様に、「意味の行為」の理解を伴わない「行為の意味」の検討も、行為と意味の内実を十分に捉え得ないと言える。ナラティブ心理学の展開が内包するこのような不足に対し、本論文は人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」の過程を、いずれ何らかの意味が落ち着くであろう可能性の脈絡希求の行為として定義される「意味の行為」の過程として理解する Bruner 心理学の方法論の解明によって、「過程」の先に展望される「結果」、「行為」の先に展望される「意味」という、物事の成り立ちを辿る順行的な流れの中に、ナラティブ心理学の研究を位置づけることを提案した。そして、こうした研究の一つの展望として、人間が意味を希求し、生成する行為として理解される「意味の行為」の過程を、物語の「語り方」に焦点をあてる分析によって明らかにすることを試みた。

以上を整理して本論文の学問的意義として3点を述べておく。本論の学問的意義は、第一に人生や経験の意味を問う心理学、と概説されてきたナラティブ心理学の今日的展開に対し、人々の生きた「行為の意味」の研究に専心することの限界を指摘し、人間が意味を希求し、生成する行為として理解される「意味の行為」の過程を研究することの必要性和意義を明らかにしたことにある。

第二に、この論究の核心となる議論において、人々の生きた「行為の意味」を問う研究の方法論的前提として、人生や経験を「意味づける行為」として受容されてきた Bruner (1990) の「意味の行為」の議論を、その本来の主題である行為論として読解しなおしたことにある。この結果明らかにされたことは、Bruner (1990) の主張した「意味の行為」とは、人生や経験を「意味づける行為」ではなく、前提や常識の破壊として定義される混乱の発生に対峙した精神が、その破綻を修復し、平静を取り戻そうとする「混乱と修復のダイナミズム」として理解することのできる行為過程である、ということであった。この過程は、混乱の発生に伴って生じた、今、この時点においては理解し難い出来事が、いずれ何らかの意味を獲得することによって理解可能になるような可能性の脈絡希求の行為として定義される。この解明は、Bruner (1990) の「意味の行為」の議論を、人々の生きた「行為の意味」を問う議論の方法論的前提として転倒させて受容してきたナラティブ心理学の今日的展開に対し、一つの再考を迫るものであり、同時に一つの Bruner 研究として、その先駆をなし得るものである。

第三に、人々の生きた「行為の意味」の研究に傾倒することによって、その行為レヴェルの前提に位置づくべき人間が、意味を希求し、生成する過程として理解される「意味の行為」の過程を不問に処してきたナラティブ心理学の不足に対し、Bruner (1990) の *Acts of meaning* の理論的読解に基づいた Bruner 心理学に通奏する「方法論」と「方法」の解明を足場として、彼の「意味の行為」の方法論に立脚したナラティブ心理学の具体的研究の方向性を展望したことである。「意味の行為」の研究をナラティブ心理学の探求の一つの基点に位置づけることの可能性を探ることによって、本論文は「過程」の先に展望される「結果」、「行為」の先に展望される「意味」という視座に定位したプラグマティックなナラティブ心理学の展開を展望した。

6. 2. 残された課題

最後に今後の研究課題について述べ、本論を締めくくることとする。本論文は、ナラティブ心理学の今日的展開に対し、人々の生きた「行為の意味」の研究に専心するのではなく、人間が意味を希求し、生成する行為として理解される「意味の行為」の研究を進めるべきである、という主張を行うものであった。言葉を換えて言えば、ナラティブ心理学の今日的展開に対し、「結果」を問う方法論から「過程」を問う方法論、「意味」を問う方法論から「行為」を問う方法論へのシフトを主張するものであった。そして、この論究の核心に、それまで人々の生きた「行為の意味」を研究するための方法論的前提として受容されてきた Bruner (1990) の「意味の行為」の議論を、人間が意味を希求し、生成する行為過程を研究するための方法論として読み直すことを位置づけた。このような研究目的に沿って論点を絞り込んだため、本論文ではナラティブ心理学の今日的展開と、Bruner の自己論、文化論との関係について十分な検討を行うことができなかった。ナラティブ心理学の展開という論点においても、Bruner 研究の展開という論点においても、自己に関わる議論と、文化に関わる議論とを十分に引き上げていない点については本研究における不足として指摘をうけるものとなろう。

特に、自己 (self) という主題については、ナラティブ心理学の展開における主要な研究課題の一つに位置づけられてきた概念である。古典心理学では、精神の奥底に宿る普遍的な実体のように考えられてきた自己の問題を、「私が私について語る物語」として再定義することによってナラティブ心理学の展開は自己研究の可能性を拡張してきた (Atkinson, 1995/2006, 1998; Bamberg, 2010; Bamberg & Georgakopoulou, 2006; Bruner, 1987, 1990, 1994, 1997, 2001, 2002; Crossley, 2000a/20009; Gergen, K. & Gergen, M., 1983, 1984, 1986, 1988;

Hermans & Kempen, 1993/2006; McAdams, 1985, 1993; Sarbin, 1986)。自己は、精神の奥底に宿る普遍的な実体ではなく、いま、この場で私が私について語る一つの相対的な物語である。自己研究における「物語への転換」は、自己を一つの物語として定義する「物語的自己 (narrative self)」(Gergen, K. & Gergen, M., 1983, 1984; Sarbin, 1986) や「自伝的自己 (autobiographical self)」(Bruner, 1987, 1990, 1994, 2002) といった概念を生み出した。また、自己を精神の奥底に宿る普遍の実体として考えるのではなく、その時、その場における語りにおいて相対的に構成されるものとして考える「対話的自己 (dialogical self)」(Hermans & Kempen, 1993/2006) や「分散された自己 (distributed self)」(Bruner, 1990) というアイデアが生み出された。自己概念を「いま、ここ、において語られた自己についての物語」として再定義する試みが進行する中で Bruner の「分散された自己」(Bruner, 1990) や「自伝的自己」(Bruner, 1987, 1994, 2002) というアイデアはこの展開の一つの理論的、思想的な基礎として有用な知見を提出している。それ故、Bruner の自己論の理論的解明は、今後の実りある研究課題の一つとすべきであろう。

心理学における自己研究の問題に言及する一方で、Bruner は心理学研究における文化の問題を考え続けている。すなわち、個としての人間の精神の有り様についての研究に傾倒しがちな心理学に、文化という概念をどのように取り込めばよいか、という問題を彼は考え続けてきた (Bruner, 1986, 1990, 1996, 2002, 2008)。それ故にこそ、彼は *Acts of meaning* (Bruner, 1990) において自らの新しい心理学の構想に「文化心理学」という呼称を与えている。従って、Bruner の心理学における文化論は、文化心理学の今日的展開に対しても有用な知見を提出し得るものである。特に、Bruner の心理学における文化論として注目に値する研究の一つが、彼の「法とナラティブ」の研究である (Amsterdam & Bruner, 2000; Bruner, 2002)。Bruner の「法とナラティブ」についての研究は、ナラティブ心理学の今日的展開においても殆ど言及が為されていない。だが、物語という概念を、文化の有する規範性と、諸個人の精神の志向性とを結びつける手段として定義した Bruner (1990) が、文化の有する強固な規範体系である「法律」と、人間の精神が可能世界を創出する際に用いる「物語」との結びつきに研究を進めたという事実は興味深い論点の一つである (Amsterdam & Bruner, 2000; Bruner, 2002)。

というのも、本論でも言及したように、物語という概念の臨床への展開は、概して精神医療の分野に向けられてきたと言える。物語療法 (narrative therapy) と呼ばれる心理療法の分野では、何らかの心理的困難を抱えるクライアントが、自らの人生や経験の意味を否定的なものから肯定的なものに編み変えることによって充足した人生を取り戻していくための手段とし

で物語が位置づけられる。セラピストに期待される役割は、クライアントの人生や経験の意味を、物語の共同的な語り直しのプロセスを通して否定的なものから肯定的なものに編み変え、クライアントのこれからの人生を充足的なものに導くような物語の台本を作り上げる手助けをすることにある。言わば、精神医療の臨床においては、クライアントの人生や経験が抱えている何らかの否定的な意味を再構成する手段として物語が使用される。ここには文化の問題を検討する用意が殆どない。むしろ、精神医療の臨床はクライアントの人生に何らかの否定的な影響を与え続けてきた社会-文化的な状況から守れた空間にある。

一方で、法律の現場はこれとは対照的である。法廷で語られる物語は原告が被告によって侵害されたと主張する行為事実を巡って構成される（事実問題を巡る物語）。あるいは、被告が原告に対して行った行為が、それを禁止する法令に違反するものであるかどうかを巡って構成される（法的争点を巡る物語）。被告側は、起こった事件の経緯について原告側とは異なる見解を提示し、係争中の行為事実が原告の権利を侵害するものではなく、法令に違反するものではないことを主張することによって告訴を論駁しようとする。一方、原告側は、当該の行為が自らの権利侵害に付するものであり、ある法令に違反するものであることを主張することによって提訴を正当化しようとする（Amsterdam & Bruner, 2000; Bruner, 2002）。

法廷でやりとりされる物語は、以上に明らかなように人生や経験の再構成の物語ではなく、むしろ再構成による歪みを厳重に戒め、常に事実を基底に据えることを指針として構成される物語である。法廷における過去の判例は、その法廷において過去に為された判決を部分的に正当化し、規範化したものとみなされる。この含意において法廷でやりとりされる物語は、一方では、被告が原告に与えた権利の侵害に付する行為の有無を巡る事実問題という論点において、他方では、その行為事実が、それを禁止する法令に違反するものであるか否かを巡る法的争点において、過去の事実というものに二重に縛られていると言えよう。従って、先にも述べたように法の現場においては、過去を曲解する再構成を厳しく戒める原理が機能しているといえる。この点において法の物語は、精神医療の物語とは対照をなす。そして、Bruner が研究を進めたのは、再構成の原理によって支えられる精神医療の物語ではなく、再構成の原理を厳しく戒める法の物語であった。法の現場において文化の問題は正面からその視野に入ってくる。というのも、一方には法体系それ自体がそれを施行する文化と不可分のものであり、他方においては法廷において争点となる行為は、特定の社会-文化的状況のもとで為される行為だからである。こうした論点を鑑みる時、物語という概念を、文化の有する規範性と、諸個人の精神の志向性とを結びつける手段として定義した Bruner (1990) が、文化の有する強固な規範体系で

ある「法律」と、人間の精神が可能世界を創出する際に用いる「物語」との結びつきに研究を進めたという事実は興味深い研究主題の一つなのである (Amsterdam & Bruner, 2000; Bruner, 2002)

続いて、本論が解明した Bruner の「意味の行為」の方法論、すなわち精神の「混乱と修復のダイナミズム」を捉える方法論について一つ論じておく必要がある。我々の日常的な会話場面において、その会話の組織の中に頻繁に生じ得る通例からの違反や破綻を、それを違反や破綻として見なさないように修復 (repair) する技法を人々は用いている。そのことを我々の日常の会話の組織の中に観察可能な行為事実として解明したのは、エスノメソドロジーの仕事であった (Shegloff, Jefferson, & Sacks, 1977; Shegloff, 1979, 1992)。本論文が解明した Bruner の「混乱と修復のダイナミズム」の方法論は、この考え方に類似するものとして理解されるかもしれない。だが、エスノメソドロジーの研究が問題にしたのは、破綻の修復が、人々の言語を介した社会的なやりとりの中で、彼らが用いる特定の技法の遂行によって達成されている、というその行為事実であった。例えばそれは、他者の発話の指示対象が曖昧であった時に、その曖昧箇所を特定し、別の言葉でもって置き換える技法 (あるいは、訂正の技法) や、発話の指示対象を明確にするための再認の質問の技法、また、発話者が言おうとしていることを的確に指標する言葉が見出せないでいる時、会話の社会的システムが適切な言葉の探索に取りかかるその仕方などが、会話に埋め込まれた修復の組織として微視的に説明されていく (Shegloff, Jefferson, & Sacks, 1977; Shegloff, 1979, 1992)。修復の基点には、何らかの破綻 (trouble) が生じていることが前提される。会話の途上で何が破綻と見なされるかは、会話の組織のされ方に依存する。破綻の知覚を基点として、その破綻箇所への修復が開始される。そこには、発話者によって開始される修復の技法と、発話の受取手によって開始される修復の技法とがある (Shegloff, Jefferson, & Sacks, 1977; Shegloff, 1979, 1992)。だが、エスノメソドロジーによって解明された人々の会話の組織に埋め込まれた修復の技法の議論の中には、人間の精神の機能というものを議論する用意がない。むしろ精神の機能といった問題に、社会的な達成として構成されている行為事実としての修復の会話システム (conversation systems) を還元して議論することは、その元来の目的から外れる。

あるいは言葉を換えて言うならば、エスノメソドロジーにおいて問われている破綻と修復の会話的組織の問題は、社会学的な関心の下に、直接観察が可能な人々の行為事実の研究として位置づけられるものであって、心理学的な関心の下に、精神機能の具体的様態の研究として位置づけられるものではない。すなわち、そもそもの出発点において、その問い立ての立脚点が

異なるのである。従って、両者を混同して考えるわけにはいかない。ただし、社会学的な関心の下であれ、心理学的な関心の下であれ、人間の日常的行為としての「混乱と修復のダイナミズム」の過程を捉えようとした点において、両者は類似する問題関心を持っているということは言えるだろう。

以上の議論を念頭において我々が本論を通して究明してきたのは、心理学的な関心のもとに精神の志向的機能の問題として探求される「混乱と修復のダイナミズム」の過程であった。本論文では、精神の志向的状态といった概念を敬遠するのではなく、正面から扱ってきた。そして、Bruner (1990) の *Acts of meaning* の理論的読解を通して心理学的な関心のもとに人間の精神の志向的状态に基礎づいた「混乱と修復のダイナミズム」、即ち「意味の行為」の過程を捉える研究の展開可能性について検討を進めてきた。この点については、付言するに足る論点であろう。

最後に、「意味の行為」の研究方法についてである。本論では第 5 章において、物語の分析を通して「意味の行為」の過程を理解する方法を検討した。ここでは物語の「語り方」、特に、語りの文脈の変化に注目して、精神の「混乱と修復のダイナミズム」として記述し得る「意味の行為」の過程を捉えようとした。だが、語りの文脈の変化に「意味の行為」の過程が捉えきれていると言えるかどうかについて、本論文は十分に納得のいく説明を展開できていない。また、語りの分析も、出来事の再構成として個別に書かれたテキスト形式の語りを分析対象としており、「意味の行為」の過程を、関わり合う主体同士の社会的な応答関係の進行の内に捉えていくところまでは研究を進めることができなかった。人間の「意味の行為」の過程を、関わり合う主体同士の社会的な応答関係の進行の内に分析していくという研究の方向性は、「意味の行為」の過程の解明を研究課題に位置づける心理学の展開において興味深い研究の余地を残していると言えよう。これらのことから、「意味の行為」の行為としての研究をどのような方法によって進めていくのが、本研究に課せられた今後の大きな研究課題の一つであると言える。

また、ナラティブ心理学の今日的展開には、言語至上主義的な側面がある。すなわち、人間の行為や精神の様態についての理解は、人間の言語行為を中核とした分析によって可能になるという考え方である。だがこの時、本来であれば、我々の言語行為と不可分であるはずの身体の問題が屢々、検討の枠外に置かれる。例えば、表情や仕草、身振り、手振りといったものは、我々の日常において言外の意味を他者に伝える重要な手段となっている。また、表情や仕草は、身体全体の姿勢や身構え、立ち居振る舞いとも結びついている（やまだ, 2004）。このように考

えるならば、人間の言語行為は、本来、身体動作や身体配置といった身体の問題から切り離して検討することは出来ない。このような視座から、近年では人間の行為や精神の様態についての理解は、人間の言語行為とその所産に対する研究のみならず、身体動作や身体配置といった身体の問題を取り込んだ研究が必要であることが主張されてきた。ナラティブ心理学の今日的展開の中でこの主題を検討した研究事例としてやまだ（2004）の研究をあげておきたい。やまだ（2004）は、小津安二郎の映画『東京物語』を分析対象として、登場人物の「身体配置」と「語り」の様式との関係进行分析するという興味深い仕事を行っている。やまだ（2004）が目しているのは、登場人物たちが横並びの身体配置で居る時の語り様式と、対面する身体配置で居る時の語り様式との違いである。映画の分析であるという特質から、脚本が基礎にあるという身体配置と語りであるという指摘を差し引いても、この分析は興味深い知見を提出している。分析の結果、登場人物たちが横並びの身体配置で居る時の語りは、話し手と語り手との役割交替がはっきりせず、発話者が共に相手の言葉を拾うようにして類似することばを少しずつ変化させながら重ねていく、やまだ（2004）が「かさねの語り」（やまだ, 2004, p. 153）と呼ぶ特徴が見出された。「かさねの語り」が見出される語り様式を、やまだ（2004）は「共存の語り（coexistential narrative）」（やまだ, 2004, p. 137）と呼んでいる。これに対し、登場人物たちが対面する身体配置で居る時の語りは、情報交換や応答といったやりとりを特徴としており、ここでは話し手と聞き手との役割交替が明示的となる。こうした語り様式をやまだ（2004）は「共存の語り」に対置して「対話的語り（dialogic narrative）」（やまだ, 2004, p. 137）と呼んでいる。やまだ（2004）の論考にヒントを得て、人間が意味を希求し、生成する行為として理解される「意味の行為」の過程を、身体配置や身体動作と語りの関係にまで視野を広げて研究するという展望を持つこともできるだろう。

さて、本節で述べたように本論文は「意味の行為」の具体的な研究方法という点において課題を抱えている。だがその一方で、これまで人々の生きた「行為の意味」の研究のための方法論的前提として受容されてきた、Bruner の「意味の行為」の議論を、人間が意味を希求し、生成する行為が如何なる行為であるかを研究するための方法論として読解し直したことは、Bruner 心理学に通奏する思想の解明という思想研究に付する学問的意義のみならず、ナラティブ心理学の今後の展開に対する一つの有効な方法論の提案という側面においても価値のある識見を提出し得たのではないだろうか。特に、「構成する精神」の研究から「希求する精神」の研究へという展望は、心理学研究に対する新たな可能性を示唆するものとなっているのではないだろうか。

6. 3. 結語

Bruner は、現前する世界の内側に生きる存在としての人間が否応無く引き受けることになる規範性と、そうした規範的世界からの逸脱を契機として、不確実な可能性の世界に自らを投げ込むという行為によって平静を取り戻そうとする我々の精神の「混乱と修復のダイナミズム」の過程、すなわち「意味の行為」の過程に、人間の心理学が探求すべき一つの重要な問いがあると主張した。我々は、人間の精神における規範性と可能性との絶えざる弁証法のダイナミズムを捉えようとする Bruner の心理学に、「希求する精神」を問う心理学という思想的視座を見出した。そして彼は「希求する精神」のダイナミズムの解明の先に、心理学の知による平和の達成を展望していた。ここに至って我々は Bruner 心理学の思想的視野を捉えて、彼の心理学に「希望の心理学」という呼称を与えることができるだろう。

文献

- Amsterdam, A. G., & Bruner, J. S. (2000). *Minding the law*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Anderson, H., & Goolishian, H. (1988). Human systems as linguistic systems: Preliminary and evolving ideas about the implications for clinical theory. *Family Process*, 27(4), 371–393. (アンダーソン, H.・グーリシャン, H. 野村 直樹 (訳) (2013) . 言語システムとしてのヒューマンシステム——臨床理論発展に向けてのいくつかの理念—— 協働するナラティブ——グーリシャンとアンダーソンによる論文「言語システムとしてのヒューマンシステム」—— (pp. 27-100) 遠見書房)
- Anderson, H., & Goolishian, H. (1992). The client is the expert: A not-knowing approach to therapy. In S. McNamee & K. J. Gergen (Eds.), *Therapy as social construction* (pp. 25–39). London: Sage Publications. (アンダーソン, H.・グーリシャン, H. 野口 裕二・野村 直樹 (訳) (2014) . クライアントこそ専門家である——セラピーにおける無知のアプローチ—— ナラティブ・セラピー——社会構成主義の実践—— (pp. 43-64) 遠見書房)
- 浅野 智彦 (2001) . 自己への物語論的接近——家族療法から社会学へ—— 東京: 勁草書房
- 浅野 智彦 (2003). 自己物語論が社会構成主義に飲み込まれるとき 文化と社会, vol. 4 (pp. 121–138) マルジュ
- Atkinson, R. (1995). *The gift of stories: Practical and spiritual applications of autobiography, life stories, and personal mythmaking*. Connecticut: Greenwood Publishing Group. (アトキンソン, R. 塚田 守 (訳) (2006) . 私たちの中にある物語——人生のストーリーを書く意義と方法—— ミネルヴァ書房)
- Atkinson, R. (1998). The life story interview. *Qualitative Research Methods*, 44. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- Atkinson, P., & Delamont, S. (2006). Rescuing narrative from qualitative research. *Narrative Inquiry*, 16(1), 164–172.
- Bamberg, M. (2006). Stories: Big or small: Why do we care? *Narrative Inquiry*, 16(1), 139–147.

- Bamberg, M. (2010). Who am I? Narration and its contribution to self and identity. *Theory & Psychology, 21*(1), 1–22.
- Bamberg, M., & Georgakopoulou, A. (2008). Small stories as a new perspective in narrative and identity analysis. *Text & Talk, 28*(3), 377–396.
- Brockmeier, J. (2000). Autobiographical time. *Narrative Inquiry, 10*(1), 51–73.
- Brockmeier, J. (2009). Reaching for meaning: Human agency and the narrative imagination. *Theory & Psychology, 19*(2), 213–233.
- Brockmeier, J., & Harre, R. (1997). Narrative: Problems and promises of an alternative paradigm. *Research on Language and Social Interaction, 30*(4), 263–283.
- Bruner, J. S. (1960). *The process of education*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Bruner, J. S. (1983a). *Child's talk: Learning to use language*. New York: W. W. Norton & Company.
- Bruner, J. S. (1983b). *In search of mind: Essays in autobiography* (1st ed.). New York: Harper & Row.
- Bruner, J. S. (1985). Narrative and paradigmatic modes of thought. *Learning and Teaching the Ways of Knowing, 84*, 97–115.
- Bruner, J. S. (1986). *Actual minds, possible worlds*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Bruner, J. S. (1987). Life as narrative. *Social Research, 54*(1), 11–32.
- Bruner, J. S. (1990). *Acts of meaning*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Bruner, J. S. (1991). The narrative construction of reality. *Critical Inquiry, 18*(1), 1–21.
- Bruner, J. S. (1994). The “remembered” self. In U. Neisser & R. Fivush (Eds.). *The remembering self: Construction and accuracy in the self-narrative* (pp. 41–54). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Bruner, J. S. (1996). *The culture of education*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Bruner, J. S. (1997). A narrative model of self-construction. *Annals of the New York Academy of Sciences, 818*(1), 145–161.
- Bruner, J. S. (2001). Self-making and world-making. In J. Brockmeier & D. Carbaugh (Eds.), *Narrative and identity: Studies in autobiography, self and culture* (pp. 25–37). Amsterdam, Philadelphia: Jhon Benjamins.

- Bruner, J. S. (2002). *Making stories: Law, literature, life*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Bruner, J. S. (2006a). Culture, mind, and narrative. In J. S. Bruner (Ed.), *In search of pedagogy: The selected works of Jerome S. Bruner, vol. II* (pp. 230–236). New York: Routledge.
- Bruner, J. S. (2006b). *In search of pedagogy: The selected works of Jerome S. Bruner, vol. I, II*. New York: Routledge.
- Bruner, J. S. (2008). Culture and mind: Their fruitful incommensurability. *Ethos*, 36(1), 29–45.
- Bruner, J. S. (2010). Narrative, culture, and mind. In D. Schiffrin, A. De Fina & A. Nylund (Eds.), *Telling stories: Language, narrative, and social life* (pp. 45–49). Washington, D.C.: Georgetown University Press.
- Bruner, J. S., & Lucariello, J. (1989). Monologue as narrative recreation of the world. In K. Nelson (Ed.), *Narratives from the crib* (pp. 73–97). Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Bruner, J. S., & Postman, L. (1949). On the perception of incongruity: A paradigm. *Journal of Personality*, 18(2), 206–223.
- Bruner, J. S., Goodnow, J. J., & Austin, G. A. (1956). *A study of thinking*. New York: John Wiley & Sons.
- Bruner, J. S., Olver, R. R., & Greenfield, P. M. (1966). *Studies in cognitive growth: A collaboration at the Center for Cognitive Studies*. New York: John Wiley & Sons.
- Brunswik, E. (1956). *Perception and the representative design of psychological experiments*. Oakland, CA: University of California Press.
- Burke, K. (1945). *A grammar of motives*. Oakland, CA: University of California Press. (パ
ーク, K. 森 常治 (訳) (1982) . 動機の文法 晶文社)
- Clandinin, D. J., & Connelly, F. M. (2000). *Narrative inquiry: Experience and story in qualitative research*. California: Jossey-Bass.
- Clandinin, D. J., Pushor, D., & Orr, A. M. (2007). Navigating sites for narrative inquiry. *Journal of Teacher Education*, 58(1), 21–35.

- Cole, M. (1996). *Cultural psychology: A once and future discipline*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Cole, M., & Bruner, J. S. (1972). Cultural differences and inferences about psychological processes. *Yearbook of the National Society for the Study of Education*, 867–876.
- Cole, M., & Scribner, S. (1974). *Culture & thought: A psychological introduction*. New York: John Wiley & Sons.
- Cole, M., Hood, L., & McDermott, R. (1994). *Ecological niche picking: Ecological invalidity as an axiom of experimental cognitive psychology*. New York: Laboratory of Comparative Human Cognition, Rockefeller University.
- Cole, M., Hood, L., & McDermott, R. (1997). Concepts of ecological validity: Their differing implications for comparative cognitive research. *Mind, culture, and activity: Seminal papers from the Laboratory of Comparative Human Cognition*, 49–56.
- Costall, A. (2006). “Introspectionism” and the mythical origins of scientific psychology. *Consciousness and Cognition*, 15(4), 634–654.
- Crossley, M. L. (2000a). *Introducing narrative psychology*. Buckingham: Open University Press. (クロスリー, M. L. 角山 富雄・田中 勝博 (訳) (2009) . ナラティブ心理学セミナー——自己・トラウマ・意味の構築—— 金剛出版)
- Crossley, M. L. (2000b). Narrative psychology, trauma and the study of self/identity. *Theory & Psychology*, 10(4), 527–546.
- Crossley, M. L. (2003). Formulating narrative psychology: The limitations of contemporary social constructionism. *Narrative Inquiry*, 13(2), 287–300.
- De Fina, A., & Georgakopoulou, A. (2008). Analysing narratives as practices. *Qualitative Research*, 8(3), 379–387.
- De Fina, A., & Georgakopoulou, A. (2012). *Analyzing narrative: Discourse and sociolinguistic perspectives*. NY: Cambridge University Press.
- Denzin, N. K., & Lincoln, Y. S. (Eds.). (2011). *Handbook of qualitative research* (4th ed.). London: Sage Publications.
- Edwards, D., & Potter, J. (1992). *Discursive psychology*. London: Sage Publications.
- Eisner, E. (Ed.). (1985). *Learning and teaching the ways of knowing*. Chicago, IL: University of Chicago Press.

- Epston, D., White, M., & Murray, K. (1992). A proposal for a re-authoring therapy: Rose's revisioning of her life and a commentary. In S. McNamee & K. J. Gergen (Eds.), *Therapy as social construction* (pp. 96–115). London: Sage Publications. (エプストン, D.・ホワイト, M.・マレイ, K. 野口 裕二・野村 直樹 (訳) (2014) . 書きかえ療法—人生というストーリーの再著述—— ナラティブ・セラピー——社会構成主義の実践—— (pp. 103-137) 遠見書房)
- Flick, U. (1995). *Qualitative sozialforschung*. Hamburg: Rowohlt Verlag GmbH. (フリック, U. 小田 博志・山本 則子・春日常・宮地 尚子 (訳) (2011) . 新版 質的研究入門——<人間の科学>のための方法論—— 春秋社)
- Flick, U. (Ed.). (2014). *The Sage handbook of qualitative data analysis*. London: Sage Publications.
- Gardner, H. (1983). He came, he saw, he cognized. *The New Republic*, xx, xx.
- Gardner, H. (1987). *The mind's new science: A history of the cognitive revolution*. New York: Basic Books.
- Georgakopoulou, A. (2006). Thinking big with small stories in narrative and identity analysis. *Narrative Inquiry*, 16(1), 122–130.
- Gergen, K. J. (1973). Social psychology as history. *Journal of Personality and Social Psychology*, 26(2), 309–320.
- Gergen, K. J. (1985). The social constructionist movement in modern psychology. *American Psychologist*, 40(3), 266–275.
- Gergen, K. J. (1994). *Realities and relationships: Soundings in social construction*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (ガーゲン, K. J. 永田 素彦・深尾 誠 (訳) (2004) . 社会構成主義の理論と実践——関係性が現実をつくる—— ナカニシヤ出版)
- Gergen, K. J. (1999). *An invitation to social construction*. London: Sage Publications. (東村 知子 (訳) (2004) . あなたへの社会構成主義 ナカニシヤ出版)
- Gergen, K. J., & Gergen, M. M. (1983). Narratives of the self. In T. R. Sarbin & K. E. Scheibe (Eds.), *Studies in Social Identity* (pp. 254–273). Santa Barbara, CA: Praeger Publishers.

- Gergen, K. J., & Gergen, M. M. (1984). The social construction of narrative accounts. In K. J. Gergen & M. M. Gergen (Eds.), *Historical social psychology* (pp. 173–189). Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates.
- Gergen, K. J., & Gergen, M. M. (1986). Narrative form and the construction of psychological science. In T. R. Sarbin (Ed.), *Narrative psychology: The storied nature of human conduct* (pp. 22–44). Santa Barbara, CA: Praeger Publishers.
- Gergen, K. J., & Gergen, M. M. (1988). Narrative and the self as relationship. *Advances in Experimental Social Psychology*, 21(1), 17–56.
- Gergen, K. J., & Kaye, J. (1992). Beyond narrative in the negotiation of therapeutic meaning. In S. McNamee & K. J. Gergen (Eds.), *Therapy as social construction*. (pp. 166–185). London: Sage Publications. (ガーゲン, K. J.・カイエ, J. 野口 裕二・野村 直樹 (訳) (2014) . ナラティブ・モデルを越えて ナラティブ・セラピー——社会構成主義の実践 —— (pp. 138-164) 遠見書房)
- Goffman, E. (1961). *Asylums: Essays on the social situation of mental patients and other inmates*. New York: Doubleday Publishing Group.
- Goffman, E. (1974). *Frame analysis: An essay on the organization of experience*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Gregg, G. S. (1991). *Self-representation: Life narrative studies in identity and ideology*. Santa Barbara, CA: Greenwood Publishing Group.
- Gregg, G. S. (2011). Identity in life narratives. *Narrative Inquiry*, 21(2), 319–328.
- 浜田 寿美男 (2002) . 身体から表象へ ミネルヴァ書房
- Harre, R. (1992). Introduction: The second cognitive revolution. *American Behavioral Scientist*, 36, 5–7.
- Harre, R. (1999). The rediscovery of the human mind: The discursive approach. *Asian Journal of Social Psychology*, 2, 43–62.
- Harre, R., & Secord, P. F. (1972). *The explanation of social behaviour*. Oxford: Blackwell.
- Hermans, H. J., & Kempen, H. J. (1993). *The dialogical self: Meaning as movement*. California: Academic Press. (ハーマンス, H. J.・ケンペン, H. J. 溝上 慎一・水間 玲子・森岡 正芳 (訳) (2006) . 対話的自己——デカルト／ジェームズ／ミードを越えて —— 新曜社)

- Josselson, R. (1995). Imagining the real: Empathy, narrative, and the dialogic self. In R. Josselson & A. Lieblich (Eds.), *Interpreting experience: The narrative study of lives, Volume 3*. (pp. 27-44). Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- Josselson, R. (2004). The hermeneutics of faith and the hermeneutics of suspicion. *Narrative Inquiry, 14*(1), 1–28.
- Josselson, R., & Lieblich, A. (Eds.). (1993). *The narrative study of lives*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- Josselson, R., & Lieblich, A. (Eds.). (1995). *Interpreting experience: The narrative study of lives, Volume 3*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- Josselson, R., & Lieblich, A. (Eds.). (1999). *Making meaning of narratives: The narrative study of lives, Volume 6*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- Josselson, R., & Lieblich, A. (2009). Reflections on the narrative study of lives. *Narrative Inquiry, 19*(1), 183–198.
- Kuhn, T. S. (1962). *The Structure of Scientific Revolutions*. Chicago, IL: University of Chicago Press. (クーン, T. S. 中山 茂 (訳) (1971). 科学革命の構造 みすず書房)
- Levin, H. (1984). Psychologist's memoirs: In search of mind. *Science, 224*(4650), 720–721.
- MacIntyre, A. (1981). *After virtue: A study in moral theory*. Notre Dame: University of Notre Dame Press.
- Mancuso, J. C., & Sarbin, T. R. (1983). The self-narrative in the enactment of roles. In T. R. Sarbin & K. E. Scheibe (Eds.), *Studies in social identity* (pp. 233–253). New York: Praeger Publishers.
- 丸山 高司 (1985). 人間科学の方法論争 勁草書房
- McAdams, D. P. (1985). *Power, intimacy, and the life story*. New York: Guilford Press.
- McAdams, D. P. (1993). *The stories we live by: Personal myths and the making of the self*. New York: Guilford Press.
- McAdams, D. P., Josselson, R., & Lieblich, A. (Eds.). (2001). *Turns in the road*. Washinton, D.C.: American Psychological Association.
- McLeod, J. (1997). *Narrative and psychotherapy*. London: Sage Publications. (マクレオド, J. 下山 晴彦・野村 晴夫 (訳) (2007). 物語としての心理療法——ナラティブ・セラピーの魅力—— 誠信書房)

- McNamee, S. & Gergen, K. J. (Eds.). (1992). *Therapy as social construction*. London: Sage Publications. (マクナミー, S.・ガーゲン, K. J. 野口 裕二・野村 直樹 (訳) (2014) . ナラティブ・セラピー——社会構成主義の実践—— 遠見書房)
- Mink, L. O. (1978). Narrative form as a cognitive instrument. In R. H. Canary & H. Kozicki(Eds.), *The writing of history: Literary form and historical understanding* (pp. 129–149). Madison, WI: University of Wisconsin Press.
- Mitchell, W. J. T. (Ed.). (1981). *On narrative*. Chicago, IL: University of Chicago Press. (ミッチェル, W. J. T. 海老根宏・原田 大介・新妻 昭彦・野崎 次郎・林 完枝・虎岩 直子 (訳) (1987) . 物語について 平凡社)
- Monteagudo, J. G. (2011). Jerome Bruner and the challenges of the narrative turn: Then and now. *Narrative Inquiry, 21*(2), 295–302.
- 森岡 正芳 (2013) . ナラティブとは やまだ ようこ・麻生 武・サトウ タツヤ・能智 正博・秋田 喜代美・矢守 克也 (編) 質的心理学ハンドブック (pp. 276–293) 新曜社
- 森岡 正芳 (2015) . ナラティブとは 森岡正芳(編) 臨床ナラティブアプローチ (pp. 3-18) ミネルヴァ書房
- Murray, M. (2000). Levels of narrative analysis in health psychology. *Journal of Health Psychology, 5*(3), 337–47.
- Murray, M. (2002). Connecting narrative and social representation theory in health research. *Social Science Information, 41*(4), 653–673.
- 野矢 啓一 (2005) . 物語の哲学 岩波書店
- Ochs, E., & Capps, L. (2001). *Living narrative: Creating lives in everyday storytelling*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 岡本 夏木・池上 貴美子・岡村 佳子 (2004) . 解題 ブルーナー, J. S. 教育という文化 (pp. 295-312) 岩波書店
- Parker, I. (1994). Qualitative research. In P. Banister, E. Burman, I. Parker, M. Taylor & C. Tindall (Eds.), *Qualitative methods in psychology: A research guide*. Buckingham: Open University Press.
- Parker, I. (2003). Psychoanalytic narratives: Writing the self into contemporary cultural phenomena. *Narrative Inquiry, 13*(2), 301–315.

- Parker, I. (2005). *Qualitative psychology: Introducing radical research*. Buckingham: Open University Press.
- Pepper, S. C. (1942). *World hypotheses: A study in evidence*. Berkeley, CA: University of California Press.
- Polkinghorne, D. E. (1988). *Narrative knowing and the human sciences*. New York: New York University Press.
- Riessman, C. K. (2008). *Narrative methods for the human sciences*. London: Sage Publications.
- Rorty, R. (1967). *The linguistic turn: Recent essays in philosophical method*. Chicago IL: University of Chicago Press.
- Sarbin, T. R. (1986). The narrative as a root metaphor for psychology. In T. R. Sarbin (Ed.), *Narrative psychology: The storied nature of human conduct* (pp. 3–21). Westport, CT: Praeger Publishers.
- Sarbin, T. R. (1990). The narrative quality of action. *Theoretical & Philosophical Psychology*, 10(2), 49–65.
- Sarbin, T. R., & Allen, V. L. (1968). Role theory. In E. Aronson & G. Lindzey (Eds.), *Handbook of social psychology* (pp. 488–567). MA: Addison-Wesley Publishing.
- Scaife, M., & Bruner, J. S. (1975). The capacity for joint visual attention in the infant. *Nature*, 253(5489), 265–266.
- Schachter, E. P. (2011). Narrative identity construction as a goal-oriented endeavor: Reframing the issue of “big vs. small” story research. *Theory & Psychology*, 21(1), 107–113.
- Schachter, E. P. (2012). When possible, make a U-turn: Reflecting on ‘the narrative turn’, meaning, morality and identity. *Narrative Inquiry*, 22(1), 186–193.
- Schafer, R. (1981). Narration in the psychoanalytical dialogue. In W. J. T. Mitchell (Ed.), *On narrative* (pp. 25–49). Chicago, IL: University of Chicago Press. (シェーファー, R. 海老根 宏・原田 大介・新妻 昭彦・野崎 次郎・林 完枝・虎岩 直子 (訳) (1987) . 精神分析の対話における語り 物語について (pp. 51-88) 平凡社)
- Schegloff, E. (1979). The relevance of repair to syntax-for-conversation in discourse and syntax. *Syntax and Semantics*, 12, 261–286.

- Schegloff, E. (1992). Repair after next turn: The last structurally provided defense of intersubjectivity in conversation. *American Journal of Sociology*, 97(5), 1295–1345.
- Schegloff, E., Jefferson, G., & Sacks, H. (1977). The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language*, 53(2), 361–382.
- Searle, J. R. (1983). *Intentionality: An essay in the philosophy of mind*. Cambridge, UK: Cambridge University Press. (サール, J. R. 坂本 百大 (訳) (1997) . 志向性——心の哲学—— 誠信書房)
- Shank, R., & Abelson, R. (1977). *Scripts, plans, goals and understanding*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Shotter, J. (1997). The social construction of our “inner” selves. *Journal of Constructivist Psychology*, 10(1), 7–24.
- Shotter, J. (2001). Towards a third revolution in psychology: From inner mental representations to dialogically-structured social practices. In D. Bakhurst & S. Shanker (Eds.), *Jerome Bruner: Language, culture, self* (pp. 167–183). London: Sage Publications.
- Spence, D. P. (1982). *Narrative truth and historical truth: Meaning and interpretation in psychoanalysis*. New York: W. W. Norton & Company.
- Shweder, R. (2008). The cultural psychology of suffering: The many meanings of health in Orissa, India (and elsewhere). *Ethos*, 36(1), 60–77.
- Tomasello, M. (2008). *Origins of human communication*. MA: MIT press.
- Tomasello, M. (2014). *A natural history of human thinking*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Tomasello, M., & Carpenter, M. (2007). Shared intentionality. *Developmental Science*, 10(1), 121–125.
- Toulmin, S. (1990). *Cosmopolis: The hidden agenda of modernity*. New York: Free Press.
- Wertsch, J. V. (2002). *Voices of collective remembering*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wertsch, J. V. (2008). The narrative organization of collective memory. *Ethos*, 36(1), 120–135.

- Wertsch, J. V. (2009). Collective Memory. In P. Boyer & J. V. Wertsch (Eds.), *Memory in mind and culture* (pp. 117–137). New York: Cambridge University Press.
- White, H. (1973). *Metahistory: The historical imagination in nineteenth-century Europe*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- White, H. (1981). The value of narrativity in the representation of reality. In W. J. T. Mitchell (Ed.), *On narrative* (pp. 1–23). Chicago, IL: University of Chicago Press. (ホワイト, H. 海老根 宏・原田 大介・新妻 昭彦・野崎 次郎・林 完枝・虎岩 直子 (訳) (1987) . 歴史における物語性の価値 物語について (pp. 15-50) 平凡社)
- White, M., & Epston, D. (1990). *Narrative means to therapeutic ends*. New York: W. W. Norton & Company.
- Wooffitt, R. (1992). *Telling tales of the unexpected: The organization of factual discourse*. Hemel Hempstead: Harvester Wheatsheaf. (ウーフィット, R. 大橋 靖史・山田 詩津夫 (訳) (1998) . 人は不思議な体験をどう語るか——体験記憶のサイエンス—— 大修館書店)
- やまだ ようこ (2000a) . 人生を物語ることの意味——ライフストーリーの心理学—— やまだ ようこ・江口 重幸(編) 人生を物語る——生成のライフストーリー—— (pp. 1–38) ミネルヴァ書房
- やまだ ようこ (2000b) . 喪失と生成のライフストーリー——F1 ヒーローの死とファンの人生—— やまだ ようこ・江口 重幸(編) 人生を物語る——生成のライフストーリー—— (pp. 77–108) ミネルヴァ書房
- やまだ ようこ (2004) . 小津安二郎の映画『東京物語』にみる共存的ナラティブ 質的心理学研究, 3, 130-156. 新曜社
- やまだ ようこ (2006) . 質的心理学とナラティブ研究の基礎概念——ナラティブ・ターンと物語的自己—— 心理学評論, 49, 436–463.
- やまだ ようこ (2007) . ナラティブ研究 質的心理学の方法——語りをきく —— (pp. 54–71) 新曜社
- やまだ ようこ (2013) . 質的心理学の核心 やまだ ようこ・麻生 武・サトウ タツヤ・能智 正博・秋田 喜代美・矢守 克也(編) 質的心理学ハンドブック (pp. 4–23) 新曜社
- やまだ ようこ・麻生 武・サトウ タツヤ・能智 正博・秋田 喜代美・矢守 克也(編) (2013) . 質的心理学ハンドブック 新曜社

- 横山 草介 (2012) . 質的データ分析試論としてのナラティブの重奏化 青山社会情報研究, 4, 1-12.
- 横山 草介 (2013) . ナラティブの重奏化による現実の生成 質的心理学研究, 12, 176-194. 新曜社
- 横山 草介 (2014) . ブルーナーと人間をみる眼 ナラティブと質的研究会 会議発表資料
立命館大学生存学研究センター・日本心理学会ナラティブと質的研究会・日本発達心理学会ナラティブと質的研究分科会 立命館大学
- 横山 草介 (2015) . ナラティブの文化心理学——ブルーナーの方法—— 質的心理学研究, 14, 90-109. 新曜社

謝辞

Bruner (1990) の「意味の行為 (acts of meaning)」という考え方を、「行為の意味」論としてではなく「意味の行為」論として、その本来の主題のもとに読解し直すこと。そして、この解明によって、ナラティブ心理学の今日的展開に、心理学研究としての一つの方法論的な示唆を与えること。本論が取り組んできたのはこうした課題であった。

この問い立てに対する結論は次のようなものであった。Bruner (1990) の考えた「意味の行為」とは、人生や経験を「意味づける行為」ではなく、前提や常識の破壊として定義される混乱の発生に対峙した精神が、その破綻を修復し、平静を取り戻そうとする「混乱と修復のダイナミズム」として理解することのできる行為過程である、ということであった。この過程は、混乱の発生に伴って生じた、今、この時点においては理解し難い出来事が、いずれ何らかの意味を獲得することによって理解可能になるような可能性の脈絡希求の行為として定義される。Bruner の物語は、この可能性の脈絡希求の行為を媒介する手段であった。意味は、この行為の先に未決定性に基礎づけられたものとして展望されるに留まる。Bruner (1990) の「意味の行為」のアイデアのこうした読み直しは、人々の生きた人生や経験を「意味づける行為」としてこのアイデアを受容するよりも遥かに深い心理学上の意義を持つように思われる。

私は本論文の締めくくりに、Bruner (1990) が「希求する精神」のダイナミズムの解明の先に、心理学の知による平和の達成を展望していたことを述べた。そして、そこに「希望の心理学」という思想的構図を読み取ることによって本論を締めくくった。その思考に筋立った体系性のない折衷主義的な心理学者として屢々揶揄されてきた 20 世紀心理学の巨人の一人である Bruner が、彼の心理学の遂行において常にその構図の中に描いてきたものが希望であると結論することになった。私には、Bruner という心理学者が単純な折衷主義によって、20 世紀を通して心理学のフロンティアを幾度も切り拓いていくような業績を重ねられるとは到底思えなかった。そこには、折衷主義という揶揄の背後に覆い隠された何かがあると決めてかかってきた。そして、希望という主題に沿って考えると 1980 年代以降、彼が、なぜ、物語という考え方に——しかも、一見してスタティックな定式の内にと留まる物語という考え方に——執拗なまでにこだわってきたのかが分かるような気がするのである。それは、Bruner の考える物語が、希望の原基を内包しているからである。つまり、人間の物語という行為が、不可能性と可能性とを結びつけ得る手段として位置づけられているからである。

この結論に到るまでの道のりは甚だ険しかった。その道程を、スタート地点から見届けて下さったのが指導教官である高木光太郎先生である。高木先生には、文字通り理論研究者に叩き上げて頂いたと思っている。果たして、「理論」を自認できる程の器になったのかは甚だ心もとないが、先生の指導なしには、その道に一步も踏み出さなかつたらうことは明らかである。先生は、常に私の思考の一步先を見ていたように思われる。私が全力を込めて考えていったことの、その一步先をピタリと見抜いて、批評や助言を与えて下さった。特に思い出されるのは、『はじまりのレーニン』という1冊の単行本である。理論研究というものが全く分かっていなかった私に先生が紹介して下さいたのがこの本であった。レーニンが笑う。「ドリン！ドリン！」と豪快に笑う。この「笑い」にレーニンという人物の全てが凝縮されている。中沢新一はこの「ドリン！ドリン！」に、レーニンの生き姿を見取った。Brunerの「ドリン！ドリン！」は何か。それを見つけ出すのがBrunerの理論研究と呼び得るものだ。この時の指導が、未だに忘れ難いインプレッションとして私の記憶に残っている。それ以来、私はBrunerの「ドリン！ドリン！」を頑なに探し求めてきたといってもよい。先立って、第一に感謝を申し上げたい。

また、決して読みやすいとは言えない本論文の草稿を繰り返し丁寧に呼んで下さり、論文の主旨や学問的な意義の明白性について惜しみのない助言を下された苅宿俊文先生と宮川裕之先生にこの場をかりて御礼申し上げたい。お二方の助言を得て、本論文は草稿に比して格段に読みやすく、主旨のはっきりとしたものに仕上がった。

Brunerと格闘する途上で、私は彼のつかみどころのない文体に幾度となく振り回され、その度に彼の思考の外側に放り出された。その思考の核心にあるものが一体何なのかが全く掴めずに苦悩した。Brunerの書物は、周知のようにその論旨が捉え難く、とにかく読み難い。そのような時に、研究室の定例会での研究の進捗報告はよいペースメーカーになった。私の報告に対する先生や研究室の皆さんの忌憚のない意見や質問は、厳しくも的確で、常に学問の向上に向けられていた。この定例会での研究報告が、本研究を漸進させたことは疑いない。

そして、本研究の最後の動力源を与えて下さったのが、やまだようこ先生である。2014年3月に京都大学で催された発達心理学会の懇親会の席でBruner(1990)の*Acts of meaning*の話題で盛り上がった。何故、岡本夏木先生はこの本を『意味の復権』と訳したのか、といった話で意気投合した。このことがきっかけとなって、半年後、立命館大学で行われる「ナラティブと質的研究会」の第7回の例会を古典再訪としてBruner(1990)の*Acts of meaning*を主題に行うことを提案して下さいた。やまだ先生は、未だBrunerの文章に振り回されていた私を、大胆にも講演者として呼んで下さり、私は「ブルーナーと人間を観る眼」という演題でそ

の時点の私の思考で考え得る全てをお話させて頂いた。この研究会での多くの実りある出会いが、本論文の最後の動力源となっている。この出会いは、2015年3月に東京大学で催された発達心理学会でのラウンドテーブル「ナラティブ論における『意味』とは何か、いかに捉えるか」に結びついた。「Jerome Bruner と『意味の行為』の照準」という主題は、この時点では形を得た構想となった。このような経緯があって、本論において私は、やまだ先生の Bruner 読解にチャレンジングな議論を展開しているが、やまだ先生の遠方からの励ましと助力なくしては、本論文は形にならなかつたろう。この場を借りて心より感謝申し上げたい。また、やまだ先生の「喪失」と「不在」のナラティブへの注目には、疑いなく Bruner の「意味の行為」の方法論に定位したナラティブ心理学の展望が描き出されている。

最後に、Jerome Bruner 博士の名前をあげないわけにはいかない。*Acts of meaning* の原著者であり本研究が読解に取り組んだ Jerome Bruner 博士は今秋10月1日に100歳の誕生日を迎えた。100歳を迎えた今も New York University Law School で教壇に立っておられる。私は、研究上の疑問について折にふれて博士とメールでコンタクトをとってきた。その度に博士は温かい励ましの言葉を添えて下さった。博士の最近の研究関心を伺った時、彼は一言、こう返事を返してくれた。

人は、どのようにして自分の身近な人たちと平穏な生活を営んでいくことができるのか。この問題は、古来からの深い問いの1つだけれども、私はこの主題への再訪をとっても楽しんでる。

(J. S. Bruner, personal e-mail, September 4, 2013)

「意味の行為」の照準は、間違っていなかったと確信した。本研究の前進をその心底において支えたのは博士の励ましの言葉である。心よりの敬意を込めてここに感謝申し上げると共に、本論文を博士の人間科学としての心理学の発展に向けた揺るぎない眼差しに捧げる。

2015年 11月 17日

横山 草介